

機動戦士ガンダム
血のオルフェンズ
再

鉄別

グランクラン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今作は『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ 別』のリメイク及び再構築版になります。以下今作のあらすじです。

厄祭戦と呼ばれ戦いの中で『鉄血のオルフェンズ』と呼ばれた少年たちが存在した。時は流れ約三百年が経ちP・D・323年の数年前主人公の一人サブレ・グリフォンはグリフォン家の倉庫の地下深くに『ガンダム・アガレス』を発見した。そして、少年は成長し『フォートレス』のエージェントとして活動する彼は後に『鉄華団』と名乗る組織の戦いを目撃する。戦いに参加する少年兵の中にもう一人の主人公である『三日月・オーガス』がバルバトスに乗って戦おうとしていた。これは鉄華団が歩く『別』の未来

への物語。

目次

鉄華団発足編

設定集及び序章『悪魔と呼ばれたガン

ダム』 | 1

鉄と血 | 18

バルバトスとアガレス | 34

散華 | 51

ダーブラ編

逆襲のダーブラ | 68

死神と呼ばれたガンダム | 81

暁の空の向こう側へ | 95

宿命の戦場 | 109

死神の正体へ | 123

タービンス編

成長の証 | 139

いさなとり | 153

死神の片割れ | 167

おくりもの | 179

ブルワーズ編

明日からの手紙 | 192

ヒューマンデブリ | 204

暗闇 | 217

強さの証明 | 229

ドルト編

交わる者達 | 243

守り続けてきた弟 | 256

鉄華団	380
者達	368
悪魔と呼ばれた者達と希望と恨まれた	356
暗躍と復讐	343
エドモントン編	327
愛シテイマス	314
別の未来へ	301
相棒	288
願いの重力	277
父親と息子	267
地球降下編	
クーデリアの決意	
すれ違いゆく者	

裏の顔と赤い顔	526
出世の引き金	511
真つ赤な悪魔よ	500
夜明け前の戦い	487
嫉心の渦中	471
新たな血	456
黙する戦争編	
次へ	444
ネクストステージ	433
温泉旅行記	421
グリフォン家の受難	409
外伝	
未だ見ぬ未来へ	396

変革する未来編

無音の戦場	540
舞い降りた悪魔	554
友よ	569
幸せを求めて	582
誠の願い	598
ヴィダール立つ	612
目覚めた禍編	
目覚める厄災	629
厄祭の亡霊	643
悪魔の不協和音	657
悪魔の輪舞曲	669
悪魔と天使	685

家族のカタチ	699
燃ゆる太陽に照らされて	713
それぞれの愛	738
落とし前	754
開戦の刻	770

鉄華団発足編

設定集及び序章『悪魔と呼ばれたガンダム』

キャラクター設定集

サブレ・グリフォン

概要……冷静で落ち着いた性格をしており、冷たく見えるが仲間想いな一面がある。しかし、初対面には誤解されがち。モビルスーツパイロットとしてはかなり優秀で、業界内ではそれなりに有名で、名瀬達にすら知られ渡っているが、ギャラルホルンではそこまで有名ではない。秘密組織フォートレスのエージェントの一人で違法組織の取り締まりとガンダムなど遺棄されたモビルスーツなどの回収を仕事にしており、メンバーはその役割ごとに本部から雇っている。サブレの元に居る構成員は『明楽・アルトランド』と『ジョシユア・レッドアイ』の二名しかいないが、開発担当の『ソニア』がすき好んでついてくるので正式には四名になる。モビルスーツとしては『ガンダム・アガレス』に乗り込んでおり、その二つ名は『死神』であり、その姿を見た敵パイロットは死ぬとすら言われており、パイロットに恐怖を与えている。明楽には尊敬、ジョシユアからは畏怖の感情を抱かれている。モットーは『ピンチこそ冷静に、大切な人こそ敵

しく』をしており、大切な人には厳しくしており、それは優しさからくる行動である。兄妹の中でも三男であるが、兄妹の中で一番才能が有り両親からも期待されていたが、それが二人の兄との溝を作ってしまう。両親の死後地球に移住すべきと一番上の兄である『サヴァラン』に進言したが、『ビスケット』の誤解から離れ離れの生活を送ることになる。義理の父親である『マハラジャ』に拾われて以降、色々な事を教わっており、モットーもそのうちの一つ。

明楽・アルトランド

概要………明るく落ち着きのない性格をしており、あまり空気が読めず楽しいことを一番に考える童顔の男子。サブレ同様にモビルスーツパイロットとしては優秀であるが、身体で覚えるタイプで在り、理屈では判断しない。しかし、サブレからは『直情的になるな』と言われており、本人もそこには気を付けている。本来なら頭を使うような戦い方ですら本能で覚え、実行できる。サブレに救われて以降サブレに尊敬の念を抱いており、サブレのいう事を絶対に行っているが、サブレからは「自分で考えて動け」と言われる。『ガンダム・アンドロマリウス』の乗り手であり、サブレからもらったプレゼントだと思っているが、サブレ本人はそのつもりは無い。モットーは『楽しい事第一』であり、いつだって楽しく過ごしている。

ジョシユア・レッドアイ

概要……露出度の高い衣装を好み、戦闘時はテンションが高く戦闘狂としての一面を持つ赤い髪のスタイルのいい女子。サブレ同様にモビルスーツパイロットとしては優秀であるが、戦い方に問題があり、戦いの中の殺しをどこかで楽しみ、拷問のような殺しを行う問題児。昔サブレに襲い掛かって反撃された過去があり、サブレに対して畏怖を抱いていて、サブレの命令はある意味絶対。意外と頭も優秀で理屈でも理解できるところがあり、育つ環境さえちやんとしていればお嬢様になれる人物である。赤い髪を振り回しながら戦うため、明楽達からは『パーサーカー』と呼ばれる。宇宙空間でなければビキニに薄着のジャケツト、ホットパンツを着こなし、これでもサブレに言いつけを守っているほうで、本人は紐ビキニが好みだが、一度サブレに怒られて以降自粛している。部屋着は持つておらず、全裸で過ごす。『ガンダム・フェネクス』を乗り手。モットーは『生殺与奪』であり、それを聞いた全員がドン引きしていた。

マハラジャ・ダースリン／マーズ・マセ

概要……秘密組織フォートレスの首領であり、元ギヤラルホルンでもそれなりの地位についていた人物。肩幅の広く服の上からでもわかるほどの筋肉、強面で初対面からは怖がられることが多い。かつてはモビルスーツパイロットであったが、今は半分は引退している。今でも特訓は続けており、そのすべては『ラスタル・エリオン』を殺すためである。主に偽名である『マーズ・マセ』の方を使っており、本人からすれば『マハ

ラジャ・ダースリン』に代わる名前である。サブレの義理の父親であり、『ジュリエッタ・ジュリス』にとつては実の父親。『ジュリエッタ』をギャラルホルンにスパイとして送り込む事自体猛烈に反対しており、アルベルトやサブレからの後押しもあつて許した。モットーは『寄らば大樹の陰』であり、人の助けをモットーにしている。人は他人の助けがなければ生きていけず、人はその為の努力をするべきだと考えており、幼い頃より人の助けになることが多かつたためか、いつかそれが返せるような人間になろうと努力を続けてきた。その為か、観察眼がかなり優秀で才能のある人間を見抜く術を持つ。多くの人から慕われており、それも又才能の一つ。

アルベルト・シユキュナー

概要……………秘密組織フォートレスの副首領であり、元ギャラルホルンに所属しており、生真面目な性格をしている男性。指揮や戦術能力は抜きんでており、サブレもかつて指南を受けたことがある。真面目さが前面に出ており、基本的に怒っているように見える。『マハラジャ』は彼を信頼しており、仕事の管理も彼に任せている。サブレにとつては依頼を出す純粋な上司である。私生活から仕事までなんでもこなす。

ソニア

概要……………秘密組織フォートレスの開発担当の白銀の髪をなびかせる女性。開発整備を担当しており、ガンダムフレームにご執心でサブレ達についてくるのも戦闘データ

をリアルタイムで知りたいためである。天才であるが故にどこか抜けており、サブレに言わせれば頭のネジが何本か抜けている状態とのこと。開発整備技術は飛びぬけておりその点は信頼できる……が、前述のとおりどこか頭のネジが飛んでおり、人をいじくって楽しむところがある。サブレは何回か実験に付き合った事がある。その度、サブレがアガレスで暴れ回る結果に終わっており、ソニアから見たらアガレスは最も試しがいのある機体である。

ジュリエッタ・ジュリス

概要……秘密組織フォートレスからギャラルホルンへと入り込んでいるスパイ。金髪で釣り目をしておりどこか直情的な性格をしている。サブレとは幼馴染の関係であり、ラストルの前とサブレやマハラジャの前では態度がかなり違う。というよりスパイとしてふるまっている際は忠実過ぎる部下を演じており、サブレやマハラジャの前では素直になれなく、興奮すると自然に暴言が出てくる。モビルスーツの腕前はサブレに全くなかわず、それでついきつい態度で接してしまうだけで本人はどうやれば素直な言葉で言えるかどうかで常に悩んでいる。スパイとしてはアルベルトから指南を受けており、サブレよりましなレベルであった為選ばれた。本人たちは幼馴染とは言わず腐れ縁とい続けている。

モビルスーツ設定集

ガンダム・アガレス

概要……ガンダムフレームの中でも二番目に作られたガンダム。バエルと同時進行で開発を受けており、バエルがバランスを重要視しているのに対し、アガレスは後に一転特化型と言われる機体の先駆けになった。ただし、ほかのガンダムとは違って開発予算の上限が設けられていなかった（バエルですら開発予算が限られていた）。スラスターや装備に関しても個人の趣向が込められており、無線式オールレンジ攻撃用兵器『ソード・ファンネル』、広範囲索敵システム『ウアサゴ』など当時のモビルスーツに乗せる機能としては高スペックなモノが選ばれており、その後のモビルスーツ開発においては重要な機体の参考にされていった。ギャラルホルンの中ではガンダムの中でも噂程度の機体であり、基本的に信じていない者が多いのが現実で、グリフォン家の倉庫に隠されていたところをサブレ達兄妹が発見し、マハラジャに譲った。マハラジャやソニア自身も発見するまでは噂程度にしか考えていなかったほど。厄祭戦終盤において、政府に反逆したアグニカを殺すため『鉄血のオルフェンズ』を名乗った者達にとってリーダー機の役割を果たした。その後は祖先に託された。

ガンダム・アンドロマリウス

概要……最後に開発されたガンダムである。大きな両腕から発する衝撃を使った押しつぶす攻撃を行うことが出来るが、一回攻撃する毎にフレームにダメージを与える

為、連発はできない。他のガンダム以上に装甲が厚くよほどの攻撃でなければ傷一つつかない。サブレが金星付近のデブリ帯で発見されたが、発見当初は右半身のほとんどが無く、アガレスの中に存在するデータを元に再現した。明楽の乗機として与えられ、明楽の手によって本来の性能以上を出すことが出来る。

ガンダム・フェネクス

概要……ガンダムフレームの中でも異彩を放つ機体であり、変形機構による飛行形態は言うまでもなく、ナノマシンによる自己修復機能など、今の技術では再現できない物ばかりで、特にナノマシンはソニアが努力して再現して見せ、フェネクス以外には使えそうもないとマハラジャに進言するほどだった。翼には刃がついており、右腕には折り畳み式の三刃式のクローと隠しナイフやソードなど基本的に近距離遠距離武装が揃っており、全ての武装にアンチナノラミネートが採用されており、殺傷能力はかなり高い。

その他の設定集

鉄血のオルフェンズ……かつて反アグニカ派が名乗っていた名称。「鉄血の意思を胸に！」という言葉を活用しており、アグニカを止める戦いに身を投じた。結果から見れば世界を変えることまではできなかったが、アグニカを殺すという当初の目的は達した。生き残りは『サントノーレ・エルフォン』とその双子の弟である『コロンビエ・エ

ルフォン』と『満月・オーガス』しか生き残れなかった。

フォートレス……秘密組織や宇宙海賊など様々な名前を持つているが、実態は不明。複数の会社や部隊を持っており、スパイも多くの組織に入れているなど活動はかなり広範囲に及び、それ以外にもエージェントと呼ばれる特別な人間もいる。移動型コロニーの『カゲロウ』を所有しており、隠れるための透明効果を持っており、ギャラルホルンでも見つけることはできない。アリアドネへのハッキングツールを使用した無効化など様々なステルス機能を持っており、一部の人には分からないようになってい

序章

厄祭戦。

戦争の自動化の代償に人は機械と戦う羽目になってしまった。長い戦いの果て、人類は悪魔と呼ばれたガンダムによる戦いによって。しかし、人類は罪を犯してしまった。

人類は悪魔達を討伐するための部隊を送り込んでしまう。

こじれ続ける関係は、人と人による争いへと発展していく。

しかし、そんな戦いも今終わりを迎えようとしていた。

アグニカ・カイエルと呼ばれる少年は大切な弟を政府の手によって殺され、それによって政府への反逆を決めてしまう。

彼に憧れて戦い、信じて突き進んできた少年少女達の多くは彼についていくことを決めてしまった。

そんなアグニカを止めようと『サントノーレ・エルフォン』の決起した『鉄血のオルフェンズ』と呼ばれ始める組織が出来上がっていく。

今、最後の戦いへと向かおうとしていた。

ノーマルスーツを着ている自分の両掌に嫌な汗をかき始め、全身の血が冷たくなっていくような感覚を覚えるのはこれから自分が大切にしていった人物を殺そうとしているからだとわかっていても、これだけは誰にも譲れない。

ガンダム・バルバトスはハーフメタルで作られた特殊繊維で編んだマントを着て、エイハブリアクターから発せられるエイハブ粒子や固有周波数を遮っている。

吐き出す息が温かすぎる所為か、マスクのバイザーが曇ってしまう。

内心早く来いという言葉は何回も吐き出した。

これで終わりにするんだと……

そして、その時は唐突に訪れる。

白い外色と折りたたまれたような突起物の生えた背中、二本の剣を構えたその特徴的な姿を見間違えようもない。

「鉄血の意思を胸に……俺達鉄血のオルフェンズが終わらせるんだ」

バルバトスの握るメイスと呼ばれる先端の尖った棍棒を振り下ろす。

「死んでくれ！アグニカ!!」

バエルの視線がこちらを向くときは既に戦いが終わっていた。

嫌な予感がした。

取り返しのない事態になるような嫌な予感がイラク・イシューの背筋をピリピリとした感覚が告げる。

先ほどからアグニカ・カイエルからの通信が無くなってしまっており、最後に連絡が付いた場所へと移動している最中だった。

しかし、そんな予感は的中することになる。

コックピットが潰れた状態で発見されたバエルのコックピットまでたどり着くと、コックピットのハッチを強引に開け、変わり果てたアグニカの体を抱きしめる。

「ああああ……アグニカあ!!!」

悲痛な叫びが無音の叫びと変わり、イラクは涙を流しながら抱きしめる。

「もう………どうでもいい。何百年かかろうが実現して見せる……お前の国を!!」

ドルトコロニーの側面には『2』の文字が書かれており、その中にある小さな倉庫の

地下への道の奥で二人の少年がドアをこじ開けようとしていた。

細身の少年『サブレ・グリフォン』は両手と両足を巧みに使いこなし、少しづつ開いていく扉を開けようと努力する。

その後ろで心配そうに見つめている丸っこい少年『ビスケット・グリフォン』は慌てながら小さな声で「やめようよお〜」とつぶやく。

全く聞こうとしない少年はようやく開いた隙間に自分の体を通し、中に入るが、いまいち暗く奥まで見えない。微かにだが大きな物体があるように見える。

もつと奥に行けば見えるのでは？と思つて一歩踏み出そうと思つたが、後ろからビスケットの情けない声が聞えてきて振り返る。

そこにはドアの隙間に挟まって身動きが取れなくなったビスケットの姿があり、サブレは大きなため息を吐き出しながら引つ張り出そうと奮闘する。しかし、全く身じろぎしないビスケット、サブレはドアの方を開けた方がいいのだと感づいてドアに手を掛ける。

ビスケットも同じように両手でドアを開けようとし、一分後微かにドアが動きビスケットは大きく前に落ちていく。

ビスケットに押しつぶされてしまうサブレは彼を退けようと両手に力を籠める。

何とか退ける事に成功するがビスケットはその場で泣きそうになつてしまう。しか

し、ビスケットの視線はサブレとビスケットが少し前に出たことで明るくなった室内へと向いたまま固まってしまふ。

大きく開いた口を見てサブレはどうしたのだろうと同じ方向を見ると、そこには白いガンダム・フレームが鎮座しており、背中にはマントを羽織り、全体的に角張ったデザインに、二つの目に頭部のアンテナが特徴的なデザインをしており、マントを羽織っていてわかりにくいがバックパックが異様に大きい。

最後に頭部に書かれている名前にサブレは注目した。

「ガンダム……アガレス？」

ガンダム・アガレスを見上げている人物が居た。

肩幅が広く盛り上がった筋肉が制服の上からでもよく分かり、周囲からボスと呼ばれている人物の名前は『マハラジャ・ダースリン』はガンダムを見る目を少しだけ細める。視線の先には『ASW—G—02／03』とその下に『ガンダムアガレス』と書かれている。

「02と03か……二機分のエイハブリアクターを積んでいるのが理由なんだろうが、しかし、エイハブリアクターは停止しているのか？」

マハラジャの疑問に答えたのは白の髪をした女性だった。

スラットとしたスタイルの良い女性『ソニア』は腕を組みながらガンダムを見上げる。「それもあるのでしょうけど単にあのマントが原因だと思うわよ。あれはハーフメタルを繊維状に加工して作ってあるんでしょう。でも、すごい発想よね。中々聞かないわよ」

本気で感心したような声を出す視線は黙ってマハラジャが右手で捕まえているサブレの方へと向く。

ほんの一時間ほど前にマハラジャが息子として迎え入れた子供。

そんなサブレとは反対側に娘のジュリエッタがいて、マハラジャがアガレスを持ち出そうと作業している男性から呼ばれると、子供達の手を一旦放して去っていく。

サブレの方はどこか居心地の悪い気持ちを抱いているようで表情がさえない。そんなサブレにジュリエッタが近づいていき、手をさし伸ばす。

「私ジュリエッタ。あなたは?」

「僕はサブレ……」

火星の空気って冷たいんだなって思いながら黒く染め上げられたアガレスのコックピットの外で火星の空気を感じていると、右隣に待機しているガンダム・アンドロマリウスが大きな両腕が存在感を放つ。反対側に座っているガンダム・フェネクスは赤い外

装と鳥の翼のようなバツク。パツクが火星の大地とマツチさせている。

アガレスの中から漏れている jazz が通信で両機にも伝わっているように、ガンダム・フェネクスに乗っている赤い髪の少女『ジョシユア・レッドアイ』が不快そうな声を出す。

「うるさいんですけど」

「我慢しろ」

俺がそう言つてやるとジョシユアは小声で「なんでサブレ先輩ってこんなにわがままかな」とつぶやく。

「そう言う事は俺に聞こえないようにしろよ。見ろ、明楽なんて小躍りしているぞ」

「見えていないのによく分かりますね」

「分かるさ。通信機越しに明楽の鼻歌が聞こえてくるからな」

Jazz の曲調に合わせた鼻歌が聞こえてくればそれに合わせて小躍りしているぐらいは読める。

俺の頭の中には小躍りしている背丈の低い黒髪の少年が映っている。

明楽が俺の二個下の十四歳。

ジョシユアが俺の三つ下の十三歳。

しかし、身長や体つきは完全にジョシユアの方が上だし、明楽はそれ以上に童顔が気

になってしまふ。

この地に張り込んで二日。

標的が違う場所に移動してしまえば作戦は台無しだが、確かな情報筋からの情報なので信用してもいいだろう。

双眼鏡で数キロ先を確認していると、目の前にモビルスーツの砂煙が見えてくる。

「当たり。戦闘準備！」

サブレがアガレスのコックピットへと入っていくと、アガレスのデータベースが情報を探り当てる。

『ヘキサ・フレームであると該当。凡庸性が高くバランスの良い機体。しかし、防御力が低いので敗北の可能性は1%』

サブレは握りしめる操縦桿に自分が右腕に巻いている『タクヤ・ジュン』と書かれた黒ずんだ血が付いたドッグタグを巻きつける。

ヘキサ・フレームからの砲撃をアガレスは華麗なステップで回避し、打撃用武器レンチメイスと呼ばれる棍棒の一種を肩に抱きながら接近していく。

先に仕掛けたのはフェネクスだった。大きく開いた翼と変形した鳥のような外見が二機のヘキサ・フレームを切り裂いてしまふ。そのまま上空に飛翔し一旦敵の目を引き付ける。

その隙に一気に接近するアガレスのレンチメイスをヘキサ・フレームのコックピットに叩き込む。その時点で残り敵機数が四機。

その内の一機がガンダム・アンドロマリウスの大きな右腕がヘキサ・フレームを捉え、持ち上げるとそのまま粉碎音と共にヘキサ・フレームを沈黙させる。

アンドロマリウスが離れたヘキサ・フレームは頭部とコックピットが潰れており、コックピットの隙間から血とオイルが混じったような『何か』が漏れ出している。

そつちに見とれていたが、右側から襲い掛かる敵の斧を俺は後方へのステップで回避、敵の斧を奪ってコックピットに叩き込む。これで残り二機。

だと思っていたらフェネクスが一機のヘキサ・フレームのコックピットに剣を差し込み、右腕に折り畳み式の三刃式のクローが最後の機体のモビルスーツをと構えて手元まで連れてくる。

とどめとばかりに収納式の仕込みナイフがコックピットを貫く。

アガレスの斧を手放し、沈黙してしまったモビルスーツに目を瞑り黙祷する。

「モビルスーツを回収してその場を離脱する」

俺が指示を出すと明楽とジョシユアが視線を東の渓谷の隙間の方へと向けて告げる。

「先輩。あそこに隠れているモビルワーカーはどうしますか？」

気が付いていないわけではない。

「無視しろ。歩く棺桶を相手にするだけ無駄だ」

そこに隠れていたのはクリュセ・ガード・セキユリテイ通称『CGS』と呼ばれている組織の者だったと気が付いたのはこの翌日の事であった。

鉄と血

クリユセ郊外に位置する枯れ果てた火星の大地、『CGS』と大きく書かれた建物の中で黒髪と特徴的な眉毛をしている少々小柄な少年は参番組の隊長を探してさまよっていた。

窓が無く金属の壁の生活感があまりない廊下を歩いていると、目的の部屋までやって来た。後ろから追いかけてくる褐色肌の中年の男性が追いかけてくるのを感じ、部屋の中を覗いてみると案の定ブーメランのような前髪が特徴の少年が眠っている。

全く。

そんな気持ちを抱きながら、仕方なさそうな表情を浮かべてそばまで寄ると名前を呼び。

「オルガ。オルガ・イツカ？まだ寝てるの」

オルガ・イツカ。

そう呼ばれた少年は無反応を示し、黒髪の少年はオルガの顔を覗き込む。しかし、オルガはどこかうなされたように表情を歪ませている。

何度か揺すって起こすと大きく開かれた瞳から動揺が見て取れる。

「おう。ミカか」

三日月・オーガス。

それが黒髪の少年の名前だった。

体を起こすオルガの動きに連動する様にドアの方から褐色肌の中年の男性が体をのぞき込む。

「三日月いたか？」

三日月が歩き出す中、オルガも後ろからついて行こうとする。しかし、中年の男性は大きくため息を吐き出す。

「ここは立ち入り禁止だっけいつも言っただろうが」

オルガが「おやっさん」と呼ぶ中年の男性こそ『ナデイ・雪之丞・カナバツサ』という名のCGSの整備長。

「マルバが呼んでるぞ」

その言葉を耳にしながら内心「またろくでもない話なんだろ」っという悪態をつく。

CGSの参番組に命じられた任務とは、加勢の革命家『クーデリア・藍那・バーンス・ライン』の地球への護衛任務。

長い金髪とお嬢様らしい立ち振る舞いが特徴で、火星のテレビでは連日彼女の噂でいっぱいだった。

そんな人間がそこまで大きくもない民間傭兵企業の少年兵に仕事を頼む、隊長のオルガと副官のビスケットは疑念が常に頭を抱えており、食事中もその話題が尽きないでいた。

実際オルガの正面に居た金髪の癖が強い髪をしている少年『ユージン・セブンスターク』がオルガにつかかっていることも、濃茶色の髪をした陽気な少年『ノルバ・シノ』が女の事で頭を一杯にさせていることも、喧嘩を止めようと耳を引っ張る三日月の行動もいつもの事だ。

食事を終えて立ち去っていく長身とガタイの良い黒髪の少年『昭弘・アルトランド』に向けて「すまねえな」と告げると昭弘は「いつもの事だろ」と皮肉を聞かせて返す。

食事をとる為に口をモグモグさせているビスケット、何かを思い出しているような顔になる。

「そういえば、シノ達が昨日見つけたモビルスーツの事だけだ」

「そうそう！なあ？ユージン」

シノがそう語りかけるが、ユージンは耳を痛そうに抑えるだけで反応が薄い。常に喋っているシノの言葉を簡単にまとめるところである。

昨日の仕事帰りに荒野でモビルスーツの戦闘を目撃したのだという。三機の色が違うモビルスーツがたくさんいた（七、八機ほど）の似たようなモビルスーツをあつとい

う間に潰して見せたそうだ。

「見間違いないじゃない?」

「おいおい。ビスケット信じてねえだろ」

「でもなあ、モビルスーツがいて生きて帰れる?」

「俺達に気が付いてない風だったぜ」

ビスケットとシノが言い争いになっているとオルガがスプーンで皿を叩きながら口を割り込ませる。

「どうせ、俺達みたいになやつらは眼中にないってことだろ?」

モビルスーツから見れば彼らが操るモビルワーカー（よく動く戦車のような兵器）など、その辺の石と変わらないのだろう。

モビルワーカーではモビルスーツには勝てるはずがない。

この苛立ちは何なのだろうと思う一方でどうしてもビスケットを見てしまう。

きつとこの苛立ちは夢が原因だとわかっているが、夢を覚えていないオルガには不安な気持ちの方が強い。

この先何かが起きるような感覚。

手に残っている不安な感触がそれがまるで夢ではないと告げているようで、暗い表情を三日月だけが見ていた。

クーデリアは本人の強い希望でスラム街を見てからCGS本部へと向かう手筈に変更していた。しかし、車を運転している黒髪のメイド『フミタン・アドモス』は反対していた。

細い道をクーデリアを載せた車が走る中、問題は起きた。

車の前に小さな女の子が飛び出してきた。咄嗟にブレーキを踏むフミタン。しかし、フミタンは少女の目と合ったからだろう。少女の瞳が被害を受けそうになっている者の目では無く、獲物を見付けたような瞳だったからだ。

「大丈夫ですか」

警戒心の無いクーデリアが飛び出していくと、フミタンがそれを止めた。

「いけませんお嬢様」

同じように飛び出すのが、一步遅く少女は泣きながらクーデリアに飛びつく、引きはがそうと試みるが少女はそれより早く離れて逃げ出していく。その手に財布を握りしめながら。

クーデリアはとっさの事で目を丸くさせるだけで、盗まれたとはまるで考えていないようで、フミタンは追いかけてようと足をそつちに向けたときだった。少女の右腕をつかんで逃がさないように強い力を込めている茶髪の少年に出会った。

サブレ・グリフォンは少女とクーデリアを見比べながら立ち尽くしていた。

結果から言おう。偶然だ。

車の前に少女が飛び出した所は全くの偶然目撃しただけだし、その後のお嬢さんの行動は意外だったが、彼女が革命家で有名なクーデリア・藍那・バーンスタインだと気が付いたことに気をとられ、少女が盗む手を止められなかったのは痛手だっただろう。しかし、その後少女がこちらに走ってきたことは二つ目の偶然だった。

結果から見れば、俺は狙ったわけでも無く捕まえることが出来た。

「財布を離せば逃がす」

そう告げると少女は悔しそうに抵抗を試みる。しかし、俺の握力が強すぎると理解できたのか、諦めたのかは分からないが少女は財布を投げ出して逃げ去っていく。

近くに控えていたボロボ布のホームレスの男性が飛びつこうとするが、俺はそれをハンドガンで威嚇してやる。

ホームレスは驚きと唾然が混じり合ったような感情を表情に浮かべながら逃げている。

この辺は治安が悪いな。

俺は財布を拾ってお嬢さんに返してやる。

「今度は気を付けなよ。この辺は治安が悪いからな」

財布を受け取るお嬢さんはどこか辛そうに少女が去っていく方向を見つめていた。

どうしたのだろうか？

「あそこまでしなくてもよいのではありませんか？」

ムツと少しむかつきを覚える。

「優しさと言きは別だ。甘さが自分に帰ってくる場合がある。時に厳しくすることも大切なことだよ。それにこれからあんたがやろうとしていることは優しさだけじゃどうしようもないだろう？ クーデリア・藍那・バーンスタイン」

驚きで表情が変わる。

「別に驚くべきことではないだろう？ あんただって自分の知名度が低いって思っていたわけじゃないだろう？ それにこんなスラム街にドレスを着て現れるような人間はあんたぐらいしか知らないしな。気を付けなよ。あんたを狙っている人間だっているんだし、接する人間を疑うぐらいがちょうどいいと思うよ」

言い過ぎたかな？

お嬢さんは項垂れながら立ち去っていき車に乗り込む。黒髪のメイドさんはどこか複雑そうな表情でお嬢さんを見ている。

ふん。この人は訳有りかな？

「後悔しないようにした方がいいよ」

「？ ？ ？ どういう意味ですか？」

「老婆心みたいなものかな。お婆さんじゃないけどさ。人間いつ死のぬか分らないからさ後悔しないほうがいいよ。あんたがあのお嬢さんに何を想い付いているのかは俺は興味が無いしき。でも、見ていると不安になっていくよ」

「私は……別に」

「アンタはどう思っているのか知らないけど、俺から見ればあんたの気持ちは随分揺れているように見えるけど。まあ、好きなようにすればいいけど」

そう言いながら俺は反対側の喫茶店へと向かって行くが、車はその場から中々動かなかった。

俺が喫茶店に入ると一番奥の席で飲んで騒いでいる明楽とジョシユアが一定の方向に視線を向けており、その方向を見ないようにしていたのに否応なしにそっちの方を見てしまう。

円形のテーブルに五人の大男が大騒ぎをしており、薄茶色と黒目のジャケットを着こんでいて、服の背中に『CGS』と太字で書かれている。

見るからに傲慢そうな大人たちで、大きな声で「あのクソガキ」とか「可愛げがないよな」とか叫んでまわっている。

不機嫌度合いが上限を超えようとしているのに気が付いてほしい。

明楽がこちらをチラ見しては恐怖をハンバーガーにかじりつくことでごまかし、ジョ

シユアは俺が暴れだす時を今か今かと待ちかねている。

君はそこままでしてまでも暴れて欲しいのかね。

いいよ。お兄さん暴れちゃうよ。

俺はドリンクバーへと移動している風を装いそのまま近くまで寄ると俺は椅子の一脚を蹴つ飛ばす。

転げまわる男を冷たい目で見下してみる。他四名が怒りの表情を浮かべ、その内の刈り上げているリーダー格の男が俺の襟もとを強くつかんで持ち上げる。

「ガキがあー！舐めてんのか？」

「スンませえん」

おつちやらけて返す。まあ、謝るつもりも無いし。

「ぶつ殺すぞ！ガキはガキらしく大人の言う事を聞いてりやいいんだよ！」

今の言い方に完全にブチ切れる。多少やり返せればすつきりさせようとか思っていたが、こんな言い方をされたらやり返したくなる。

「子供を盾にしかできない役立たずはホームレスと一緒にでしょ？それで金をもらうんだから子供にお礼を言うべきでしょ？」

額に分かりやすい血管を浮かべ怒りレベルが限界突破の勢いを見せようとする大人げない大人四名に対し、後ろでやる気満々のジヨシユア。

君は楽しそうですね。

「もう一回行ってみろや」

「安っぽい挑発だね。ホームレスさん。子供を盾にして恥ずかしくないんですか？」

右拳を強く固めて今にも殴りかかろうとするが、それより早く俺は左足で相手の股間を蹴り上げた。

「はう!？」

情けない言葉と共に地面に付す大男を乗り越えて二人がまず殴りかかっていたのが、俺はそれを軽くさばいて見せる。

右側の男の顎目掛けてアツパーを決めつつもう一人に回し蹴りを決める。

ジョシユアが喧嘩が始まったと近づいてくると大きな胸元見せつけながら接近する。

紐ビキニの上に薄手のジャケットにホットパンツという全裸とさほど変わらない格好なのだが、残りの男は近づいて来たジョシユアの胸元に視線を移し、どう遊ぶかで脳内がいっぱいになっている。

「なあなあ。俺達オジサンと遊ばない?」

ああ。そういう事は駄目だ。絶対酷い目に合うに決まっているんだから。

なんて思っていると案の定である。胸元に手を伸ばす男の体を片手で一本背負いを決めて見せる。驚いたもう一方の男性を足払いで転げさせると掌にヒールをめり込ま

せる。

あれは痛い。

「これで終わり？」

ジョシユアは心から残念そうな声を出す。

多少はすつきりしたので良いとしよう。そう思い明樂の方を見ると、明樂は小柄な体にどうやって入ったのか不思議に思うぐらいテーブルに大量の皿が積み重なっていた。

少しはこつちに興味を示さない。

問題が起きたのは俺達がホテルに戻ってきてからだった。十階建てのホテルに七階の部屋を予約したのだが、室内が荒らされていた。

土足の跡があちらこちらに付いており、鍵穴が壊されていた。机などの引き出しが開けられていて、ベットの下からサポートAIである『ハロ』が丸っこい体を転がしながら現れる。

「侵入者！無念ダ！侵入者！無念ダ！」

緑色の体をあちらこちらにぶつけては反射して明後日の方向へとぶつかっていく。俺はそれを拾い上げ抱きしめる。

「何があつた？」

「侵入者。CGS！」

あの時の大男か。

喫茶店で暴れ回った時の……短絡的な思考をしているな。ああいう大人は長生きできそうにないな。

まあ、咎めるまでもないけれど。

「物盗マレター！ICチップ！」

そう言われてベットの下に隠しておいた荷物に手を伸ばす。ほぼ空になっているリュックサックの中を探っていると確かに物は完全に消えていた。

「あのクソホームレスもどきめ。ぶっ殺してやる」

俺はハ口を部屋に置いた状態で勢いよく部屋を出ていった。

胡散臭さは初めから分かっていたし、罠は罠で掻い潜ると決めていた。しかし、ギヤラルホルンが動くとは読めきれなかった。

ギヤラルホルン。

地球に拠点を置く最大規模の軍事組織。と言われているが実際はCGSと根っこを同じにする民間傭兵企業だ。

しかし、絶大な権力と武力をもって支配権を拡大し続ける彼らを一部の経済圏のトップや一般市民なんかは鬱陶しがらなくなった。

そんなギヤラルホルンから攻撃を受けたという事実を前にして一軍と呼ばれる大人

たちはすぐさまに逃げ出した。

しかし、参番組の隊長であるオルガはなんとなくこの状況が読めていた。

もちろんその備えはしていたつもりだった。

逃げ出したことへの動揺が部隊全体に広がる。

オルガにはこのまま逃がすつもりは無かった。

「オルガ！悪い方の読みが当たったよ。一軍は今社長と一緒に裏口から全速で戦闘域を離脱中」

ビスケットが通信機を持ちながら姿を現すとそんな言葉をオルガに向ける。

「おいおいどうすんだよ！俺らこのままじゃ犬死かよ！」

ユージンの言葉が更に部隊全員に伝わってしまう。しかし、オルガはこのままで終わらせるつもりも無かった。

「いや。違うな。それじゃ筋が通らねえ。なあ？ビスケット」

「だね」

打ち上げられる信号弾を前にしてギャラルホルンのモビルワーカー隊の進路が急激に変更する。

しかし、そんなオルガの作戦も三機のモビルスーツの前に沈黙することになる。

双眼鏡でのぞき込む明楽の表情はさえない。それも仕方がないだろう本来であれば

ベットのの中に入っている時間だし、目の前で起きている状況はあまり気持ちのいい戦いではないからだ。

ギャラルホルン製のモビルスーツ『グレイズ』深緑の色合いと頭部がハンマーのように前方に出ている。

ショートアックスとシールドを装備したモビルスーツを前にCGSのモビルワーカーは戦いにならない戦いを繰り返していった。

あれではただの殲滅だろう。

しかも一機のモビルスーツが一方的な戦いをしており、また今一機のモビルワーカーが空を舞った。

明楽が耐え切れず立ち上がる。それを左腕で押さえる。

「気持ち分かる。しかし、お前のモビルスーツだと目立つ。それにはアガレスしかない」

「でも！あんなの戦いじゃない！」

興奮する明楽を俺はあくまでも冷静を装いながら語り掛けてみる。ジョシユアは本を読みながら興味なさそうにしている所が見える。しかし、その手が小さく震えている。

マントを羽織ったアガレスのアイカメラと俺の視線が合ったような気がする。

分かってるよ。俺達は戦えない。

粘っているモビルワーカーの一つに斧を持ち上げようとするが、地面が破壊されるような砂煙と衝撃が俺の方にもよく分かる。

見ている瞳が大きく開かれるのがよく分かり、アガレスの目が突然姿を現したモビルスーツを捕らえる。

二本のアンテナにガンダム特有のツインアイカメラ。ガンダムフレームが所々むき出しになっており、特に肩には装甲が付いていない。

「勝てるんですか?」

「さあ?」

俺は他人事のように答えて見せる。

「彼は勝てるのですか?」

部屋から連れ出したクーデリアは不安そうな面持ちでビスケットを見ていた。それに対してビスケットは消えていったガンダムを見ながら多少見上げて答える。

「さあ?」

無責任にも聞こえる言葉、クーデリアは驚きを示す。

その時サブレも同じことを言っていた。

「僕達はただ負けないように抗う事しかできない」

「彼らに出来ることは負けないように抗う事だけさ」

俺の背筋を流れる汗の正体が突然現れたガンダムにあるのか、それとも全く別の何かなのか？俺にはそれすら分からなかった。

バルバトスとアガレス

「どうすればいい？オルガ？」

この言葉と共に投げかけられる鋭い視線。期待をプレッシャーで纏うような視線はいつ見てもオルガの心に怯みを与える。

オルガはこの期待にいつだって応え続けてきた。その分だけ三日月もどんな無理難題に付き合ってきた。

今回だつて無理難題に付き合ってくれるはず。

「ミカ。お前にしか頼めねえとっておきの仕事がある」

三日月が下の格納庫までモバイルワーカー毎降りると、雪之丞とヤマギと呼ばれる少年がモバイルスーツの整備をしており、その端っこの方でクーデリアが座りこんでいる。

クーデリアは一瞬だけ三日月を見ていると俯いてしまう。

おそらく周囲から『邪魔』とでも言われたのだろう。

三日月も一瞬だけ確認すると雪之丞の方へと向かっていく。

この場においてクーデリアは戦力にならない。それは仕方のない事だし、かといって無理に動けば邪魔になるだけだ。

場面はモビルワーカーのコックピット部分をモビルスーツに転用する作業へと移行していた。

「転売目的でマルバ（CGSの社長）が秘蔵していたもんでな。コックピット周りは使うようがねえからごっすり抜かれちまってたんだ。だからこいつを流用する」

そう雪之丞は説明しながらコックピットの座席にクレーンを取り付ける作業をする最中に三日月にタブレットを手渡すが、三日月はそれを断る。

三日月は文字が読めない。

「ああ……そうだったな。まっ欲しいのは『阿頼耶識』のインターフェイスの部分だ。大戦時代のモビルスーツはだいたいこのシステムで……」

阿頼耶識という言葉聞いたクーデリアが身を乗り出しそうになり、ハッキリとした声で「阿頼耶識？」と発する。

「それは成長期の子供にしかな定着しない特殊なナノマシンを使用する危険で人道に反したシステムだと……」

「ナノマシンによつて脳に空間認識をつかさどる器官を疑似的に形成し、それを通じて外部の機器……この場合モビルスーツの情報を直接脳で処理できるようにするシステムだ。こんなもんでもなきや学もねえこいつみてえなのにこんなもん動かせるわけねえだろ」

「ですが……………」

クーデリアの不満のような声に雪之丞は無視しながら心配そうな表情で三日月に語り掛ける。

「けどな三日月。モビルスーツの情報のフィードバックはモビルワーカーの比じゃない。下手したらおめえの脳神経は……………」

「いいよ。もともと大して使っていないし」

雪之丞は三日月の言葉に呆れながらも作業を続ける。まるで大したことじゃないように語るその姿にクーデリアは声を張り上げる。

「なんで……………そんなに簡単に……………？自分の命が大切では無いのですか!？」

「大切に決まってるでしょ。俺の命も、みんなの命も」

その言葉に絶句してクーデリアはその場に立ち尽くす。

背中につけた機械をモビルスーツへと接続する。

三日月は目の前で立ち上げる画面を気に掛ける。

「これなんて読むの？」

「ええ〜『GANDAM FRAME TYPE』……………ババ…バロ…」

脳内に叩き込まれるような情報の本流を前に三日月はまるで殴られたような衝撃を受けた。鼻から大量の血を流しながら「バルバトス」と呟いた。

雪之丞が心配そうにのぞき込むが三日月は「大丈夫」といつて立ち上げを続行する。

「じゃあねえか。行けるってよ！ヤマギ！リフトアップだ！」

コックピットの中へと入っていく中薄暗い個室のような部屋で三日月の視界とバルバトスの視界を繋げる。

「行くぞー！バルバトス！」

振り下ろされたメイスの一撃でグレイズが沈黙する姿を見ると、アガレスに妙な仮面が付いているのが見て取れた。

「何をしているんだソニア？」

ここにいないはずの白銀の髪的女性に対し睨みつけてみるが、微笑み返されるだけで反応が無い。

「偽装装甲を軽くつけてあげたわ。マントを羽織って戦えば正体が割れる心配も無いでしょっ。」

「必要を感じないが？」

モビルスーツ。ガンダムがあるのならギャラルホルンが勝てるとは思えない。

「数が少なければね。でも……………」

指をさす方向を見るとそこにはグレイズが五機ほど現れた。

「おいおい数が多すぎないか？たかが中規模の組織だぞ？」

ソニアがニヤニヤしながら俺の方を見てくる。

「誰かさんが荒野で暴れ回っていたからねえ」

俺の所為か……責任は俺にある。

「ソニア。俺が戦う」

黒髪の少年が動揺している姿を上官である克蘭ク二尉が死者への弔いの表情を浮かべる。

「そ………そんな………オーリス隊長が。ここにモビルスーツがあるなんて情報は無かったのに」

確かに事前情報ではそんな情報は無かったが、この数日前ほどから奇妙なモビルスーツを扱う集団が確認されていたためか、異様に多いモビルスーツが実戦に投入されていた。

後続のモビルスーツ部隊合計五機ほどが現場に現れると、克蘭クは心の中でそんなに必要なのかという疑問と葛藤していたが、それもさらなる予想外の侵入者によって払拭することになる。

全身を黒い装甲とそれを隠すようなマント。頭部には見慣れないマスクのような何が装備されている。

「克蘭ク二尉！あれは!？」

「……最近目撃されていた未確認モビルスーツなのか!?こんな所で…アイン！我々は白い奴をやるぞ！」

同時にバルバトスに乗っている三日月に『sound only』の言葉と共に声が聞えてくる。

「手伝おう。あの五機が近づいて来たのはこちらの責任だ」

「勝手にすれば」

若い声と共にレンチメイスが振り下ろされる音が聞こえてくる。三日月の視界の片隅の少し離れた所で戦う姿が見える。

一人で五機を相手にしている姿を見る。

まるで五機のグレイズでも相手にならない姿を見るとさすがの三日月でも自分でも勝てないという感想を得た。

克蘭クのグレイズがショートアックスを構えながらバルバトスへと突っ込んでいく姿を見ながら三日月は素早くバルバトスの位置を変える。三日月の視線には撤退していくギャラルホルンのモビルワーカー隊の姿が見える。

そのモビルワーカー隊に向かって突っ込んでいき、蹴散らしながら制止する。

アインの向ける銃口にその姿を捉える。克蘭クの制止する声アインにも同じようにその存在に気づく。

「撤退中の我が軍のモビルワーカー隊！貴様！モビルワーカーを狙うとはなんと卑劣な！」

その言葉を聞いていた三日月とサブレはほぼ同時に声を発する。

「どの口が言うんだ」

アガレスがグレイズのショートアックスの攻撃を華麗に回避しながらレンチメイスを振り下ろす。五機いたはずのグレイズの内二機は既に撃沈されており、他の三機も実力の差に本来の性能を発揮できていない。

その闘いにサブレはいささか疑問を感じていた。

「奇妙だな。一人の女性を狙うにしては異様にしつこい。何を焦っている？」

バルバトスがメイスを投げ飛ばして一気に接近する姿を見ながらも思考を諦めない。

「そうか………：監査官が来るのか。それで………その前に殺してノブリスから依頼金を受け取るつもりなんだな」

取っ組み合いになるクランクのグレイズが語り掛ける言葉。

「そんな旧時代のモビルスーツでこのギャラルホルンのグレイズの相手が出来るとでも

……？」

「もう一人死んだみたいだけど？」

応じる言葉はあまりにも幼く、聞いただけでそれが子供だとわかってしまう。

「その声！ 貴様まさか……子供か？」

「そうだよ。あんたらが殺しまくったのも……これからあんたらを殺すのも……」

ライフルでの威嚇射撃にとっさに後方に飛ぶことで回避するが、スラスタアの燃料が切れたようだ。

「ガス欠？」

その姿はアガレスからでも見て取れた。アガレスはレンチメイスでグレイズを持ち上げながら吹き飛ばし、持っていたショートアックスを奪ってコックピット目掛けて投げる。

ショートアックスの刃はコックピットに深く突き刺さり、アガレスは身を翻してバルバトスの方へと目指す。

アインは砂煙を上げるバルバトスに向けてライフルの照準を向ける。

「無駄だ！ この距離なら照準は……」

しかし、それが油断を呼んだのだろう。下から駆けてくるバルバトスにとっさの反応が出来ない。

「下だ！」

その叫び声でやっと下からやってくる攻撃に反応するが、メイスの方が一歩速い。しかし、克蘭クはとっさに攻撃の軌道を逸らすことに成功し、直撃だけは回避する。

アインのグレイズを担いで撤退を決めた克蘭ク。

「アイン無事か？」

「は………はい。しかし………」

「よし。このまま撤退する」

「向こうはスラストターが不調だ。残っていたモビルワーカー隊も安全圏まで離脱できた。それに………我々以外のモビルスーツ隊は全滅だ。これ以上戦っても勝ち目がない」

しかし、三日月はまだ戦おうと一歩前にバルバトスの足を踏み出させるが、鼻血の量は半端ではなく意識を失いそうになる中、倒れそうになる機体をアガレスが支えた。

「あんた………誰？」

オルガ・イツカの前の前に立つ黒髪の少年に見える人物こそが黒いモビルスーツのパイロットなのだが、いまいち信頼できない。

「要するにあんた達は自分達が荒野で戦ったからギャラルホルンが戦力を増強したっていうんだな？」

「そうだ。そのうえで交渉がある」

「聞こう」

「君達の組織の大人が奪った『ICチップ』を返してほしい」

黒髪の少年が示す道具はビスケットがあつという間に見つけ出し、持ってくる。しかし、同時に良くない表情を浮かべる。

「オルガ。一軍が呼んでる」

「済まないな。こつちも忙しくてね。これでいいか？」

「ああ。すまない。こちらが迷惑をかけた。」

「いや。元々こちらの問題だ。むしろ助かった」

黒髪の少年は少しだけ考えたようなそぶりを見せながら立ち去る。

コックピットの中に入り込みその場を移動しながら黒髪のカツラを脱ぎ、メイクを濡れ布巾で落とす。

「兄さんにも見つからなかったし、一件落着かな？」

ギヤラルホルンのビスコー級クルーザーである『ヴィルム』で火星に向かう者達こそ、ギヤラルホルンの監査官だった。

監査官であるマクギリス・フアリドは整った顔立ちごと視線を後方で退屈そうにして
いるガエリオ・ボードウインの方に向ける。

「辺境任務は退屈か？ガエリオ」

「まさか。監査部付の武官として仕事はきっちりやるさ。マクギリス特務三佐殿」

ガエリオはキザッぽい顔つきをマクギリスに向ける。

「今の地球圏の経済は火星の経済を組み敷いた上に成り立っている火星支部には我ら世界秩序の番人たるギャラルホルンの一員として襟を正してもらわねば」

マクギリスは前髪をいじりながら真剣なまなざしで語り、ガエリオは同情するような表情を作りながら返す。

「支部の連中には同情する」

「火星は今、全土で独立の機運が高まっているらしい。案外人の同情をしている暇はないかもしれないぞ」

まさに今、火星支部は作戦の失敗によって頭を抱えていた。

「何!?!失敗しただど!?!」

コーラルと呼ばれる火星支部を任されている男性は頭を抱えながら作戦失敗の報告を聞いていた。

通信機を前に克蘭クは正確な報告を上げた。

「指揮官であるオーリス・ステンジャが死亡。三割の兵とグレイズ六機を失いやむを得ず撤退を……」

「ふぎけるな!」

机を強く叩きつけながら悔しそうに表情を崩すコーラル。

（なんてことだ……火星独立運動の旗頭だったクーデリア・藍那・バースタインが我々

の襲撃により華々しく戦死を遂げる。ヒロインを失った火星は今まで以上の混乱に陥り地球への憎しみを強くする。そういう手筈だったのに！このままではノブリスからの資金援助はおじやん。しかもモビルスーツを六機も失ったとなれば……このままでは!？」

「フアリド特務三佐がこつちに着くのはいつだ？」

「はっ。二日後には」

コーラルは近くにいる士官に尋ねるとそのままクランクへと命令する。

「いいか！それまでになんとしてでもクーデリアを捕らえろ。そして戦闘の証拠は全て消せ！相手ごと全て！」

「相手は……子供でした。その上……もう一方は行方不明でして、証拠も全部消されていのです……これではまるで……」

「口答えをするな！」

「子供を！少年兵を相手に戦うことなどできません！」

「甘いことを抜かすな相手が子だろうと関係ない！一人残らず排除しろ！これは命令だ！

絶対に失敗は許されんぞ！」

一方的に切られる通信を前にクランクは歯ぎしりしながら黙っていることしかでき

なかった。

(子供………相手に殺すことは………できん。ましてや………アインに子供殺しの罪を着せるなぞ………)

ビスケットが双子の妹であるクッキーとクラツカを相手にしている頃、ようやく三日月が目覚ましていた。

「おめえが氣い失つてる状態じゃこいつとのリンクが切れなかったんだよ。それと、黒い奴は撤退したぞ」

「そっか………何人しんだの？」

「参番組は四十二人。一軍は六十八人だ。おめえは………おめえとこいつはよくやったよ」

雪之丞に片付けを任せてその場から立ち去る過程で三日月は幼い表情をした少女アトラと出会った。

アトラの視線が咄嗟に三日月の血の方へと向く。

「あれ？アトラ？ああ、配達か」

「あの………三日月。あのね………平気？」

平気に見えないことは分かっていたし、渡したい物があつたはずなのに立ち去ろうとする三日月を止められなかった。

「うん。ありがとうアトラ。今ちよつと急いでるからあとでね」

「あつ……うん！」

せつかく作つたブレスレットを握りしめる。

(馬鹿だな私……平気じゃないの分かつてたのに)

ノアキス七月会議のクーデリア・藍那・バーンスタイン。

彼女は後悔していた。

少年兵の実態をよく知らなかった彼女は今少年兵の現実と、自分の甘さの結果を身に染みて理解していた。

あの時の少年が言っていた言葉が正しかったのかもしれない。

(彼らは……私のせいで……)

クーデリアの側によるフミタンの怪我を尋ねるが彼女は「かすり傷」だと言つてきかない。

父親から帰つてこいという言葉も聞いても大人しくうなずけない。

「今回の地球行きは秘密裏に行われるはずでした。ですがギャラルホルンの攻撃は間違はなく私を狙つてのもの。そしていつもは私の活動に反対しているお父様が今回に限つて……考えたありませんが……それを確かめてからでないと戻れません」

「分かりました。ですが、ここに残る意味も無いでしょう」

「それは……」

葛藤するクーデリアの目の前に荷物を取りに来た三日月が「まだいたんだ」と冷たく声をかける。

「三日月あの……先ほどは守っていただきありがとうございます」

「そう言うのはいいよ」

「でも私のせいで大勢の方が……」

「マジでやめて」

向けられる視線はスラム街で出会った少年の目とは違い冷たいが、どこか似ているようにも見える。

「たかがあんた一人のせいであいつらが死んだなんて……俺の仲間をバカにしないで」

その言葉がシヨックで……どうしても立ち直れなかった。

一軍と呼ばれる大人たちに今回の作戦の腹いせに殴られたオルガ達はクーデターを決めた。

このまま一軍に任せていても未来がないと判断しての行動である。

まだマルバ・アーケイの方がまじだった。

このままでは殺される。それがオルガの意思を固めた。

他の仲間達であるビスケットとユージン、シノと昭弘もまた同じようにここ以外に居

場所が無いのも事実。

特に否定する理由が無い。

三日月にクーデターの話を持ち掛けに行くと三日月は近づいて来たオルガに微笑み返す。

「ははっ色男になってんね」

「死んじまった仲間最後の別れをしなくていいのか？」

「んん〜いいよ。昔オルガが言ってた。死んだ奴には死んだ後でいつでも会えるんだから今生きている奴をが死なないように精一杯出来ることをやれって」

「そんなこともあったかな？……なあミカ。やつてもらいてえ事がある」

そう言つてオルガは黙つてハンドガンを渡すがミカは詳しく聞かずにハンドガンを受け取る。最後まで聞かずに受け取る姿に「話を聞く前に受け取るか？」と訪ねるが三日月はさも当然のように答える。

「これから聞く。でもどつちにしろオルガが決めたことならやるよ俺」

視線を逸らしながら「サンキューな」っと照れくさそうに答えるだけだった。

克蘭クは一人で立ち向かう覚悟を決めていた。アインがいくら言つても聞かない克蘭クは兵士としての汚名を着せたくないのだと告げる。

（戦いたくはない。しかし戦わずには済まされないので……）

克蘭クが困難に立ち向かおうとする中、ガエリオ・ボードウィンとマクギリス・ファリドが火星支部に到着していた。

散華

クッキーとクラツカ。ビスケットにとって大切な双子の妹達。彼女達は今アトラ・ミクスタと呼ばれる少女と共にCGSの食堂で食事の準備をしていた。その後クーデリア・藍那・バーンスタインと共に賑やかな準備を終えるとビスケット達参番組も同じように食事を始めた。

更に時間が経過するとビスケット達中核メンバーはクーデターを行う為、食事に睡眠薬を入れ、眠る時間を待つて計画を実行に移すことにした。

食堂前を通ろうとする三日月にクッキーとクラツカからスープが入った深皿を手渡す。

「はいー(´)飯まだでしょ?」

深皿を覗き込むと大きすぎる食材が丸々入っているのが見て取れた。

「でっかいね」

「これクーデリアが切ったんだよ」

悪気の無い声を聴いた瞬間に後ろで赤面するクーデリアは瞬間移動おも彷彿とさせるような勢いで急接近する。

「そ……それはダメ！これは私があとで責任を持つて頂くと言ったではないですか！とても人様にお出しできるものではないので私が自分でわあく!!」

賑やかなクーデリアの前で平然と食材を口にする三日月。騒ぐクーデリアの前でおいしそうに食べる。

「うん。これくらいでかい方が食ってる感じがしてうまい」

「そ……それは大変よろしかったですね……」

赤面するクーデリアの前でクッキーとクラツカは素朴な疑問を口にする。

「どうしたの？クーデリア」

「なんか顔赤い？」

それを遠くから見ているアトラの後ろから話しかけてくる雪之丞が「どうした？」つと話しかけてきた。

「三日月か。行かねえのか？」

「今日はもう帰ります。女将さんにも無理言つて来てる。それに……三日月なんかピリピリしているから」

「そうかあ？変わんねえだろ」

「なんか違うつて分かつちやうんです。あ、雪之丞さんにちよつとお願いしたいことが……」

三日月の些細な変化に気が付いたアトラは雪之丞にあるプレスレットをわたした。

時間が過ぎ去り、夜中になると参番組はクーデターを実行に移した。一軍の男達の親指を拘束していた。目を覚まして見えてくる光景は同じように拘束されている一軍の仲間たちと部屋に悠々と入ってくる三番組の中核メンバーだった。

「おはようございませす。薬入りの飯の味はいかがでしたか？」

オルガの言葉を前に虚勢をはる大人達。

「ガキがなんの真似だ！」

「まあはつきりさせたいんですよ。誰がここの一番かつて事を」

どれだけ大きな声で虚勢を張ろうが拘束されている手前、威圧感など皆無だった。

「ガキども！貴様ら一体誰を相手にしてると………」

「ろくな指揮もせずこれだけの被害を出した無能をですよ」

見下すオルガと見上げる大人達を前に怯えていく周囲の大人達。

「わ……分かった！分かったから！とりあえずこいつを取れ。そしたら命だけは助けてやる」

蹴られたことによる恐怖心が間違った命乞いを繰り返す。

「はあ？お前状況分かってんのか？そのセリフを言えるのはお前か俺かどっちだ？無能な指揮の所為で死ななくてもいいはずの仲間が死んだ。その落とし前はきっちりつけ

てもらおう」

後ろからオルガの前にやって来た三日月は無言でハンドガンを数発浴びせる。

「さて……これからCGSは俺達のものだ。さあ選べ。俺達宇宙ネズミの下で働き続けるかそれともここから出ていくか」

オルガの威圧感を前に一人の大人が飛び出していくが、再び三日月のハンドガンが数発の弾丸を発砲した。

訪れる沈黙に再びオルガのドスの聞いた声が響く。

「どっちも嫌ならこいつみたいにくらここで終わらせてやってもいいぞ」

すると眼鏡の男性が「俺は出ていく方で……」と提案するが、それをビスケツトが遮る。

「確か会計を担当しているデクスター・キュラスターさんですよ？あなたにはちよつと残ってもらいます」

辞めると宣言した直後の「辞めないで」発言に悲鳴を上げた。

いじけてCGSを出ていく元一軍の大人達が車で移動している。すると大きな音と共に車が多少沈むのが分かった。

ついてない。

そんな言葉を誰かが吐いた瞬間だっただろう。

いかにも海賊ですよと言わんばかりの大人達がアサルトライフルとモビルワーカーを引き連れて現れた。

「この辺の会社の連中を手当たり次第に襲撃していれば、この前の連中に当るんじゃないかと思っただがな……………死神どもめ!!」

前のサブレ達に襲撃された集団だった。

腹癒せ目的の襲撃だったが、思わぬ人物からの連絡に彼らは目を輝かせる。

「ボス！ノブリス・ゴルドンからの連絡です！」

「なんて？」

「ターゲットを殺してくれば報酬は弾むっと」

ボスと呼ばれた人物はあくどい微笑みを浮かべるとその連絡用の電話機を受け取る。電話の奥から低い声が聞えてくる。

「宇宙海賊ダーブラかな？」

「いかにも」

「君達に仕事の依頼がしたい。何せギャラルホルンが失敗したのでね。成功させれば……………報酬は弾もう」

「いいだろう。で？何をすればいい？」

「殺してほしいターゲットがいる。クーデリア・藍那・バースタイン……………居場所は

『クリュセ・ガード・セキュリティ』と呼ばれる場所だ」

宇宙海賊のボスは襲撃した男達が持っていた金と荷物を手元で転がす。

「いいだろう。ちょうど時間を持って余っていた所だ」

通話が切れるとボスは部下に指示を怒号のように出す。

「その男達を近くの倉庫に監禁し聞き出せるだけの全ての情報を聞き出せ。それと恐らくクリュセにいる可能性の高い『クリュセ・ガード・セキュリティ』の社長も捕まえろ！ 最悪は殺してもいいから全てを聞き出すぞ！」

ボスは金だけをポケットに入れながら端末にクーデリア・藍那・バーンスタインの写真を見ながら微笑む。

「いい女だ。どんな悲鳴を上げてくれるんだろうな………仕事の時間だ」

CGSに残る者と残らない者。

「残る事選んだ雪之丞と改めて社長になったオルガが会話をしていると後ろからクーデリアが現れた。落ちていたネジを拾いどこか浮かない表情を浮かべる彼女にオルガが話しかける。

「何やってんです？ こんなところで」

「あつ………いえ………」

心の内に秘めた弱い言葉を飲み込み別の言葉を吐き出す。

「すごいですね三日月は。あんなに大きなものを手足のように操って。さぞ鍛錬を積まれたのでしょうかね」

クーデリアの言葉を咄嗟に否定するオルガ。

「いやこの前が初めてのはずだ」

「えっ!?!それであんなに激しい戦いを!?!」

『阿頼耶識システム』ってのはモビルスーツ用に開発されたって話だからな。モビルワーカーより感覚的に動かしやすいんだろが……まあ、そんな事よりあんた、これからどうするんだ?」

オルガから咄嗟に投げ替えられた言葉にクーデリアは弱くなる言葉を吐き出す。

「父の元へは帰れません」

オルガは「どうするんだ?」と尋ねるとクーデリアは「分かりません」と己の正直な気持ちを打ち明ける。

「私にできることがあると思っていました」

「過去形か?」

「思っていた」という言葉のチョイスが引っかけかり、咄嗟に聞き返すオルガに焦ったように返す。

「いえ!今でもその気持ちは変わりません。でも、それを成し遂げるためには罪の無い

人達を犠牲にしてしまう可能性があります……」

「俺達の仲間が死んだのはあんたの責任だよ」

オルガから向けられる言葉を前に三日月の冷たい目と、スラム街で出会った少年の言葉が突き刺さる。

「私はただ自分が悔しいのです。こんなにも無力な自分が……」

掌に存在するネジをジツと見つめながらつぶやく。

会計のデクスターが眼鏡を持ち上げながらタブレットで慣れた手つきで画面をそうさしていた。

「残された資産のうち現金のほとんどはマルバが持ち出したようですね。先日の戦闘での拾得物とこれから入金予定の分を予算として計上すると……」

そういつて差し出されるタブレット画面に表示された金額を前にシノが「そんな大金見たことねえ！」と興奮し、ユージンは「アホ！会社つつつたら普通こんくらい」などと言いながらもどこか動揺を隠せない。

しかし、現実は無常でデクスターは手慣れた手つきで画面を再び操作し新しい画面を表示させ、それを覗き込むビスケットの表情がどこか優れないものへと変わっていく。

「いえ、そこから退職金、モバイルワーカーの修理費に施設維持費それら全てを計上するとこうなります」

それを見ると他三名も同じような表情を造つてしまう。

「三か月維持するのが限度でしょうね」

「とりあえず目先の仕事が決まらないことには話にならねえか」

「今の状態じゃ足元を見られるだけだよ……」

悩むメンバーに話を聞いていたちよび髭の中年の元一軍『トド・ミルコネ』が口を挟んできた。

「忘れちゃいねえか？ お前らはギャラルホルンをめたくそにしちまった。もうここはヤツらに狙われちまつてる」

そんな言葉に詰まるユージンと黙つて腕組みをするオルガ。

「た……確かに派手にやつちまつたからな」

「仕事以前の問題じゃねえか！」

「そこで俺に一つ考えがある。ここを襲つてきたのは積み荷であるクーデリアがいるからだ。こちらから呼びかけて金と引き換えにお嬢さんを引き渡す。ぜくんぶマルバの罪にしちまえばなんとでもなるだろうよ。大将も分かつてるはずだよな？ クーデリアを抱えたままじゃ仕事は立ち行かないって事ぐらいさ」

難しい表情で腕組みを止めず、返答もしないオルガに業を煮やしたユージンは「オルガ何迷つてんだよ！ もうこれしか道はねえじゃねえか……」と決断を急がせる。しか

し、そんな状況を打ち破るように警報が発令した。

『監視班から報告。ギャラルホルンのモビルスーツが一機。赤い布を持ってこつちに向かつてる!』

クランク・ゼントは一对一の決闘を望み、CGSの前へと現れた。

クランクは勝利した際には『クーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡すこと』であり、勝つてもそこから先はギャラルホルンが関わらないというものだった。

そんな言葉に対しクーデリアは「私が行きます」と言い出すが、オルガは「どうなるか分からねえんだぞ!」と制止する。そんな言葉にビスケットが同意するが、クーデリアは「既に多くの人が死にました。それに私はただ死ぬつもりは無い」と聞く気が無い。「そのつもりはねえ。あのおっさんの言葉がどこまで本当か分からねえしな。ミカ! やつてくれるか?」

「はーん」

あくまで冷静に返事する三日月に周囲が驚く番である。

オルガはクランクを殺すことを決意した。

バルバトスの左肩にはグレイズの装甲を付け足されており、それを見上げるクーデリアは自分が何もできないことへの無力感を感じていた。

「私もその阿頼耶識システムというのを使えばあれを思うがままに操れるのでしょうか

「？そうすれば私も少しは皆さんの力に……」

「止めとけ。俺達は運が良かっただけだよ。俺とミカと一緒に手術を受けたのは十人。その内四人は失敗してそのまま病院送り。多分今でもベッドから起き上がれないだろう。生きていればただけどな」

阿頼耶識システムの残酷な現実を前に息を呑むクーデリア。

「ミカはそれを三回も受けてる。そのリスクしかないような手術を……：勿論自分の意思でな」

コックピットの中で三日月はアトラからもらったミサンガ風のプレスレットを左腕に付けながら匂いを嗅ぐ。

バルバトスとグレイズの間には絶妙な距離感を作り、お互いに沈黙を守っているとクラック・ゼントが先に声を張り上げた。

「ギヤラルホルン火星支部実働部隊クラック・ゼント！」

「えっ？ああくえくつと……：CGS参番組三日月・オーガス」

「参る！」

クラックは言葉と共にグレイズのスラスターを吹かせて距離を詰め、バルバトスも負けじとメイスを叩き落す。

「ねえ決着ってどうつけるの？どっちが死ねばいいの？」

三日月は戦う前から思った疑問を戦いの最中で尋ねる。しかし、三日月の問いにクランクは「その必要はない！」とただけ告げながらショートアックスを振り下ろす。

「コーラル……いや元々こちらが欲していたのはクーデリアの命だけ。大人の争いの為に子供は犠牲になることは無いんだ！」

「さんざん殺しておいて……まあもういいよ。俺はオルガに言われたんだ。あんたを殺つちまえってさ！」

クランクの言葉に苛立ちを隠せない三日月は攻撃を弾きながら殺意をメイスに乗せて体重を乗せた一撃を叩き込む。大きく仰け反るグレイス。

戦いを遠くから見ていたオルガはクーデリアと語り合っていた。

「ミカは強くななくちや生きていけないことを知ってるんだ」

「だからってそんな危険な手術を……」

「意地汚くてだけど潔い。あいつは矛盾の塊なんだ。だけど……だからこそ強い」

クーデリアはバルバトスがグレイスを追い詰めていく姿を見ながら「私も彼のように戦えるでしょうか？」と出す言葉に、今度はオルガが怒りを滲ませるような表情をかすかに作る。

「もう手術を受けたいなどとは考えていません。私の戦う場所は別にある事を知っています」

決意のまなざしにオルガは微笑むことしかなかった。

そして、追い詰められていくグレイスに乗り込むクランクは「くっ！これが子供か!」と呟く。

「言つとくけど俺は犠牲になんてなつてないよ。俺と俺の仲間の為に出来ることをやるだけだ。で、今はとりあえずあんたが邪魔だ!」

メイスの矛先をグレイズに向け、メイスからの突き攻撃を左腕を犠牲にしながらショートアックスでメイスを破損させる。

ショートアックスを振り下ろそうと腕を大きく上げると、その隙を縫いくぐるようにメイスの先端からパイルバンカーでコックピットを貫く。

「鉄華団。俺達の新しい名前。CGSなんてかび臭い名前を名乗るのはしやくに障るからな」

「『てつか』……鉄の火ですか?」

オルガの新しい組織名を前にクーデリアは尋ね返す。

「いや。鉄の華だ。決して散らない鉄の華」

バルバトスの視界の端に傷を負い、大量の血を流す筋骨隆々の中年の姿が写り、それがクランク・ゼントなのだという事は直ぐに分かった。

コクピットから身を乗り出す三日月を確認するとクランクは笑いなのか苦しみな

か分からないような表情を作る。

「本当に子供なんだな……」

「なあ。俺が勝った場合はどうなの？あんたそれ言ってなかっただろ？気にくわなかったんだ」

「すまない……馬鹿にしたわけじゃないんだ。その選択を俺が持たなかった。それだけだ」

自らが死ぬことで部下への責任を背負い死ぬ。それが克蘭クの責任の取り方だった。子供を殺した自分への、部下であるアインに子供殺しの罪を背負って欲しくない。

「俺は上官の命令に背いた。なんの手土産もなく帰れば俺の命令は部隊全体の問題になってしまう。だが……ここで俺が終われば責任は全て俺が抱えたまま……」

血を吐き出し体を座席に預ける。

「もういいよ。喋らなくて」

「すまんが……手を貸してくれないか？俺はもう自分で終る事すらできない……」

三日月は取り出したハンドガンから隠すように左腕に付けたブレスレットを隠す。

「ありが……」

最後まで言うことも無く克蘭クは命を散らせることになった。

オルガ達鉄華団のメンバーがクーデリアから仕事を受けている時、クリュセ郊外の倉

庫の中で元CGSの一軍残党と元社長マルバ・アーケイは海賊ダーブラから拷問を受けていた。

口から血を吐き、体中青あぎだらけになるマルバは命乞いをしながらCGSの場所と残りの構成員の情報を吐き出した。

「これで全部だ！これで……………助けてくれるんだよな？」

「ああ。助けてやるよ……………苦しみからな」

ハンドガンをマルバの額に向け容赦なく引き金を引く。

悲鳴を上げる暇もない行動に他のCGSのメンバーが表情を曇らせ、ダーブラのボスは他のメンバーに「殺せ」とだけ指示を出し立ち去る。

「さて……………カードは手に入れた。準備ができ次第農場を襲撃するぞ」

手元の資料には『桜農場』と書かれた文字と詳細な場所が書かれていた。

ハロが大騒ぎをしながらベットの上で眠りにつこうとする俺を邪魔する。

いっそのこと電源をオフにしてやろうかとも思うが、ハロが抵抗するだけなのがよく分かる。

「ハロ。静かにしろ」

「ハロ！ハロ！お休み！」

「そう思うんなら静かにしてくれ」

胸の奥に存在する嫌な予感。チクチクするような感覚がどうしても俺に眠気を与えようとしなない。

どうしたのだろうか？

そういうえば。先日戦ったあいつらの情報を詳しく聞いていない。まあ、今更聞くにもならないけど。

などと思いながらも寝れないからとついタブレットに手を伸ばしスリープモードを解除して画面を操作する。

「えつと……？ 『宇宙海賊ダーブラ』？ 聞いたことも無い三流海賊だろ？」

そう思い更に画面を移すとそこには恐るべき内容が記されていた。

『宇宙海賊ダーブラ……：危険度ランク四』

危険度……：要するに危険の値を示す数値で零から五までのランク付けがされている。そして、ランク四は上から二番目。

『宇宙海賊の中でもヒューマンデブリの販売を主にしており、特に最近はクリュセ一帯のスラム街から子供を売り渡している。『夜明けの地平線団』などの危険度の高い海賊や組織とのつながり、大量のモビルスーツを保有するなどその危険度は高い』

だったら俺達が邪魔したのはヒューマンデブリの取引を回避させるためか!? だったらどうしてそう告げない？

俺はベットから起き上がり寝間着から普段着へと着替えると部屋から飛び出した。

それは最後のページを確認してしまったからだ。

『最新情報。最近CGSと呼ばれる組織のメンバーから情報を強引に聞き出した疑いあり。次のターゲット………CGSとその関係者』

まずい。下手をすると妹達までがターゲットになる！

ダーブラ編

逆襲のダーブラ

トドは頭を抱えていた。

先日の戦闘ではつきりとギヤラルホルンを敵に回してしまった鉄華団。そんなトドの恐怖とは裏腹にオルガたちはあくまでもクーデリアを地球に送る為の算段を立てる。

そんな中、トドはオルガたちを売り飛ばすためオルクス商会という会社を使って計画を企てていた。しかし、少しだけ時は遅く先手を打つ為、サブレ達は先にオルクス商会を襲撃していた。

サブレからすればオルクス商会はある疑いがかけられていたからだ。

ダーブラと呼ばれる宇宙海賊との密接なつながりが指摘され、サブレはその証拠を押しさえる為に襲撃を計画したという話だった。

まずは其処から語るべきだろう。

オルクス商会を襲撃したのはこの商会の一部の部署でヒューマンデブリの販売を行っているためである。オルクス商会はダーブラが隠れ蓑にしている子会社の可能性があったが、実際は取引をしてはいるがそこまでの関係ではないというのが実情だっ

た。

「ハズレだったかな？」

まあ、子供を商品にして地球圏内の工業系の会社やコロニーに売り飛ばしているので同情の余地など無いだろう。

目の前には最後まで抵抗して拳銃自殺した社長のオルクスの遺体がついているが、俺はそれを踏み越えながら歩いていく。

金庫の中や書類データをしつこく調べてもダーブラの本拠地に関する情報はまるで見つからなかった。

すると、出入口口から誰かが上がってくるのが感じ取れ、俺と明楽とジョシユアは警戒心を最大値まで高めながら上ってくる人物を前に拳銃を手にする。

「アンタたちかい……………って、おいおい。子供じゃねえか」

白い服を着た伊達男が入ってきた。

いや、言い換えると『名瀬・タービン』が単身この部屋の中に張り込んでくる。

警戒心を高めて損じた気分で調査に戻る俺達に呆れ顔で接するのは俺達が盗み目的の子供ぐらいの認識だからなのかもしれない。

「お前達。こいつらを殺してどうするんだ？」

「別に……………ダーブラとの接点を洗っているだけだ。近々あいつらが小さな組織相手に

喧嘩を吹っ掛けそうだって聞いてね。俺達が取引を邪魔したのが原因だし、それに民間人に被害が出る前に阻止したい」

俺の言葉を聞いて驚きと共に強く俺の肩を掴む伊達男を俺は睨みつける。

「そいつは本当か!？」

「本当だよ。これでも俺はフォートレスのエージェントだぞ?・本部からの正確な情報だ。それに、今回の一件にはノブリスが関わっていると云ったらあんたも情報に信憑性が出るんじゃない?」

ノブリス・ゴルドン。

クリュセを中心に知れ渡る武器商人で通用『死の商人』と裏社会では呼ばれている。特に関わるとめんどくさい相手でも知られており、ギャラルホルンとも取引をしているとは有名な話だ。

さすがにタービンスという『テイワズ』と呼ばれるマフィアの輸送部門を受け持っている組織のトップを張っているだけはある。

ノブリスの名前を出しただけで顔色を変えてきた。

「そうか……………どうやら俺は当たりを引いたらしい」

どうやら取引をするべき相手であるようだ。

「名瀬・タービンだ。取引をしようじゃねえか」

「サブレ……：姓は名乗れない。それでもいいなら俺と取引をしよう」

俺達が手を結ぶ頃ダーブラは次の動きを見せようとしていた。

ガエリオが紅茶を嗜みながら仕事をしているマクギリスの後ろで壁を背に立っている。

「さすがに部下達もみんな死にそうな顔をしていたぞ。お前のペースで働かされては体がもたないだろうな。優秀過ぎる上官を持つと苦労するというやつだ」

マクギリスは仕事をしながら「気を付けよう」とだけ答え、聞いているのか聞いていないのか分からないような返事をする。

「時間稼ぎのつもりだったんだろうが……コーラルの奴、驚くだろうな」

すると、近づいてくる足音を前にマクギリスとガエリオはドアの方に視線を移す。

部屋の中にコーラルと呼ばれる火星支部代表が入室してきた。

「朝からご苦労だなファリド特務三佐。ボードウィン特務三佐」

申し訳なさそうな表情を作りつつどこか表情が笑っているコーラル。

「作業の方はどうかね？ いやくすまんねえこちらの不手際でデータの整理がまるで間に合わず。あれでは目を通すのも一苦労だろう？」

マクギリスはそんなコーラルからの言葉に「いえ」と返した。

「お預かりしていた資料の精査はほぼ終わりました」

マクギリスの強めの視線を前にコーラルは内心焦りを滲ませる。

「監査の結果ももうじきご報告できるでしょう。ところで一個中隊が出動したまま帰投していないようなのですが」

コーラルは「ああ〜」つと言いよどみ、どういったらいいのかと探りを入れる。

「それなら暴動の鎮圧に出ているな」

「暴動？独立運動ですか？」

ガエリオの質問に作り笑顔で返すコーラルは内心面白くなかった。

「所詮は市民のガス抜きにすぎんがね。このところ多くて難儀している」

「地球でも噂は聞いていましたが鎮圧に中隊規模の戦力が必要とは……ご苦労お察します」

しかし、マクギリスの中ではある程度の予想ぐらいできていた。

コーラルが逃げるように立ち去ろうとする際、ワイロに走ろうとポケットに手を突っ込む。

「ところで何か不便は無いかな？滞在中入用なものがあればまあ些少だが何かの足しにでも……」

「それを出せばあなたを拘束しなくなります。ご自重くださいコーラル・コンラッド本部長」

きつめの言葉に視線に怯んでしまうコーラルは焦ったようにその場をあとにした。

薄暗い廊下の中、コーラルは額が赤くはれてしまうほど頭を壁に叩きつけていた。

「若造共がなめおつて！これも全てクランクの所為だ！あいつが勝手な事をしてしくじるから……ちつ……あの役立たずの愚か者が！」

同じ時、アインは失意の中をさまよっていた。

全身が筋肉の鎧でできているような体つきをしている昭弘は会計のデクスターと共にクリュセ中央宇宙港のロビーで元CGSの宇宙艦の名義変更を行う為に来ていた。

昭弘達はヒューマンデブリと呼ばれる道具扱いされてきた者達だったが、オルガはそんな昭弘達を自由にする権利を与えた。最初こそ戸惑った昭弘だったが、オルガの言葉を前に一緒に仕事をする道を選んだ。

また仕事が出来ると喜びとこんな自分を仲間だと言ってくれたオルガへの恩を仕事で返す為一段と気合を入れる。

「おい！気合い入れていくぞー！」

そんな昭弘を前にデクスターは「事務手続きするだけですけどね」と呟きながら立ち去っていった。

結論だけ言えばオルクスとは連絡が取れなかった。

それ故に手が打てない状況が続く中、三日月は難しそうな表情をするクーデリアを連

れて行こうとする。

また、クーデリアもノブリスとの連絡が取れない状況が続き、同時に自分が鉄華団の子供達を犠牲にしている状況が嫌だった。

時を同じくしてサブレも名瀬・タービンと取引をしている最中だった。

名瀬と呼ばれている人物との取引はすんなりと進み、近くの個室付きの酒場を選び、盗聴されていない事を確認しつつ、なるべく音量を押さえながら話し出す。

「要するに、ノブリスの狙いはクーデリアってお嬢さんを殺すことで、お前さん達のボスはクーデリアを地球に連れていくべきだという解釈でいいのか？」

「ああ。うちのボスは蒔苗という老人からクーデリアの護衛の仕事を受けているんだが、このまま鉄華団に任せてもいいかもしれないという意見でね。しかし、クーデリアはギャラルホルンに狙われている。俺達もできるなら今はギャラルホルンと構えたくない。そこで丁度良く話しに関わって来たあんた達の出番というわけだ」

「うちとしては良い条件だが、鉄華団つてのはそのお嬢さんを護衛する上で任せるに値する組織なのか？」

「それはあんた達が直接確認するればいいさ。あんた達が認めないというならその後は任せるし」

「まあいいさ。で？お前さん達は？」

「仲間と他のエージェントと合流次第ダーブラの中継地を襲撃する。できれば民間人が襲われる前が好ましいが、そうはいない場合はもつと早めに攻める」

名瀬は口に手を置き小声で「まあいいさ」とか言いながら立ち上がりこちらに手を伸ばす。

「取引成立だな」

俺は黙って立ち上がり手を握る。

さて、時は既に遅かった。

鉄華団の三日月とかいう奴と兄さんであるビスケットがギヤラホルンの監査官二名と争っている場面と遭遇してしまったからだ。

その原因は俺のおばあちゃんが経営している農場で作業しているはずのおばあちゃんが倒れ、妹達二名が居ないことを考えると検討できる。

派手な戦闘痕こそ見えないが、どうやら既にダーブラはここを襲撃したようだ。

され、どうしたものか。

ここは静観するべきかどうかで悩むが、兄さんは三日月を止められずにおり、紫の髪をした監査官事ガエリオ・ボードウインは今にも気を失いそうになっている。

その後ろではマクギリス・フアリドがどうするべきかで悩んでいて直ぐには動けそうにない。

これは俺が動かないと手遅れになりそうだ。

しかし、今日はカツラなどの変装道具を持ち合わせておらず、このままいけば兄さんに正体がバレるのは必至。

考えている時間は無い。それに早めにこの喧嘩を止めてダークブラを追いかけた方が賢明という結論がでた。

大きなため息を隠しながら俺は身を出す。

三日月と言う少年の後ろ髪を強めに掴んで引つ張ると案の定、少年は驚いて首を絞めていた手を緩めてこちらを向く。

驚いたのはその場にいる全員である。

しかし、激昂ガエリオ・ボードウインはそれに気付かず、三日月と呼ばれる少年に殴りかかろうとする。

それを三日月は回避すると同時に謝ろうと頭を下げる。すると、ガエリオは三日月の背中の阿頼耶識に気付く。

「おい。貴様その背中のはなんだ？」

マクギリスも同じものを見た。背中についている突起物が三つ。なら兄さんも同じものが付いているというわけか。

『阿頼耶識システム』。人体に埋め込むタイプの有機デバイスシステムだったか。いま

だに使われていると聞いたことはあったが」

地球出身であるガエリオは吐きそうになりながら身を車に隠し、マクギリスはガエリオの身を察じている。

「しかし、この状況はあまりよろしくないようだね」

マクギリスは周囲を見回しながらふとつぶやいた。

それについては俺も同感だが、できればギャラルホルンに介入してほしくない。

「我々ギャラルホルンが解決してもいいのだが？」

「断る。迷惑」

「のようだな……しかし、何かあれば私に話を……私の名前は」

「マクギリス・ファリドだろ？言わなくても分かるよ」

マクギリスは肩透かしを受ながら車に向かって行く。すると、再びこちらを向く。

「そうだ。最近この辺りで戦闘があったようなのだが何か気付いたことはないか？」

兄さんが余計な事を口に出しそうにしそうな感覚を覚え、俺はそれを最大限まで邪魔をすることにした。

「あつたらしいね。コーラルが何かを隠したがっているんじゃない？」

兄さんの表情が暗く落ち込んでいくのを見て取れる。

マクギリスは「そうか……参考にするよ」とだけ告げて車で去っていく。

俺がもう一度三日月と兄さんの方を見つめ、同時に奥のトウモロコシの畑の方を見る。うつすらとだがクーデリアが隠れている。

「サ、サブレ……なの？」

「それ以外の誰かに見える？」

俺はツンとした態度で返す中、三日月はどういう態度で返すべきかどうかを悩むそぶりを見せている。

すると、三日月は座ったような目つきで立つ去ろうとする。それを俺は右手で阻止する。俺の方を睨むように見上げる。

「誰がこんな事をしたのか分かっていいのか？今、君達は余計な事をしている場合じゃないんじゃないのか？」

その言葉に兄さんが反発する。

「クツキーとクラツカが誘拐されたんだよ!？」

「分かっている。だから取り返す算段を經てている。それに今回の相手は兄さん達では太刀打ちできない」

「でも！」

「何を言っても俺は引かないぞ。それに仕事も大事なはずだ。クーデリアの事はどうするんだ？」

兄さんと三日月は驚きの表情を作り、クーデリアが畑から身を出す。

「私がその人達と取引します。きつとその人達の目的は私の可能性があります」

「駄目だ。それでは意味がない。彼らと一緒に宇宙に上がってもらおう」

「私の所為でこんなことになって桜さんも……………なのに」

「この人の所為？ 違う。これは……………俺の所為だ！」

「これは俺の所為だ!!」

俺の咄嗟の怒鳴り声に怯むクーデリアと兄さん。三日月は目を細めながら俺を見ることを止めない。

「この前彼らの取引の部隊を上での指示で阻止したのは俺だ。その腹いせも混じっているんだろ。だから……………俺が取り返す」

俺は兄さん達を無視して立ち去ろうとする。

「ねえ、ビスケット。オルガに言っておいて、バルバトスを貸してって。俺、この人と一緒に三人を取り戻すよ」

三日月の一言に俺が反応する番だった。

「あのかな……………お前が付いてくれば仕事はどうなるんだ？」

「オルガ達が火星から完全に離れる前に合流すればいいんでしょう？ それに俺があんたについて行けばビスケットも安心でしょ？」

「まあ、三日月がついて行ってくれるなら」

「それに……あんたは信用できる」

此奴は梃子でも引かないような目をしている。見れば分かる。

こいつはこの状況で三日月やクーデリアを説得しつつ、自分が得する状況を見つけ出したのか？ しかも本能で。

説得する術をいくつか考えたが、その全てでこいつが引かないことが分かっちゃった。

「分かった。今から告げる場所に機体を持ってこい。それが条件だ」

「分かった」

三日月は端的にうなづく。

俺は地面に落ちているプレスレットを拾って握りしめる。

覚えているよ……逆襲してやるよ。宇宙海賊ダーブラ!!

死神と呼ばれたガンダム

俺は弟であるサブレと出会いたいかと言えば正直あまりで会いたくない。俺は両親の死後サブレの提案を断ってしまった。

「俺達も知り合いを作ろう！」

サヴァラン兄さんが言った「お祖母ちゃんの所に行け」という言葉を俺は鵜呑みにした。結果から見れば失敗だったし、俺はおばあちゃんを困らせる結果になった。

今となっては後悔しているし、かといってサブレの言う事が正しいとも思わない。それでもあんな再開になるとは思わなかった。

だって、クツキーとクラツカがアトラと一緒に誘拐されて俺だって正直冷静にはいられない上に、三日月は頭に血が上ってギャラルホルンに喧嘩を売る。クーデリアさんを隠さないといけないという状況でまるで救世主のように姿を現したのがサブレだったのだから。

しかし、嬉しさと複雑な感情が行き来してどう声を掛けたらいいのか分からなかった。

あの目を見るまでは。

きっとあの場にいたほぼ全員が恐怖したかもしれない。

サブレ自身は平静を装っていたのかもしれないが、目だけは真実を語るものでサブレの瞳の奥が怒りの炎が燃えていたからだ。

あの目を見れば誰だって怯んでしまうだろう。

サブレは誰にも厳しく、自分にも厳しい。それ自体は別におかしい事ではない。しかし、この場合はサブレが己の過失だと己を責めている点である。

サブレの怒りの理由は二つ。妹達をさらった連中への怒りと、それを阻止できなかった自分自身への怒りだ。

同時にサブレは己を厳しく律することも欠かさない性格をしており、いつもと変わらないように思いながらもサブレは激怒していた。

あの三日月がサブレの怒りを感じ取り怒りを鎮めたのだろう。正確には冷静になつてしまったのだろう。

そんな理由があり俺とサブレとの再会は最悪と言つてもいいほどに悪かった。

俺はその後三日月と共に話すサブレの後ろ姿をクーデリアさんと共に見つめていた。フミタンさんも同時にその後姿を複雑な視線を送るのが印象的だった。

二人がサブレとどこかで話をしていたのなら、サブレはクリュセに居たという事になる。しかし、クリュセに住んでいたのなら俺が目撃している。

実際クリュセに何度も言ったことがあるが一度だっても目撃しなかったという事は、サブレは別にクリュセに住んでいるわけじゃないという結論になる。

しかし、同時に不思議に思う。

ならサブレはどうしてこの地に来ているのだろうか？

これは推測をするだけなら可能だ。

「仕事………だよね」

何か仕事をしているから………そこでサブレが俺に渡した一枚の紙きれだった。そこには宇宙におけるあるポイントが書かれている。

サブレは「そこに行けば案内人がある」と言っていたし、その案内人が「テイワズの幹部」という事は聞いている。

テイワズ——木星における複合企業とも言われており、この世界においてギャラルホルンが直接手が出しにくい相手の一つでもある。そんな組織と連絡が取れるか、もしくは相談事を聞いてくれるような組織。ならサブレは相当地位のある組織。しかも組織の中でもかなりトップにいるような人間なのだろう。

そう考えたとき、俺は自分の立場とサブレの立場を比べて精神的なショックから中々立ち直れなかった。

サブレからもらった『阿頼耶識システム治療用装置』なる道具を断れないぐらいに

……

オルガ・イルカは特徴的な前髪を視界に入れながら手元のタブレットとビスケットからもらった一切れの紙を見比べながら思考を繰り返していた。

正直に言えばビスケットの妹達とアトラを助けに行きたい。それをすることは出来ない。ビスケットが我慢しているのなら自分も我慢するべきだ。

それにビスケットのあの表情もあまり気持ちのいいものではない。

あれは我慢している以外にも正直辛い事があったのだろうことは想像に難くない。

「聞けねえよな……今更家族について教えてくれなんてよお」

紙とタブレットを团长室の机の上に一旦置きながら大きなため息を吐き出す。

「明日の13時にシャトルを打ち上げ、同時にイサリビで回収して離脱する……」

イサリビ——鉄華団がCGSから権利を引き継いだ戦艦での離脱作戦。この作戦に問題があるとすれば今三人を救出に向かっている三日月が抜けているという点だ。

三日月が言うにはオルガが宇宙に行く頃には自分も上がるらしいが、こればかりは向こうの作戦次第になってしまう。

しかし、オルガは信じるしかなかった。

ビスケットが信じると決めた相手を自分が信じるしかない。

「今頃向こうも作戦の準備に入っている頃かもな。こっちの作戦時間は伝えたし、あとは神のみぞ知るって奴かもな」

オルガは開いてしまった両手でビスケットから渡された『阿頼耶識システム治療装置』なる道具を転がす。

呆けていたビスケットからの言葉を要約するなら、背骨に神経と共にくつついているナノマシンを綺麗に時間を掛けながら丁寧に吸収し、完全に除去できた段階で最後にピアスと呼ばれる部分を装置ごと抜くだけらしい。が、治療の段階で手先が痺れる事があるなど様々な問題があるらしいが、私生活や仕事ができないほどではないらしい。

実際の問題としては阿頼耶識システムが使えなくなるという点だった。

そう考えたときだった。

オルガは妙なというべき嫌な感覚が脳裏をよぎった。

「くそ……………この前に奇妙な悪夢を見て以来どうも……………いやな感覚が脳裏をよぎるやがる」

オルガは悪夢を覚えていない。

しかし、悪夢を見たという感覚に近い感情が奇妙なタイミングで恐れになっている。

このまま宇宙に上がれば取り返しつかない事態になるのではないか……………という想像がどうしてもオルガの行動にブレーキを掛けようとしている。

今回はその別である。

オルガの中でビスケットにこれを付けろという指令が降りている。

「悩むなんて俺らしくねえ……………よな」

そう言う想いと共に立ち上がりビスケットの部屋へと移動する。

明日は早くに行動する為ほとんどのメンバーが就寝していて、ビスケットも今日は速めに寝ているはずだ。

そう思いながらオルガはビスケットの寝室へと急ぐ。

なるべく音をたてないように目的の部屋の前に辿り着くとゆっくりと自らの手でドアを開ける。ポケットの中へと入れてある道具の存在を確認しつつ部屋の中に入っていく。薄暗く足元も確認できない部屋にオルガが入ってきた際に廊下の明かりだけだった。

しかし、ビスケットのベットには誰もおらず鉄華団のジャケットとツナギがかけられているだけだった。

オルガは内心驚きながら周囲を見回すとシノが薄っすらと目を開けながら小声で呟いた。

「ビスケット……………飲み物飲んできたのか?……………けっこう早かったけど……………」

さ」

オルガは寝ぼけているシノが起きる前に部屋から出ていく。

「そうだよな。チビ達があんな目にあつて安心して眠れるわけねえ……か」

そんなことを呟きながらオルガは一人食堂の方まで行くが、窓から覗き込む限り食堂にビスケットはいない。

「? あいつどこに行つたんだ?」

そう思いながら廊下から外を軽く見回すと、施設の端つこの方でビスケットはタンクトツプ姿で黄昏ている。

オルガは足音をたてないような速度で近づいていき、背中にそつと道具を取り付ける。

慌てたような勢いで振り返り視線があう両者。驚きの表情を浮かべるビスケットに、シニカルに笑つて返すオルガ。

「何!? 何つけたの?」

「お前がくれた道具」

そう言いながらもオルガはビスケットの隣座った。ビスケットは背中に付いた半球型の道具を取れないかどうかと模索するが、五分ほど経過して諦めた。

「なんで……?」

「ん? ……お前にそれは似合わないからかな。それでお前から阿頼耶識が取り除ける

ならそれでもいいかもな。まあ、お前は阿頼耶識いらねえだろ？」

「そりゃ……三日月や昭弘達なんかと比べたら俺の操縦技術何て全然しただろうけど……でもいざとなったら俺が戦ったほうが」

などと呟くような声質で喋っているが、オルガはその言葉に啞然とした表情になっていた。

しかし、その理由を喉の奥に頭の奥にしまい込み、オルガは立ち上がりながらビスケットの肩を軽く叩く。

「まあ、そうならねえようにするのが俺達の戦いだろ？だから……」

オルガは息を思いつきり吸い込み肺の中に空気を取り入れながらビスケットの方へと視線を移す。

「今はミカを信じようぜ。それが俺達が今できる最大の仕事だろ？」

「……………そうだね」

肌寒さを体中にかみしめながら少し遠くの空で戦おうとする者達を信じる二人がそこにはいた。

荒野の奥にそれはある。

小さくさびれたような工場跡。そこそ三人の少女達が連れ込まれてしまった場所だった。しかし、その場所からさほど離れていない場所を拠点に俺達オートレスの部

隊は作戦の為に待機状態だった。

先ほど三日月も到着しいよいよ作戦は引き返しようもない状態が続いている。先ほどこからフォートレスの上層部はダブルラに対し交渉を続けているが、これと言った進展も無いというのが現実だった。

実際俺は真夜中にもかかわらずフォートレスが用意した長距離通信の個室の中にいた。

一人が入るだけのスペースが容姿されている場所で周囲のモニターには『sound only』の文字が描かれているだけ。

「では、やはり交渉は……？」

向こう側から「失敗」という言葉を受け止めながらもおおよその状況を把握できた。

とりあえず人質にはまだ手を出していないという事、あちらの目的は『クーデリア・藍那・バーンスタイン』を引き渡すという事だった。

『おおよそ情報と依頼の出所はノブリスと言った所……だな』

モニター越しに聞こえてくるオヤジ『マハラジャ・ダースリン』の声を聴きながら俺は静かに怒りの鬨志を燃やしていた。

『それで？ サブレはお前が所持していた戦力だけで何とかなるのか？』

「これ以上引き延ばせば人質が酷い目に遭う可能性が高い。それに……これ以上は俺

が耐えられない」

もう無理だ。全てを破壊してしまいたくなる。

モニターの奥から『フム』と複数人の声が聞えて来る。

どうせ他の下部組織や企業のトップもいるのだろう。フォートレスとはそういう組織だ。

いくつかの資金主や企業、組織をまとめて『フォートレス』と呼ばれる秘密組織という形で纏めており、俺はその中に存在する『エージェント』と呼ばれるフォートレスの為に行動するメンバーだ。

『しかし………な。その辺の三流海賊を相手にするのはわけが違うぞ。近くに『彼女』が居るのなら差し出す方が被害が少なくて済むのでは？』

『なら蒔苗の一件はどうする？彼はクーデリア・藍那・バースタインを求めているのだろうか？なら彼女は安全に送り届けるべきだ。誰が送り届けようと我々は儲けることが出来るはずだ』

『ならどうやって勝つというのだ？相手はダーブラだぞ？戦力だけを言えば夜明けの地平線団に次ぐ勢いがある』

『そうは言うが、あそこと比べると戦力差がありすぎるだろう。『死神』ならやれる。想定範囲内だ』

『彼はエージェントの中でも最も優秀なエージェントだぞ。ガンダムを三機も所有している。失敗のリスクが高い。予備の戦力が届くまで待つべきだ』

『蒔苗が待てないだろう。クーデリアは直ぐにでも上にあげて逃がすべきだ。最悪人質は無視をして……』

『それではフォートレスの志に反することになるぞ。民間人を救出しないとあれば』

イライラしながら話の経過を聞いている俺は靴で地面をコツコツと音を鳴らせる。

「確かにダーブラの戦力は多い。情報が正確なら敵の主力が降りてきていることになる。『あの男』の機体も。だが、今回は追加の戦力も存在する。これに分と地の利があるのはこちら。十分やれる。それに……これ以上は俺が耐えられない」

今すぐにもあの男を殺すべきだ。

三年前の雪辱を。

俺は腕に巻き付けたドッグタグを握りしめる。

『……追加戦力無し。現状の戦力だけで戦う。お前にできるか？お前に先ほど話した通り三年前のあの男を相手にすることになるぞ』

三年前。俺は当時まだダーブラが完成する前にフリーの傭兵時代だったある男の部隊からの裏切りを経て大事な後輩を失った。

『助けてください！先輩！』

あの声が何度も脳内を響く思いを抱えてきた。
それも今日で終わりだ。

「ちようどいい。あの男がダーブラの首領を務めているのなら……俺が潰してやる。死神に関わって無事でいられないという事を」

俺は今更隠すこともしない。

「証明してやる。俺とアガレスがどう呼ばれているのかを……」

『いいだろう。サブレ。妹を取り戻し、クーデリアの安全を無事保証して見せろ。『死神』の通り名を証明したいのならな』

オヤジからの無理難題も今はただ心地よい。

証明してやるよ。

明楽は夜空を眺めながら栄養ドリンクと牛乳を半々で割った飲み物をストローで飲む。視線を今度は正面で整備されているバルバトスへと向ける。

肩は角ばったデザインとブースターが装着された独特な形をしており、左腕にはシールドとクローアームが一体になった装甲を取りつけ、全身の装甲も新しい物に変更されている。

改造を施したソニア自身は特にまだまだこだわりたいらしく、先ほどからあと数時間で何が出来るとか呟いている。

最終調整にテストをしなければいけないのでこれ以上改造の余地が明楽にはあるとは思えなかった。

「後……あそこを」

なんて言いながらソニアはバルバトスの周りをグルグル回っている。アガレスはアガレスで新武装のチェックを行っている。

「黒い外見に鎌の組み合わせ」

外見だけを言ったら本当に死神に見えなくもない。

バルバトスの調整をしているはずのパイロットである三日月はアガレスを足元から見上げていた。

「似てる……顔以外」

そう思うのも無理はない。三日月が初めて遭遇したときは顔にマスクをつけた状態だったのだから。

「なんか皆殺気立ってて嫌だな……暇だなく早く始まらないかな」

そんなことを言いながら休憩用のテントの中でゴロゴロと転がりながら時間を潰す明楽。そんな彼の目の前で通信室のドアが開き中からサブレが出てきた。

明楽は声を上げそうになる口を堅く閉ざす。

あのジョシユアですら恐怖で体を震わせて小走りで逃げていく歳相応の姿を見なが

ら、明樂もまた恐怖していた。

「今までで一番の怒りだよね」

確かに妹を攫われたとあつてはサブレと言えど怒るとは思うが、どうもうそれ以上の何かがあると明樂は読んだ。

明樂は聞き耳を立てながらサブレがつぶやくその一言を聞き逃さなかった。

「ぶっ殺してやる」

太陽が空へと昇っていく中、俺はガンダムの起動シークエンスを進行しているアガレスのコックピット内で待機していた。

ドッグタグを握りしめる力をどうしても強くしてしまう。

「敵を取るつもりは無い。何かが変わると思えない。ただ、倒して前に進むだけだ。あの男は俺にとって乗り越えるべき……壁だ」

操縦桿を握りしめる。

視線はまっすぐと正面を捉え、大きく吐き出す息と同時にアガレスが全身から排熱を行っているのがよく分かる。

「証明するぞ……アガレス！」

暁の空の向こう側へ

怯える双子の幼女達とそれを庇う一人の少女、牢獄に入れられながら孤独におびえる二人を何とか宥めている。2人が泣き騒がないことだけが少女——アトラからすればマシな状況で、目の前の男達も今のところ自分達に危害を加える様子もない。

しかし、もしこの二人の幼女がサブレ——死神の関係者だと知ればタダでは済まなかっただろう。そういう意味では不幸中の幸いだった。

逃げ出すこともできず、怯える時間を過ごすアトラにとってこの状況は最悪の一手前で、これ以上の状況をどうしても想像してしまう。

「助けて……………三日月」

祈る事しかできない自分の弱さと共に双子の幼女——クツキーとクラツカを抱きしめながら大好きな人の名前を呟く。

「ビスケット……………三日月……………誰か……………」

そんな時だった。施設が大きく揺れる衝撃でクツキーとクラツカが悲鳴を上げそうになる。それにすかさず反応したのは見張りをしていた大人達だった。

「叫んだら切り刻むぞ!!ガキ」

アトラは抱きしめ何とか怯える二人を宥めようとした時だった。ドアが強引に開く音と全身黒ずくめの襲撃者が現れた。

アサルトライフルと防弾チョッキ、顔や頭も防具やマスク、ゴーグルで隠しており怪しさで言ったらアトラ達を連れてきた男達と決して負けていない。

「こちら救出ターゲットを確保。了解です。エージェントも気を付けて。こちらは敵施設を破壊しながらアクセスできる情報端末を調べます」

牢獄のカギが開くのと同時に捕まってしまった男達が皮肉を叫びながら退出していく。

黒ずくめの男達が地図と睨めっこしているのを後ろから見ているアトラ、地図の構図を見たときこの施設が地下に存在しているという事に気が付いた。

施設が地下にあるという情報とおおよその出入り口をたった一時間で発見したフォートレスの諜報部は大したものだと思う。

地下から侵入する上で問題は進入路が限られているという点であった。

襲撃を仕掛けるうえで見つからないように侵入するのは難しい。

「侵入方法は二つだな。正面から攻めるか排水溝から攻めるか」

「え？掘り進んだらダメ？」

明楽からのまるでなんでしないの？なんていう疑問顔をされるが、馬鹿に対してどう

いえばいいのか分からない。

「あのな………何日かかると思うんだ？急いでいるって言うって言っていたら？」

「？言ってた？」

「言ってた」

俺とジョシユアで同音で答えて見せる。

言つたはずなのだが全く聞いていなかったらしい。

「俺はどうすればいい？」

「三日月・オーガス。君は俺達と一緒にモビルスーツ隊の相手をしてもらう。俺は途中から敵中枢に攻撃しに行くから、君はその隙に一度救出部隊と離脱。そしてそのまま時刻通りに宇宙に上がってもらおう。モビルワーカーを救出部隊の離脱ポイントに用意してあるはずだ」

俺は実際に画面を見せた。

「耐熱性のシールドを装備して大気圏突破の際の摩擦熱を緩和、シャトルもこちらで用意している。人質はこちらで安全な場所まで離脱させる。問題はそのシャトルなんだ」

三人が疑問を抱きながらこちらを見てくる。

「旧式のシャトルでね、外からの操作が出来ない。操縦はモビルスーツで出来るんだが、起動はシャトルの中に入る必要がある。しかも入ればそのまま宇宙に一直線だ」

要するに起動者を回収する手筈が無いという事だ。

「それで人質になつてゐる少女……アトラだつたかな？彼女に乗り込んでもらおうと思う。そのまま鉄華団に回収してもらうが……これにも問題。彼女はそのまま戦いに巻き込まれるという点だ」

俺が「要するに」と付け加えようと思つたが、その先は三日月にも分かつたらしく、その静かな声で呟く。

「俺が守りながら戦えばいいんでしょ？一度どこかで離しちや駄目なわけ？」

「駄目だ。シャトルに操縦機能もない。たとえ操縦できたとしても彼女にそれが出来ると思うか？」

三日月は首を横に振る。

それはそうだろう。ただの民間人を戦いに巻き込むだけでも問題なのだ。その上で場で放置しようものならギャラルホルンに捕まってしまう。

「勿論君がギャラルホルンを信用するというのなら俺は自由にすればいいと思う。だが、正直安全は保障できない」

「分かつた。俺が守ればいいから」

現状それしか方法が無い。

「明楽はモビルワーカー隊の護衛。ジョシユアは敵主力隊の相手、途中までは三日月・

オーガスと俺と共に戦うが最終的には一人でやってもらおう。俺達の目的は人質の救出と回収。俺は敵中枢に攻撃しに行く。以上！一時間後作戦開始！」

モビルスーツの後方より多数のミサイルが敵施設範囲に向かつて叩き込まれる。敵施設と聞いた場所には工場のような物が見えてくる。

工場の屋根を引き飛ばしながらもさらに施設奥からモビルスーツが大量に姿を現す。「行くぞ！俺達三機で敵主力をひきつける」

俺達は傾斜を勢いよく下っていくと、敵モビルスーツと正面からぶつかり合う。俺は死神の鎌を振り回し敵モビルスーツを三機同時に撃墜する。

三日月は敵が振り下ろす斧をメイスで受け止め、弾きながら蹴り飛ばしてメイスを叩き込む。すると、後ろからの攻撃にとっさに反応した三日月は機体を捻りながらメイスを横から叩き込む。

その後ろではジョシユアがクローで敵を拘束し、仕込みナイフでコックピットを突き刺す。敵がまとわりつこうとする中、ジョシユアは翼の剣で敵の胴体を真っ二つに切り裂く。

同じ時刻、地下の排水溝より突入部隊が侵入を果たしたとき、更に左寄りからモビルワーカーの突入部隊が突撃を仕掛けようとしていた。

モビルワーカーが施設内の地下出入り口に突入を仕掛けた段階で人質を回収する為

に人員を送り込んだが連絡が途絶えた。それを切っ掛けに別の突入部隊が居ることに素早く気が付いたボス『デリカーン』はハンドガンを腰に付けたまま自室を出ていく。

「敵の目的は人質の回収だ。すぐに白兵戦が出来るメンバーをロビーに集めろ」

「なぜロビーなのですか？」

「貴様は馬鹿か!?こちらから牢屋には送り込んだのだろうか?なら敵は既に人質の回収に成功したという事だ。あと俺のイーガを用意しろ。あと……シャトルもな」

モビルスーツ格納庫へと急ぐデリカーンの後ろから疑問声が飛んできた。

「シャトルですか？」

「モビルスーツに装備できるタイプのシャトルがあるだろうか？」

タブレットを操作しながら確認を急ぐ。

「確かにありますが……?」

「こちらにモビルスーツの戦力を寄越したという事はクーデリアの護衛要員は今手薄のはず、ギャラルホルンと戦う事を念頭に入れたら更に更に戦力は減るはずだ。これで手筈通り。お前達はタイミングを見て離脱しろ。俺は……クーデリアを捕らえる」

火星支部ではコーラルが必要以上の動きが見せていた。そんな中、ノブリスからの新しい情報を元にコーラルは鉄華団を襲撃する手筈を整えていた。

アインは鉄華団への復讐へと動き始め、マクギリスとガエリオはクーデリアを捕らえ

て利用しようと動き始める。

宇宙で別の動きを見せる中、地上戦では別の動きへと移行しようとしていた。格納庫一帯では既に戦場になっており、モビルワーカー部隊と宇宙海賊ダーブラが白兵戦を起こしながら人質を安全に離脱させるための戦いが起きていた。

同時刻。アガレスとバルバトスがモビルスーツ格納庫に突入。

バルバトスがモビルワーカーの救出と離脱の手伝い。アンドロマリウスが退路の確保を完了させる頃、サブレはようやく違和感を感じ取った。

「こんなにも予定通りいくなんて……何か奇妙だ」

モビルスーツが通れる道をひたすら進んで行くと大広間のような大部屋に辿り着いた。大量の柱と大量に用意してあるモビルスーツに装備するタイプのシャトル。

「これは……」

そして、その奥に佇むヴァルキュリア・フレームをベースにしたと思われるモビルスーツ。全身が細く洗練されたフォルムをしており、色合いもそれに応じて灰色と赤で整えられている。

右腕に刀と左腕にガトリングを搭載した小型シールド、背中に長距離攻撃用の兵器を搭載している。

サブレはその姿に身に覚えがあつた。

サブレ達を裏切り、サブレの後輩を手に掛けた裏切り者の組織のリーダーが乗り込んでいた。サブレにとつて宿敵。

「あんた………あんたを殺す!!」

「お前は………そうか。今回の仕事の邪魔をする連中が居るとは思ってたが、お前………あの時のガキだな？成長したものだ。もう一仕事する前に軽く揉んでやる」

サブレがイーガへと向かって鎌を振り下ろし、イーガは刀を振り下ろす。

金属と金属がぶつかり合う音が響く中、三日月はクツキーとクラツカとアトラを連れて施設を離脱していた。

「貴様!!クーデリア・藍那・バーンスタインを襲撃する為だけにあの子達をさらったのか!?!」

「その通りだ。あの子達が我々の施設にいるとわかればギャラルホルンだろうが何だろうが戦力をそこそこ送り出さなければなるまい？我々はもとよりギャラルホルンに對してある程度のパイプがある。あの程度であればあそこは襲つてこんよ。なら、鉄華団からすれば俺達から戦力を取り戻すのに戦力を使うしかない。しかし、このタイミングを逃せばクーデリアを火星から逃がすことも出来ないだろう?」

それについては正解だった。

このタイミングを逃せばクーデリアを逃がすための時間は無くなると言ってもいい。

時間を掛け過ぎればギャラルホルンからの追撃を招く可能性が高い。

だからこそクーデリアの打ち上げと三日月の打ち上げのタイミングの誤差をほぼぼゼロにする必要があった。その為の電撃作戦。クーデリアを火星から逃がす片手間で人質を無事救出する手筈。

この男はそれすら読んでいた。

アガレスとイーガが再び後ろに跳躍し、イーガは素早くアガレスとの間の距離を縮める。刀の方が攻撃速度は上、攻撃範囲では鎌の方が上だが、この場合はサブレの方が若干不利と言えるだろう。

攻撃を捌きながら後ろに下がっていく。

イーガは攻撃速度を極端に上げている手前、防御力が低いという欠点がある。その欠点をシールドで補っている。

サブレは時計を確認すると今頃三日月はシャトルまで辿り着いている頃だった。

「ならギャラルホルンが襲撃した後、戦力の低下を招いた段階でクーデリアを襲う。それに………クーデリアを捕らえればノブリスを交渉の席に呼び出すことが出来るだろう？」

盾で攻撃を弾きつつ二度斬りつけアガレスの装甲に擦れた痕が残る。

「ノブリスとはいえ海賊相手に真正面から戦争が出来るわけでは無い。そこで………殺

す！あいつさえいなくなれば火星での商売で邪魔者はいなくなるわけだ」

「ふざけんな。ノブリスを殺すのは俺達だ」

「火星は俺達からすればヒューマンデブリの養殖場のような場所だ。スラム街からガキをさらっても誰も言わない。君は知っているかな？年間どれだけの子供がスラムで生まれ、捨てられているか？」

サブレは答えない。正直神経を研ぎ澄ませないと勝てない。

「万を超えると言われている。そしてそれと同じぐらいの数の子供が飢えて死ぬか、少年兵や売春に走ると言われている。我々が商売に使ってやつても何も困るまい」

「困るよ………未来ある子供達の将来をあんたもまた奪っているー！」

「この社会情勢がある限り子供が救われる未来なんて存在しない。ギャラルホルンだけじゃないんだよ。ギャラルホルンを支えるスポンサーも、それに従う経済圏にも問題はある。しかし、最大の問題は目の前に存在するはずの問題に対し目を背ける事さ。ギャラルホルンは目の前の問題から逃げているだけなんだよ」

問題の先送りをサブレに語って見せたのはフォートレスの首領であり父親代わりである『マハラジャ・ダースリン』だった。

『今のギャラルホルンは足元にある問題より自分達の利益だけを考えている。それ故に火星支部の独断を見抜くことが出来ない。いや、たとえ知ったとしても不正を不正とし

て文句を言うだけの士官が一体どれだけいるか。恐らくまともな士官は両手があれば足りる。それだけ今のギャラルホルンは問題を抱えすぎている』

三百年という平和が怠惰を生み、七つの名家がセブンスターズという権力の元変わらずにいられたばかりに怠惰は愚かさに変わった。

そんな愚かさは火星や木星などを犯罪者の巢窟に変えてしまったことは否めない。

それもギャラルホルンが下にいる人を見ることも無く、地球以外の人を宇宙人だと拒絶するばかりの行動だ。そして、そんなギャラルホルンが恐ろしく何も言えない経済圏も犯罪の横行を見逃すことしかできなかった。

それ故に、ギャラルホルンは『反ギャラルホルン組織 フォートレス』の結成に気が付かず、組織が少しづつ強くなっていく経緯を知ることが出来なかった。

「フォートレス。俺たちなりに調べてみたんだがな。結成は意外と古く………実は三百年も昔だと言われている。ギャラルホルンとほぼ同時期に結成され、それ以降反ギャラルホルンとしての地下活動に専念。しかし、ここ数年で活動範囲を急に拡大。それも………お前が現れてからだ………お前は誰だ？」

サブレが入ってからフォートレスは本格的な活動へと移行した。ここ数年は闇組織（海賊や秘密結社など）相手に取り締まりと捕獲、拡大の為の事業などを中心に行い、水面下では各組織にスパイを送り込み且つエージェントの規模を拡大している。

三百年かけて地下活動を本格的な活動へと少しづつ移行しているフォートレス。

「俺達としては別にいいんだがな。今回の仕事の邪魔をされては困る。お前の相手は別にしてやる。だから……………今は大人しくしていろ」

イーガがアガレスの体を蹴り飛ばして柱を二本ほど吹き飛ばしそのまま瓦礫にまみれてしまうアガレス。そんな隙を活用し、イーガはシャトルを装備して大型シールドを装備してシャフトを利用して上まで消えていく。

「逃がすか……………お前は殺すって決めたんだ!!」

アガレスもシャトルの一つを装備して上へと消えていく。

鉄華団のシャトルが空へと上がる頃、三日月はシャトルで上へと上がる為の準備に入っていた。急いでシャトルの準備をしながら三日月はアトラにノーマルスーツを着するための手伝いをしていた。

「ごめんアトラ。巻き込んで」

「ううん。私……………三日月の手伝い出来て嬉しいよ」

クツキーとクラツカは桜に抱かれながら今は疲れ寝ている。きつと起きれば勝手にいなくなつた事を怒るだろう。だが、きつと理解してくれるはずだと三日月は自分に言い聞かせる。

「帰ってきたら謝るよ桜ちゃん」

「気を付けて帰ってくるんだよ」

三日月がバルバトスのコックピットに、アトラはシャトルのコックピットに乗り込むとソニアが両者の前に現れる。

『二人共準備は良いかしら？アトラちゃん。君は目の前のレバーを下ろすだけでいいわ。ただ、少し力を籠める必要があるからね。レバーを下ろしたら席で大人しくするのよ。三日月君。ブースターに火が点いたら一気に上まで機体を持ち上げてくれるわ。でも、気を付けてね。シールドが弾かれるとアトラちゃんはともかく、君は摩擦熱による温度上昇で蒸し焼きよ』

「アトラは？」

『彼女はバルバトスが守ってくれるから大丈夫よ。急いで、先ほど鉄華団のシャトルが打ちあがったという報告が上がったわ』

オルガは時間通り作戦に移った。

「俺達も行こう。アトラ」

「うん。任せて」

アトラは多少体重を乗せながらレバーを下ろすと、機体が大きく揺れる。機体全体にGがかかると機体が一気に大気圏を突破していく。

三日月はシールドを吹き飛ばさないように神経を研ぎ澄ましている。

そして、時は三十分ほど遅れて二機のシャトルが打ちあがった。

それを追いかける大量の機体もまたサブレを追いかけていた。

戦場は宇宙へと移行しようとしていた。

シャトルの目の前にいるモビルスーツを前にオルガは試練の時を向かえていた。

「どうするんだよオルガ！」

トドは結局最後まで裏切って見せた。

彼はギャラルホルンにオルガたちを売り飛ばした。

万事休すかと思われた瞬間、砲撃がモビルスーツとシャトルの間を通り過ぎた。

「ミカ!!」

バルバトスがシャトルの追加ブースターを切り離してそのままメイスを振り下ろした。

宿命の戦場

鉄華団のシャトルが宇宙に上がった事を確認すると、ギヤラルホルンの火星支部本部長コーラルは自らモビルスーツに乗ってクーデリア確保の為に動いていた。

一機のモビルスーツが近づいてくると、ワイヤーを使って接触通信を仕掛ける。

『クーデリア・藍那・バーンスタイン』の手柄を引き渡せ」とか言ってますけど!?」
「ささささ……差し出せ！そうすりゃ俺達の命までは取らねえだろ！」

トドが悲鳴のような声で差し出せと文句を言う。殴られながらも叫び続ける。

するとクーデリアが身を乗り出す。

「私を差し出してください」

「それはなしだ。俺らの筋が通らねえ」

するとそのオルガの言葉に今度はトドが叫ぶ。

「じゃあどうするんだよお!!」

オルガは信じていた。すると砲撃のような攻撃がモビルスーツのワイヤーを断ち切り、同時に急接近、両手にそれぞれ構えた二本のメイスの内右腕のメイスの先端がモビルスーツのコックピットの深く突き刺さる。

「お待たせ。オルガ」

追加ブースターを切り離し、背中についた追加装備のブースターで素早くその場を離脱し、ギャラルホルンのモビルスーツ隊へと突っ込んでいく。

「目標の確保に失敗したようです」

「クーデリアがそこにいるのならそれでいい」

コーラル自ら戦いに赴こうとする姿にアイン自ら意見を出す。

「コーラル司令！ファリド特務三佐より殺すなという指示が……」

「貴様の上官はいつからあの青二才になった！船ごと撃ち落とせ！」

その言葉にアインは自らの胸の奥から湧き出る復讐心に逆らう事は出来なかった。

（今は確実にあの角の付いたモビルスーツを倒し、クランク二尉の敵を取る事だけを考
えろ！）

しかし、コーラルもまた別の事を考えていた。

（監査官自らが参加している作戦中の事故ならば、いくらでも言い訳は立つ。あとはノ
ブリスとの契約だ。華々しく散ってもらおうぞクーデリア！）

未だにコーラルはノブリスから期待されていないという事に気が付いていない。

船に近づくモビルスーツを的確に落としながら三日月は高速で戦場を移動していた。

「アトラ。大丈夫？」

「大丈夫だよ。三日月は戦いに集中して」

「分かった。きつかったら言っただけ」

左のメイスを一旦戻し、同時に砲撃用の遠距離武装を腰から取り出す。

モビルスーツ隊がおびき寄せられる間に鉄華団の船であるイサリビが迎えに来てくれた。

「おい！なんでこの船がここにいます？静止軌道上で合流だったはずだ！」

「これまでお前が信用に足る仕事をしたことがあったか？倉庫にでもぶち込んだけ！」

トドは大きな声で文句を言いながら去っていくと、クーデリアはビスケットの操作する画面を覗き込みながら三日月の様子が気になっていた。

「遠距離で撃ち合っているうちは大丈夫。モビルスーツのナノラミネートアーマーは撃ち抜けない」

そうしているとオルガが大きな声で指示をだした。

「ヤマギにあれの準備をさせろ」

「パイロットはどうするんだよ」

シノが素早く食いつき、ユージンが何の話だよという表情を浮かべながら周囲を見る。

「昭弘頼めるか？ビスケットも準備しておいてくれ。お前は最終手段だ」

昭弘とビスケットはそろってブリッジから移動して行く。ユージンは二人の行動に違和感を覚えている。

「ユージンは船の操縦を任せられるか？」

「いいけどよ。さつきから何の話をしているんだよ!？」

オルガが艦長席をユージンに譲り、ユージンは背中に付けている阿頼耶識を艦長席に取り付けて尋ねる。すると、オルガはユージンの後ろで戦場をまっすぐ眺める。

「昭弘とビスケットにはモビルスーツを任せることになってる」

「はあ!?! シノじゃねえのかよ!？」

「いや、阿頼耶識を使えるなら俺も志願するんだけどよ。あのモビルスーツ使えねえんだよな。ああいうマニュアル操作にはビスケットがなんだかんだ向いているからな」

シノは先ほどまでビスケットが座っていた席に座りながら答える。

どこか納得のいかないユージンだったが、そう言う事を言っている場合ではないと自らを律し、戦場を見る。

「で? オルガ。何か作戦があるんだろ?」

オルガは小さな声で「まあな……」と答えた。

パイロットルームで昭弘とビスケットはパイロットスーツに着替えていた。ビスケットは自分の背中についている装着物が邪魔にならない様な特別なパイロットスー

ツを着ながら、自分の帽子が邪魔になっていると気が付いた。

自分のロツカーにそれを入れて振り返ると昭弘が真剣な眼差しをして待機していた。「それじゃ俺は艦で待機しているから、安心して戦つて来て」

「ああ、いざとなつたら艦を頼む」

昭弘と一緒にパイロツトルームから出ていき、それぞれのグレイズに乗り込む。

サブレが最初の戦いの際に壊したグレイズはサブレが回収せずに去つたためにその場に残っていた。それを鉄華団が回収し、使えるように再調整を施した。

ビスケットと昭弘がコックピットに入っていくと、昭弘の機体が沈んでいく。ビスケットはその間にブリッジに連絡を取っていた。

「くっそーちよこまかと……援護しろ接近戦をするー！」

中々致命的な一撃を打てずにいる事に業を煮やし、苛立ちながらバルバトスに接近していく。

「私の邪魔をするな！」

攻撃を防いだ直後の隙を突く形で目の前まで接近したコーラルだが、その妨害の為に行われた昭弘の援護射撃に意識がそれてしまう。

三日月を呼ぶ声に三日月は右手に構えているメイスを構えなおす。

「まさかあのグレイズは……」

「コーラル三佐！」

コーラルはグレイズに意識を向け過ぎ、後ろでメイスを構えなおしている三日月に気が付かなかった。メイスのパールランカーが深々とコックピットに突き刺さる。

「またあいつに……このリアクターの反応は……クランク二尉の機体か〜！」

アインは隊列を乱しながら一人突っ込んでいく。

「足の止まった奴からやろう。援護頼む」

「待てよ！ビスケットじゃねえんだぞ！俺はまだこれに慣れてねえのに……」

アインはショートアックスを振り下ろす。

「角突き!!」

三日月は流れるように回避する。三日月の予想できない動きを前にギャラルホルンのパイロットたちは混乱の最中であつた。

「その動きはなんだ!!」

阿頼耶識を使った生身同然の動き方は現代のモビルスーツの動かし方では出来ないものばかり。

グレイズを一機つつ確実に落としているが、それを妨害する様に紫の機体が射撃で邪魔をする。

「コーラルめ。我々を出し抜こうとしてこのザマか」

シユバルベグレイズのコックピットの中でガエリオは戦場の状況を分析した。

「グレイズを既に四機……見てくれよりは出来るようだな！」

ガエリオと三日月が交戦しているとマクギリスはバルバトスの解析を部下にさせていた。

「見ない機体だな。照合できるか？」

「距離はありますがエイハブ・リアクターの固有周波数は拾えています」

目の前の画面には『ガンダム・フレーム』と書かれていた。

「ガンダム・フレームだと？」

「マツチングエラーでしょうか？ 厄祭戦時の古い機体ですよ？」

「いや、必然かもしれないな。その名を冠する機体は幾度となく歴史の節目に姿を現し、人類史に多大な影響を与えてきた。火星の独立を謳うクーデリア・藍那・バーンスタインがそれを従えているのだ。船を任せるぞ。私も出る」

そして、マクギリスも戦場へと出ていく。

戦場に出たマクギリスは持ち前の洞察能力を駆使して三日月の戦い方を分析していた。

「ああもおかしな避け方をされてはむきになるのも分かるが、こちらの照準システムに異常はない。やはり奴の問題か。姿勢制御プログラム特有の回避パターンは出ない。

まるで生身のような重心制御が回避動作を最小限にとどめている。空間認識能力の大を謳ったものだったか、阿頼耶識システムとは……、外部スラスターのナノラミネートアーマーだけ消耗が激しい……そうか」

スラスター目掛けての攻撃が見事に着弾する。

「生身の体にスラスターはあるまい。分かればあつけないものだな」

しかし、三日月もマクギリスの戦い方に気が付き、素早く対応して見せる。

「もう気が付いたか。ならば……」

後方からギャラルホルンの船が追いかけており、オルガ達はそれから逃げている状況だった。

「資源小惑星を利用する。アンカーを小惑星に打ち込み、ビスケットがそれを砲撃で打ち抜く。問題はアンカーを打ち込むタイミングだが……」

『俺がしようか?』

「いや駄目だ。ビスケットは杭を打ち抜くタイミングに集中しろ。そっちが重要だ」
オルガが悩んでいると船の操縦をしているユージンが名乗りを上げた。

「俺が打ち抜く。俺にも仕事させろ」

「出来るのか?」

ユージンは黙って頷く、オルガはシノの方へと顔を向ける。

「シノはタイミング頼む」

「おうよー!」

時は一刻一刻と過ぎていき、ユージンはアンカーの照準を目の前の小惑星へと向ける、このアンカーのタイミングがずれれば目標通りの軌道で動きが取れない。

ユージンは速度を高めながら息を吐き出すタイミングでアンカーを小惑星に打ち込んだ。

艦全体に大きな揺れが起きており、誰もが自分の持ち場で必死にしがみついている。

「こんな揺れで撃てるのかよ!？」

「ビスケット!!」

ビスケットはカタパルトから身を乗り出し、スナイパーライフルを杭の方へと向ける。

イサリビが大きく半円の軌道へと入っていく。

小惑星にぶつかりそうになるような速度、目の前には小惑星が見えてきた。

「ぶつかる!」

オルガはビスケット信じていた。

ビスケットは息を大きく吐き出し、こんな状況でも冷静になれている自分に驚いてしまいそうになる。

スナイパーライフルの引き金を引く準備をしながら移動速度などを頭の中で計算し、杭へと照準を向けて引き金を引く。

ライフルの弾丸は杭の端を強く撃ち抜いていき、杭は衝突の衝撃から遠くへと吹き飛んでいく。

イサリビは杭を回収しながらギャラルホルンの船の真正面に位置を付ける。

ギャラルホルンの船とイサリビの船の距離がほぼゼロ距離に位置すると、お互いには同時に主砲が火を噴いた。

同時に閃光弾を放ちながら視界と照準補正を狂わしながらイサリビは遠くに去っていく。

昭弘の機体を補足しながら三日月の機体を確認しているとクーデリアが気が付いた。

三日月はマクギリス相手に苦戦を強いられていた。

左腕の装甲をパージして致命傷は回避したが、今度はガエリオがワイヤーで動きを拘束する。

「大人しく投降すればしかるべき手段で貴様を処罰してやるぞ」

「投降はしない。する理由がない」

聞こえてくる言葉にガエリオは首を絞められたことを思い出した。

「そのクソ生意気な声……あの時のガキか！」

「そういうあんたは……誰だっけ？」

「ガエリオ・ボードウインだ！火星人は火星に帰れ！」

三日月はワイヤー解くため一旦ガエリオとの距離を多少詰め、同時にメイスを投げ飛ばす。

マクギリスがガエリオを回収するが、時は既に遅く三日月はブースターで一気に離脱していた。

アインは悔しさに打ちひしがれている間、オルガはトドをギャラルホルンへと送っていた。

バスケットと昭弘はアトラが入っているシャトルのコックピットをまずは取り外し、中へと入れていく。中に入ろうとする三日月が何かに反応したように身動きを止める。

すると昭弘とバスケットもモビルスーツのアラートが激しく反応した。

「オルガ！回避！」

ユージンが素早く反応すると、イサリビ右側面に強い衝撃と強い揺れが起きる。

バスケットと昭弘のグレイズがイサリビにしがみつが、三日月は素早く襲撃者へと向かって機体を走らせる。

襲撃者は大きなシールドを装備して姿を現し、大きなキャノンを手腕に装備している。

三日月は右腕のメイスでシールドを打ち上げ、でき隙をビスケットがスナイパーライフルでコックピットを撃ち抜く。

するとイサリビの目の前にはおびただしい数のモビルスーツがたつた一機の黒いモビルスーツを囲んで戦っている。

驚くべきことはその一機が少しずつ戦力を減らしながらイサリビの進路を開けようとしていた。

その姿を見ればあれが誰なのかなんて三日月とビスケットには分かっってしまう。

アガレスはたつた一機で戦っていた。

死神の鎌を振り回しながら、孤独に戦っていた。

「どうするよオルガ！」

ユージンからの一言にオルガは考え込んでしまう。この戦いを回避すること自体は非常に難しいが、大きく迂回すれば出来ないことは無い。しかし、下手に迂回すればギャラルホルンにまた見つかる可能性が高い。かといって先ほどのギャラルホルンより三倍以上ある戦力を前に勝てる可能性も低い。

オルガが悩んでいる間にビスケットの視界に写るアガレスの姿が、昔のサブレの姿に見えた。

たつた一人、孤独に不良と戦うサブレ。

ビスケットはそれがどうしても怖く、どうしてもサブレを助けに行くことが出来なかった。

(それでいいの？また俺は………僕はサブレに押し付けて助かるの？)

自分への自問自答。

逃げるのか、戦うのか。

(決めたじゃないか。オルガ達と戦うと、その為にモビルスーツのマニュアルまで暗記して、昭弘と確かめて、ああして戦えた)

サブレの猛猛な戦い方を前にどうしても怯んでしまうビスケット。そんな自分の心に鞭を打つ。

すると、サブレの戦いを見ているとどうしてあそこまでこだわるのだろうとふと疑問に思ってしまう。

サブレにはこの戦いに何かを感じたに違いない。

(サブレにとつてこれは宿命の戦いなんだ。逃げるつもりも、避けるつもりも無いのだろう。なら………俺は)

そう思うとビスケットは自らのグレイズを走らせる。

ほぼ同時に三日月も機体を走らせる姿を目撃する昭弘は「ビスケット?!三日月!」と叫びながら内心「クソ!知らねえからな!」なんて思いながらも機体を走らせる。

オルガやユージンも驚きを隠せないが、今更隠しても仕方がない。そういう想いと共に艦を敵主力へと向けて移動させていく。

「ユージン！頼めるか!？」

「やるしかねえだろ!!ビスケットと三日月の野郎！帰ってきたら一発殴ってやる！」

イサリビもまた宿命へと巻き込まれていく。

ダーブラとのまだ見ぬ決着へと向かって進んで行った。

死神の正体へ

地球圏のヨーロッパの小高い丘の上、花畑に囲まれる壊れた一軒家。天井は突き抜けて壊れ、机や壁にはヒビが割れている。

そんな部屋にフードとサングラスを付けた男が立っていた。

その男の右手には赤いバンドナが握られており、左腕にはギャラルホルンが使っているハンドガンが握られている。

「やつとだ。あれから三百年。ここまで来た。あと少しでみんなでそっちにいけるな」
バンドナを机の上に置き、ハンドガンの弾丸を確認した後胸の内側のポケットの中へとしまふ。

そして、腰に付けたポーチの中からギャラルホルンの文様が描かれている両手で持てるサイズの箱が出てきた。箱の中には七つの穴と蓋の裏にはセブンスターズの家門が描かれている。

「リブルド計画。死神の半身は目覚めた。狩人も目覚めた。あとは死神の半身のみだ。大丈夫。ちょっと刺激を与えてやれば必ず目覚める。もう少し時間はかかるけど待っていてくれ。そしたら……みんなで旅立とう」

彼は最後に一枚の写真を机の引き出しの中へとしまう。

その写真には赤いバンダナを腕に巻き付けた男性が三人、巻き付けていない男性が一人、その後ろにだが謎の腕が映っていた。

男は家から出ていくと小高い丘を降りていく、小さな森の中へと進んで行き、倒れている看板を付け直して立ち入りを禁止しているかのような鎖を乗り越える。

付け直した看板には『ここから先の立ち入りを禁止する。ギャラルホルン セブンスターズ イシユール家所有地』と書かれていた。

「まずは死神の試練だ。乗り越えて見せてくれよ。お前がガンダムのパイロットならな」

男は空を眺めるように視線を上へと向ける。

同じとき、サブレは試練の時を迎えていた。

死神の鎌が空を切り、多くのモビルスーツに囲まれながらも善戦を繰り返しているように見えるが、実際は突破口が見いだせずさらなる混戦へと向かっていた。

肝心のダーブラのモビルスーツ隊もアガレスを打つ手立てを打てずにいた。

しかし、それは半分はわざとだった。

ダーブラのボス『デリカーン』は顎下に手を当ててふと思考していた。

「あの少年が現れてからフォートレスの本格的な活動が始まったのは事実。問題はあの

少年がいつからか業界内で死神の名前で呼ばれるようになった。これは偶然か？まるであの少年の本名を隠すためのフェイクのように見える。いや、そもそも今回の依頼からしておかしい所があった」

今回ダーブラは第三者を仲介する形で別の依頼を受けていた。それはフォートレスの火星進出を防いでほしいと言う物だった。依頼主を辿って調べたところどうやらアフリカン・ユニオンの資本家であることが分かった。

問題はこの資本家自信がどうもフォートレスの活動を支援しているという点だ。

そして、その資本家が謎の失踪を遂げている。

「そこからしておかしい、前金と依頼が完了すれば残りの依頼金を払うとずっと連絡があったので依頼を受けたが、そもそもフォートレス内部に裏切り者が発生する可能性が高いと組織で三百年裏切り者を発生させなかったという事がおかしいのだ。誰かが外部からコントロールをしているという事か？誰だ？」

その行動に呼応するようにクーデリア・藍那・バースタインが活動を本格化させた。その連鎖が偶然なのだとどうしても断言できないデリカーンである。もしと考えるとしまう。

クーデリアが活動を始めたのはアーブラウの議長である蒔苗が交渉に応じるとクーデリアに告げたのがきっかけだったはず。

「いや、もしかしたらフォートレスが活動する為に誰かが動き出す理由をフォートレスが用意したのか?となると、蒔苗は当初フォートレスに護衛の依頼を出したに違いない。なら……」

そこまで言えばデリカーンにはサブレの本当の依頼が分かった。周囲に嘘をつき、決して本心を離そうとしないこの少年はあくまでもエージエント。仕事を遂行する上で時に冷酷さは発揮することが出来るように最低限の特訓を受けている。

目の前で戦っている少年に冷たい声を放つ。

「君の仕事の本来の依頼は『クーデリア・藍那・バースタインの護衛組織を見出し、安全に送り出せるように手伝う事。そして、最悪の場合はこちら側に連れてくること』じゃないのか?」

その推測は決して間違いじゃない。しかし、この時サブレが戦うもう一つの理由に自分が関わっている事にまだそこまで気が付いていない。

サブレがデリカーンにどうして固執するのか、それはサブレにとつての苦い過去。救えるはずだった命、気が付かないうちに見殺しにしてしまったツケをここで払ってしまいたいという願い。

妹達を傷つけられたという怒りがサブレを突き動かそうとする。

サブレとてまだ十六の少年である。感情で動いてしまいたくなる時とてある。

しかし、この時デリカーンはあと少しでその奥にある真実のドアを開ける所まで来ていた。しかし、それを妨害する様に三機のモビルスーツが割って入ってきた。

サブレが鎌で敵を切り裂いていると、後ろからスナイパーライフルの鋭い弾丸がサブレに攻撃を加えようとする敵モビルスーツ『量産型ユーゴ』を切り裂く。簡易素材で完成されたユーゴの右腕を吹き飛ばし、サブレはその敵に容赦の無い攻撃を加える。

コックピットに突き刺さった鎌を引き抜こうとするが、別の敵がサブレに攻撃を仕掛けようと斧を振り上げる。

サブレは鎌の回収を諦め、背中に隠していたレンチメイスに切り替える。

ビスケットはようやく冷静さを失って前に出過ぎたことに気が付いたが、周囲を取り囲む機体を相手に出来るほど技術が高いわけでも無く、囲まれた敵相手に殺されそうになっっている間に三日月がビスケットの回収に現れた。

「落ち着いて。この数に突っ込んでいくのは危険だとおもう」

「ごめん三日月。でも………僕」

「分かっている。でも、すごいね。あの数相手に一步も引いてない」

「そうなのだ。数えるのが億劫に感じるほどの数相手にサブレは一步も引かず、互角の戦いをしている。」

「でも、今だけだよ。あの奥にいる機体が多分リーダー機だと思う。あれが参加したら

さすがのサブレでも」

「なら俺と昭弘で残りの敵をひきつけるから、ビスケットはあいつと一緒に敵を倒してよ」

「でも！昭弘と三日月だけじゃ」

すると昭弘が後ろから現れ声をかけてくる。

「イサリビもひきつけてくれるってよ。その隙なら大丈夫だろ？」

「でも、それじゃ……………イサリビが」

イサリビまで前に出たら敵の思うつぼなのではないかと考えてしまう。しかし、ビスケットが悩んでいる間に三日月が強めの声をかけてきた。

「ビスケットはさ助けたくないの？」

「助けていよ……………」

「なら助けに行けばいいじゃん。それに、ここで引いても同じことだと思う。なら前に進んだ方が良い。でしよ？」

（確かに今更引くことなんてできない）

そう思うと目の前で戦っているサブレの背中が遠くに見える。

手を伸ばしても届きそうに見えない距離、それはビスケット自身が作り出す偽りの距離感だ。実際は機体を走らせれば届くはずなのだ。

「行つて。ビスケット。後ろは俺達を守る」

ビスケットは機体をサブレの方へと走らせ、三日月と昭弘はイサリビを守りながら敵モビルスーツを引き付けようとしていた。

サブレは敵勢力がクーディアを狙おうとしていると気が付いたが、今日の前で自分が出ることは目の前に存在している。

デリカーンとの戦いに集中する為機体を一気に走らせる。

ビスケットが敵からの攻撃を受けそうになるが三日月や昭弘が援護に入り、ビスケットの目の前でサブレとデリカーンがいにぶつかつた。

レンチメイスと刀がぶつかり合い、至近距離で視線と視線と言葉がぶつかつていた。

「君のような子供にこんな重大な事件を託すのは失敗だつたな」

「アンタみたいな悪党相手なら俺一人でも十分だ」

火花を散らし合い、サブレが機体を半歩後ろに引き、レンチメイスをイーガの頭上目掛けて振り下ろそうとする。しかし、イーガはそれをシールドで攻撃を弾きながらガンダムの腰目掛けて刀を振り回す。

サブレはそれをレンチメイスの端で受け止めながら攻撃を回避することに成功した。

腰を思いつき蹴りつけるサブレはイーガが震えながらも攻撃を耐え、シールドをアガレスの胴体へと叩きつける。

「何故あの時裏切ったんだ!？」

「ああいう計画だったからだ!あれは我々にとつて偉大なる組織結成の日だった」

「そんな事の為に!!」

衝撃がお互いのコックピットを振動し、イーガはその隙に周囲に漂う小惑星の陰に隠れてしまう。

サブレはそれが畏だとわかっていてもそれでも突っ込んでいこうとする中、たった一機の機体の手がその行動を一度止めた。

「駄目だよ。畏だ」

「邪魔だから後ろに下がっている!」

「駄目だ!一人で戦わないでよ!僕を……俺を頼りにしてよ!俺だつて戦えるんだ!!」

その言葉はサブレの心にブレーキをかけようとしていた。

目の前に存在している敵に対し、どこか盲目になっていて冷静さをかけていた。

サブレはいつでも『俺がしっかりしなければ』『俺が倒せばいいんだ』という感情がサブレを異常なまでに追い詰めていた。

それも全てはあの頃の失敗からくる行動だった。

『助けてください!先輩!』

助けを求める声とそこに駆け付けた時、コックピットの中に広がる肉体の残骸を見た

とき、サブレは初めて戦う事の結果を目撃した。

助けてくれという言葉をサブレは救う事は出来なかった。

サブレの視線の先にいる兄はもう弱弱い兄では無かった。

いつの間にかサブレなんかよりよっぽど成長した兄の姿を見たとき、ぶつきら棒に答えるだけだった。

「援護は任せる」

そう言つてサブレは小惑星の裏へと回り込んだ。

デリカーンはサブレが追いかけてこないことへの疑問が生まれた。デリカーンはサブレが自分と同じように回り込んでくると判断していた。

しかし、冷静を取り戻したサブレはあえてイーガの上を陣取った。上を陣取られたと察したイーガは回避行動を取ろうとするが、それを今度はビスケットが妨害した。回り込んできたビスケットはスナイパーライフルの弾丸をイーガの右足のスラストーへと見事に当てて見せた。

「二人がかりだど!? しかし!」

イーガはバランスを崩してしまう機体を素早く立て直し、サブレからの攻撃を左腕を犠牲にする形で致命傷を回避した。

しかし、右足に続き左手を犠牲にしてしまったデリカーンは勝機が無くなったと判断

できた。

「各機撤退。二時間後に撤退ポイントにて集結、来なかった機体は考えるな」

それを最後の言葉にすることにした。

刀を一本。しかし、せめて今回の不可解な事件を紐解き、なんとしても同じ失敗をさせまいとサブレと直接対決へと挑んでいった。

（今回の事件の裏に別の誰かがいることは確かだ。その『誰か』は我々と依頼主を貶めようとしている。恐らく依頼主は既に死んでいるのだろう。目的はどうしてそんなことをしたのかだ。依頼主が裏切っているとわかったのならフォートレスはこんな回りくどい手を使うとは思えない。なら、フォートレス所属では無い者が行ったという事か？）

考えられるだろうか？

（もう一つ不可解なのはやはりこの少年とこの機体だろう。この機体、もしくはこの少年はおそらくフォートレスの中でも相当重要な存在に違いない。出なければクーデリア・藍那・バーンスタインの依頼を極秘裏に受けるとは思えない。やはり、この少年はキーマンだ）

サブレからの攻撃を驚愕の集中力で回避するが、ビスケットの弾丸が適度に機体の端に当たってしまう。

ちよっとずつ機体の速度に追いつきつつある。

（この少年。この機体がもし……フオートレスにとって重要な立場にあったのなら。もし、私とその『誰か』だったのならこの少年の登場以降どういう風に事を起こすか。決まっている目的がギヤラルホルンの撲滅ならこの少年を切り札として使えるように鍛えるはずだ。ああ、そうか……）

そこまで来て画面いっぱいに広がるレンチメイスを見た瞬間、デリカーンはようやく『誰か』の目的の一つに限りなく近づいた。

気が付けば左半身の感覚が無い事に気が付いた。

なんてことだ。私は『誰か』の策略の中で礎にされたようだな。失態だ。こんな作戦に気が付かないなんて。

その上、敵の迷惑通りにここまで来てしまった。

ここで私を取るべきこの『誰か』への対抗策は生き残る事だ。しかし、それだけは私の心が許さなかった。

こんな所で恥をさらすつもりは無い。

私はハンドガンを取る為に右腕を動かした。血が流れ出る左半身の痛みなどづくに感じない。

自らのこめかみにハンドガンの銃口を当て、最後に目の前にいるアガレスに私は睨み

つけた。

精々足掻くといい。その先に何かがあるのか地獄から見ている事にしよう。

私は銃の引き金を引いた。

銃の引き金が引かれる音が聞えてきた。

機体同士が接触している所為だろう。俺は急いでコックピットから出ていくと俺は急いでイーガのコックピットの中へと入ろうとこじ開けた。

中には左半身を失った男が右手でハンドガンを握りしめ、頭部から血が大量に流れている映像だった。

俺の隣に兄さんがやってきて遺体を前に少しだけ吐きそうになる気持ちを抑える。

「ビスケット！奴らが撤退する。今のうちに離脱するぞ」

兄さんの機体からそんな声が聞えて来た時には俺はアガレスのコックピットへと帰っていた。兄さんもグレイズへと帰っていく。

俺は兄さんがコックピットの中へと帰る前に一冊のマニュアル本を渡した。

「死なないように必死で生きる事だ」

俺はそれだけを言うとそのまま帰路に就いた。

後ろで兄さんの機体を他の二機が回収しながら艦が離脱していくのが見えた。

俺は資源衛星コロニーへと進路を取り、その間に本部へと今回の経緯と結果を報告し

た。

資源衛星コロニーはフォートレスの手によって既に管理されており、俺は一番奥へと機体を止めつつ視界の端の方で見たくない人の一人を見てしまった。

生真面目さを決して隠そうとしないその顔立ちはサブレは何度見ても背筋に嫌な汗をかいてしまう。

コックピットから出ていくと彼の近くへと降り立つ。

「随分早いおつきですね？ 終了時刻を事前に予想しておられたと？」

「まあな。新しい依頼だ」

「はあ。密命を周囲に隠しての依頼の後でまた依頼ですか？ いいですけど。また密命とか止めてくださいね。これ以上はジョシユアには隠せませんよ」

「安心したまえ。今回は密命ではない。当分はテイワズに預けることで決着した。勿論彼らが裏のルールを破るようなら話は完全に別になるが」

「そこは彼らを信じるしかありませんね。まあ、あんなできたばかりの組織が裏のルールを知っているとは思えません？」

「そこはテイワズの教育に期待するしかない。さて……これが次の指令書だ」

俺はその指令書という名の薄い本を取る。本と言ってもいいのかどうかというほどの薄さ。多分ページは存在しないだろう。俺が中を開くとそこには『指令書』という簡

潔な文字と下に依頼内容と依頼主が羅列されている。

「今度の依頼は『オセアニア連邦』ですか？」

「ああ、いくつかの我が傘下の商会がある宇宙海賊の被害を訴えている。その宇宙海賊の撲滅がお前の次の依頼だ」

「こういう仕事は別の人間の仕事でしように」

「君にしかできない理由がある」

俺は依頼内容を確認するが、宇宙海賊名が『ブルワーズ』という名前しか書かれていない。またしても意図して書かれていないわけか。

「またこういう内容ですか？嫌ですよ。ちゃんと依頼内容は正確に書いてくださいよ」

「善処しよう。今回の宇宙海賊が『ガンダム』を所有しているそうだ。実際に襲われた商会がデータの提供をしてくれた。お前の目的はブルワーズを撲滅し、ガンダムの回収を並行して行う事。事前の情報はこちらから伝える」

まあいいか。そう思い俺はあの機体はどうするのかと尋ねた。

イーガとかいう機体だったか？

「あれはこちらの商会で回収させる。残党はアリアンロッド艦隊を利用することになっている。こういうことは彼らの仕事だろうからな。安心しろお前の目撃者は皆殺しにしておくようにと伝えてある」

「あまりジユリエッタに無理をさせるとばれますよ」

俺は釘を刺した。

あまり派手な行動はラスタルにジユリエッタへの不信に繋がるだけだ。

「気にするな。実際に進言するのは別だ。ジユリエッタの目的はあくまでもラスタルの行動を逐一私達に伝える事だ。お前が気にする事じゃない。そもそもお前は我々フオートレスにとつて旗頭なのだ。危険な所への任務何てさせられないだろう」

「だったら任務内容も少しぐらい安全な奴を求めますね。一年前の金星付近での取り締まりなんて下手をしたらアガレスを失っていましたよ。少しぐらい情報に正確さが欲しいです。だいたいこの報告書にした所で……」

なんて愚痴をこぼしているアルベルトさんは踵を返してその場から立ち去ってしまった。

「ではな。仕事はきちんとかこなせ」

「あ！逃げる気だ！」

俺の目の前で逃げていったアルベルトさんへの睨みを俺は忘れずに言い。その片手間でスマホオを使って『親父』へと嫌がらせを行う。

この時の俺は気が付かなかった。この依頼が俺達と鉄華団の初対決へと向かって行くとは……誰も気が付かなかった。そう思っていた。

そう。一人だけいたんだ。この展開を予想していた人物が。

タービンス編

成長の証

鉄華団が火星圏から離脱した後、マクギリスは追撃は不可能という判断を素早く下した。

すると包帯で傷を塞いでいる体の上からジャケット一枚をかけているだけという格好でガエリオがブリッジに現れた。

「無理せず休んでいろガエリオ」

「かすり傷だといっただろう。今度こそあのクソガキを……」

「追撃はしない」

その言葉にガエリオは驚きの声と視線を隣のマクギリスへと向けるもマクギリスは涼しい表情をしている。

「落ち着けよ。コーラルが死んだおかげで仕事が山積みだ。すぐには動けない。連中から届いた荷物からクーデリア・藍那・バースタインが乗っていると確認できた。となればいずれ地球航路に乗るだろう。再会の機会はあるさ」

届いた荷物とは「トド」の事である。

ガエリオはどこか納得がいかないというような表情をするが、ここはマクギリスが正しいと引き下がるしかない。それに彼の言う通り地球へ向かうのならいずれは相手になることになるのは事実だった。

そんな中、ガエリオはマクギリスが調べたバルバトスに関する報告を挙げた。

「ガンダム・フレームだと？」

「厄祭戦末期に活躍したガンダムの名を冠された72体の内の1つ。個体名はバルバトス。ちなみに同時刻より少し前に大気圏内に三機ほど確認したが、うち一機はギャラルホルンのデータベースに書かれていなかった」

「そいつらがそうだという確信はあるのか？そんな昔の機体」

「間違いない。エイハブウェーブのパターンを確認している。あれは専用設計のエイハブリアクター二基を搭載しているのがその特徴だからな。他三機も同じような形をしていた」

「そんな大昔のモバイルスーツに苦戦させられたとはな」

「機体性能というよりは乗り手の問題かもしれない」

ガエリオが素早く反応し、顔を挙げるとマクギリスは「気にするな」と返す。

『阿頼耶識システム』はそもそも厄祭戦時にモバイルスーツの能力を最大限に引き出すために開発された技術らしいからな」

「あれが阿頼耶識……か」

俺は火星の中に存在しているフォートレスの隠れ家から少し移動した所に祖母ちゃん
の農場が存在している。

現在は桜農場はフォートレスの隠れ家から半分防衛と監視目的で機能しており、俺は
桜農場を遠くから眺めており、家の中ではクッキーとクラツカが医療班から治療を受け
ている。

俺は阿頼耶識システムと言う物を本格的に見た。

短期間であれだけの戦闘が出来るのだから、俺達が使っている脳波式阿頼耶識とは全
く違う。しかし、あの指揮官機がしてやられた理由は彼が単純に頭に血が上っていた事
も理由だし、ガンダムの性能が高いのも理由だったからだ」

「正解。そう、いくら古ぼけた機体で、長年管理が行き届いていなくてもそれでも最新鋭
機を超える性能を見せるのがガンダムよ」

ソニアが俺の方へと近づいてきて、俺が持っている指令書をくれと手を伸ばす。俺が
それをわたすと同時にクッキーとクラツカがドアから姿を現し、こちらの様子を見てく
る。

どうしたらいい物かどうかと表情を作るのも難しい。

するとその奥から祖母ちゃんがしかめっ面で現れた。

「少しぐらいこの子達と遊んであげてくれないかい？まさかとは思うけどもう行くからなんて言つて逃げないよね？」

俺もそう言ふと逃げずらい。どうしたものかと悩んでいると知つた声が聞えてきたので俺の視線はそちらの方へと向いた。

「相手にしてやつたらどうだ？どうせ次の任務用の情報が来るまで暇だろう？」

マハラジャ・ダースリンこと俺の容姿上の父親が笑いながら現れた。

面白おかしそうに現れたこの人、どうも俺の仕事中には既にこの地にいたらしい。

「アンタ……どこに隠れていたんだ!？」

「勘違いをするなよ。今来たんだ。近くまで隠れ家が来ている」

クッキーとクラツカはやつて来た親父相手に今度は興味が移動してしまつたらしく、俺はどう説明したらいい物かどうかと悩んでいると、親父は二人の前によつてきて、お菓子の入つた箱を二人分手渡す。

「怖い思いをしただらう？我慢して耐えた子にはこのお菓子をプレゼントだ」

「「ありがとう」」

嬉しそうにお菓子を受け取ると、二人はそのお菓子の箱を開けてしまふ。中には色とりどりの袋に入れられた様々なお菓子が詰められている。

クッキーやビスケット、キャンデーなど本当に様々だ。

「オジサン誰？」

「私は君達のお兄さん……そこにいる子のお父さんだ。義理のな」

義理でもこの人は俺の父親なのだ。こんな人でも。

なんてしていると俺の方を見るクツキーとクラツカは親父に尋ねる。

「お父さん？」

「お父さんてこと？」

「そう言う事だな……」

なんて言うのと二人は親父の周りではしやぎ回っていて、俺は親父と遊んでいる姿を見ていると、俺は不意に空に視線を向けてしまう。

今頃タービンを接触している頃のなのかな？

なんて黄昏しているとクラツカが俺の服の裾を強くつかんで引つ張る。

「一緒に遊ぼう！」

俺は「いいよ」と言いながら一緒に遊びに行った。

鉄華団は無事逃げ切られたことを確認するとブリッジにいる全員が息を吐き出し安心する。格納庫ではモビルスーツの修理に悪戦苦闘しており、特に情報の少ないバルバトスの苦戦具合は酷い物だった。すると、コックピットの中の座席の隙間に奇妙な一枚の紙きれを発見した。

中にはバルバトスに使える簡単な修理方法が書かれており、格納庫はその情報を信用する形で修理が始まった。

ブリッジではクーデリアの秘書であるフミタンが通信オペレーターを引き受けている姿を見届けると、同時にオルガたちは三日月が持ってきたある人物への接触地点へと急いでいた。

クーデリアは落ち込みながらも廊下に出ていく当てもなく歩いていると正面から三日月とアトラが姿を現した。

三日月がすれ違いざまに「何してんの？」と尋ねるので先ほどまで経緯を簡単に話した。

「今後の方針について団長さん達と話し合ってきました。あなたはどのようにして参加しなかったのですか？」

「いや別に。俺難しいこと苦手だし、聞いてもよく分かんないから」

なんて言っつてすれ違おうと、アトラと三日月が同じ鞆を担いでいる事に気が付いたクーデリアはふと「それは？」と尋ねると三日月は「弁当だよ」とだけ答えた。

「作業中の人達に届けているんです」

そんな言葉を聞いてクーデリアは咄嗟に「私も！」と答えた。

「私もお手伝いしてもいいでしょうか？」

三日月は「は？」と威圧したような声を出してしまふ。

しかし、めげずにクーデリアは付いてきて一緒に手伝いをし始める。倉庫やトレーニングルームなど順番に弁当を届けていくと、エレベーターで先ほどの内容を詳細に伝えると三日月はまるで興味が無いような声を発する。

「興味が無いのですか？ 大事な事ですよ」

「別に。オルガがちゃんとしてくれるだろ。大体俺あんたがなんで地球へ行くのかもよく分かって無いし」

「えっ!?! 私達地球へ行くの!?!」

今まで行き先を聞く暇が無かったアトラは驚きと共に三日月の方を見ると、三日月は「言つてなかったけ？」と答えた。

「でも、どうしよう。おしゃれな服とか持つてないのに……」

「そのまんまでいいんじゃないか？」

「だって地球に行くんでしょ？ 田舎者だつて思われなかなあ？」

二人が少々の外れな事を言い合っていると、クーデリアは自分が地球へ行く目的を話し出す。

「私が地球へ行くのは火星の人々の自由な暮らしを勝ち取る為です。厄祭戦によつて地球の国家群が四つの経済圏に統合されたのは知っていますよね？」

三日月は当然のように「知らない」と答える。

「あつそうですか……。それを受けて火星・木星などの圏外圏でもそれぞれの経済圏により分割統治が積極的に進められていきました。クリュセ自治区は経済圏の1つ、アーブラウの支配下に入ったのですが、開拓時代に結ばれた不利な惑星間経済協定の名目の下、長年の不当な摂取に晒されてきたのです。この状況を改善する為に私は地球のアーブラウ政府と交渉を続けてきました。そして、先日アーブラウ代表である蒔苗東護ノ介氏が対話のテーブルに着くことを初めて了承して下さったのです。私の目的は火星の経済的独立を勝ち取ることにあります。それが全ての火星の人々の幸せに繋がっているものとして信じています」

長いな橋を聞き終わるとアトラが拍手をしながら「すごい」と褒め称える。すると三日月は「ふくん」と口を開く。

「じゃああなたが俺達を幸せにしてくれるんだ？」

「……ええ。そのつもりです」

その後も格納庫で弁当を配っていると三日月と雪之丞の話の話を立ち聞きしてしまったクーデリアは三日月が文字の読み書きが出来ないことを知ってしまう。

「三日月。あなた字が読めないの？だってこんな複雑そうな機械を動かしているのに？」

「字読んで動かすわけじゃないからね。モビルワーカーと大体一緒だし。あとは……勘？ていうか、モビルスーツをマニュアルとかいうのでちゃんと動かしているのってビスケットぐらいじゃない？」

雪之丞が黙って同意してくれるので、クーデリアは次に気になったことを尋ねる。

「あの……学校とかには？」

「行つてないよ。行つたことある奴の方が少ないんじゃないかな」

と三日月は雪之丞に同意を求めると、雪之丞は周囲を見回す。

「まあ生きていくだけで精一杯だった奴もここには多いからなあ。ましな施設にいた奴はいくらか教わつたこともあるようだがな」

なんて話をしていると弁当を配り終えたアトラが近づいて来て「配り終えたよ」と声をかけてきた。

「アトラは字読めるんだっけ？」

「うん。おばさんに習つたから」

クーデリアは「もしよかつたら」と三日月に声をかける。

「読み書きの勉強をしませんか？私が教えますから。読み書きができればきつとこの先役に立ちます。本を読んだり手紙や文章を書くことで自分の世界を広げる事もできます」

そんな話を聞くと三日月は「そっか。色々な本とか読めるようになるんだよな」と眩く。

「ええ！そうですよ！」

やる気を出そうとしている三日月の話を聞いていた子供達も同じようにやる気を見せ始める。

「ええ。私でよければみんなでお勉強をしましょう」

三日月はバルバトスの方を見ると一瞬だがバルバトスの姿がアガレスへと変貌したように見えた。

アトラが心配して声をかけてくる。

「大丈夫？顔色悪いけど」

「大丈夫……」

あれ以降三日月はある不安に襲われるようになった。

アガレスの戦闘を間近で見ると何度も三日月は思う、「俺はあれに勝てるのだろうか」と想像し、何度も冷汗をかいては現実引き戻される。

三日月は何度も何度も同じようにシミュレーションしていたからだ。

アガレスと戦闘することを前提にシミュレーションすると細かい違いはあれど基本は同じ結果。

一方的に殺されて終わる。

惨殺や打撃による殺害方法など様々であるが三日月が勝てるという方法が見つからなかった。

いつだって最大限の整備を続けてきて、操縦にも慣れ親しみ、自分なんかよりよっぽど訓練や実践を積んできた人間に勝てる方がおかしいのだ。

三日月は焦り以上の感情を抱いていた。

劣等感。自分がオルガや仲間達を守れるだろうか？ 守り切れても自分は無事でいられるのか？ あんな奴がもつともつとこの世界には溢れているのでは？

そんな疑問は新しい焦りに変わろうとしていた。

心の奥にいつだって喉元まで伸びるような死神の鎌を感じ、次戦えばいつだってアガレスの存在を感じて戦う事だろう。

勉強をしてもやはり感じるアガレスの存在感。

三日月は見ていたのだから、アガレスと互角に戦う敵モビルスーツの存在を。その行く末を。

戦いに負ければ死ぬのだという事を改めて三日月は知ることになったが、なぜだろうっと感じていた。いままで死を感じたことは何度もあっても、あの男の死を遠くから見たとき、三日月は不思議と恐怖を感じていた。

まるであの男からの『死ぬとはこのことだぞ』と告げられているようだった。

死を直視したのはあれが初めてではない。しかし、どれだけ強い人間でも『死』は訪れるのだと、そしてそれは次は自分かもしれないという現実を告げた。

三日月から見れば目の前で戦っていた戦いは自分がしたことも無い『互角の戦い』だったからだろう。

どちらも死を感じながら戦い、喉元に届く死神の鎌をお互いが斬り合う。喉元をいつだって鎌が通り過ぎる感覚。

三日月はいつだって感じていたはずなのに、今更になってそれが怖く感じた。

いや、本当は分かっている。それは三日月にとって真の意味での『強者』だったのだろう。そして、強者同士の殺し合い。

どんな強い人間でも死ぬのだと。

三日月はイサリビ中に響き渡る警報を前に戦いを起きるのだと判断し素早くバルバトスの元へと向かう。

サブレが告げた試練とでもいうべき時が来た。

パイロットルームで着替えていると、ビスケットと昭弘もやってきてビスケットが早口で告げた。

「相手からのテイワズを紹介する条件。敵艦を制圧することだつて。方法は破壊しない

事が条件らしいけど……オルガと俺で作戦があるからとりあえず聞いてほしい」

そんな言葉と共に三日月と昭弘は着替えながらビスケットの話を聞き、同時に自分のやるべきことをきつちりと把握する。

全てを聞き終わると三日月、昭弘、ビスケットの順でモビルスーツのコックピットへと姿を消す。

操縦桿を握ろうとすると途端目の前にアガレスがいるような錯覚をを一瞬だけ見えてしまう。

しかし、戦いが始まったと脳を切り替え、素早く操縦桿を握りしめる。

三日月は気が付いていない。

彼がその恐れを抱いてしまったのは彼が成長した証なのだという事に、それに気が付くのはまだ先の話だった。

俺は親父や二人の妹達と共に農場の裏手に作った手作りの倉庫の中に鎮座しているアガレスへと近づいていた。

黒い装甲の上からハーフメタルのマントを背負って隠してあり、エイハブリアクターに繋がっているケーブルは外へと向かって伸びている。

「これがお兄ちゃんの機体？」

「そうだぞ。お兄ちゃんの機体だ。そうだ。良い事を教えよう。機体にこだわらず塗ら

れている色。実はな白に近づくと安くなっていき、黒に近づいていくと高くなるんだ」
そんな事を教えてどうするんだ？

しかし、二人は初めて教えてくれるお話の前にワクワクしながら聞いているらしく、俺は親父が余計な事を離すのではないかとハラハラする時間を過ごしていた。

俺はふと空を眺める。

今頃戦いが始まって来る頃かな？

「そうだ。今日は焼肉にするか？」

「焼肉!? やった！」

兄さんが聞いたら涙を流しそうな話ですね。

なんて思いながらも久しぶりに妹達と食事ができるワクワク感が生まれていた。

まあ、三日月・オーガスなら何とかするだろう。

成長途中のあの少年ならいざとなれば何とか乗り越えるだろう。

そう思うと俺は親父が進める焼肉の準備を手伝う事にした。

いさなとり

狭いコックピットの中で足の爪にネイルを塗るツインテールの女性『ラフタ』、足のネイルの完成度に満足しながら『イサリビ』の画像を見ながら楽しみにしていた。

「にしても早く食べたいなくあれ……茹でたエビみたいですつごく美味しそう」

時を同じくし名瀬はハンマーヘッドと呼ばれる戦艦のブリッジの艦長席に座りながら相手の出方を見ていた。

イサリビは真後ろに付けているハンマーヘッドへと回頭し速度を変えずに一定の距離を保っている。

アミダと呼ばれている褐色肌の姉御肌の女性がイサリビの行動を画面越しに確認している間にアジーと呼ばれる女性が出撃していった。

「教科書通り速度は殺さず艦首だけをうちに向けてきたか。まずは合格点だよ。アミダ・アルカ百鍊出るよ！」

百鍊と呼ばれるティワズ性のモビルスーツはギャラルホルン製のグレイズとは全く違う姿形をしており、アジー機は青、アミダ機は赤に塗り分けられている。

対して三日月のバルバトスはリアクターが調整不足なうえ、各モーターにも変な負荷

がかかっており、正直全開で戦える状況では無かった。

先行した昭弘と合流した三日月と違い、ビスケットは引き続きカタパルトデッキで待機状態にあった。

長距離砲を装備したバルバトスは照準を敵モビルスーツへと向け、対峙の時を今か今かと待ちわびていた。

「躰の時間だよ。坊や達！」

ビスケットは不安が無いといえれば嘘になる。しかし、文句を言ってもオルガの言葉や性格が変わるわけでも無いし、出来る事なら危険な事はしたくないし、でもそれが正しいのかと言えば頷くこともできない。

時にオルガの言葉が正しくなる時だつてある。

故にビスケットはどうしようもなく不安だった。

オルガが生き急いでいるように見えたからだ。

文句を言いたいし、でも今はそれを言っている場合ではないという気持ちでカタパルトデッキで待機しているとユージンの焦りに似た声が聞えてきた。

「ちつとは回避出来ねえのか！」

そんな声にビスケットはユージンの声を上回る声を響かせる。

「下手に舵を切れば距離を詰められて対艦ナパーム弾の射程に捕まる！」

そんな声と同時に正面に近づくナパーム弾をビスケットのグレイズが落とす。ブリッジの正面にナパーム弾の爆発が見て取れ、艦長席で阿頼耶識を使った操縦方法を取っているユージンにもそれがはつきりと見えた。

「あれを続けてもらえばナノラミネートアーマーでも溶解するんだ。今は迎撃可能距離を維持して！」

ビスケットはスナイパーライフルの照準を敵艦の砲台へと向け引き金を引く。

同じときハンマーヘッドのブリッジでは様々な女性が役割に分かれており、一人が「敵艦進路維持」と告げると誰かが「意外と肝は据わってるんだ」と感心している。

「長引きそうなのか？ならラフタに出てきてもらったらどうだ？」

なんて声を聴くとラフタと呼ばれた先ほどのツインテールの女性は「まだ爪乾いてなかったのにい」と不満げにしている。

そんなときだったハンマーヘッドが大きく揺れ、同時に右砲台に損傷を受けたというアラートが響き渡る。

「なんだ!?どこからの攻撃だ!？」

名瀬の焦り声から一秒も掛からず一人の女性がイサリビのカタパルトデッキでスナイパーライフルを構えるグレイズが映される。

ほぼ全員が驚きと共に目を大きく開くほどの衝撃を受けていた。そんな中ラフタが

静かにやる気を出していた。

アミダは内心感心を覚えていた。

それは勿論目の前で戦う二機のモビルスーツ、バルバトスとグレイズのパイロットもそうだが、カタパルトデッキで移動し揺れる戦艦から小さな標的を撃ち抜いたもう一機のモビルスーツのパイロットにも言えたことだ。

「やるじゃないか。弾道と艦の揺れと相手艦の移動の予測を頭の中で計算しなきゃ長距離狙撃で砲台を狙えないからね。あれじゃラフタでも狙われるかもね」

手伝いに行きたいところだが、そう簡単にはいかない。

しかし、そんな中ラフタの乗る可変機構を取り入れたモビルスーツが艦へとまっすぐ向かっていた。

ビスケットのスナイパーライフルの攻撃をうまいこと回避しながら接近するラフタ、しかしその回避にも素早く適応して見せたビスケットは敵の動きについていた。

ラフタの機体が大きく揺れ止まりそうな機体の速度をあえて挙げる。

「やるじゃん。でも……………これならー！」

ラフタの機体は大きく旋回し、横合いから艦からはみ出ているビスケットのグレイズへと突撃をかます。

ビスケットの機体はラフタの機体に捕まったまま艦から離れていく。

ユージンのビスケットを呼ぶ声がビスケットの元へと届いた。

「ユージンは作戦通りに!!」

コクピット内のビスケットは体中にかかるGに耐えているが、このままでは意識が持っていかれそうになる。

それを見ていた三日月の脳裏にアガレスの陰が重なる。死神の鎌を持ち、自らの喉元に当ててくるような気配が三日月を突き動かす。

「昭弘……は任せる。ビスケットと交代してくる」

「ああ……任せろ!」

力強い声を聴くと三日月はどこか死神の鎌を意識しないで済んだ。

捕まっているビスケットのグレイズとラフタのモバイルスーツの間に砲弾を当て引き離すとビスケットだけを回収する。

「ビスケットは昭弘の援護に。あいつは俺がやる」

昭弘が二機の百鍊に囲まれながら奮闘しており、ビスケットは三日月に戦場を任せながら昭弘の援護に向かった。

クーデリアはノーマルスーツに着替えようと奮闘したが、うまく着替えられずにいた。

「いつもは……フミタンに手伝ってもらっていたから……」

なんて愚痴を漏らしながら着替えているとジャガイモを大量に抱えたアトラが現れクーデリアの名前を呼びながら覗き込む。

「えっ!?!ア……アトラさん……ってそれは?」

アトラはクーデリアの姿を見て少しだけ笑うと着替えを手伝う為ヘルメットにじやがいもを詰め込む。

クーデリアにノーマルスールの着替え方を教えているとようやくの想いで着る事が出来たクーデリア。そんなクーデリアにアトラは「じゃあ行きましようか」なんて言うのと自らの言葉に失言を感じてしまう。

「やっぱり私はブリッジに入ったらだめですよね」

するとクーデリアが呆然とアトラの方を見ながら自分がすべきことを見出す。

(落ち込んでいてもなんにもならない。鉄華団の戦いを見届ける。それが今の私にできる事)

「いえ一緒に行きましょ」

「えっ?え……ええっ!?!」

ラフタと三日月の戦い。

ラフタの機体に遠距離から当たった所でラフタの狙いは三日月へと変わっていた。

「くっ………生気」

しかし、ラフタの機体の速さに三日月の機体が付いていけない。

「くっそ！速い！」

「推進力が違うっての」

周囲を旋回されながら三日月のバルバトスは完全にラフタの的になっていた。

シノ達は敵艦に乗り込むための準備へと入っていた。

数機のモビルワーカーが最終調整に入っており、シノが覗き込むと中で最後の調整を終えたヤマギと言う名の中性的な少年を呼ぶ。

「ようヤマギ！準備はどうだ？」

「今終わったところだよ」

「そっか。いっつも悪いな」

差し出すとシノの笑顔を見ながらヤマギは不思議な感覚に襲われそのまま外へと出ていった。

シノが乗り込む中ミカのバルバトスは苦戦していた。

アトラとクーデリアがブリッジに上がると丁度三日月のバルバトスがアンカーをラフタの機体に付けている場面に遭遇した。

アンカーを振り外そうと加速するラフタだが、死んでも離すつもりが無い三日月は体にかかるGに耐えていた。

結果から見れば三日月はラフタをイサリビから引き離すことに成功した。

ユージンはハンマーヘッドへ向けてミサイルを射出し、ハンマーヘッドはそれを見事に迎撃するが、その瞬間に視界を塞ぐほどのスモッグが覆う。

「ただの目くらましか。それとも……」

「エイハブ・リアクターの反応増大!」

「これまさか近づいてきてるの!?!」

その言葉は正しく、名瀬の目が大きく開かれるとスモッグの奥からイサリビが近づいてきていた。

ギリギリの所でうまく艦を動かしながらすれ違い、同時に離れていく。

「あとは任せたぞてめえら!」

イサリビは素早くその場から離脱する。

「度胸は認めてやるがお前らはやっぱり未熟なガキなん……何が起こった!?!」

大きく揺れるハンマーヘッドで名瀬の声に反応した女性がカーゴブロックでの爆発を告げた。

同時に監視カメラが侵入者を映し出した。

「さっきのニアミス時に飛び移ったつてののか? 艦の速度を考えろよ。体がミンチになるだろ」と呟いたところでサブレがひそかに告げた言葉を思い出した。

(そうか……あいつらは阿頼耶識があるんだったな。たく………)

同時に引き離されていると気が付いたアミダとアジーだったが、昭弘とビスケットの手によって引き離されていた。

アジーはビスケットと戦いながら、アミダは昭弘と戦っていた。

昭弘はアミダに食らい付こうとするが、アミダは昭弘の攻撃を素早くさばいて見せる。それに負けじと昭弘はグレイズでアミダの百鍊の頭部を思いつき殴りつける。

アミダは右足でグレイズの頭部へと攻撃を与える。

「思いつ切りが良くなったね!」

昭弘は肩に装備した砲台を至近距離で攻撃しようとするが、アミダはそれを素早く回避して砲台を斬りつける。

しかし、ビスケットとアジー戦は予想外の局面を見ていた。

ビスケットはアジーの百鍊に向けてショットアックスを投げつける。

「武器を投げて………一体何のつもりで!」

ショットアックスを右手で弾くと塞がっていた視界が大きく広がり、同時に視界いっぱいにはビスケットのグレイズが迫っていた。

ビスケットがサブレからもらったマニュアルに書かれていた戦術の1つ。

あえて武器を敵の視界目掛けて投げることで視界を塞ぎつつ接近を気づかせにくく

させ、同時に接近すると同時に武器も回収し至近距離で攻撃する。

ビスケットは敵のコックピット目掛けて武器を振り下ろす。しかし、アジーはそれを左腕で受け何とか回避し、同時に距離を開けようとする。

「逃がさない！」

ビスケットはアジーの百鍊にタツクルを決め今度は右腕をショートアックスで切り落とす。

アミダは昭弘のグレイズを殴りつけていた。

「脳みそまで筋肉で出来ていそうな戦い方じゃないか。いいねそういうのはさー！」

アミダは剣で昭弘のコックピットへと攻撃しようとするがそれを制止する声によってコックピット目前で動きを止めた。

「待つてください！この機体のパイロットがどうなってもいいんですか!？」

ビスケットはアジーの後ろに隠れながらコックピットにショートアックスを構える。

「すいません。姐さん」

二人が睨み合う中、三日月とラフタの戦いも終局へと向かおうとしていた。

振り回されながらも絶対に離さない三日月。

「そつちは慣性制御が追いついていないんでしょ？早く放さないと苦しいだけだよ」

「放したらあんたはイサリビを沈めにいくんだろ？」

「戦いつてそういう事でしょ？」

「オルガの邪魔はさせない」

「邪魔をしているのはあんたの方だろ！」

バルバトスを小惑星にぶつけたラフタは勝利を確信してその場から離脱しようとする。

「バイバイ少年。楽しかったよ」

離れていこうと速度を上げるとラフタは強く引つ張られる力の存在に気が付いた。三日月の「捕まえた」という声と同時に砂煙の中からバルバトスがメイスを小惑星に打ち付け、ワイヤーを片手で引つ張るバルバトス。

思いつきり引つ張られたラフタの機体は強く小惑星に叩きつけられる。

「そろそろ消えろ」

とどめを刺そうとする三日月に対しラフタも「なめんなく！」と叫びながら隠していた腕が姿を現す。

突き刺そうとするメイスを隠していた腕で軌道を逸らし、バルバトスとラフタの機体の頭部の距離が数メートルまで接近する。

「往生際が悪いね」

「あんたこそしつこい男は嫌われちゃうよ」

「んじやそろそろ終わりにしようか……」

大きく目を開き、三日月は殺意に満ち溢れメイスを抜こうとするが三日月にオルガの「もういい」という声が聞えてきた。

「手間かけさせたなアミダ。戻ってきてくれ。こいつらの勝ちだ」

「ビスケットも戻ってきてくれ」

ビスケットはコックピットの中で大きく息を吐き出し、昭弘は汗まみれになりながらも小さく「終わったのか？」と呟く。

しかし、ラフタは不満げでヘルメットを取り外す。

「最高に盛り上がっていたのに。ああっもう！一体何なの!？」

三日月も息を大きく吐き出しながら疲れを感じさせていた。

クッキーとクラツカの二人を寝かしつけたマハラジャは二階の廊下の窓から見えるアガレスの方へと視線を向けた。

コックピットではサブレがイーガの戦闘データとシミュレーションを行っており、一対一でも勝てるようにと念入りな特訓をしている。

「サブレを育ててくれたんだってね？」

桜がマハラジャの前へと立って見上げる形になるが、マハラジャはあえてそちらへは視線を向けない。

「俺は子供は好きだしな。あの子達の学費は俺が出そう。サブレの妹なら俺の子も同然だ。あれぐらい素直な子が一番育てがいがある。サブレも俺の娘もどうも反抗期が速くてな」

「あの子はいつもうああなのか？」

あの子がサブレを指すのだという事ぐらいはお互いハッキリわかっていた。

「成長速度で言えばあいつは他に追隨を許さないほどだ。それに、自分が未熟なあまりにあいつは後輩を失ったことを忘れていない。それが今のあいつの行動原理になっている」

コックピットからサブレが出てくると汗をタオルで拭き飲み物で口内を潤しながら息を整える。

再びコックピットの中へと入っていき再びシミュレーションを開始する。

「死神。あいつと戦った誰かが言った言葉。黒い巨体に見た者が死ぬとさえ噂されるほどの強さ。裏社会であいつを知らない者はいない。逆を言うとギャラルホルンではあいつを知らないものの方が多い。あいつとアガレスはギャラルホルンにとって『銀の弾丸』なのさ」

一撃で殺すことが出来るほどの危険な存在。その存在を隠しながらもう少しすればギャラルホルン相手に戦ってもらおうとしていた。

「もう少しすればまた出ていく。あの子達に危険が迫らないようにこの辺に警護用の組織を置いておく、当分は農作業にでも使ってやってくれ」

すっかり夜も深まっていく。

アガレスを月明りが明るく照らし、サブレが再び姿を現していた。

死神の片割れ

三日月達が決着へと向かう最中の出来事、ハンマーヘッドに潜入に成功したオルガ達一同はダンテと呼ばれる赤みがかった髪をした少年兵に電子戦を任せ自らはブリッジへと攻撃を開始していた。

可燃性のガスを周囲にまき散らしながらも確実に目的地へと突き進もうとしていた。

ブリッジではダンテの電子戦の影響を受け始めていた。

「可燃性のガスが艦内に広がってます！」

「隔壁でガスごとガキどもを閉じ込められねえのか？」

名瀬の問いに周囲のメンバーは「閉じられません」と否定した。名瀬は「なんで？」と問うと彼女たちは「メインフレームに潜り込まれたみたい。こちらの操作をブロックされ続けてます。ああつモニターまで！」と悲鳴を上げる。

肝心のオルガたちは上から艦内が混乱の真ただ中にあると判断し、その隙に一気にブリッジへと向かおうとするが、シノは艦内が女性だらけである事に多少の違和感を抱えていた。

「しかし、さつきから女しか出てこねえぞ」

オルガの「知るかよ」という言葉とともにブリッジへと目指し動き始め、名瀬達もたもたしている間にオルガたちはブリッジまでたどり着いた。

「ほう……さすがは死神が推薦した奴らってわけだ」

「俺達がらただのガキじゃねえって事が分かってもらえましたかね？」

「良いだろうお前らの覚悟見せて貰った。死神との契約でもあるしなお前らとの交渉を始めようじゃねえか。アミダにつないでくれ。祭りは終わりだ」

それが戦いが終結に向かった流れだった。

名瀬は帰還したアミダを格納庫まで迎えに行き、アミダを手で呼ぶと彼女も名瀬へと近づいていく。

「ご苦労さん。どうだった？」

「楽しいもんじゃないさ、子供とやり合うなんてね。でも、中々見どころのある坊や達だったよ」

名瀬は「だな」とだけ答える最中、アジーがアミダと名瀬に近づいていく。

「すいません姐さん。足引っ張ってしまつて」

「油断したねアジー」

言い返せないアジーを決して咎めないアミダ。

同じ時間イサリビの中でもパイロットたちが帰還を果たしていた。

ヤマギはグレイズから昭弘を、タカキはビスケットの相手をしていると雪之丞は申し訳なきような表情で三日月を出迎えた。

「悪かったな。調整の出来てねえ半端な機体で無理させちまってよ」

「おやつさんのせいじゃないよ。で、結局どうなったの？」

「今からオルガがお嬢さんを連れてナシつけに行くつてよ。多分ビスケットも行くんじゃないかねえか？」

三日月は「そっか」とだけしか言えなかつた。

名瀬との交渉は特別な部屋で行われ、ソファにはオルガとクーデリアが、その後ろではユージンとビスケットが立っていた。

「そっちの坊やが良いのかい？あんたはモビルスーツパイロットだったんだろ？」

「え？あ、はい。僕は大丈夫です」

アミダはビスケットへとそう語りかけると、オルガのカップに紅茶を濯ぐ女性を見ながらいい加減気になっていたことを尋ねる。

「この船女性しか見かけないんですけど……」

名瀬は「そりやそうだ」とだけ言い当然だと言わんばかりにはつきりと告げる。

「ここは俺のハーレムだからな。この船の乗員は全員俺の女つてわけだ」

ビスケットは「全員……」と引き、クーデリアも「奥さんなのですか？」なんて言い

ながら慄く。

「まあそう言う事だな。後いるのは……子供が五人くらいか」

クーデリアは頬を赤らめながら「5!？」と数を驚き、オルガは「その子供つてのは……」と分かっているながら尋ねる。

「全部俺の子に決まってんだろ。まっどれも腹違いだがな」

アミダは「いい加減くだらないこと言つてないで……仕事だろ？」と忠告すると名瀬は「おっとそうだな」と切り替える。

「お前たちの事は『死神』から聞いてる。クーデリア・藍那・バーンスタインを地球へのご案内役だったな。お前たち個人はどうするんだ？」

名瀬の鋭い問いにオルガは鋭い目つきを止めないようにはつきりと告げた。

「俺達鉄華団をテイワズの傘下に入れてもらえないでしょうか？」

「まあ、その辺も『死神』から一通り頼まれてるしな。うちもできるなら『フォートレス』とはきつちりしていたいな。いいだろう。オヤジに話を通してやる」

その言葉を人取り聞いたクーデリアが「お父様と交渉……ですか？」と呟く。すると名瀬は「違うつて」と否定するとクーデリアの後ろでビスケットが補足する。

「テイワズのボス、マクマード・バリストーンさんの事ですね。そうだ……あの……死神つてなんですか？それと……フォートレス……も」

名瀬は「どこまで話したのか……」なんて呟きながら『ギャラルホルン』について鉄華団に尋ねる。すると、ユージンが「軍隊だろ？よく分かってねえけど」なんて呟くのを聞いたクーデリアが自分が知る限りの知識を口にする。

「三百年前厄祭戦を終わらせたその後も強大な軍事を背景に戦争が起きないよう四つの経済圏を外部から監視する組織、それがギャラルホルンです」

「そいつを各経済圏が重荷に感じ始めている。最近のギャラルホルンは自分達の利益追求に走っているからなあ。で、そんな時にこのお嬢さんが現れた。『ノアキスの七月会議』のクーデリア。火星独立をまとめた時代のヒロイン。一地方の独立運動家がギャラルホルンを飛び越えて独自に地球経済圏のトップと会談する。もし、それが実現したら一大事だ。それこそギャラルホルンの支配体制を揺るがしかねえほどのな。そして、それを軍事的な意味合いで可能な組織は今や一つしかない。それが『フォートレス』だ」

ユージンは「よく分かんねえけど……すげえ人と組織だったのは分かった」とよく理解していない表情をしている。

「それで死神がそのエージェントの固有名だな。エージェントクラスだと単機でその辺の組織なら壊滅できるほどの実力を持ち、フォートレスの中でも重要な仕事を任せられ、直接ボスへと接触できる数少ない人物でもある。『死神』とくれば有名なのは『金星

事変』だな」

名瀬の告げる事件の名前にあまり聞きなじみのない鉄華団のメンバーに対し、名瀬は真剣な面持ちで話しかけた。

「二年前に金星のコロニーで起きた違法組織の壊滅事件だ。それをたつた単機のモビルスーツが起こし、ギャラルホルンに知られることなく撤退したのは有名な事件だ」

金星で起きたある事件。

それは違法組織が金星のコロニーを使つて資金のやりくりをしているという話を聞いたフォートレスがその撲滅を含めた一大事件。

それを鉄華団のメンバーが知らなくても仕方がない。

ギャラルホルンへの情報はあえて封鎖され、一般にも公表されることはあまりなかった。実際のニュースではガスによる爆発事故として発表され、事実を歪められた。

しかし真実はたつた一機のモビルスーツが二十機のモビルスーツを壊滅させ、その反動でコロニーが崩壊してしまったのは裏社会ではもはや有名な事件でもあった。

ある意味裏社会で『フォートレス』を恐れるには十分な事件で、この裏でいくつかの組織をフォートレスは揉みつぶした。

『フォートレスを怒らせるな。怒らせると潰されるぞ』

そんな合言葉が裏社会でよく耳にするようになった事件。

裏社会でもテイワズのような商売を縄張りしている者達は噂ばかりだと信じる者は少ないが、マクマードは「あいつらならやりかねない」とし、テイワズ傘下の組織にフオートレスとの直接対決をさせないようにしていた。

オルガと三日月が話をしている時、三日月は「役に立てなかった」と自らを厳しくしている姿をオルガは少しだけ恐怖を感じずにはいられない。

オルガはここ最近三日月が『何か』に対し嫉妬に近い感情を抱いていると感じており、まともに話せていない。

『誰か』を意識して戦い、毎日を『誰か』への対策へと走っている。

そんな話をしていた直後オルガは何故に金策に走る為に話し合いに向かっていた。

話が無事終わり、オルガ達鉄華団は金のめどを立てたとき、名瀬に『ある人物』からの預かりモノを託された。

アトラとクーデリアが名瀬の子供達と逢っている頃、ビスケットは一人隠れるようにサブレからのメッセージを聞いていた。

「これを聞いているつてことは名瀬・タービンとの交渉を無事終えたという事だと判断する。これはあくまでも無事終わり、名瀬・タービンを納得させたときだけ渡すようにと伝えてある」

「()う()う()とは……ちゃんと話してほしかったな」

「俺が出来ることはこれで全部だ。最もこれは俺の仕事でもある。忠告もしておくが俺達の仕事の邪魔をするならいくら兄さん達でも容赦をしない。それだけは分かっている。くれ。その上で先に告げておく。ここから先は死地だ。いつ死ぬのかも分からない場所だ。引き返すならここで最後だと思ってくれ。怖いのなら引き返してくれ」

サブレからの沈黙が続く。

そうしているとこれが録画映像ではないことにビスケットは気が付いてしまった。

そう、これは今実際に通信している。どうやって通信しているのかは分からなかったが、確実にこれは通信をしている。

「気が付いたか……まあ、合格ラインだな。これはアリアドネをウチが使いながら連絡を飛ばしている。この機械なら俺達と好きなかだけ連絡が取れるわけだ」

「…………アリアドネを使用しているってどういう意味？」

「そのままだ。アリアドネを管理しているのは実質ギャラルホルンじゃない、俺達だ。俺達が時間を掛けながら確実にアリアドネを支配していった。三百年かけてな。だから、ギャラルホルンは俺達に自由に覗かれているのと同じなんだ。だから兄さん達がどこにいるのかもおよそ検討を付けている」

「金星事変もサブレが起こしていたの？」

「俺が起こしたなんて言われ方をすると語弊があるが俺が起こしたわけじゃない。あれ

は突入部隊が失敗してしまい、俺が尻拭いをさせられた結果だ。まあ、コロニーを壊滅させたのは悪かったと思っっているが、こつちだつて死ぬ思いだつたんだからイーブンだろ」

サブレは外面の奥でコーヒーを入れながらも一度席に着く。すると、サブレがいる場所が祖母の家だという事に気が付き、同時に外からは『ハロー！』と言う機械の音とクツキーとクラツカカの遊ぶ声が聞えてきた。

「俺の事よりそちの心配をしたらどうなんだ？ 多分兄さん達が思っているほど簡単な状況じゃないはずだ。気を抜けばやられるのは変わらないんだぞ」

「心配だよ……………オルガはオルガで焦っているみたいに生き急ぐし、三日月は三日月で……………」

サブレはビスケットの話を聞きながら膝をつき黙って話を聞いている。

「サブレだつてそうだ。皆……………危険な事をするし、もう少し安全な方法だつてあるはずだし……………それだけでいいと思うのに」

「それで何かが変わるなら俺だつてそうするさ。でも、自分で動かなきゃ世界は変わらない。それは分かっているはずだろ？ 俺達は両親にすぎるだけで何かが変わったのか？」

「変わつてほしいと思うよ……………でも怖いんだよ!!サブレにはわかんないよ！三日月

だって！オルガだって！俺は……皆に死んでほしくない」

サブレはビスケットの怒鳴り声を黙って涼しげに聞きながら心の中で「ストレスたまっているな」と他人事のように考えていた。

ビスケットはここ最近命懸けの戦いが続き、そのど真ん中で戦っているためかストレスが非常に溜まっている。

「死んでほしくないから戦うんじゃないのか？」

「え？」

「そうだろ？死んでほしくないから戦うんだ。時にそれがストイックに見えるかもしれないし、守りたいから生き急いでいるように見えるかもしれないけれど、それはそれだけ仲間達の事を大事にしているって証拠だろ。兄さんの事だって大事に思っている証拠だ。それを疑ったりするのはさすがにどうかと思うけどな。それに……本当に間違っている事なら兄さんが止めればいいだけの話だ」

「俺の……話なんて……」

「それこそ怒鳴って止めればいいだけだろ？俺に怒鳴れて他にできない理屈がよく分からないし。それに……本当に大切なら怒鳴って止めるだろ？本当に真剣に『仲間』の事を考えているのなら……な」

仲間という言葉にビスケット自身はオルガや三日月達を思い出す。

オルガが頑張るのは仲間達がいるからだとわかってはいる。

『頼ってほしい』

そんな言葉を吐けないのは自分だって同じじゃないか。

「俺達の組織じゃ兄さん達のような組織がある人達になぞらえてこう呼ぶんだ……『鉄血のオルフェンズ』とね。血が鉄のように固まって絆になる。そうやって家族のような絆が出来ていく」

「……………? 『鉄血のオルフェンズ』?」

「俺達一族の祖先でもあるらしいよ。かつてのガンダムパイロットの集団の呼称でもあるらしく、裏切りによって崩壊した集団らしいんだよね。俺達はその生き残りってわけだ。オルフェンズはそのまま『孤児たち』だな。そういう意味じゃ兄さん達に相応しい名前だと思うけれど?」

「そんなカツコイイものじゃないよ」

「かつこいいかどうかなんて決められるものじゃないだろ? でも、そういう人たちは泥臭く生き、みつともなく生き残り、死んでいった仲間達の分まで信じたんだろ? それでも、彼らは『オルフェンズ』を捨てられなかったんだし。だからこそ、家族を知る人間が必要だと俺は思うけれど。兄さんのように……ちゃんとブレーキを踏むことが出来る人間がな」

ビスケットは涙を流しながらサブレに「ありがとう」と呟いた。

「俺達は死神だ。兄さんだって死神の片割れなんだからな。俺は……それだけ伝えたかった。たとえこの先戦っても俺はそれだけは忘れない。俺達は双子で……」

「俺達は死神なんだよね」

おくりもの

「そう言えばマクマード・バリストンって圏外圏で一番恐ろしい男って言われているんだっけ？」

俺は机の上に広げているガラクタの類をかき集め、溶かし、繋ぎ、組み立てる作業中にふと尋ねる。俺の後ろで俺がクリユセのゴミ捨て場やがらくたシヨツプから購入してきたがらくたを、興味なさそうにいじっている親父こと『マハラジャ・ダースリン』に尋ねる。

親父は「ああそう言われているな」などと心底興味なさそうな声を発しているので、本当に興味が無いのだろう。

この人はこういう人である。

「テイワズってそんなに大きな組織だったんだ」

「まあ所詮はマファイアだ。マファイア故にこうして恐れられているってだけだ。実際はそれなりに気前のいい男だがな」

この人がこういうぐらいいだからそうなのだろう。

しかし、親父の興味は俺が作っているモノにあるようで覗き込んでくる。

ちなみに俺達が今いるのはお祖母ちゃん家のリビングスペースである。

「何を作っているんだ？」

「『ハロ』だけど？もうすぐ休暇も終わりだし、その前にクッキーとクラツカにプレゼントしようと思ってるね。あの二人意外とハロを気に入ったらしくて」

「ああ、お前が友達欲しさに作ったAI搭載ロボットか」

「虚偽の噂話が混じっているな。歳か？」

「？ああ、そう言うことにしておいてやろう。全く子供だな」

子供だよ。子供でいる間は子供でいるさ。

大人のふりをする子供にはなりたくないな。

「あ、パーツが足りない。仕方ないな」

なんて言いながら俺は立ち上がりそのまま玄関から出ていくと、モバイルスーツやモバイルアーマーが農作業をしているという不思議な光景を前になれ親しみを覚え、その奥では二人の妹達がハロを追いかけまわしながら遊んでいる。

あと少ししか居てやれない。

フォートレスの特別メンバーが防衛用の設備をあと少しで完成させようとしており、後ろでは実際にその為の大掛かりな設備が仮完成をみせようとしている。

あれが完成したら俺達はこの辺の防衛の仕事は終わり、ブルワーズを追いかけなければ

ばならない。アルベルトが言うにはブルワーズの足取りをようやく掴めそうだというので時間的にもちようどいいだろう。

俺はバイクにまたがりそのままクリユセへと移動して行く。

家を離れる際一瞬だがアガレスの横顔が見えた気がした。

オルガ達がマクマードと面会し、兄妹の契りを交わすための話し合いをしている最中、昭弘はラフタ相手にしつこく訓練を申し込んでおり、アジーとアトラはキッチンで食事の準備をしている。

そんな最中の出来事、子供の一人が「アトラ、オルガ達にどうしてついていかなかったの？」なんてことを訪ねてきた。

脇で摘まみ食いしようとしている子供が「女だからだろ。女は弱えから連れてつたら邪魔になるしな……」と言うとアジーは後ろから頭に拳でしめる。

「でもクーデリアは女だけど一緒に行ったよ」

「ご飯を食べ終えた机を拭きながらアミダが絡んでくる。

「男の度量つてのはね愛の量で決まるんだよ。男の中にやね持っている愛がやたら多い奴がいる。その愛はたとえ多くの女に配分されても普通の男の愛なんかよりずっとでかくて心も体も芯の芯から満足できるのさ。あんたはさ、ザラザラしたもろこしのパンを独占するのとびっスキりの極上の肉をみんなで味わうのどっちがいい？」

アトラは『パン?』と疑問声を発し、アミダはそんなアトラに対し驚きの声を上げる。「あつ……ごめんさい。肉つて本物のお肉ですよね……食べたこと無いですしなかかわいそうで……それに女将さんの焼くパンはとても美味しいので」

そんなアトラの答えにアミダは優しい表情を浮かべる。

「あんたいい奥さんになれるよ」

「本当ですか!？」

嬉しそうにはしゃぐアトラを見ながら小さく――、

「男選びさえ間違えなきゃね」と付け加えた。

ギヤラルホルン所属のマクギリス・ファリドとガエリオ・ボードウインはアイン・ダルトンを連れて地球への航路を進んでいた。

マクギリスが裏の情報に詳しい男に探らせているという情報を同じく入手していたのがフォートレスだった。

アインもまたクランク二尉を殺された復讐へと走ろうとし、静かに闘志を燃やしていた。

オルガたちはクーデリアと三日月だけをマクマードの元へと残し、外でマクマードが用意させたお菓子を食べていた。

「なんだろうね?クーデリアさんだけに話つて」

ビスケットの問いに名瀬が「恐ろしい人」と言う比喩表現を使いながら口を開く。
「道理の通らんことはしない。一応護衛役もつけたんだろ？」

ビスケットの隣で付いてきていたユージンがドンドン口の中にお菓子を放り込んでいく。

名瀬が「お前から引き取った諸々」と言いながら電卓をオルガ達三人に見せる。

「この金額でよけりや請求をよこしてくれ」

なんて言いながら電卓に書かれている金額に三人は目を引ん？く思いを抱く。

「玉石混交だったがな。中でもグレイズのリアクターは高く売れた。今エイハブ・リアクターを新規で製造できるのはギャラルホルンだけだからな」

「何から何までその……恩に着ます。えつとあ……兄貴」

「まだその呼び名は早いぜ」

照れながらも「兄貴」と呼ぶオルガに名瀬は提案する。

「歳星は金さえありや楽しめる場所だ。少しは息抜きさせてやれ」

「そういうのいつもかみさん達にやってるんですか？」

家族を知らないオルガの素朴な質問をしながら、「いやえつと……」と言いよどむ。

「家族サービスってやつなのかと……」

「女つてのは適度にガスを抜いてやらないと爆発すつからなあ。家長としては当然の務

めってやつだ」

オルガが小さな声で「家長として……」と呟きながら立ち上がりユージンとビスケットに提案する。

「よし……いつの売り上げで今夜はパァ〜つといくか!」

ユージンは「マジでか!」と驚きながらも喜びを全身で表現し、ビスケットは「待つてよオルガ」と制止するが「こうなったら無理だな」とよく理解しているビスケットは素早く諦めた。

クーデリアはドア前に三日月を護衛役としておきながら煙草の煙を部屋中にまき散らしているマクマードと対話していた。

「あんたが火星独立運動家のお嬢さんか。時の人と会えて光栄だ。火星経済の再生策として地球側が取りまとめていた火星のハーフメタル資源の規制解除を要求。火星での独自流通を実現するため地球くんだりまで出向く。そいつで間違いないな?うちで仕入れた情報じゃ現アークブラウ首長である蒔苗は本気でそいつを通そうとしているらしい」

クーデリア嬉しそうな表情をしながら「本当ですか!」と尋ねるが、マクマードは多少深刻そうな表情を浮かべる。

「下手をすりや戦争になるな。新たな利益を得ようと様々な組織が暗躍する。それこそ

どんなあくどい手を使つても。しかもこいつは長引く。利権を勝ち取つてもその後の各組織間で亀裂が残るからなあ」

「どうして……私はただ……」

クーデリア深刻そうな表情にマクマードが提案を受ける。

「テイワズを指名しちやくれないか。お嬢さんがじきじきに指名した業者つて大義名分を得られれば当座の問題に關しちやくつちでなんとかしてやれる。まつ避けようもねえ事もあるかもしれねえが」

「それは……もう少し考える時間を頂けますでしょうか……」

マクマードを見る視線を三日月へと向けるクーデリア、三日月はクーデリアに「これはあんたが決める事だよ」と突きつける。

「どつちにしろこれからも人は死ぬんだ。今までの事で分かつてるだろ。これは多分俺が最初に人を殺した時と同じ、クーデリアのこれからの全部を決めるような決断だ。だからこれはクーデリアが自分で決めなくちやいけないんだ」

三日月の言葉にマクマードは「なるほど」と頷く。

「確かにそいつは一大事だ。いいだろう。しかし、俺はもう老いぼれだ」

「ありがとうございませす。では今日はこれで」

スカートの裾を持ち上げて去ろうとするクーデリア、三日月立ち去ろうと振り返つた

ところでマクマードは「若い衆。名前は？」と尋ねる。

「三日月・オーガス」

「モビルスーツ乗りの奴か。よしお前のモビルスーツうちで見てやろう」
マクマードの提案に三日月は「はあ？」と返した。

「うちの職人は腕がいいぞ。じじいの気まぐれだ。取り上げやしねえよ」

酒を飲み過ぎたオルガを抱えて帰って来た。三日月はビスケツトにマクマードとクーデリアアの会話を全部打ち明けた。

「クーデリアアさんは実質ティワズ預かりになるってことか」

「反対した方がよかったかな？」

「どうして？」

「こんな大事な事オルガに聞かずに決めて……」

「組織間の戦争なんてことになったら、うちじゃ手に負えないってことはオルガにだって分かってはいるはずだよ。いや、本当は今までだつてうまくいったからいいけど、本当は俺達の手に負えないことばかりだった」

「でも、オルガの意地のお陰で俺達も夢が見れてる」

「だね。まあオルガにはもう少し俺達を頼ってほしんだけどね」

翌日、盃を交わすためにそれぞれが着替えている最中、シノだけは別行動をしていた。

外で空気を吸っている昭弘の側に近づいていくビスケットは「昭弘はこういうの性に合わないから出ないって言うかと思つた」と言う。

「家族の晴れ舞台だからな……」

同じときクーデリアはアトラに手伝ってもらいながらドレスを着ていたが、アトラはクーデリアの顔色が悪い事を指摘する。

「三日月はずつとこんな気持ちをもつていたのですね……いえ、ずつとお前に同じような指摘を受けました。あの少年はこうなると予想していたのでしようか？」

かつてサブレが彼女に告げた言葉。それを気が付いた時、クーデリアは彼の言葉を思い出した。

『優しさと甘さは別だ。甘さが自分に帰ってくる場合がある。時に厳しくすることも大切なことだよ。それにこれからあんたがやろうとしていることは優しさだけじゃどうしようもないだろ？クーデリア・藍那・バーンスタイン』

『あんたを狙っている人間だっているんだし、接する人間を疑うぐらいがちょうどいいと思うよ』

サブレは確かにそう告げた。

しかし、今更立ち止まることは出来ないクーデリアはオルガと共にマクマードへと話を付けに行く。

「じゃあ、護衛はこつちで受けるがハーフメタルに関しては仕事が終えるまで考えさせてほしいっつと？」

「はい。ある少年から言われました。「優しさだけじゃどうしようもないもない」「疑うぐらいがちようどいい」と。もう少し私は見てみたいのです。この世界を、その上でキチンと私の手で結論を出したいのです。この手は既に真つ赤に染まっています。これは鉄華団の血です。今私が立ち止まることは彼らに対する裏切りです。私は彼らを歩きながら自分でこの世界を見てみたいのです」

「それでいいのか？鉄華団は？」

「護衛の仕事自体はテイワズの下で引き続き任せてもらえるんですよね？」

「ああ、だがお前の頭としてのメンツは潰れちまうんじやねえのか？」

「鉄華団は俺が……いえ、俺らが皆で作る家です。俺のメンツなんて関係ないです。これから何があっても俺らが変わる事はない。俺ら一人一人が鉄華団のことを考えていく、守っていく」

クーデリアとオルガの決意をマクマードは受け入れながら彼らを見送った。

サブレはごみ処理場の中を漁りながら必要なパーツを探し出していた。

するとゴミの中に羽の折れた飛行機のおもちゃを見つけ出しついで手を伸ばしてしまふ。

「懐かしいな」

しかし、右翼の部分が折れており、サブレは手持ちの工具でうまくつなげてしまった所で、「これ……いらぬいな」なんて口に出す。

既に家に大量に飛行機のガラクタが置いてあるのに、これ以上置いてどうするのだと言いかせる。

部屋に持ち帰るとジュリエッタが返ってきた際に文句を言われかねないので捨てて帰るしかないと置こうとしたときだった。足元からの視線に気が付くと、五、六歳ぐらいの男の子が物欲しそうな視線を向けていた。

捨てても持つていくだけだろうと思ひサブレはおもちやの飛行機をその少年にくれたやる事にした。

「ありがとう」

少年は感謝の言葉を口にしてそのまま足早に去っていく、

初めてプレゼントをもらった時の事を思い出し、サブレはその場で立ち尽くしてしまった。

初めてマハラジャ邸宅にやって来た時、サブレはマハラジャに「プレゼントは何がい？」と言いなからショッピングモールに連れまわされたことを覚えている。

しかし、親からプレゼントをもらった事の無いサブレにはどれを選ばいいのか分から

ず、結果から言えば何も選べなかった。

そんな中目に入ったのが飛行機のラジコンだった。

サブレにはラジコンを操作したことが無い。

もつと言えばサブレは壊れたラジコンの飛行機を持つてはいたため、ラジコン自体は触れたことがある。

しかし、ラジコンを操作したことが無いサブレは珍しい物を見る目をしていた。

次の日自分の部屋にプレゼント用に包装された箱を見付けた。

丁寧に箱を開けると中には飛行機のラジコンが入っていた。

始めてもらったプレゼント。

今でも大切に棚の上に飾っており、今でも大切な思い出の品である。

それからと言うもののサブレは色々な物を作ってきた。

初めてプレゼントをもらった時の思い出は決して色あせない。

二人の妹にも同じ思いをしてほしいという気持ちからサブレはプレゼントを贈ろうとしていた。

そして、出発当日。

クッキーとクラツカは俺達が出ていくと聞き悲しそうな表情をして見送っていた。

「そんな悲しそうな表情をするな。また帰ってくるからな」

二人は黙って頷く、俺の足元ではハロがウロウロしている。

ここしかないと言うタイミングで俺は小さな包装されたプレゼント箱を二人にプレゼントした。

「開けてみ」

二人は急いで包装を破り捨て、中から取り出した物を見ると興奮したように声を上げた。

「ハロだ！」

「二人のハロ。クッキーはピンクでクラツカはオレンジだ。大事に育てるんだぞ」

「うん！」

二人は楽しそうにはしゃぎ、その足元では新しいハロが転がっている。

俺のハロもまるで妹を見るような感じで珍しく黙っている。

気持ちを引き締め振り返る。

ブルワーズ編

明日からの手紙

三日月をテイワズ本拠地歳星に残し、鉄華団は進路を地球へと向けて動き出していた。

アトラはクーデリアと三日月の後ろ姿を想像しながらため息を、ビスケット達は火星からのメールを確認したりしている。

ビスケットは鉄華団所属であるタカキという金髪の少年と共にお互いに妹のメールを見ていると、クッキーとクラツカの背後で小さなハロが飛び回っているのが分かった。

二人が言うにはこのハロは『サブレ』からのプレゼントらしく、本人は既にここを経つたらしい。

やる気を見せるタカキとビスケット、家族のために頑張ろうという声を一人聞いていた昭弘は一人家族の事を思い出していた。

クーデリアの下にも家族からメールが届くが、「帰ってこい」というメールにクーデリアは嬉しくない表情を浮かべ、巻き込んだとフミタンに謝る。

しかし、クーデリアから言葉を受ける最中、フミタンの表情は決して晴れない。

彼女の心にサブレの言葉が深く突き刺さっていた。

名瀬達とブリッジに呼び出されたオルガ、ビスケット、ユージンの三人は改めてこれからの航路の説明を受けていた。

「エイハブリアクターを動力に使用する以上無線の類は一切使えねえ。唯一の目印はこのアリアドネだけだ」

そう言いながら床モニターを靴で叩くと『アリアドネ』と書かれた文字が表示される。「とはいえこいつはギャラルホルンの管理下にある。道標として利用しつついかに監視の目を掻い潜って航路を組み立てるかが腕の見せ所ってわけだ。まっこつちはそいつが本業だからな、お前らは俺の指示する通りに舵を切つてりゃあそれでいい」

なんて言うと同名瀬の右隣に立っていたアミダが「問題は同業者の方だね」と言うのと、ビスケットが「同業者？」と尋ねる。

「アリアドネを回避する航路はギャラルホルンには有効だけど、そこを通る船を専門に狙う海賊まがいの連中がいるのさ」

なんて説明していると名瀬はオルガの肩を叩きながら「お目付け役で一人乗せる」と言い出して一人の女性を紹介し始めた。

オルガは使用されていないと不満げな態度を見せるが、名瀬はうまくかわしながら女

性前に出す。

「初めまして。メリビット・ステープルトンです」

金髪のカールのかかったスーツ姿の女性が目の前にいた。

オルガがメリビット相手に強がりを見せる間、鉄華団のメンバーはメリビット相手にデレデレするなどそれぞれの対応をしていると、家族からメールで気分が落ち込んでいたクーデリアがアトラに手伝いを申し出る。

そんな中クーデリアはアトラに鉄華団との出会いを尋ねた。

「私が最初にいたのは女の子ばかりの店だったんですけど、稼ぎのあるおねえさん達と違って小さかった私は雑用ばかりで、それもうまくできなくて。毎日毎日失敗してその度に怒られて、いじめられたり、殴られたり、何か失敗すると何日も食事を抜かれて……………。どうしてもお腹がすいて眠れなくて、私はお店を抜け出したんだけど……………」

怯えてさ迷い歩いていくうち、路上に座り込んだ対面に幼い三日月と出会った。

「見てもやらないよ」

「私だって働くから」

「子供はどこも雇ってくれないよ。CGSも女は駄目だし」

なんて言うと言通三日月は持っていた食べ物を実際に食べきってしまった。

しかし、アトラはそのまま腹をすかせたまま倒れそうになっており、三日月は店の中入ると女将さんに自分が持っている金を差し出す。

「これしかないや。なんでもいいからこれで食い物売つて。あいつ腹減り過ぎて立てないみたいなんだ」

アトラを指さす三日月。

クーデリアはそんな話を聞き入っていると、アトラは「それで……」と語り始めた。「事情を聴いた女将さんが私を雇ってくえることになって。それから手伝いでCGSにも配達に行くようになって。だから三日月のお陰なんです。私がこうしてられるの」「そう………大変な思いをなさったのね」

「いえそんな事！三日月達と会ってからはみんな優しくしてくれるし」

「少し羨ましいわアトラさんが、心から信頼できる仲間という家族がいつもそばにいますもの、私には両親がいるけれど信頼どころか……父は私の存在を疎んじて命まで奪おうと……」

表情を暗く落とすクーデリアにアトラは「誤解とかじゃないですか？」と励まそうとする。

「でも、クーデリアさんは私達の仲間の………家族の一人ですから！」

そこからアトラは一人想像を肥大化させ、頭の中で三日月ハーレムを想像する。

やる気を出すタカキは哨戒に出ようとしている昭弘に同行を申し出る。

監視の目は多い方が良いと連れて出るタカキは迂闊にも昭弘に家族の話を持ち掛けてしまう。昭弘は「気にするな」と言いながら弟がいたと語りだした。

そんな話を聞いているとタカキは動く光を見つけた。

エイハブリアクターの反応を昭弘は感じそちらに視線を動かす。

目の前に迫る丸っこいボディが特徴の『マン・ロデイ』が急襲を仕掛ける。

三機のマン・ロデイを前に翻弄されるグレイズ、逃げることもできない昭弘は次第に追い詰められていく。

しかし、そんな昭弘の前に三日月が救援のために駆け付ける。

フォートレスが所有する宇宙海陸の三拠点での運用を目的に開発された特別運用母艦。エイハブリアクターとナノラミネートアーマー、エイハブリアクター周りにはハーフメタルが採用されており、固有周波数を隠すための細工もなされている。

対空砲や連装主砲を二基、ミサイルをそろえており、全長はハーフビーク級と同サイズを誇る。陸と海で運用されることが前提で開発を受けており、カタパルトデッキは上方と下方に備え付けられており、陸と海で運用される際は上側のみ使用できる。

単独での大気圏突破機能こそ持っているが、運用の際は非常に繊細な作業を必要としており、三百年前に少数が生産されたが、その扱いの難しさと生産の困難がマイナスイ

メージとなり少数生産しかされなかったという曰く付きの船である。

サブレ達はその運用母艦でアリアドネの運行ルート間を移動しながら、フォートレス本拠点である『アナグラ』からの連絡を待っているような感じになっている。

ブリッジも安全性を重要視してど真ん中に作られており、モニターが周囲を三百八十八度横に広がっていて、運用に際してはAIでのみ運用できるようになっている。

勿論戦闘や細かい作業に際しては人員を要する場合もあるが、サブレ達のように少数が運用する上ではこの艦はメリットしか存在しない。

サブレは寂しいブリッジで艦長席に座りながら各モニターに移されているアリアドネのハッキング状況を正確に記録させ、同時にアナグラに送信している模様を見ているだけだった。

さすがに暇になったサブレはそのままエレベーターから食堂まで移動して行く。

すると食堂ではマハラジャと明楽の母親である絵里・アルトランドがテーブルを挟んでコーヒを飲んでおり、サブレは冷蔵庫を漁りながら紅茶を探す出す。

しかし冷蔵庫には缶コーヒしかなく、仕方なしに缶コーヒを持ち出してそのまま口をつけて飲み始める。

「絵里さんいらしていたんですね」

「ああ、暇だからね。それにマハラジャの偏食に合わせられる人間は少ないからなね」

「失礼なことをいう奴だな」

マハラジャは渋顔を作りながら膝をついて鬱陶しそうにしている。

サブレは缶コーヒーを持ったまま、絵里たちに近づいていきある不満をぶつけた。それというのも明楽が嫌に兄弟を欲するのだと不満げにする。すると、絵里は苦笑いを浮かべながら「あの子はね……」と呟く。

「昔弟のように可愛がっていた親戚の子がいたからでしょうね。その反動で今度はお兄さんが欲しくなったんじゃないかしら」

「？昔と言うと運送業だったか？その頃はパイロットをしていたんだったかな？」

「ええ。夫と一緒にモビルスーツパイロットをしていたんだけどね。ああいう仕事のパイロットは大体その子供もパイロットになるから他の子のように仕事を手伝うようなことも無かったかな。だから、あの子は暇そうにしているね。そんな中、自分と年の近い二人の兄弟を見付けたって興奮していた時があったかしら」

「その子はどうしたんですか？」

「どうかしら？両親は死んでいるのは確認したけど……生きていれば……まだ十代かしらね」

「待て。その子の両親とお前の関係はなんだ？」

「私の姉がその兄弟の母親なのよ。だから今でもアルトランドの姓を名乗ってくれてい

ると良いけど。いや、生きていてくれるといいかしらね」

サブレは心の中で「アルトランド……か、そう言えば三日月・オーガスがそれっぽい話をしていたような、していなかったような気がする……が」と記憶を探り出す。

しかし、それっぽい話を思い出す前に二人はそれぞれ仕事があるからと部屋から出ていき、サブレは一人展望場へと歩いて移動していた。

天井一面が星空で埋め尽くされているとサブレは昔の事をふと思い出した。

初めてアガレスに乗って哨戒任務に出たときはまだレンチメイスを持っていなかった。刀のような扱いやすい武器を携帯して、近場のデブリ帯を回っていた時の事である。

アガレスを壊すわけにはいかなないので、最低限のシールドを装備しながら簡単な性能実験テストをしている最中でもあった。

当時はまだ黒でカラーリングされておらず、ハーフメタルを使ったマントも羽織っていた。

「暇だなくこんな事なら学校の課題でも持つてくれば良かったよ」

一人でぶつぶつ呟きながら足をバタつかせるわけにもいけないので、気持ちと身体を左右に揺すりながら暇であることをアピールする。

まだ幼さが残るサブレ、当時からエージェントとしての教育を受けながら学校にも

通っていた。いや、今でも学校には通っており、フォートレスの意向で十八までは学校に通わなければならない決まりがある。

学校の課題でも持つてくれば良かったなんて考えていた時だった。

アガレスのコックピット中にアラート音が響き渡り、左モニター下に複数のエイハブリアクターの反応を見つけ出した。

しかし、それがアガレスとは関係の無い方向へと集団で移動しているのも確認したところで、サブレはその情報を上に報告する。

そんな戦闘情報をジッと見ていると一機のモビルスーツを十機のモビルスーツが追いついて回っているという構図だと理解できた。

「虐めみたいな状況だよな。なんか………嫌だな」

しかし、勝てるかどうかで言えば正直不安だったが、ソニアが言っていた言葉を思い出したらなんかいける気がした。

「アガレスは全てのモビルスーツで最強のモビルスーツなの。性能で言えば追隨できるモビルスーツなんていないわ。まあ、パイロットが高い性能を持つていればだけどね」

後半の言葉は思い出そうとしないが、サブレは操縦桿を握りしめながら走り出した。

アガレスは戦闘のロデイシリーズのコックピットに刀のような武器を差し込む。

残り九機のモビルスーツに囲まれながらもサブレは戦いを挑む気持ちを曲げようとしない。

すると頭をハンマーで叩かれたような痛みが走り、アガレスのモニターに赤い文字で『予測演算モード開始、戦闘データの収集を開始します』と表示された。

外ではアガレスの左目が青く発光し、周囲に不吉な雰囲気を感じ取れた。

「やらなきや……やられる。アガレス……やるぞー！」

アガレスは素早く跳躍しモビルスーツの一機に刀を突きさしながらシールドで攻撃を受け止める。次第にアガレスは周囲の機体の動き方を学習していき、サブレの視界に重なるように敵モビルスーツの攻撃予測が仮想ヴィジョンとして映し出される。

アガレスが指し示す勝率が凄まじい速度で上がっていき、その度アガレスを動かす機体の動かし方も変わっていく。素早く、不規則に、デブリや機体を足場に変えていきながらすさまじい速度で動いていく。

その動きは悪魔と言っても変わり映えの無いもので、敵モビルスーツ一人が目の前に迫るアガレスを見ながら「死神」と呟いた。

サブレの左目には神経が集まったように浮き彫りになっており、サブレは痛みより研ぎ澄まされた神経で敵をひたすら殺していく。

気が付けば十機のモビルスーツはサブレの手によって全部倒されており、サブレが大

大きく息を吐き出したところでやっと頭痛も収まった。

アガレスの秘めたる力。

サブレは未完全ながらその一片を引き出した。

「多分。あの時がそうなんだよな。知らなかったけど」

俺が助けた相手がそうだったのは後日知ったが、あの時は夢中で戦っていたから印象が薄い。

近くの椅子に座りながら休学中の課題をこなす為に近くの椅子に座りタブレットを起動させる。

すると後ろから明楽が話しかけてきた。

「先輩！学校の課題があるんですけど……分かんないから教えてください！」

「代わりにやってくださいじゃないのか？」

「違いますう！」

不貞腐れるように頬を膨らませるが、俺は「仕方が無いな」と言いながら隣に座るよ
うにと進める。

教えていくと俺はどうしても気になったことを尋ねた。

「明楽……もし、もしだぞ。もしお兄さんがいたらこうして教えてもらおうか？」

「うん……うん！憧れる！俺お兄ちゃんがいなかったから！」

俺からすれば兄がいるけど頼るといふ場面が無かった気がする。むしろ俺がシツカリしなければという意識が強く、甘えることはしなかった。

俺の隣で宿題を聞いてくる明楽を見ると「弟ってこういう奴の事なのかね」と思ってしまう。

思うだけ。

決して口には出さない。

見つかると良いな。お前にとって兄のような存在に。

俺も元通りになれるだろうか。兄と妹と元通りの関係に。

ヒューマンデブリ

昭弘達が襲われておりまだバルバトスが現場に入る前、バルバトスに乗っている三日月はクタン参型を操縦しながら雪之丞と共に戦場に一気に近づいた。

オルガ達がイサリビの横から通り過ぎるバルバトスを目撃し、三日月は昭弘を救出する為にクタン参型を分離させようとする。

「このまま突っ込むね。これのコントロールそっちに返すね」

雪之丞は焦りを見せ始め突然託された操縦に混乱しながらも無駄な抵抗を試みる。

「ちよっ……待ておい！俺は操縦何て……!？」

最後に『ぐわっ!』という叫び声を挙げながらどこかへと流れていった。

そしてマン・ロデイの隙間に太刀を突き刺し救出した。

敵パイロットの一人は死んだ仲間に動揺を隠せず「嘘だろ？」と現実を認識できずにいた。

モビルスーツを操縦する少年はライフルを連射しながら少しづつ近づいていき、三日月はマン・ロデイを盾にする。

そして蹴ってマン・ロデイを相手に返しながら翻す。

敵パイロットの一人も先行する一人に近づいていき、「落ち着け」と冷静になるように促し、連携で叩こうと提案する。

「昭弘とタカキは一度イサリビに戻って」

そう言う三日月に昭弘は戦場から離れていくクタン参型を操縦する雪之丞を想うが、三日月は戦場から離れていつている事を良い事に「まあ敵から離れていつてるし回収は後でいいでしょ」と返す。

「鬼かよ……」

「三日月さん！また来てる！」

三日月は敵の方を向きながら「お前も調子よさそうだな」と独り言をつぶやく。

「んじゃ行こうか」

煙幕の手榴弾を蹴って起爆させ、バルバトスの周囲にスモッグが視界を塞いでいき、三日月は「こういうものもあるのか」と感心している。

「背中ががら空きだぜ！」

隙だらけに見えるバルバトスの背中にハンマーチョッパーを横なぎで切りかかるが、バルバトスはそれをまるで背中に目が付いているようにきれいに回避する。滑腔砲を取り出しマン・ロディの足元へと着弾させる。

「ぐっ！あいつこの距離で！」

「気を付けろ！あいつも俺達と同じ「阿頼耶識」使いだ！」

バルバトスが複数のマン・ロデイと戦っている間、撤退する昭弘とタカキに別の機体が襲撃を仕掛ける。

「残念。まだ終わりじゃないのよ〜！」

お姉喋りのゴリマッチョの男がマン・ロデイにそっくりのツインアイ型のモビルスーツで姿を現す。

三日月は滑腔砲を背中に当てるが全くダメ〜ジが通る気がしない。

「くそ……さっきの奴といい、嫌に堅いな。昭弘達はやらせない」

「つたく、あつちのガキは何してんだ！お前らはしっかり仕事しろよ。こつちの相手は俺がしてやる！」

ツインアイ型が振り返りバルバトスに襲い掛かってくる。

ずんぐり体型な見た目と違いグシオンは素早く動き回り、至近距離で放つ攻撃も簡単に回避して見せた。

「このクダル・カデル様とグシオンを舐めるんじゃないよ〜！」

グシオンは背中の中の両手ハンマーを取り出しバルバトスに叩きつけようとするが、三日月は大きく回避し小惑星に叩きつけられる。

肝心の昭弘は最初の二機に追撃されながら撤退戦を繰り返しており、敵の攻撃がタカ

キのモビルワーカーと昭弘のグレイズ改を分断させられ、敵がモビルワーカーを手に入れたパイロットに「昌弘は人質を連れて下がれ！」と指示を出す。

「昭弘……さん……逃げ……て」

「昭弘？」

昭弘は敵モビルスーツを上手く捌きながらタカキを連れ去ったモビルスーツに食いつき、大きな声で「そいつを返せ！」と叫ぶ姿を「まさか」と言いながら昌弘は呟く。

「おい！てめえ聞こえてんだろ！さっさと」

「あんた昭弘……兄貴？」

「兄貴？お前……昌弘……？」

戦場で敵として対面した兄弟。

完全に場の空気が停止し、ラフタとアジーとビスケットが救援に現場に現れる。

タカキを連れて撤退しようとする昌弘に対して昭弘は「これは置いていけ……」と必死になる。

バルバトスとグシオンが接近戦をしているが、バルバトスの太刀では太刀打ちが出来ず、苦戦を強いられていた。

ラフタが三日月の援護に入るとグシオンの燃費の悪さを理由に撤退していく。

タカキは再生治療器の中で治療中で、メリビットの的確な治療のお陰で何とか大事に

ならずにおり、名瀬達はブルワーズと一戦を交えようとする中、昭弘はらしくなく落ち込んでいた。

そんな状況でオルガは「お前の所為じゃない」と励ます。

「お前がタカキの事を自分の所為だつて思つてんならそりや違うぞありやあ俺が指示したんだ」

あまり返事の無い昭弘に対し三日月は「らしくない」と言うと、昭弘は「そうだな」と肯定した。

「らしくねえんだよ俺は。ヒューマンデブリらしくねえ」

オルガは「なんだそりや」と心のままに返す。

「弟がな………いたんだ。昌弘つつつて、ヒューマンデブリとして俺とは別々に売り飛ばされた。迎えに行くつて言つていたのに、いつの間にかどうせもう死んでいると勝手に思い込んでた」

「その弟が？」

「タカキを襲つたモビルスーツに乗つてやがった……、最近楽しかつたんだ。お前らと鉄華団を立ち上げて一緒に戦つて、仲間の為に……とか言つてよ。姐さんたちにしごかれんのも楽しかつた。楽しかつたから俺がゴミだつて事を忘れてた。ヒューマンデブリが楽しくつていいわけがねえ。だから罰が当たつたんだ」

なんて言うのと三日月は「そっか。俺達の所為で昭弘に罰が当たっちゃったんだ」と告げると昭弘は「そう言うわけじゃなくて」と言いよどむ。

「鉄華団が楽しかったのが原因ってことは団長の俺に責任があるな」

「いや違う。俺が言いてえのは……」

「責任は全部俺が取ってやるよ。昌弘って弟の事もな。お前の弟は別に望んで俺達の敵に回ったわけじゃねえんだろ」

「それは……分からねえ」

昭弘は自信なくそう答えた。

「どのみちお前の兄弟だってんなら俺達鉄華団の兄弟も同然だ。なあそう思うだろ？ お前ら」

オルガが視線を向ける先に昭弘も視線を向ける。

そこにはシノやビケットをはじめに鉄華団のメンバーが揃っていた。ガヤガヤという声に反応したタカキが目を覚ました。

「あの……なんかうるさくて寝てらんないですけど」

クーデリアやアトラも部屋の中に入ってくると、いつそ医務室が騒がしくなっていく。

その後オルガは名瀬と二人廊下で話をしていた。

名瀬はオルガに対し「悪いな」と告げた。

「偉そうなこと言つといて結局海賊なんぞに絡まれてこのざまだ」

「よしてくれ兄貴。道理の分からねえチンピラが売つて来た安い喧嘩だ」

「で……どうする兄弟」

「安い喧嘩だがなめられつぱなしつてのも面白くねえ」

「同感だ。じゃあいつちよ俺達の道理つてやつを教えてやろうじゃねえか」

サブレは艦内の休憩室でコーヒを飲みながら対面のソファに座るマハラジャからタブレットを手渡された。

「アイン・ダルトンと克蘭ク・ゼントに関する最終報告？誰それ？」

全く興味のない人物の記憶はサツサつと消去しているサブレからすれば全く知らない人物である。

「先ほど地球のギャラルホルンに潜入しているうちのスパイから報告が上がった。火星出身者である『アイン・ダルトン』がやって来たとな。それでウチで彼の経歴を調べた。それを見てみる」

サブレは手元のタブレットに書かれている記載内容には克蘭ク・ゼントが火星に赴任した理由として『火星の少年兵の急増』だったらしく、克蘭ク・ゼントとアイン・ダルトンがCGS襲撃騒ぎに際し出撃していたことが書かれていた。

「ああ。あの時の戦いにいたんだ。だったら知らねえや」

「まあな。それは良いんだ。問題は克蘭ク・ゼントの死の理由だ。確かお前の話では三日月という少年兵は「自ら死を望んでいた」と言っていたな？」

「確かそう言う話だったよ。で？何？」

「その理由だが。彼は自らの手で少年兵に手を掛けることに躊躇いを持っていたようだ。しかし、戦いは避けられない。そして、自分の部下であるアイン・ダルトンにも同じように子供を手にかけてほしくなかった。だから、そうなる前に自分が責任を背負って死ぬ道を選んだ。それが理由だ」

確かにタブレットにはそう書かれており、三日月から聞いた話とも一致する場面が多い。

「問題はアイン・ダルトンの戦う動機に関してだが、どうやら鉄華団に対する憎しみが大きな理由であるらしい。それでマクギリス・ファリドとガエリオ・ボードウインの両名に地球行きを申し出た」

「？火星出身者が地球に言ってもろくな扱いを受けないだろ？それに、克蘭ク・ゼントの意向を踏むのなら復讐しないのが正解じゃないのか？」

「…………『闇堕ち』とでも言うのだろうな。自分のしている行動が『克蘭ク・ゼント』の意向にならないと知っていながらも、復讐したいという感情に逆らえない」

「復讐……か。分からないでもないけど。でも……それが何で俺に説明する?」

「問題はアインを連れてきたマクギリスとガエリオの方だな。この兩名はクーデリア・藍那・バースタインを狙っている可能性が高い。となると地球については最悪ウチが動く可能性が高いという事をまず理解しておけ。今回の依頼はお前が受けているんだ」

「たしか父さんが無理矢理俺に押し付けてきたと把握してはいますが?」

「まあ、切っ掛けなんてどうでもいいんだ。そして……今回ブルワーズの標的はマクギリスからの仕事の依頼で鉄華団からクーデリアの奪取らしいな。これからマクマードにこちらに任せるようにと言っておく。いくらマクマードでもウチと真正面から事を構える気はないだろうしな」

「ま……したら負けるしだろうし。俺達としても無暗に戦力を使いたくないしな」

「そう言うわけだ……それと」

サブレはコーヒーを飲みながら視線をマハラジャの方に向けると、マハラジャはあつさりと凄い事を言つてのけた。

「アガレスが故障中だから別の機体に乗ってもらおうぞ」

「そっか……それは困ったことに……!? なんの話!? 故障? この前の戦闘の時はまだ使えたでしょ?」

「戦闘時に使われるシステム用の回路の方に問題が発生してな、腕と足を繋げている回路が焼き切れている。新しい回路に切り替えようにもガンダムフレームの回路は独自なうえ、アガレスは特殊仕様だからな。他のガンダムフレームの部品では代替えが出来るん」

「だったら……………どうすんの？」

「マルコシアスを使う。持ってきているし、ソニアが火星にいる間に最終整備を完了させてある」

「……………半年前に俺が見つけたあの機体？あのコックピット部分とエイハブ・リアクターしか見つからなかったという？」

「これがメイン武装だ」

『バスタードメイス／大太刀』と四本のサブアームを使った『短剣』が書かれており、腕には細長いシールドも装備しているようだ。

「背中の翼に見える装備に意味はあるわけ？」

「機動力向上じゃないか？飛行能力を獲得するにはさすがに重すぎるだろうしな」

「難しそうな機体だな。特にこのバスタードメイス……………鞆から抜けば大太刀に変わるシステムは戦局を良く確認しておいた方が良いな。これから少しだけテストしておいていい？」

「ああ勝手にすればいいさ」

サブレはそのまま格納庫に向かって歩き出す。

サブレがパイロットスーツに着替えてマルコシアスの真ん前で立ち止まる。

「お前に乗り込む日がするとは思わなかったが、今回の任務だけだろうがよろしく頼むぞ」

厄祭戦時の姿を再現したマルコシアスは白を基本色とし所々赤が使われている。

背中には翼を模した背部バインダーを装備し、背中にはバスタードメイスを装備し、腰にはサブアームが隠れている。

ソニアが髪を弄りながら寝ぼけた様子で現れた。

「扱うのは良いけど、この先のデブリ帯で別の海賊がヒューマンデブリの販売をしているって噂があるから気を付けてね。あと……武装は全部アンチナノラミネートが装備されているわ」

「分かった……ならテストがてら海賊を壊滅させてくる」

そう言つてソニアが「はい？」と振り返る前にはコックピットの中に入っていく、操縦桿を握りしめながら視界が明るくなっていく。

「お前の才能を俺に確かめさせてくれ……ガンダム・マルコシアス！サブレ・グリフォーン！出るぞ！」

カタパルトデツキから出撃していき、目標のデブリまで一気に近づいていき、デブリを足場にして速度を上げながら少しずつマルコシアスのシステムに慣れていく。

目の前に見えた海賊が使用する武装を搭載した艦を前にマルコシアスのバスタードメイスを取り出し周囲を護衛しているロディ・フレームのコックピット目掛けて横なぎに叩きつける。

「……いつ!? どうやって現れたんだ?」

慌てた海賊がライフルで牽制するがサブレはそんな攻撃をもともせず一気に至近距離まで近づきバスタードメイスを振り下ろすが、敵は右腕を犠牲にして攻撃を受け止めショートアックスをマルコシアスに向けて振り下ろすが、サブレはシールドで攻撃を受け止めサブアームの短剣でコックピットに突き刺す。

次々に現れる敵機を前に四本の短剣とバスタードメイスから抜いた大太刀を構える。

「……いよ・悪魔の名の由来。お前達の命で確かめさせてくれ」

明楽とジョシユアが少し遅れて出撃してデブリを回避しながら現場に駆け付けると、デブリ中にモビルスーツと戦艦の破片が浮かび上がり、戦艦の中心部分の上にマルコシアスが大太刀を刺しながら立っており、その無傷な姿を二人に見せる。

正直に言えば二人は心の底からゾツとした。

いくら海賊と言えどモビルスーツを所有する者達であり、一機のモビルスーツが戦つ

て勝てる相手ではない。

サブレは無傷で勝ち、いまだに余裕を見せている。

艦の壊れ方も異常な状況で、どう考えてもこれだけ徹底してぶつ壊す必要も無かつたはずだ。

「来たのか？もう終わったぞ。しかし、こいつ中々良いな。気に入ったよ」

残骸に囲まれながら微笑むサブレの姿は文字通り『死神』に見えた。

見る者全てに『死』をもたらす存在に見せてくれた。

暗闇

オルガ・イツカが目を覚ますと、視界の先に自分を長い間支え続けてきてくれたビスケット・グリフォンの無残な姿があった。

ビスケット下半身はモビルワーカーの残骸でつぶれており、生存は絶望的だった。

「ビスケット！返事をしろー！」

オルガの叫びはビスケットの耳に届いているのか、届いていないのか。それすらはっきりしない状況で、オルガに向けて真直ぐ伸ばす手をオルガはそつと握りしめる。

「オル……ガ……俺達で……鉄華……団を」

そこでビスケットは力尽き、地面に伏せてしまった。

動かなくなつたビスケットを抱きしめ、声にならない悲鳴を上げる。

降り出した雨の寒さと温もりが無くなつていくビスケットの体が嫌に体に残っていった。

タービンズと鉄華団はデブリ帯で待ち伏せをしている可能性があるブルワーズに奇襲を仕掛ける作戦に打って出た。

クタン参型を装備したバルバトスとラフタの乗る百里を先行で向かわせ、敵の注意が

二人に向いている間にイサリビとハンマーヘッドが側面から仕掛ける。

三日月はアトラとクーデリアが作ったお弁当を受け取ると、ラフタと共に戦場へと向かって出撃していった。

「ビスケット!!」

オルガは勢いよく叫び、ベットから起き上がる。

「ゆ、夢か？」

（またあの夢か……）

オルガは額を抑え、頭を左右に振る。ブルワーズとの闘いを前に一時的な睡眠をとるように言われたオルガ、団長としての仕事をビスケットに任せ、久方ぶりの睡眠をとっていた。

しかし、オルガはここ最近ビスケットの死ぬ夢に襲われており、夢を見れば見るほどそれは現実感が増してくる。

（そんなはずはねえ……あれは夢だ）

自分にそう言い聞かせるオルガはそれでも不安を隠しきれなかった。

そんなことはない、これからも俺を支えてくれるはずだと。しかし、日に日に現実感を増していく夢の感覚は次第にオルガに嫌な予想をさせるには十分だった。

コンコン！

「オルガ！そろそろ作戦時刻だよ」

ビスケットのそんな声が聞こえてくる。

「ああ、今行く」

オルガは嫌な汗をぬぐい、ジャケットを握りしめ、そのまま外に出ていく。

ドアの外ではビスケットがいつもの表情でオルガを待っていた。

ビスケットの顔を見ると、夢の姿が一瞬だけ浮かぶ。

「オルガ？」

「なんでもねえよ」

素晴らしいながらオルガはブリッジに移動していく。

三日月とラフタとの通信が切れた段階でオルガ達の乗るイサリビのナビゲーションシステムを使ってデブリ帯の中をひたすら突き進む。

三日月とラフタは攻撃予定ポイントまでたどり着くと、二人の警戒通りに敵は攻撃を仕掛けてきた。

ブルワーズのヒューマンデブリの少年兵の一人が三日月を発見するとまっすぐとラifulの引き金を引き、ラフタと三日月は機動力を殺されているこの場所の所為で戦い難く、苦戦を強いられていた。

三日月はその間に昭弘の弟をデブリの中で発見していた。

ブルワーズの旗艦には未だに気付かれぬままイサリビやハンマーヘッドが左舷から仕掛けてきた。

デブリを突つ切つて来たイサリビとハンマーヘッドが近づいてくる。ハンマーヘッドが側面から旗艦とは別の艦に船体ごと叩きつけ、イサリビがその隙に上から敵旗艦に取り付く。

側面から機体ごと叩きつけ、イサリビがその隙に上から憑りつく。

その間にシノ率いる白兵戦部隊がモビルワーカーで侵入を試みようとしている時、サブレ達フォートレスはその光景を遠くから目撃していた。

「で?..どうするの父さん?」

目の前で繰り広げられているモビルスーツを交えた戦闘、これを見なかつたふりをするとするのは流石に無理があるだろう。

実際、今二つの戦艦がブルワーズの戦艦の横つ腹と真上を押しさえている。

父親事『マハラジャ・ダースリン』は顎下に右手を当て、左手で左肘を触れた状態で黙り込んでいる。

「おかしいな。テイワズには告げていたはずだが?..どこで情報ミスが起きた?」

「それ.....(こ)一分で三回聞いたんだけど?」

先ほどから同じことを言いながらジツと見つめているが、父さんはブリッジの機器を

「弄りだすと小さな声で「なるほど」と呟いた。

「何かなるほどなわけ？」

「いやな。この辺一带は通信不能エリアに成っているようだと思つてな。それが原因なのかもしれないが……」

「ほかに問題が？」

「ああ、この辺が通信不能エリアだと言つてだいぶ前に告げた忠告を聞いていないなんてことがあるか？」

「まあ、無いだろうね。でも、実際に聞いていないから仕掛けたんだろ？それより、この一件どうする気？」

父さんは目の前で戦うモビルスーツの中の一機、バルバトスを格納するクタン参型をじつと見つめる視線は鋭さを見せる。

狩人のような目と立てればいいのだろうが、この人は時折ああいう目をするときは何かを企んでいる時の目だろう。

「バルバトスももらおう。あれを使ってテイワズに違約金を支払ってもらおう」

俺が人一倍大きなため息を吐き出し、「それって？」と尋ねる。

「仕事が増えたな。バルバトスとグシオンの回収をして来い」

俺は「まあいいけど」と言いながらモニター越しに戦場を見ていると、モニターの端っ

ここにドラム缶サイズの真新しいゴミが見えた。
「これって何？」

マハラジャに指を向けるとそこにあるごみの側面に『高濃度エイハブ粒子貯蔵タンク』と書かれていた。

「見ての通りだろう？ それ以外の何に見える？」

「そうじゃなく、あれって俺には真新しいゴミに見えるんだけど？」

マハラジャも目を凝らしながらジッと見つめる。

やはりアレは真新しいゴミだろう。

「確かに……誰かがここにエイハブ粒子を撒いたという事か？ 誰だ？ 誰がこの状況をシチュエーションした？」

「誰かが目論んだと？ ならギャラルホルンとか？」

「いや、ありえんな。こんなゴミ溜めのような汚い場所を綺麗好きギャラルホルンがやってくると思うか？ この辺は地球の方が近い場所だ。しかも、範囲内では『リアンロッド』の管轄下だろう。あの『ラスタル・エリオン』がこんな場所に撒いて共倒れを狙うと思うか？」

そう言われながら思考してみるが、ありえないだろう。

俺も『ラスタル・エリオン』という人物は知っているが、あの人はこういう細々とし

た作戦は得意としない上、基本的に大胆な戦術を好む傾向がある。

相手から仕掛けさせ、それを口実に直接攻撃を仕掛けるのはいつものパターン。

共倒れなんて状況を狙う人間じゃない。

「ありえないとは思うけど。ギャラルホルンじゃないとしても、裏社会で俺達に仕掛けようなんて度胸ある人間がいるとは思えないけど?」

「そうだな。フォートレス個人ならともかく、死神相手に喧嘩を売るなんて……どこかの死にたがりという話だしな」

「あのく俺個人を怒らせることの方をフォートレスを怒らせるほうより上に設定しないでくれます?」

俺ってそんなに暴れ回っただろうか?

全く記憶にないのだが?

「記憶が無いなんてことは無いだろう? 金星付近で大暴れした挙句、裏社会で恐れられる存在になったのはお前の責任だろうに」

「フザケンナ! 父さんが俺に無理難題を吹っ掛けてくるんだろ!?! その上金星での問題は明樂の所為だしな!」

「部下の責任は上司の責任だろうに」

「だったら俺の責任は父さんの責任だろ!?!」

「それより……早く行ったらどうだ？」

「話を切るのが下手過ぎるだろ！」

俺が叫ぶのを無視して父さんはブリッジの艦長席でふんぞり返っている。

「待たせたな昭弘」

オルガが通信機越しに話しかけると昭弘は申し訳なさそうに「済まないオルガ」と告げた。

「ヒューマンデブリの俺らなんかの為に……」

オルガは心底聞き飽きたように「まだ言ってるのかよ」と呆れ顔で呟いた。

「いい加減聞き飽きたぜ。これから先は変えられる。俺らの手でいくらでもな。それをまずお前が証明して見せろよ」

「ああ。昭弘・アルトランド。グレイズ改出る！」

昭弘に続いてビスケットもグレイズ改で出撃していき、アミダ達で昭弘への進路を作ると、昭弘はアジーから「急げ昭弘」という言葉を背にそのまま突き進む。

三日月はクタン参型を脱ぎ捨てメイスを手にモビルスーツへと突っ込んでいき、グシオンが戦場にやって来た。

グシオンのパイロットであるクダルが怒鳴り声と共にヒューマンデブりに命令を下す。

「一番から五番！俺と一緒に来い！他の奴らはモビルスーツを足止めしろ！」

イサリビへの攻撃に転じるグシオンの前に三日月が、ラフタはハンマーヘッドの直衛につくと、ビスケットは昭弘を援護しながら昌弘までの道を作っていた。

「行つて！昭弘！」

「すまねえビスケット」

昭弘は「行くぞ昌弘」と言いながら昌弘のマン・ロデイへと突っ込んでいくが、昌弘は昭弘の機体を見付けるが心の中で「何を今更……」と呟く。

「待たせたな昌弘。迎えに来たぞ」

三日月とビスケットはグシオンを追いかけながら周囲のマン・ロデイを追いかけまわす。

「今更何言っているんだよ……俺ずつと待つてたんだよ。兄貴を……だけど分かったんだ。期待するだけ無駄だって……期待しただけ辛くなつて……」

「だからこうして迎えに……」

「それが無駄なんだよ！兄貴が迎えに来て、兄貴についていってそれで何が変わるっていうんだ……遅かれ早かれどうせ死ぬんだ。だってそうだろ？俺達ヒューマンデブリなんだ。地面でなんて死ねない」

時を移し、内部に侵入したシノ部隊は死者を出しながらも内部の制圧を目的に突き進

んでいった。

昌弘とくつつ付いたまま漂っている昭弘のグレイズ。

「デブリは宇宙でゴミみたいに死んでいくんだ」

「そうだな。俺もそう思ってた。けどな……こんな俺を人間扱いしてくれる奴らが……いや家族って言うてくれる奴らが出来たんだ」

「家族？」

「ああ。みんながお前を待ってくれる。だから……」

昌弘の中で何か壊れ始めた。

「家族ってなんだよ……兄貴……あんたと父さんと母さんと……それだけだったよ俺の家族は……俺があんたの事を待っている間に一人だけいい目にあつたのかよ！ やっぱりあんたは俺を捨てた」

「違う昌弘！俺は……」

その話を立ち聞きしていたのは近くでハーフメタル製のマントを装備したマルコシアスに乗り込むサブレだった。

しかし、誤解の為に生じたすれ違い。

「あんただってさ……今に分かるよ」

三日月とビスケットがしつこくグシオンを追いかけていた。

「しつこい！しつこいしつこいしつこい！うぜえ〜！なんだつてのよこのネズミはよお！誰か援護しなさい！おい！ああ〜もうどいつもこいつも使えねえ！」

マン・ロディはほとんどが全滅しており、グシオンは苛立ちをハンマーに乗せてビスケットのグレイズ改目指して振り回すが、ビスケットは攻撃を上手く回避する。

三日月も同じような動きで回避するが、クダルの視界に昭弘と昌弘が写っていた。

「はっ！あいつを人質に後ろの白い奴を……」

昌弘と昭弘に接近するその姿をサブレをジッと見つめていた。

狩るべきタイミングを見定める為に。

「あんたは勘違いしているんだ。「人間」だなんて……笑えるよ。どうせすぐ分かるんだ……ヒューマンデブリがどうやって死んでいくか。すぐにね」

クダルの「そのまま押さえてろー」という叫び声を上げながらハンマーを装備して突っ込んでくる姿が昌弘の視界に写った。

後ろから追いかける三日月とビスケット、しかし、それ以上に早く動いたのはサブレだった。

クダルが上からくるエイハブ・リアクターの固有周波集に反応することも無く、コックピットを上から下へと突き刺す。

あまりにも見事な仕事捌きに、全てのパイロットや戦艦に乗組員すらその姿に見とれ

ていた。

「あのさ。さつきから聞いていれば腹つことばかり言っているけど。ゴミだろうが、人間だろうがお前が生きている事には違いないだろ？」

サブレはグシオンからの接触を使って昌弘に通信していた。

「生きている限りどんな命も最後の一瞬まで諦めるべきじゃない。他の誰よりもお前をゴミだって罵っているのはお前だ」

サブレは大太刀をグシオンから抜き取り、マルコシアスのツインアイを真直ぐバルバトスの方へと向ける。

三日月の背筋に嫌な汗が流れ始める。

三日月の視界にはマルコシアスがアガレスに写っていた。

「人間だとか、ゴミだとか、俺には関係ない。バルバトス。お前をいただく」

サブレは三日月の方へと低い声を発する。

「悪いけどこれも……仕事なんでな」

三日月は自らの敗北すらなぜ予想しているのか分からず、目の前で睨みつける姿は恐怖を抱かせるには十分な状況だった。

死神を目の前に三日月は生唾を飲み込んで額に汗を掻いている事すら知らなかった。

強さの証明

ブルワーズ旗艦内ではノルバ・シノの潜入部隊がブリッジまで進撃を進めており、道中ヒューマンデブリの子供達を発見していた。

しかし、ヒューマンデブリ側からの予想外の攻撃に潜入部隊の一人が反撃してしま
う。

シノの制止も聞かず、潜入部隊は被害を出しながらも進んで行く。

一方三日月達の戦いにサブレが乱入し、グシオンを沈黙させている頃、ハンマーヘッドとイサリビにフェネクスがナパーム弾で攻撃を仕掛けていた。

アンドロマリウスがラフタの百里の横っ腹に強烈な一撃をお見舞いし、ラフタは悲鳴を上げながら突然の奇襲に回避すら間に合わずそのままデブリまですっ飛んでしまう。

「ラフタ!?!?! いくつかの間に接近を!?!」

アジーがアンドロマリウスの背に向けて一気に接近するが、フェネクスが横から突撃をかましてきたことに気が付かなかった。

アミダの悲鳴に似た声を聞いた時に視界一杯にフェネクス、衝撃とその反対側からアンドロマリウスの一撃を受けてアジーも沈黙。

アンドロマリウスとフェネクスの視線の先にアミダの駆ける機体を捉えた。

三日月の乗るバルバトスの顔面を押さえてそのままデブリに何度も打ち付け、コックピットの中で派手な衝撃が三日月を襲う。

ビスケットが追おうとするが、ワイヤー周辺からビスケットのグレイズを捉え、昭弘は昌弘を回収しながら後ろの光景に目を移していた。

三日月はマルコシアスの攻撃から逃げるため機体を翻る、それをサブレはバルバトスの右足を掴んで阻止し、そのまま振り回して小惑星まで打ち付ける。

「ううー」

三日月の口から漏れ出る悲鳴、オルガの背に嫌な汗が流れ誰の脳裏にも『三日月の敗北

』が想像してしまう。

「負けんな！ミカ！」

その声が聞えたのか、三日月はメイスで砂煙を作って視界封じに使いながら、マルコシアスのコックピットへとメイスを突きつける。

しかし、サブレはその攻撃をバスタードメイスで受け止め、鞘を抜きそのまま大太刀に切り替えて切りかかる。

武装の切り替えに三日月は驚き、大太刀の打撃部分で頭部を打ち据えられた。

角が両方折れ、視界にマルコシアスの悪魔のような目が接近してきた。

三日月の心に小さい恐怖が生まれると、頭の中で逃げるべきか、それとも立ち向かうべきかの二択を生まれた。

三日月の葛藤の間にマルコシアスはバスタードメイスに切り替え、バルバトスの腰、腕、足の順に攻撃を受けながら三日月はサブレの狙いが自分なのだと思いが付いてしまった。

「ごめん………オルガ」

そう言つて三日月はもう一度小惑星で砂煙を上げ、身を隠しカウンターを狙う。

意識を全身に集中させ、砂煙の中で動く物体に意識を向ける中、背中からモビルスーツの形をした影が接近してきた。

ここだというタイミングで影目掛けてメイスを突き刺すが、現れた影はグシオンの物で、グシオンの強固な外装にメイスの先端が弾かれる。

畏なのだという事に気が付いた時は既に真後ろを取られており、グシオンを投げるために使ったバスタードメイスを捨て、身軽になったマルコシアスは隠し腕を使ってバルバトスを捕らえた。

その姿は二人以外のほぼ全員の目に移っており、オルガは「うそだ……」と呟き、他の誰もが三日月の敗北を知った瞬間である。

バスタードメイイスの打撃によって既にバルバトスは拘束から逃れるだけの力もない。誰もが叫んだ。

「止める!!」

しかし、マルコシアスの右拳は容赦なくバルバトスのコックピットへと直撃し大きくめり込んでいく。

その光景はオルガにはスローモーションのようにゆっくりと見えた。

バルバトスを両腕で、隠し腕でグシオンを回収したマルコシアスは撤退の合図を上げ、アミダと交戦していたアンドロマリウスとフェネクスも同じように撤退していく。

フオートレスの艦からスモッグ弾が射出され、そのスモッグに隠れるように三機のモビルスーツは撤退していく。

三日月を載せたバルバトスもグシオンと共にスモッグの中に隠れていく。

「ミカ!!!」

「だから言っただろ? マクマード。お前が出すべき違約金を出せばパイロットごときちゃんと返すとな。それとも……俺達とやるか? こっちはいいんだ。お前相手に全力で潰してもな」

ドスの聞いたような睨み方、マクマードの画面越しに睨みつけてくるフオートレス代表の偽名『マーズ・マセ』、マクマードは先ほど名瀬・タービンからフオートレスと戦っ

たという話を既に聞いていた。

その後素早くフォートレスからの違約金を収めるようにという脅しをマクマード自身を受けていた。

ここで断ることは簡単だが、その後の事を考えればフォートレスとの関係を考えればここで断る事がテイワズの終わりを意味している。それは出来ない。

「分かった。こちらでもフォートレスと正面切つて争うつもりは無い。違約金。そちらが受けた依頼の三倍の額を支払う」

「了解だ。では……………交渉の場はドルトコロニーにしようか。お互いに用事があるだろう?」

マクマードは目を大きく開く。

この男はどこまで知っているのだろうか、目の前で睨んでいるこの男が呟くこの言葉。

「ドルトのテイワズ支店にこちらから出向かせてもらう。ただし、お互いに交渉役二名のみとする。盗聴や盗撮の類を使用した場合は裏切りとみなし人質及びバルバトスは返さない。以上の条件でよいな?」

「交渉役とは?」

「そつちは勝手に決めればいい。こつちは私以外と言えよいいかな?」

「分かった。ではドルトで」

三日月はゆつくりと目を開き、自分の体が拘束されていないことを足から腕にかけて確かめ、ゆつくりと立ち上がると白の個室。

ベットだけの寂しい部屋で、ドアに手を掛けて開こうとするが開く気配がしない。

自分の病院着以外見当たらない、拳銃もノーマルスツすらも見つからない。

捕まったのだという気持ち、負けたのだという感情が三日月に襲い掛かる。

再びベットに戻っていき、腰を掛けて出入り口をジツと眺めているとゆつくりとドアが横に開いていき、外からサブレが入って来た。

「どうやら起きたようだな」

「(い)は(ど)ハ(い)？」

「フォートレスの艦と言えば分かるだろ？お前は捕虜と言う扱いになつている。ドルトコロニーで交渉しだいで直ぐに返してやる。最もお前が暴れ回れば話は別だがな」

「大人しくしていれば？」

「一々確認するなよ。不信だと思われるだろ？」

サブレは三日月の側に飲み物をそつと置き、立ち去ろうとしたとき三日月が「どうすれば？」と尋ねてきた。

サブレは「はあ？」と振り返る。

「どうすればあんたみたいに強くなれる?」

「お前は十分強い。それ以上強くなってどうする?」

三日月は暗くどこまで問う。それをサブレは質問で返した。

「強くないと皆を守れないし、何より……オルガの命令もともにこなせない」

サブレの強烈な視線、三日月の視線がぶつかり合い衝突するがサブレは三日月を見ないように立ち去ってしまう。

「強さの理由なんて俺が教えられるような物じゃない」

そう言いながらその場から立ち去ってしまったサブレを未だにジツと見つめていた。

しかし、いなくなっただと思うと三日月は視線を下に落とし、飲み物に手を伸ばす。

すると三日月の腹から小さな音が鳴り、同時に空腹感が訪れる。

「腹減ったな。何かないのかな?」

「お弁当を持ってきてやったぞガキ」

部屋の扉をゆっくりと開いて中を入れてきたのは『マハラジャ・ダースリン』…彼がお弁当箱を持って現れた。

お弁当を三日月に手渡すとマハラジャはお酒を持ってきていた簡易的な椅子に座ってお酒を飲みだした。

「さっきの話聞かせてもらったぞ。あいつに『強さ』を聞いたな」

「聞いたけど?」

「フン。あいつはそれを答えんだろう」

「なんで?」

「照れくさいのだ。恥ずかしいとも言うな。あいつにとって強さとは己の弱さを知るという意味でもあるからな」

三日月は「弱さ?」と呟く。

「ああ、強さを突き止めたければその証明を知る事だ。それが『強さの証明』であり、『弱さ』でもある。自分の弱さを知り、その弱さと向き合う事で強さへの道が出来る」

「強さの証明? 強さへの道?」

「ただ修行して、特訓して強くなっても手に入る強さは『修羅』の道しかない。修羅の道は自滅の道でもある」

「自滅……」

「目標を見付けて、その為に努力する。その為には自分の弱さを知る事、自分の弱点を知り、その為に何が出来たのかを知ること大事だ。お前にそれが出来るかな?」

マハラジャの視線に三日月はつい逸らしてしまう。

「強くなりたい。仲間を守る為という理由は立派だが、同時にお前はそれ以外の事を見ないようにしていないか? お前は守る為に何が出来たのか、そのための努力をしている

のだろうか、お前は周囲の苦勞を知っているか？」

「苦勞？」

「そうだ。例えばお前の仲間が何に苦しみ、お前の仲間が何を考えており、その為にお前が何が出来たのかを知ろうと努力はしているか？知らないからとそこで考えを閉ざしていいか？」

それだけ言うマハラジャは黙り込み、それ以上は何も語らない。

「お前はお前の代表に何をしてやれているのか、代表一人に思考を預けていないか？お前が分かち合いたいと思ってもな、周囲にいる大人たちにまみれていれば自分が背負わなければと思いつむのも無理はない。その状況でもお前はそんな人間に「何をすればいい？」と尋ねていないか？」

尋ねている。

きっとこれからもそれだけは変わらない。

それでいいんだと思っていた。

「それも一つの方法だと思うぞ。でも、それではいずれ自滅する。思考が袋小路に迷い込んでいるのと同じだ。広い視野で物事を見つめることが、探し出すことが重要なんだ。はつきり言おう。お前の代表も、お前も子供なんだ。それを自覚し、自分達がどうやれば大人になれるのかを考えようとせん限り、何をしても子供のままで」

子供であり、ガキである。

何をしていても決して大人になれない。

「自分のしたいことを時に我慢することも、したい事の為に努力することも大切な事だ。時として正しさがお前に牙をむくだろう。時として大人がお前達を道具として利用しようとするだろう。だが、それはお前達が幼い限りどうしようもない。そこから抜け出すことは出来ない」

かつてCGSの大人たちはオルガ達を利用していた。

それはブルワーズの者達も同じである。

「大人達に頭を下げて、大人たちに従うふりをして何かを学び、学習する為に吸収する為に誇りを投げ出すことも大切だと知るべきだな」

対等に見てもらいたいという気持ちが強くと、オルガはそれ故に大人に対しても喧嘩口調で接しようとする。

「今お前達の周囲にいる大人たちはお前の代表の子供っぽさを見ないふりをしてくれているだけだ。しかし、私は甘くないぞ。はつきり言ってやる。お前達は子供だ。自分のケツもまともには拭けない情けない子供」

強くなりたい。

「サブレは強くなりたいと思うのは自分の弱さを知っているからだ。闇雲に強くなりた

いわけじゃない。仲間を守るためにはただ強くなればいいのではない。知識としての強さ、戦略としての強さ、何より絆としての強さが必要だ。サブレの言葉ではないが、お前のモビルスーツ戦の強さは十分だ。それ以上突き詰めようがないほどにな」

マハラジャはゆつくりと立ち上がり、三日月を幼い子供を見るような目で見つめる。「それ以上の強さは人間を捨てるしかないな。お前がそれでいいのならそう提案すればいいだろう。その場合、お前は人間としての大事な『何か』を失い、お前の仲間達も『人』としての大事な感性を失う事になる。お前が仲間達にそれを押し付けたいのなら話は別だ」

押し付けたいとは思わない。

しかし、強くなりたいという想いに決して偽りは無い。

「まあ、少し考えてみる事だ。その上で頼み方を少し考えてみる」

三日月はあれから少しだけ考えた。

マハラジャが言っていた言葉の意味、人間を捨てても強くなりたいのか。そんな重みを仲間達に押し付けたいのか。

分かっている。

強くなりたい、その上で仲間達を守りたいという気持ちは決して変わらない。

それでも、今後の事をきちんと考えたうえで自分達に必要な何かをこの組織は持つて

いるように思える。

オルガの幼さと周囲の考える『理想のオルガ』が本人を大人なんだと言いつけさせる切つ掛けになっているのは確かだった。

オルガを変えるだけの人間が必要で、その素質を『マハラジャ・ダースリン』は備えている。

サブレが部屋に入ってきて事務的に今後のスケジュールを話す姿を見ている。

「以上だ。他に質問は？」

「強くなりしたい」

サブレは大きなため息を吐き出す。

「またその話か？」

「みんなを支えられるように、一人でも多くの仲間を守れるように。戦術を教えて欲しい。戦い方を」

「……………父さんから何か聞いたのか？お前の弱さ。少しは自覚できたようだな」

「うん。俺考えることを放棄してた。でも、もう放棄しない。だから教えて欲しい」

「俺が教えてやれることがどれだけ多いのかなんて言えないし、その上で時間がない事だけは言える。最低限の事は今すぐにも叩き込んでやる」

サブレはタブレットを開く。

「まずは集団対集団を学ぶところが必要だな。モビルワーカーとモビルスーツでは集団戦の戦い方がまるで違う。と言うのも、モビルスーツは個々の性能や才能の差がはつきりと表れる。それは今までの経験で分かったはずだ。違うか？」

「うん。タービンスの戦い方はうまかった。正直ビスケットがいなかったら昭弘はやられてた」

「これは兄さんが事前に俺の戦術としての知識があつたからだな。モビルスーツ戦は戦術が重要な意味を持つ。周辺に活用できる物は無いのか？性能や才能差を埋めることが出来るのは戦術しかない。逆に言えばどれだけ戦術が高くても、個人の練度が低ければ負けることもあり得る。お前達の初戦で勝つことが出来たのは個人の練度で言うとお前個人の練度が勝つたのと、お前達の戦術が勝つたお陰だ。他にも色々戦術や戦い方があるのだがな」

サブレはタブレットを三日月に投げつけ、三日月はそのタブレットを受け取る。

「それにモビルスーツの効果的な動かし方や、お前でもできそうな戦術を入れたる。文字が読めなくても音声によって教えてくれる。まあ、次に味方として出会う機会があれば続きを教えてやる」

そう言つてサブレは部屋から出ていく。

『モビルスーツ戦において動作の初動を見抜くことは大切です。モビルスーツとモビル

ワーカーとの大きな違いは搭載できる武装の多さです。そして機械で運用する以上は初動で必ず動きを読むことが出来ます。また、阿頼耶識も初動に対して動きに一定のパターンがある事があります。戦いに対して相手の動きを読むことが大切です』

女の機械の声でそんな説明を受ける中、三日月は自分が負けた理由を知った。

今までの戦い方から三日月の動作の予測を考え、その上で動きを読んで戦っていた。

今までの積み重ね。

それが三日月の敗北だった。

ドルト編

交わる者達

イサリビとハンマーヘッドは交渉が行われる予定のドルトコロニーへと向かっていた。

鉄華団のメンバーはどこか意気消沈気味であり、みんなどこか仕事が見つからない様な状態である。

ブリッジでも同じような状態である。

ユージンがイライラしながら振り返り、オルガに不満をぶつける。

「本当に帰ってくるのかよ!! なんて俺達が金を支払わなくちゃいけないんだよ!!」

ユージンの言葉にため息を交えながら口を開いた。

「兄貴から言われたらどろ? 俺達が討ったブルワーズは本来あいつらのターゲットだったんだ。俺達が代わりに討ったことは裏社会では違反行動で、そのツケをテイワズが支払わなくちゃいけないって」

「それは聞いたよ! なんて俺達狙われたのにそんな金も支払わなくちゃいけないんだよ!!」

「裏社会のルールだって聞いたろ？ 相手は裏社会では『裏のギャラルホルン』なんて言われ方をしているぐらいだ」

「あいつらそんなに強いのかよ？ 数だってそんなに多くなかったじゃねえか？」

ユージンの言葉にオルガが反応するが、それより早く名瀬・タービンがブリッジにやって来た。

「アレは氷山の一角の中でもごく一部だ。まあ、今回は相手が悪かったな。あいつは『死神』と恐れられるあいつらの中では五本指に入るぐらい恐ろしい奴だ」

ユージンを含めてほぼ全員が「死神？」と口をそろえて呟く。

「ああ、五本指に入る様な奴らは皆裏社会ではそれなりに名の通った奴らで、一人一人がやばい実力者だからな。特に死神はある噂でも有名だ」

「噂っすか？」

「死神と戦った奴で生き残った奴はいない」

低い声でそう語る名瀬の言葉に全員が息を呑む。

ユージンすらも反抗する気欲が湧いてこなくなつた。

名瀬の言葉の後にビスケットがブリッジに入つて来た。

「オルガ今良いかな？」

「ああ。どうした？」

「クーデリアさんやアトラを連れてドルトにショッピングにでも行こうかと思ってね。二人共三日月がいなくなつてから正直テンションが下がっているし。気分転換でもしてこうと思つてね。その方が良いだろうし」

「ああ、そうだな。あの二人にしてもらうことも無いし、いいんじやねえか？その代りお前とフミタンさんが付いていくことが条件だ」

「分かつた。フミタンさんにもそう伝えておくね」

『手筈は予定通り。クーデリアを伴いドルト2へ入港せよ』

フミタンの元に送られてきたメールを確認しつつ、視線をクーデリアからプレゼントされたネックレスをジツと視線を送る。

かつてフミタンはクーデリアから『火星の人々を知りたい』と言つていたことを思い出し、心が揺れる。サブレに火星で言われたことも彼女の心が大きく揺れる理由になっている。

しかし、ドアを叩く音と共にフミタンの意識がドアの方に向く、外へのモニターにアトラとクーデリアがやってきていた。

「フミタン。ドルト3に観光しに行かない？ビスケットさんが仕事をすることも無いから行きませんか？」

フミタンはドアを開けて姿を現す。

「しかし、お嬢様」

「ね？いいでしょフミタン」

クーデリアの言葉に何故か否定できずにおり、「分かりました」と呟く事しかできない。

どうして自分がクーデリアの言葉を否定できないのか、彼女自身がよく分かっていたいなかった。

グシオンの外装が剥がされていくと中からガンダムフレーム共通の頭部が姿が現し、それをフォートレスの技術班が解析していき、アガレスとグシオンとバルバトスを繋げてしまう。

「あれって何しているんです？」

明楽の些細な質問にサブレ自身は心の中で（前に教えてやったような気がするけど……）と呟く。

「アガレスには詳細なガンダムフレームの全データが入っていて、そのデータを照合させながらガンダムに最適な装備をアガレスが演算してくれるというわけだ。アガレスには一種の演算処理システムも搭載されていて、戦闘データを入れれば詳細な装備の追加データを演出してくれる」

「へえ……………なら俺のガンダムも？」

「ああ、アガレスがお前の戦闘データとアンドロマリウスに合う装備を定期的に導き出すことが出来た。今回も同じだ。グシオンは別だが、バルバトスは現在パイロットである三日月の戦闘データを現在アガレスが演算している最中だ」

アガレスのツインアイモニターが青く発光しているのがその証拠である。

先ほどまで修理はすっかり終わっているらしく、次の戦闘では使えそうだという話。

しかし、サブレはその視線をマルコシアスの方へと向け、落ち着いた様子を見せていたが、別の部屋から格納庫で装甲をドンドン剥がされていくバルバトスの様子を複雑な様子見つめる三日月。

「どうした？お前がここに連れてきてほしいというから連れてきたんだぞ。少しぐらい感謝したらどうだ？」

三日月はマハラジャに連れられて格納庫直ぐの特別部屋にやってきていた。三日月は「ありがと」とだけいい視線を移動させない。

「あれって何しているの？」

「バルバトスの強化をしている最中だ。お前のデータを合わせて造っている。まあ、あそこまでポロポロにしてしまったんだ。違約金を支払う代わりと言った所だ。まあ、感謝せんでもいい」

バルバトスに新しい装甲をつぎ足されていき、三日月はその分厚い装甲と追加スラス

ターを足されていくバルバトスの追加形態を見つめていた。

「そうだ。お前グシオンのパイロットに候補はおらんか？あまりガンダムフレームを持つていると面倒だからな。お前達に渡しておこうと思つて。誰かおらんか？」

「……………昭弘なら多分」

「そうか……………？昭弘？おい。そいつの姓はしらんか？」

マハラジャの言葉に今度は三日月が反応して見せる。「なんで？」と尋ねるが、マハラジャはあえて何も答えない。

「アルトランド。だったはず。けどなんで？」

「やはりか……………向こうに小柄な小僧がいるな？あいつは『明楽・アルトランド』という、ちなみに母親は今も健在だ。そこまで言えば十分だろう」

まっすぐ向ける視線には純粋な目でサブレに付きまとう明楽がいた。

昌弘は他のブルワーズの子供達とは全くの別の個室で待機しており、昭弘が部屋に入つてきて嫌な沈黙が流れる。

「今更……………今更許してくれとは言わねえ。お前を捜すことを辞めたことは事実だ。正直諦めてた」

「もう……………いいよ」

「でも……………お前を連れて戻りたいといった時に、手伝つてくれた仲間達がいた。諦め

そうになった俺に喝を入れた。お前との関係を諦めたくない。少しづつでいい……元通りにやりたい」

昭弘はそれだけを言って立ち去ろうとすると昌弘は小さな声で「……昭弘兄ちゃん」と呟いたのを昭弘は聞き逃さなかったがあえて気づかないふりをして立ち去った。

アインとガエリオはマクギリスの休暇中に部隊を動かし鉄華団を追撃しようとしていた。

アインはそれこそ勝手に部隊を動かすことを指摘したが、ガエリオは『演習目的』と言ってきかなかった。

時を同じくしてビスケット達もドルトへと入港しようとしており、アトラと一緒に港に入港した本当に三十分後にサブレと明楽とジョシユアも入って来た。

オルガ達鉄は団は三日月回収の交渉を名瀬達に任せ、自らは仕事の為にドルト2に入っていった。

「あんたらが鉄華団かあ。驚いた。本当に若いんだなあ」

「なんだ？ガキだからってなめてんのか？」

「いや誤解しないでくれ。俺達はみんなあんた達が来てくれるのを待ってたんだよ」

社員は一緒にこの場にきていたメリビットの方を見ながら「アンタがクーデリア・藍那・バーンスタインさんか？」と質問する。

「クーデリアは用事で別のコロニーに行っている。ここへは来ない」

社員の一人が「なんだ」と残念そうにしており、更に「十代にしちや老けてると思っただぜ」とし釣れないことを言う。

メリビットが「老け…」と気にしており、オルガがどこかおかしさを感じている。一緒についてきたシノやユージン、ヤマギも同じくおかしさを感じている中、社員の一人の言葉に首を傾げる。

「俺達労働者の希望の星だからな。それとクーデリアさんを守って地球へ旅する若き騎士団」

しかしオルガは気にしないことにして仕事をし始める。

ショッピングセンターで買い物をする切っ掛けは、ビスケットに尋ねた「前に風呂に入ったのはいつですか？」という質問に、「五日前?」と答えたのがきっかけだった。

アトラとクーデリアは前々からイサリビ内で漂っている匂いが気になっていた。

これを機に衛生環境を正そうとしており、着換えから洗剤まで色々と購入していく。

ビスケットはショッピングセンターの中を眺めており、それを興味深そうに見ているアトラが「どうしたの?」と尋ねるとビスケットは自分がこの出身だと語り始める。

「じゃあビスケットはこのコロニー出身?」

「出身はドルト2のスラム街だけだね。でも、ドルト2の生活環境は最悪で、まともに保

険みたいな仕組みはなくて、働けなくなったらそこでクビなんだよ。僕達の両親は事故で死んだんだけど、僕たちはその所為でこのコロナー群に住めなくなつたんだ。それでバラバラ。一番上の兄さんはまだここにいるはずだけど」

「ビスケットにお兄さんが？」

「うん、随分長い事あつて無いんだけどね。学校に行つてた兄さんは勉強ができて会社の偉い人の家に引き取つてもらえたんだ。あれから連絡も取つてないけど、まだドルト3に住んでいるのかな？」

「会つてみようよ！」

「でも急に連絡何てしたら困るかもしれないし」

「困るわけないじゃない！兄妹なんだからお兄さんだつて会いたいには決まつてるよ！」

アトラの言葉にクーデリアも「私もそう思います」と告げた。

「このまま会わずにここを去つてしまつたら後悔が残るのでは？」

クーデリアの言葉にアトラは何度も頷く。

「連絡してあげて。ねっ？」

ビスケットが一番上の兄サヴァランに連絡を取つていた頃、サブレは近い場所でシヨップングを楽しんでいた。しかし、そんなサブレの前に一台の車が止まつた。

明楽やジョシユアが表情を暗くし、サブレはあくまでも冷静で落ち着いた表情で見つ

めている。

「サブレ様。ご主人様が是非お会いしたいと」

明楽が小声で「誰？」とサブレに尋ね、サブレは大きな声で運転手に対して告げる。

「お会いしたくないと告げて帰ってくれ。カヌーレ家の使用人。俺は今更会いたくないと」

「ご主人様は少しだけで良いからと……」

「今更俺達兄妹をバラバラにしたことを反省している？そんな奴なら俺を呼び出した
りしないよな？」

「はい。ご主人様はあなたを養子として引き取りたいといっております」

サブレは小声で「そんな事だろうと思ったよ」と告げる。

「だとしたら余計にお断りですね。俺はあんたみたいにドルトに未練なんて存在しない。正直どうでもいい」

「ご主人様曰く、それなら二人のお兄さんが無事に帰る保証はないとのことですよ」

サブレの眉がかすかに動く。

明楽は「人質？」とジョシユアは嫌そうな表情で「卑怯者」と告げる。

「サヴァラン兄さんならともかく、ビスケット兄さんは……?!まさかこのコロニーに
来ているのか？」

「はい。もう既に同じ場所に一緒に隔離しており、ご主人はあなたが来ないならこの二人の安全は保障できない」

「たとえついて行っても俺が首を縦には振らないぞ」

「それでも構わないとのことです。では……………こちらです」

サブレはリムジンに乗り込もうとする寸前に明楽とジョシユアに耳打ちで「二人の確保を頼む」と告げる。

そのままリムジンに乗ってカヌーレ家の本家にまっすぐ向かって行く。

オルガ達は自分達が運んだ積み荷がモバイルワーカーだと知って驚きを隠せずにおり、社員の一人が「いよいよ始まるんだな」と戦う気満々の声がする。

「ああ。長い間の我慢もこれで終わりだ」

やる気満々の組合員であるが、オルガ達は自分達が武器を提供したと気が付き、驚きながらオルガがメリビットに確認させる。

「リストには『工業用の物資』としか……………」

武器を持ちはしやく者達、メリビットが「依頼表を確認してみます」と言って立ち去っていく。

「あんた達は何をやるうとしてるんだ？」

「聞いていないのか？あんたら俺達の支援者に頼まれてこいつを届けてくれたんだろ

「？」

「支援者？俺達はただ仕事で……」

「あんたたちの支援者ってのは一体誰なんだ？」

「名前は知らん。クーデリアさんの代理を名乗っていたが、火星に続いて他の場所でも地球への反抗の狼煙を上げようとクーデリアさんが呼びかけてるってな。その為に必要な武器弾薬を鉄華団の手を通してクーデリアさんが俺達に提供してくれるって」

なんて説明をしているとギャラルホルンがまるでタイミングを見計らったように現れた。

「ギャラルホルン!？」

「全員動くな！武器を捨て両手が見えるように高く上げろ！戦闘用のモバイルワーカーに武器弾薬かぁ。通報は本当だったようだな。ここで違法な取引があるってな！」

しかし、ギャラルホルン相手に一人の組合員がアサルトライフルの引き金を容赦なく引き、それを合図と多くの組合員が戦い始める。オルガ達が巻き込まれる形で戦火が開く。

戦おうとするユージン達を制止する。

するとイサリビに戻ったメリビットから連絡が入った。

「団長さん？そっちは一体何が……？」

「今直ぐ船を出せ！ギヤルホルンの小競り合いに巻き込まれた。この場に鉄華団の船があるのはまずい」

「一つだけ報告が。荷物の依頼主ですがGNトレーディングという会社のようなです」

フミタンの心は揺れていた。

クーデリアは本来ドルト内での暴動で命を落とすというシナリオ、しかし、今彼女はフミタンと共に買い物をしている。

迷いの中で葛藤するフミタン。

彼女はどうして自分が命令を無視しているのかが分からなかった。

葛藤と共に思い出すのはサブレに告げられた言葉だった。

カヌーレ家の思惑と共に多くの人の運命と、グリフォン家の過去が明らかになろうとしていた。

守り続けてきた弟

カヌーレ家をはじめとするドルトカンパニーの上層部と俺こと『サブレ・グリフォン』が実はかかわりがあると知っているのは俺の義理の父親である『マハラジャ・ダースリン』以外に数人しかいない。

俺からすれば今更『カヌーレ家』にお呼ばれしても大して面白くもない。

あの頃の俺はあと少しでカヌーレ家に殴り込みをかけていた所だったし、実際父さんに止められるまでそのつもりだった。

車で今更連れていかれても何とも思わないのが事実で、窓の外から見える景色を見ることで少しだけ気持ちを落ち着かせていると、マスクを付けた怪しげな男が一瞬だけ写った。

最近変な人が多いな。

フミタンの心は揺れていた。

本来の役目を果たさず、クーデリアを生かし続けていることに困惑を覚えている。

責任を果たす事、でもなぜ自分が与えられた役目を放棄してクーデリアを守り続けている。

しかし、時は決して待つてはくれない。

時を同じくしてドルトカンパニーとの争いに巻き込まれたオルガ達、組合員からの報告でビスケツトとアトラが誘拐されたと聞かされた。

その情報は瞬く間にフミタンとクーデリアに共有されていく。

オルガからクーデリアの事を任せられ、それを簡単に受け入れる度にサブレの言葉が脳裏を過る。

（あの少年は何が言いたかったのだろうか？あの少年は何を知っているのだろうか？）
多くの人の命を巻き込み、今更引き返す道など残されていない争いが起ころうとしていた。

俺はカヌーレ家の執務室に連れていかれ、大きな執務室で一人「待つていて欲しい」なんて言われても大人しく待つているわけが無く。

監視カメラが無い事を確認しつつ、何か情報が何かどうかだけ確認する。

しかし、情報なんてあるわけが無く、あるのはカヌーレ家のパソコンがあるだけ。

「ハロ！元氣出せ！」

「そういえば付いてきていたんだっけ？」

いつの間にか俺の足元で転がっていたハロ。

俺は良い事を思いつき、ハロを持ち上げてハロの口の中から一本のコードを取り出し

てパソコンと接続させる。

「ハロー！ロード中!!」

「急げって……見つかったら面倒だぞ」

するとパソコンの画面にはカヌーレ家の計画書が姿を現し、俺はそれをマジマジと見つめる。

そこには俺の兄が密かにスラム街と取引をしており、それをドルトカンパニー上層部が知っており、ギャラルホルンのアリアンロッド艦隊と取引している事実が記されていた。

アリアンロッド艦隊にドルトカンパニーのスラム街の組合員を売り飛ばそうとしている事、それを兄が知って阻止従っていたことまでが記されていた。

それだけではない。

ドルトカンパニーの上層部は俺の兄以外にも時折ではあるが、スラム街から子供を引き取っており、そうする事でスラム街から上を目指せるのだと教えることで反乱を押しさえていたという事実。

そこまで俺が知っていたことであるが、問題はその下に記載されていた。

俺の兄サヴァランとクーデリアをまとめて殺す事でドルトの反乱を引き起こそうとしているという事実。

そして、その下にはリアルタイムで更新されたクーデリアと呼ばれている少女の写真。
真。

俺はその少女を知っている。

三日月が救出したがっていたはずのアトラという名の少女だろう。

「クソが！あのバカ兄貴は……誤解して捕まえたのか!?最悪の事態だろ！」

俺は手に入れたデータをリアルタイムでフォートレス上層部へと送りつけ、ハ口をわきに抱えたまま屋敷から脱出するつもりになった。

クーデリアと誤解されているアトラ、アトラはクーデリアを守る為拷問に耐え抜いていた頃、ビスケットとサヴァランは同じ部屋にいた。

「大した娘だな。まだ何も喋っていないそうだ。あの女の計画について何か知っていることがあるなら話せ。ギャラルホルンとの交渉材料にできる」

俯きサヴァランと視線を合わせないようにしながら呟く。

「クッキーとクラツカは九歳になったんです……二人があんなに大きくなったのは兄さんが俺達を火星に行かせてくれたお陰です」

「あの時は邪魔だったからそうしたまでだ……」

ビスケットは顔を上げ兄を怒鳴りつける。

「俺はそんな兄さんの背中に憧れて、いつも追いかけていたのに……なんでその兄さん

「がこんな真似を！」

「お前達の運んできた武器を手にした組合員が暴動でも起こしてみろ。この機会を待っていたギャラルホルンは大義名分を掲げて鎮圧に乗り出すぞ！血を流すのはお前も暮らしていたスラムの住人だ！それでいいのか!？」

「クーデリアさんをギャラルホルンに差し出して良い理由にはならない！それに……！」

「革命の乙女の身柄を押さえることが出来ればギャラルホルンも満足することが出来るだろう！見せしめの虐殺を回避できるなら理由としては十分だ！」

ビスケットは自分の話を聞かない兄に涙を流しながら怒鳴りつける。

「彼女はクーデリアさんじゃないんですよ！」

ビスケットの叫びを前にしてサヴァランは混乱した目つきで視界を泳がせるが、それでも意見を曲げることは無かった。

「いや……彼女はクーデリア・藍那・バーンスタインだ……別人だろうとギャラルホルンを止められるならそれでいい」

「正気ですか……？兄さん……」

「私達には！もはや手段を選んでいる時間はないんだ！」

クーデリアは逃げ出そうとホテルの廊下をこつそりと歩き出し、それに気が付いたフ

ミタンが制止する。

「私が本物だと名乗り出れば……」

「いけませんお嬢様」

フミタンは強くクーデリアの左腕を掴む。

「今となつてはアトラさんが偽者だと分かればその方が危険かもしれません」

「私は大切な家族を……アトラさんや鉄華団の皆さん、それにフミタンを裏切るような真似をしたくないんです！」

クーデリアのまつすぐな瞳にフミタンの表情が歪む。

「お嬢様はあの頃から何も変わっていませんね。その真直ぐな瞳が私はずっと嫌いでした。何も知らないが故に希望を抱ける。だから現実を知って濁ってしまえばいいと思っていたのに」

「何を言っているの……?」

「ですが変わったのは私の方でした。変わらなければこのような思いを抱かずに済んだのに。どんな行為にも責任は付きまとうものなのです」

（あの少年が言っていた通りだった。あの見透かしたような少年の言う通りだった）

クーデリアは何を言われているのか全く理解できず、「お願い分かるように言つて」と尋ねるが、それを遮る様に仮面を着けた男が立ちふさがる。

「一度お目にかかりたいと思つていましたよ。クーデリア・藍那・バーンスタイン。君はここで死ぬべき人ではない。すぐにたつた方がよい。時期にここは労働者達もよる武装決起で荒れるだろう。その為の武器を鉄華団に運ばせたのは誰だと思ふ？ あなたの支援者であるノブリス・ゴルドンだ。この意味が分からないほど子供でもあるまい。あれはあなたを利用する為に自らの手の者を側に潜り込ませているような男だよ」

「フミタンは私の家族です……！」

「その男の言葉は本当です」

「嘘……嘘よねフミタン……？」

「さようならお嬢様」

去つていくフミタンを追いかけようとするがそれを仮面を着けた男が遮る。

「革命の乙女たるその身を大切にしまえ。君は人々の希望になれる」

アトラとビスケットが同じ部屋に閉じ込められて、何も出来ない時間を過ごしていると大きな爆発音と衝撃が建物中に響き渡る。

外からは多数の銃撃音が響き渡り、窓の外から閃光手榴弾などの光までが見える。

「何かあつたのかな？」

「分かんない。でも……アトラは俺の後ろに隠れてて」

ビスケットはアトラを守る為盾になっていると、部屋のカギを強引に壊し侵入して

くる一人の少年。

黒髪の少年明楽は「居たよ!」と大きな声を挙げる。

「サブレ先輩に頼まれて助けに来ました!大丈夫です?」

二人の手錠を外し、ジョシユアが見張りの男性をいたぶっている姿からアトラとビスケツトは視線を外す。

「こっちはですよ」

明楽からの案内を受けながら進んで行く道の先、ようやくの想いで外に出ると後ろからサヴァランが追いかけてくる。

さすがの明楽とジョシユアですら睨みつけるが、サヴァランは必死になって縋りつくように追いかけてくる。

「頼むその娘を連れてこっちに来てくれ!もうこれしかないんだ!」

しかし、明楽達は引き渡すつもりは無かったが、全員にとって予想外の人物が現れた。カヌーレ家当主のアルガ・カヌーレが汚い路地裏から黒いスーツを着ており、周りにボディーガードを引き連れながら現れた。

サヴァランも表情を引きつらせ、カヌーレ家当主はサヴァランの前に立つと思いつ切り蹴飛ばした。

「たく………使えん奴だ。結局スラムの人間は成長したところでスラムの人間という事

だな。その上誤解して連れてくるとは……まあいい。この女を使えば本物のクーデリア・藍那・バーンスタインが姿を現すだろう」

倒れるサヴァランを足で踏みつける大柄のボディガード、ビスケットはとつさに走り出し兄を助けようとするがそのビスケットを殴り飛ばすもう一人のボディガード。

カヌーレ家当主はビスケットを踏みつけながら見下す。

「全く。お前達兄弟には手間をかけさせてくれる。特にお前達の弟は面倒だったぞ。幼いながらに我々が両親を殺したと勘付いた時は流石に焦ったものだ」

ビスケットとサヴァランの目が大きく開き、驚きと混乱を混ぜ込んだような目でカヌーレ家当主を見つめる。

「な……………!?何を?」

「フン。情けない兄貴だな。まさかお前達を守る為にお前の弟がどんな苦勞をしていたかも知らずに。あのガキがここにいと面倒なんだな。全く。しかし、お前は……もう使えんな。サヴァランを殺せ」

ビスケットは必死になって抵抗しようとするその姿にカヌーレ家当主が怒りを滲ませ、アトラがビスケット助けに行こうと駆けだそうとするが、明樂がそれを許さない。「お前が先が良いのかな?どうせ犯罪をするような組織の手先だ。ギャラルホルンに差し出しても同じだろう。我々の秘密を知った可能性が高いお前を生かす理由は無いな」

そう言いながらハンドガンの銃口をビスケットの頭めがけて照準を付け、引き金を引こうとするが、それを必死で抵抗するサヴァラン。

サヴァランの鼻先を蹴り飛ばし、怒りのままにビスケットの腹と顔面に蹴りを何度も叩きつける。

明楽とジョシユアは人質を取られているような状況下で迂闊に動けない状態が続いていた。

情けなさがそうさせるのか、二人の兄弟の脳裏にサブレの姿がよぎった。

家族を陰で守り続けてきたたった一人の弟。

ビスケットが小さな声で「サブレ」と呟くと、その声に「もつと大きな声で聴きたいな」とまるで他人後のような声が近くから聞こえた。

拳銃の発砲音と同時にボディガードの二人が頭から血を流して倒れ、カヌーレ家主の頭が思いつきり吹っ飛ぶ

周囲は何が起きたのか、どうして吹っ飛んだのかを理解できずにいると先ほどまでカヌーレ家主が居た所にサブレがハンドガンを握りしめて立っていた。

「気安く触るな。俺の両親を殺し、兄妹まで手にかけてようとするお前を神が許そうが俺が許さない」

サブレは怒りを表情で感じさせ、逃げようとするカヌーレ家主の両足にハンドガン

で打ち付ける。

悲鳴を上げ転がり回るカヌーレ家当主は建物の中から姿を現したギヤラルホルンに助けを求めぬ。

「サブレ。こつちの片付けは終つたから殺すなら殺せ」

ギヤラルホルンの残酷な言葉を前に表情を引きつらせるカヌーレ家当主、サブレは足蹴にしながらハンドガンの銃口をまつすぐ向ける。

「止めろ！やめろお!!」

「金の力で何とかして見せろよ。そうやって今まで虐げてきただろ？」

サブレはハンドガンを引く指に力を籠め、乾いた発砲音と共にカヌーレ家の頭から大量の血が周囲に散らばる。

ドルトの反乱はいよいよ止まる事なくひたすら突き進もうとしていた。

すれ違いゆく者

「フミタン！どこ?!」

『嫌いだった……何も知らない、ただまっすぐな彼女の瞳が』

フミタンはギョツと握りしめるペンダント、フミタンはクーデリアに見つからないように物陰で息を潜む。

時を同じくして、ビスケットとアトラが誘拐された現場に到着したオルガ達だが、誘拐をした者は既に現場から移動してビスケット達を見つけ出す事は出来なかった。

そのまま走り出しクーデリアが泊っているはずのホテルへと足を向けたが、ホテルには誰もいないという事が発覚した。

「チエックアウトしてねえらしいぜ。ビスケットやアトラも居ねえし！クソ！あいつらどこに一旦だ？」

シノの焦りにも似た声にユージンやヤマギも似たような表情を浮かべる。

「だったら二人はどうしたんだ？」

「それがよお……それぞれ別に出ていったらしいんだ。ビスケットとアトラは事件現場から何者かと一緒に移動したらしいぜ」

「あ……！それと見知らぬ男性がその事件現場から移動していたのも見たらしいけど……」

それぞれの情報を見てもまるで見当がつかない、闇雲に探し出すしかない現状の中オルガ達は街中へと駆け出していった。

ホテルから外へと駆け出していくオルガ達の目の前でドルトカンパニーに不満を抱く人たちの抗議デモ活動が目に入った。

「我々の子供から未来を奪うな！」

「ギャラルホルンが出てくる前に実力行使に移るべきじゃないかって……」

「それは絶対駄目です。こちらからはけっして仕掛ける事のないよう指示を徹底させていただきます。武力ではギャラルホルンにかなわない。過激に走ろうとする人達を抑える為にも交渉で事を進める姿を見せることが重要なんです」

昭弘と名瀬とアミダの三人はドルトに泊まっているフォートレスの船の中へと入っていた。

そんな三人の目の前に生まれ変わったグシオンとバルバトスが現れる。

「本当にグシオンもくれるのかい？」

アミダの疑問に対しソニアは白い髪を右手で弾きながら答える。

「ええ、こちらに置いてても持て余すだけなのでね。勿論いらぬというのなら別にいい

けれど？こちらとしてはその辺に置いておくより使ってくれる人の側に置いておいた方が良いでしょう？幸いな事にこちらにはパイロットが居るのでしよう？」

そう言つて立ち去つていくソニア、昭弘の目の前に鎮座する生まれ変わったグシオンがあつた。

宇宙港へと向かつていたフミタンの目の前に黒服の男が現れるとフミタンは諦めたようにドルト3の街中へと帰つていった。

クーデリアを追いつめるための策を前にしてフミタンは未だに迷いの中にいた。

(私は何をしている……一体何を……)

迷いの中で行く当てもなく歩き続けるフミタン、遠くから手を振つて近づいてくるクーデリアは組合員に捕まつてしまった。

クーデリアは組合員に捕まつてしまい、黒服の男性は建物の中からクーデリアを見つけて出した。

時を同じくしてサブレ達は事件現場から少し離れたドルトカンパニービルの近くまで来ていた。

「さて……クーデリアを殺す事、これがノブリス・ゴルドンの目的でもある。そして、ドルトの反乱を切つ掛けにギャラルホルンは各地の反乱分子を排除するつもりだ」

「でもサブレ……どうやってクーデリアさんを殺すの？」

「デモ隊を排除すると同時にクーデリアも巻き込まれて死ぬのを望んでいるんだろうな」

「じゃあ！今からクーデリアさんを連れ戻さない」と

「落ち着いてアトラ！今から行っても巻き込まれるだけだよ」

「その通り。でも、俺はこれだけの数のデモ隊だ。クーデリアが死ぬ可能性は低いだろう。それはノブリスも予想していると把握しておいた方が良く。だから俺達はノブリスの手先をこちらで排除することで安全を確保する。既に明楽とジョシユアがノブリスの手先前まで向かっている。俺達はここで作戦終了を待つしかない。大通りにはいくなよ、巻き込まれるから」

不安そうにしてるアトラとそれを落ち着かせようとするビスケット、その前でタブレットで作戦内容を確認している。

同時刻ドルト本社から大きな爆発が起きるが、それをサブレとビスケットはアトラを庇うように動く。

組合員の制止も聞かず、ギャラルホルンは虐殺を開始したが、サブレは近くの監視カメラの映像を解析していた。

「何しているの？サブレ？これって監視カメラの映像？」

「爆発は内部からだ。吹き飛んだ瓦礫も外に散らばっているだろ？これも証拠になるか

ら回収しておけて上からの命令でな。いずれは俺達オートレスはこれらを証拠として扱う」

「止められないの!?! サブレ達なら救う事が出来るんじゃない?」

「アリアンロッド艦隊だけなら戦えるさ、でもギャラルホルン全体を相手にしようと思っただけで力不足だ。勝てる気がしない」

時を同じくして体を起こし周囲を見回したクーデリアは目の前で広がる惨劇を前にして怒りを滲ませる。

一人の女性を抱きしめ、その最後を看取るクーデリアの姿はテレビ局のカメラにばかり映っていた。

「どうして……どうしてこんな事になるんですか!?! なんて……」

(何をやっているの! 早く逃げなさい! あなたはまた……!)

齒を食いしぼるフミタン。

そこにスナイパーライフルでクーデリアの命を狙う黒い服装の男達。

「しぶといな。まだ生きている」

「ボスにとっては好都合だろ。注目を集めてる今こそ革命の乙女が散るのに絶好の舞台だろ」

スナイパーライフルの照準をまっすぐクーデリアの頭に向けるが、そのスコープが

真つ黒に染まった。

スナイパーの男は急いで顔を上げるが、男の前の前には見慣れぬ黒髪の少年である明楽が笑顔で立っていた。

「貴様! どうやってここに入った? おい! 何をしていたんだ?」

男が急いで振り返り相方の男性の方に視線を向けると、そこには喉を切り裂かれて血を流して倒れている男性と、嬉しそうにナイフを握っているジョシユア。

「ギャラルホルンはここにこないよ。通信もできないようにしてあるし、俺達のシナリオはデモ隊の攻撃に巻き込まれて亡くなった間抜けな作業員二名つてシナリオってどうかな?」

「き、貴様! どこの手の者だ!? 我々はノブリス様が裏に居るのだぞ!」

「あつそ……俺達は裏社会の支配者だよっていえば分かるでしょ?」

「!? ……マーズ・マセ……」

睨まれている相手が違い過ぎる。

「それに……」と明楽が言う、「これも知っていますよ?」とジョシユアも言う。

「……死神に睨まれた者は必ず死を迎える。あなた達は死神の怒りに触れた。それがあなた達が死ぬ理由」

ジョシユアはナイフで喉を掻っ捌き、血で周囲が真つ赤に染まる。

ドアがゆっくりと開けて室内に入ってくるギャラルホルンの士官の服を着た男性。

「おい。そろそろ撤退しろ。後処理はこちらで済ませておくから」

「はい！ ジョシユア！ 撤退しろ！」

「えー……私殺したりない」

「撤退しないとサブレ先輩から怒られるよ」

ジョシユアは怒られたくないという気持ちで撤退することにした。

フミタンは苛立ちを強めていたが、咄嗟にクーデリアの元へと歩き出しクーデリアの右手を掴んで引っ張った。

「嫌いだった……何も知らないまっすぐなだけのあなたの眼差しが、現実が見えたらすぐ曇ってしまうものと。でもあなたは輝きを失わずここまで」

「何を言っているのフミタン」

「変わってしまったのは私の方でした」

物陰に隠れられる場所まで移動すると振り返りフミタンはペンダントをクーデリアに返そうとする。

「これは私にはふさわしくない。出来る事ならこのまま私の事を忘れてください」

そう言つてフミタンはクーデリアとすれ違つて大通りまで戻ろうとする、クーデリアは急いで振り返り手を伸ばす。

ここで逃がせばフミタンは永遠に帰ってこない。
そんな気がした。

しかし、フミタンの動きは完全に止まり、クーデリアはフミタンの右腕を掴んでいた。
フミタンの視線の先にはサブレがまっすぐ見ていた。

「……何を言っているのか分からないの。でも……私が貴方を傷つけてしまったのなら
……謝るからまた一緒にいてほしいの！私の事が嫌いでもいいから……」

「……責任ですか……あの少年の言う通りですね」

「フミタン？」

「私はあなたが嫌いだった……でも、いつの間にかあなたが好きになっていった。
まっすぐに決して曲がらない強さを持っているあなたが……」

フミタンは振り返りまっすぐな瞳をクーデリアに向ける。

「だったらもつと私に色々な事を教えて……私もフミタンが好きだから……！これか
らも変わらない愛をあなたに捧げるわ」

「…………かしこまりました。お嬢様」

クーデリアとフミタンが抱きしめ合い、後ろからオルガ達が現れて回収しようとする
中、大通りを挟んで反対側にアトラとビスケットを見つけ出した。

「アトラさん。ビスケットさん。大丈夫ですか？」

「お嬢様！ダメです！」

フミタンは強くクーデリアの両肩を抱きしめ大通りから引き離し、ビスケツトもクーデリアへと駆け出そうとするアトラの両肩を抱きしめて引き寄せる。

ほぼ同時に両サイドの建物が崩れ落ちて、大通りのど真ん中が瓦礫と炎で遮った。

「大丈夫か!? ビスケツト！」

「こっちは大丈夫！それより俺達はこのままフォートレスさんに合流するよ。地球圏で活動するのに手伝ってもらえないか相談してみる！」

オルガは心配そうな表情を浮かべ「大丈夫なのか？」と大きな声を上げる。

「大丈夫だよ！オルガ達こそ気を付けて！近くにテレビ局の車が居たはずだよ！」

「分かった！お前こそ気を付けてな！」

二人は別れて進む。

ビスケツトはアトラと一緒に路地の向こう側に戻る。

「先輩！仕事終わりましたよ。そういえば……さつきお兄さんが今にも死にそうな表情で倉庫の方へと歩いていきそうでしたよ。何かこう……今にも自殺しそうな表情で！」

話を聞いたビスケツトは素早く走り出していった。それを追いかけるようにサブレットアトラも急いで追いかける。

明楽とジョシユアも追いかける中、五人の前の前に古ぼけた倉庫が姿を現し、倉庫の

中へと足を踏み込むと今まさに首を吊って自殺しようとしていたサヴァランが視界に移った。

「駄目！」

ビスケットは急いでタックルを決めてサヴァランを自殺から救うが、サヴァランは勢いよく立ち上がり怒りを含めた涙目でビスケットを睨みつける。

「お前達の所為だ！お前達の所為でみんな死んだんだぞ」

サブレは後ろからすつ飛んでいきサヴァランの首を絞める。

「だったら見ず知らずの少女を差し出すのか!?その為なら実の弟を巻き込むのか!?それが間違っているやり方だと知っていただろ!?似合わないくせに間に立とうとするな!そんな俺達の事で責任を感じるぐらいなら……………どうして俺達を見捨てたんだ!!」

「……………あんなことに……………あんなことになるとは思わなかったんだ」

「生きて……………生きて償え。俺達兄妹に償って生きろ!!アンタはグリフォン家の長男だろ!!俺達弟の前で死ぬことが責任なのか?責任を取るのなら、俺達兄妹に責任を取れ……………!」

「一緒に謝るろうよ。クッキーとクラツカに一緒に謝って又……………一緒に暮らそう。だから……………帰ってきてよ」

サヴァランは小さな声で「……………すまない」とだけ謝った。

クーデリアの決意

クーデリアは真つ赤に染まっている自らのドレスの裾を抑えながら、先ほどの惨状を思い出しながら彼女自身自分に何が出来たのかを考えていた。

ドルト3の港口では多くの人が足止めを喰らっており、その中に鉄華団のメンバーも同じように足止めにあっていた。

「なあーオルガなんかできる事ねえのか？俺達に……………」

シノの言葉にオルガは「駄目だ」とだけしか返さない。タービンスとの約束通り今回の一件で下手に動き回れば鉄華団は目を付けられてしまうだろう。

「あのおっさん達の仲間なんだよな？おっさん達言つてたじゃねえか、俺達の事騎士団つてさ。英雄で希望の星なんだぜ!？」

「駄目だ！俺達の仕事は依頼主を無事に地球に送り届ける事だ」

「私は……………私はこのまま地球へはいけません。私が地球を目指したのは火星の人々が幸せに暮らせる世界を作る為。でも火星だけではなかった。ここの人達も同じように虐げられ踏みつけられ命さえも……………それを守れないなら…立ち上がれないならそんな私の言葉など誰も聞くはずがない。私は戦いますたとえ一人でも、もう逃げない……………」

二度と」

「お嬢様……………」

クーデリアの決意、その意思を伝えるためにもオルガ達も動くことになった。

「おいも面白い！撤収だ。治安の悪さを伝える報道はこれ以上いらんとよ。誰もが平和に楽しく暮らせるコロニーのイメージが傷が付くんだそうだ」

「今更……………」

「真実の報道が聞いてあきれれるぜ」

テレビ局の連中の前に一人の少年がやって来た。

「すいません。真実の報道をする気がありますか？」

「誰だ？お前……………」

「ある組織のモノです。そのつもりがあるならこつちの作戦に乗りませんか？安全の保障は出来ませんが。あなた達の勇気があればこの状況を打開し、あなた達の安全も保証できるかもしれませんよ」

「むう……………」

「あなた達はたかが一傭兵企業がこんな事態を引き起こす事を良しにしている良いんですか？」

「……………そうだよな。真実の報道ってやつはそういう事だよな！よし！坊主俺達はどう

すればいい?」

「これをこの写真の女性と一緒にいる前髪の男性に渡してください。渡した際に『ビスケット・グリフォンより』と伝えてください。それだけでこの記録媒体が何を示しているのか分かるはずですよ」

大きな記録媒体を報道陣に渡すサブレ、その後ろからその様子を見ているビスケットとアトラ。

「大丈夫かな?これでクーデリアさんの助けになると良いけど……」

「大丈夫だよ。サブレが言っていたけど、今回の状況を鉄華団が打開するためにはテレビ局を利用するのが妥当だと思うよ。彼等なら独自のランチも持っているはずだし……イサリビまで移動して、その間にサブレ達の船から昭弘と三日月がバルバトスとグシオンを貰って戦場に向かう。後はイサリビから世界に向けて今回の惨状を伝える。深追いが出来ないギャラルホルンは撤退するしかないはずだし」

サブレがテレビ局員から離れて戻ってくる。

「これでは鉄華団次第だな。彼らがこの地でどうするのか……父さんの望むもう一つの旗頭になれるかどうか……少し見極めさせてもらおう」

テレビ局からの接触を受けたオルガ達鉄華団は専用ランチでイサリビまで合流する。

同じとき、三日月と昭弘は既に戦場まで降り立っており、バルバトスはメイスを使っ

て三機のギャラルホルン製のモビルスーツを撃墜するが、そんな三日月の前にガンダム・キマリスが現れた。

大きなランスを装備して、素早い突進力を生かした戦法を前に三日月は多少翻弄されそうになっていた。

しかし、サブレから教わった戦法の前に三日月は下手な反撃はせず、キマリスの動作をきちんとは見極めていた。

「この出力、この性能、予想以上だ。まっそれでなくては骨董品を我が家の蔵から引っぱり出した甲斐がない！」

「早い……でも、よく見ると突っ込んだ後に大きく旋回してる。早すぎるんだ。なら……！」

旋回し、突っ込んでくる最中三日月の意識は目の前からやってくるキマリスのランスに集中し、その攻撃をギリギリで回避し側面を確実に抑えた。

「何?！」

側面からランスを叩きつけようとするのだが、そんなバルバトスにライフルの連射で邪魔するのはアインの乗るシユヴァルベだった。

三日月と共に目の前に昭弘の乗るグシオンが姿を現した。

「三日月……っちは俺がやる!お前はそっちをやれ」

「分かった………昭弘も気を付けて」

二人がギリギリの戦いをしている最中に、ランチはイサリビに回収されていた。

シノはピンク色にカラーリングされたグレイズに乗り込む。

「へっ！氷の花咲かせんのは当分先だぜ！ノルバ・シノ！流星号行くぜおらあ！」

「流星号？」

流星号と言う名前に整備班が呆れ顔を作っていた。

アインの機体にグレイズの固有周波数が認識された。

「この識別コードは克蘭クさんのグレイズ！」

「こいつはそんなだせえ名前じゃねえ！このシノ様の流星号だ！」

「あんな厳格だった克蘭クさんの機体をこんな下品な色に………許せん！」

至近距離で斧の攻撃をシールドで受け止めるアイン、ライフルで牽制しようとするがシノの流星号はそれを下に潜り込む形で回避。

「こいつは俺が抑えるぜ！昭弘は周囲の敵を頼む！」

昭弘はイサリビに群がろうとする敵に向かって突っ込んで行き、バルバトスは正面から突っ込んでくるランス攻撃を受け止め、とどめにとメイスを振り下ろそうとする。

「ふざけるな！」

キマリスの肩からディスク型の武器『スラツシユディスク』が牽制用にと射出される。

「くっ！こんなんじやダメだ」

ランスでバルバトスを吹き飛ばすが、バルバトスに搭載されたシステムが緊急サポートシステムを起動させ全スラストターが体勢を整え、反撃を仕掛けてくるキマリスに向かつて容赦なくメイスを振り下ろす。

「なんだと!？」

全てのシステムが前回の戦いから更新されており、バルバトスはキマリスの頭部めがけてメイスを振り下ろそうとするが、その間にイサリビがアインとシノの戦いに割って入った。

アインはシノを振り切ってキマリスの援護に入るのだが、キマリスに突っ込んでくるランス攻撃をアインのシュヴァルベが防御に入った。

キマリスはアインを回収してその場から離脱していく。

「アイン！」

「申し訳ありません余計な真似を……………！」

「何を……………」

「アリアンロッドの本隊がそちらに向かっています。これ以上の作戦への介入はいくらセブンスターズといえど問題になります！」

「ぐっ……………ぐっ」までか

キマリスとシュヴァルベが撤退するが、イサリビは目の前で散開しているアリアンロット艦隊の真ん前まで突っ込んでいこうとしていた。

「すげえ数だな」

「逃げてえ〜」

「逃がしてもらえないもんならね」

クーデリアのまつすぐな瞳、そしてその反対側で彼女を見守るフミタン。クーデリアの決意を見届けるフミタンは黙って頷く。

「私はクーデリア・藍那・バーンスタイン。今テレビの画面を通じて世界の皆さんに呼びかけています。私の声が届いていますか？。皆さんにお伝えします。宇宙の片隅………ドルト・コロニーで起きている事を………。そこに生きる人々の真実を……」

混乱するアリアンロット艦隊。

それもそうだろう。

情報の規制を行っているギャラルホルンの統制局の裏をかいて情報が世界中に発信されている。

それはフォートレスの本拠地に帰ってきていたマハラジャの命令で起こしていることだった。

「見せてもらおうか………クーデリア・藍那・バーンスタイン。君が旗頭になれるかどうか

か……その器を」

「私はドルトコロニーで自分達の現状に立ち向かおうとする人々に出会いました。彼らはデモという手段をとりました。しかしそれはあくまで経営陣……」

アリアンロッド艦隊の元にアフリカンユニオンからの戦闘中止要請が届いていた。

サブレは腕時計の確認をしながら密かに隠し港口に訪れていた。

「クーデリアさん……大丈夫だよね？」

「信じよう。オルガや三日月を」

アトラとビスケットはドルトからみんなを信じ、サブレは全員を引き連れながら船まで戻る道中にギャラルホルンの制服を着ているフォートレスのメンバーを見付けていた。

「サブレ！あれって……」

「大丈夫だ。あれは俺達のスパイだ。久しぶりですね。港口はそちらで？」

「ああ、我々で押さえている。今の隙に逃げる事だ。カゲロウがこのポイントで待機しているらしいぞ」

「了解………!?なんでジュリエッタがいるんだ？」

サブレは小声でスパイとして乗り込んでいるギャラルホルンの士官服の男性に耳打

ちをする。

するとジュリエッタと呼ばれた金髪の釣り目の女性が近づいて来た。

「私も好きであなたの近くににいるわけじゃありません！この配属になつてからです！」

「だったら俺の前にいる必要もないだろ!？」

「あなたがさつさと船に戻ればいいだけの話です！」

「お前の配属先を変えればいいだけだろ！」

「お前達………本当に仲が良いな！さすが幼馴染だな！」

「腐れ縁だ!!あと仲良くない！」

サブレとジュリエッタがギヤアギヤアと言いつ争いをしてる横を明楽とジョシユアが通り過ぎる。

「二人も早く乗った方が良くいっすよ！あの二人のイチヤイチヤに付き合っていたら時間かかるんで」

「明楽!!」

アトラとビスケットも横を通り過ぎながら静かに船の中に入り込む。

そんな状況でもクーデリアの演説は確かに彼女達の耳に確かに届いていた。

「しかし、彼らが行動を起こした際、まるで示し合わせたかのように付近で謎の爆発が起

きたのです。それを口実にギャラルホルンは労働者達に攻撃を開始しました。そしてその戦闘……いえ、虐殺は今も続いているのです！今私の船はギャラルホルンの艦隊に包囲されています。ギャラルホルンに私は問いたい。あなた方は正義を守る存在ではないのですか？これがあなた方の言う正義なのですか？ならば私はそんな正義は認められない。私の発言が間違っているというのなら……構いません。今すぐ私の船を撃ち落としなさい！」

「良いだろう！ならば望み通り……全艦」

「統制局より緊急指令です」

ギャラルホルン統制局は作戦の中止を指令として訴えだし、アリアンロット艦隊は完全な沈黙を守っていた。

「おいおいどういうこった？奴ら動かねえぞ」

「すごいなあいつ。俺達が必死になって一匹一匹プチ潰してきた奴等を声だけで……止めた」

マハラジャ・ダースリンは密やかな微笑みを浮かべ、膝を付きながら今回の一件で獲得したギャラルホルンの証拠映像をファイルに落としていた。

「アガレスと旗頭であるグリフォン家は抑えた。もう一つの旗頭もこれで候補を付けた……か。そろそろ俺自身が動く頃合いかな？」

サブレ達を乗せた船はカゲロウ目指して出発し始めた。

地球降下編

父親と息子

ビスケットとアトラの目の前に広がる三階建ての大きな家。家という言葉すらおこがましさを感じるほどに大きく、屋敷でも足りないくらいである。

実際門構えから見上げる事ばかりの屋敷、屋敷の外装は白で塗装されており、屋根は赤で統一されている。

広い庭には庭師のセンスが光り、その大きさに目移りしてしまいそうになる。

移動型コロニー『カゲロウ一号』の中に存在する住宅エリアの一角、間違いなくマクマード邸より大きく、存在感を発する家を前にしてビスケットとアトラは家に入る事すら躊躇うレベルだった。

サブレは容赦なく鉄製の門を開き、中へと入っていく姿をビスケットとアトラはついて行くことしかできなかつた。

玄関を開けて中の空気が外へと漏れ出していくと、同時に周囲に広がる白い大理石のような綺麗な床に、木製を組み合わせた美しい壁紙やシャンデリアが嫌でも目に移る。

「お帰りなさいお坊ちゃま」

「マルナさん。お坊ちやまはやめてくださいって言ったじゃないですか」

「旦那様の息子ですので。それより旦那様が昼食にするから直ぐに食堂に来るようにとのことです」

サブレは「わかった」と言ってビスケットとアトラを引き連れて一緒に左側通路にある食堂と書かれた黄金のプレートの両開きのドアを開ける。

長机が大きな部屋に置かれており、椅子の数だけでも合計で十二は存在する。

「し、失礼します！本日は……！」

「父さん。今日のお昼ご飯は何？」

「魚だ。お前肉を嫌がるだろ？」

「嫌がりはいないけどさあ……まあいいか。何？兄さん。なんか言った？」

サブレが自分の席に座りながら立ち尽くすビスケットの方へと視線だけを向け、ビスケットは口をパクパクさせながら恨みを込めた視線を弟サブレに向ける。

「何をしている？お前達は食事を取らないのか？」

「……………いい、いただきます。ビスケットも一旦行こう！」

二人でサブレの対面に座り、目の前に置かれていく豪華な料理の数々に二人の胃から音が鳴り響く。

アトラは一つ一つの料理を詳しく料理長に尋ねていき、ビスケットは意を決してマハ

ラジャに向けて口を開く。

「あのですね。今回僕達鉄華団の事で頼みたいことがあります！僕達が地球に降りるにいたりフォートレスの力を借りたいと思っています。勿論料金がかかるというのでしたら必ずお返しします！」

「それなんだがな。フォートレス側も事情が変わってしまつてな、分野を分け合つてお前達の仕事の手伝いをする事にした。お前達が願ひ出る前に俺達も参加するつもりだった」

マハラジャはコーヒーを飲みながらビスケットとアトラに指をさす。

「お前達は後で俺の部屋に來なさい」

ビスケットとアトラが昼食後にマハラジャの部屋の前で部屋に入るタイミングを計つており、アトラはビスケットの背中を優しく撫でてやると意を決したようにドアを二回ノックした。

マハラジャの「はいれ」という言葉に従ひ部屋の中に入るとマハラジャは大きなソファに腰を落とし、促されるままに対面のソファに腰を落とす二人。

「さて……………飲み物はオレンジジュースでいいか？苦手な飲み物とかあれば言つてくれ」

「あ、ありがとうございます。そ、それで………僕達に話つて」

「ああ、まずは君の意向だ。我々の力があれば食事に不自由することは無くなる。君が付いてくれば嫌でも巻き込まれることになる。君自身が望むならサヴァランの船と一緒に火星に送れるが？」

「だ、大丈夫です！心配して下さってありがとうございます」

「フム。君がそれでいいのならそれでいいが、まあ本題は全くの別だ。ビスケット、お前にサブレの事をきちんと話しておかなくてはなと思つてな」

ビスケットは小さな声で「サブレの事ですか？」と尋ねるのだが、マハラジャは腕組みをしながら神妙に頷くだけ。

「お前達があいつをどう思っているのかは分からんが、俺からすればあいつは一人の息子として接してきたつもりだ。だからこそあいつの精神状態は良く理解しているつもりだ。あいつは才能が精神や肉体が成熟する前に完成されてしまった。それがあいつの精神面に悪影響を出してしまった。お前は親の死因の事を知っていたか？」

「いいえ。事故死ぐらいしか。でも、ドルトカンパニー本社が関わっていたぐらいは」
「そうだな。最後の引き金はドルトカンパニー本社だ。だが、きっかけはサブレが関わっている。そこにあいつの才能が爪を立ててしまった」

ビスケットは息を飲み込む。アトラですらも空気が変わったのだという事ぐらいは

察した。

同時にアトラは自分は退室するべきなのではと考えたが、今更言い出せない空気だと感じて黙り込んだ。

「あいつは一般的な他の人間に比べて高い才能を持っていることは間違いない。それは一緒に過ごしてきたお前も良く分かっているはずだ」

「それは……両親からも期待されていました。それがサヴァラン兄さんは気に入らなかつたようで」

「そのようだな。あいつは自分の所為で家族関係が悪化したとずっとそう考えていたよ。うだ。しかし、あいつの才能は勘の良さや運動神経の高さという形で姿を現していたが、中でもえげつない才能が物事の本質を見抜きやすいという事だ」

「物事の本質ですか？」

「ああ、あいつは幼いながらにドルトカンパニーのやり口に気が付き、それを親に密告したことがドルトカンパニーが親を殺したと分かってしまったんだ。自分の責任で親が死んだと責めていた。そして、憎しみに駆られていた所で俺が拾ったというわけだ」

ビスケットは苦しそうな表情を浮かべるが、マハラジャは特に気にした様子も無く話を進めようとする。

そんな中、アトラの視界に複数の写真が目に入った。

「これ……この家ですよね？ サブレ君すごく楽しいそうにしている」

「そうだな。この家に来てからあいつは『家族』という言葉を知ったようだな。初めて誕生日プレゼントを買ってやった時の様子は今でも忘れられん。欲しそうにしていたおもちゃを買ってやるとあいつは大粒の涙を流して嬉しそうにしてた。初めてもらった誕生日プレゼントが嬉しかったんだらうな。その写真にも写っているだろ？ 真新しい飛行機のラジコンを抱きしめている写真が」

「凄く嬉しそうにしてるよ。ビスケット」

アトラはビスケットに向けて写真を見せる。

そこには嬉しそうに飛行機のラジコンを抱きしめ、ジュリエッタと隣に後ろからマハラジャが二人の頭を撫でている写真。

「良かったです。サブレが幸せそうにしている、ありがとうございました」

「そうか？ まあ、私は父親であいつは息子だ。それだけの事だ」

ビスケットは正直嬉しくなってしまう、嬉しきのあまり表情に出してしまう。

「そうだ。お前の誕生日プレゼントも部屋に置いてあるからな。ちゃんと中身を確認しておけ、クッキーとクラツカからお前の好きそうなものを聞いておいた」

「え？ でも僕は息子じゃないですし……」

「何を言っている。サブレが俺の息子ならお前も私の息子だ。さて……話はそれで終

わりだ。明日の昼に出るぞ。今日はゆっくりとするといい。そうだ。この家の風呂は露天風呂が在ってな……カゲロウは夜になると星空が綺麗に見える。露天風呂から見ると綺麗だぞ」

そう。この時アトラはすっかり露天風呂に行くつもりになり、ビスケットも言ってみてもいいかも。なんて考えたことが後の悲劇へと向かう事をこの時の二人は知らない。

夕食を食べ終え、サブレは再び自分の部屋にマハラジャも自分の部屋でやるべき仕事をしに行く。

ビスケットとアトラは二人で露天風呂へと入ろうと言い出したアトラについて行くビスケット。

「じゃあお風呂をでたらここで集合だね」

「うん、アトラはゆっくりしていていいからね。楽しみでしょ?」

「ビスケットもちゃんと体洗うんだよ!時折匂いがするからね!」

「は、はい。考慮します」

ビスケットは脱衣所で服を脱ぎ、身体を簡単に洗ったのちタオルを持って露天風呂のドアを開ける。

広い露天風呂と湯気が視界を塞いでいるのだが、ビスケットは決して気にせず風呂に

体を付ける。

少しずつ奥の方へと移動して行き、露天風呂のど真ん中に鎮座する大きな岩を背に一旦落ち着く。

「すごい広いお風呂だな……鉄華団にも一つ欲しいな」

そんなことを言いながらビスケットが息を吐き出すと、露天風呂に誰かが入ってくるのが音で分かった。

「サブレ？」

「え？ビ、ビスケット？」

ビスケットとお風呂に入ってきたアトラの視線が完全にぶつかり合い、お互いに裸で見つめ合ってから三十秒。

お互いに顔を真っ赤にして慌てたように二人そろって湯舟に消えてしまおうとする。

「ご、ごめんアトラ！い、今！今すぐ出るから！」

「へ？あ！？だ、ダメ!!」

「ど、どうして？」

「だ、だつて……その立ち位置だと色々……見えてしまつて……」

ビスケットの体積では小さな布では守り抜けない。

もう一度湯舟に身を浸し、泳ぐように岩の反対側に隠れる。

「その……見えた？」

「だ、大丈夫。そこまで見えなかったから。ほ、星キレイだね！」

「そ、そうだね」

そう言いながら上へと視線に向けるとそこには満天の星空が移っていた。

「すごいねえ……火星にはこんなお風呂も無かったし」

「そうだね。帰ったら作りたいね。でも、アトラは三日月と一緒に入りたかったんじゃない？」

「え？そ、それは……ビ、ビスケットはあたしと一緒に入っていて嬉しくないの？」

アトラから唐突に告げられる言葉に気まずさを感じたビスケットは、湯船から逃げ出そうとする。

アトラは逃げ出そうとするビスケットの左手首を強くつかむ。

「教えて。ビスケットは私と一緒にお風呂に入れてうれしくないの？」

ビスケットはつ良く引つ張られてしまい、足が滑り後ろに倒れそうになる。

ビスケットは体を180度反転し、両手をアトラの横に付き押し倒してしまったビスケット。

「ご、ごめん……アトラ」

「う、ううん。私の方こそ急に掴んでごめんね」

しかし、ビスケットの視線は自然とアトラの体の方に向いてしまい、脳内で処理できない情報をビスケットは……大量の鼻血という形で処理した。

最後の力でアトラの上に覆いかぶさらないように配慮したのは彼なりの優しさだった。

「ビスケット!? 大丈夫!? だ、誰か!!」

ビスケットは自室のベットの上で目を覚ました。

妙に体がスースーすると思ったのだが、裸の上に浴衣を着ているだけというのが理由だろ気が付いた。

まだ頭がふわふわしており、何で自分がここで寝ていたのかすらよく分からない。

「あ、大丈夫? ビスケット。メイドさんたちがビスケットの手当の為に色々してくれただよ」

「手当て? えつと……!!」

思い出してしまう鼻血が出そうになるのを必死に耐えながら布団の中に入り込む。

「大丈夫? 震えているけど」

「だ、大丈夫だよ! アトラこそ大丈夫だった?」

「う、うん。寒いなら何かしないとね。えつと……でもこの部屋には暖かい物なんて

ないし」

「だ、大丈夫だよ」

「駄目！ビスケットふるえてるもん。そうだ！」

そういう声と共に布団が動く感触が伝わってくる。ビスケットはどうしても気になり振り返るとそこにはアトラは寝間着で布団の中に入ってきていた。

「ア、アトラ!?」

「これで大丈夫だね」

恥ずかしくなったビスケットは背をアトラに向ける。

「ねえ………さっきの答え。私とビスケットは私と一緒に入れてうれしくない？」

ビスケットは答えなかった。

アトラは少しずつやってくる眠気に負けてしまった。

寝たことを確信したビスケット。

「嬉しいよ………でも、アトラは三日月が好きだから」

体に包帯を巻き無理を承知で格納庫でボロボロになった自らのモバイルスーツを見上げるアイン。

そんなアインに近づいていくガエリオ。

「無理はするなアイン。傷に障るだろう」

「もうしわけありません。またしてもあのような者共に不覚を……」

「何故謝る？それは俺を助けてくれて出来た傷だ。謝るのは俺の方だ。まさかガンダム・フレームが二機も出てくるとは。いや、それも言い訳か。何にせよお前に借りが出来てしまったな」

「私も阿頼耶識の手術を受ければあいつらにかなうのでしょうか？」

「何を言いだす。気持ちの悪い事を言うな。あんなものを体に埋め込めば人間ではなくなってしまう」

「人間ではない……その言葉は地球出身の同僚達にも言われてきました。俺には半分火星の血が流れているんです。ギャラルホルンは……いや、地球人は地球以外の純粋な血しか認めていません。それは火星でも変わらない。火星人の母を持つ私とギャラルホルンの士官であった父のお陰で入隊させてもらえましたが、やはり差別は続きました。そんな俺に克蘭ク二尉だけはみんなと対等に接してくれました。克蘭ク二尉は「いいかアイン。人間としての誇りに出自など関係ない。人間なんて一人一人違う。元々一括りにはできないものだ。自分が正しいと思う道を選べ。周囲に惑わされずお前という人間の生き方を見せるんだ」そう言ってくれた。克蘭ク二尉は俺に自分を取り戻させてくれました。周囲からどう見られてもいい。俺は俺の考えを……」

「まるで俺がお前を馬鹿にした連中と同じだと言いたげだな」

「違います！そうではなく……」

「いや、いい。俺はお前のような男を初めて見た。お前の言う通り鉄華団は絶対我らの手で倒さねばな」

「しかし、このまま行けば地球外縁軌道統制統合艦隊のテリトリーです。セブンスターズといえども勝手な行動は許されないのでは？」

「分かっている。あいつに頭を下げるのだけは絶対に避けたかったが……仕方あるまい」

願いの重力

朝起きると右腕に重みを感じるビスケット、起き上がりとしても右腕の重みが邪魔をする。

昨夜の記憶があいまいで、正直何をしていたのかが分からない。

何かをしていたような気がするし、ハッキリしない意識を現実に合わせてながらビスケットは夜寝る前の事をウトウトとした意識で思い出す。

(そういえば……昨日の夜アトラがやってきて……う?)

少しずつ意識が現実に戻っていき、恐る恐る右隣を見るとそこには確かに居た……スヤスヤと眠っているアトラの姿が。

ビスケットの顔面が真っ赤に染まっていき、何度も揺さぶりながら起こそうと試みる。

「起きて！アトラ！お願いだから！誰かが来る前に！」

しかしすっかり眠りの中にいるアトラはちよつとやそつとで起きやしない、そしてタイミングが悪い事に外からサブレの声が聞えてきた。

「兄さん。いい加減起きた方が良くぞそろそろ……!!?」

サブレの視界に写った姿、半裸のビスケットとアトラが仲良くベットの途中で寝ている。

開いた口がふさがらないよ数のサブレ、そのまま静かに扉を閉めた。

「待つて！サブレ！」

クーデリアは眠れぬ夜を過ごしていた眠れぬままフラフラと部屋を出ていき、廊下で真ん中で三日月を見付けた。

数日ぶりの三日月。

窓の外に広がる星空を見つめたままの彼に近づいていく。

「何か見えますか？三日月」

「……綺麗だなんて思つて。クーデリアこそ何してるの？」

特に理由があつたわけじゃない。

明日の作戦を前に少しだけ眠れなかつただけ。

「三日月。握手をしませんか？」

「俺の手また汚れてるよ？」

「……私の手ももう汚れています。皆の血と皆の想いと……この手に私は誇りを持って
います」

最初こそ戸惑っていた三日月だがゆっくりと汚れた右手を差し出し、優しく握りしめる。

（大きな手。こんな小さな体なのに大きな手）

「どんな困難が待ち受けていたとしても絶対皆さんを幸せにします」

三日月は優しくクーデリアを抱きしめる。

急な出来事で驚くことしかできないクーデリア。

「震えているから」

知らず知らずのうちに無理をして追い詰められていたクーデリア、三日月は優しく抱きしめられていくうちにクーデリアは涙を流していた。

三日月の胸の中で大粒の涙を流していた。

モンタークは商売に失敗していた。

というのも本来の予定であれば今頃クーデリア・藍那・バースタインにシャトルを売り飛ばし、ハーフメタルの権利をいくつか手に入れるはずだった。

しかし、モンタークが取引をしている間に、クーデリアに渡すはずだったシャトルを五倍の値段で買い付けてきた商会が現れたからだ。

「いいんですかい？」

「これは忠告だよ。これ以上関わるなっていう顔の見えない相手からの」

モンタークはそう感じた。

モンタークとしての立場あるからこそ分かるギャラルホルンが知らない影の組織がある。

「彼らに喧嘩を売れば我々の命では済まないぞ」

「そんなやばい奴らなんですかい？裏で調べても大した名前は出てこなかったじゃないですか」

「当然だ。そんな簡単な表には顔を出さないさ」

トドは正直複雑な表情とは別にモンタークは微笑んでいた。

イサリビにはとある商会から無償提供されたシャトルを受け取っていた。

あと少しで作戦を開始することを既に確認済み、ビスケット側からの連絡が今だ来ないが、きつとビスケットはビスケットで動くだろうという確信と共にオルガはシャトルに乗り込む。

同時刻イサリビの反応を捕らえたカルタはやる気に満ちていた。

「アリアドネに反応！エイハブ・ウエーブ確認。報告にあつた船と一致しました！」

「まさか本当にくるとは。いえそれでこそよ！」

カルタのやる気に水を差すように目の前の画面にガエリオが姿を現し「カルタ」と呼び捨てるが、カルタの方は「カルタ司令」と少々強調する。

「参加させてあげたのだから我々の足を引っ張らぬようそれなりの働きをなさい」

「分かつて……います」

「それよりあの男はどうしたの?」

「あの男?」

「そつ……そんな鈍い事で今回の作戦が務まるの!? あの金髪の高慢ちきな……地位の為にしょんべん臭い子供なんぞと婚約した。いっつも前髪イジイジしている男の事よ!」

「相変わらずの物言いだ。マクギリスなら休暇中ですよ。地球でその子供と過ごしている」

「地球に?それで私になんの報告もなかったと?」

「直属の上司でもないあなたに報告する義務が?」

「ガエリオ!あなたも我ら地球外縁軌道統制統合艦隊をバカにするつもり!」

「はっ? いやそのつもりは……」

「いい!! 成果を上げられなかったら承知しない。折檻が待っているわよ!」

「折檻!? 折檻って何……」

「統制局の連中にお飾りだなんだといわれてきた私達……その真の実力をここで証明してあげる。我ら地球外縁軌道統制統合艦隊！」

「面壁九年！堅牢堅固！」

カルタの指示の下後ろでポーズを決める部下、右から二番目が少し遅れていることを鋭い一斉で指示する。

「さあ！ひねり潰してあげるわ！」

ユージン、チャド、ダンテの乗るイサリビは順調にアリアドネに補足されていた。

張り切るユージンの乗るイサリビはワザと補足され、同時にカルタは攻撃を開始していき、ユージンはブルワーズの旗艦を盾にしながら突っ込んでいく。

「船を盾にだど!?」なんと野蛮な。両翼の艦隊を前に出しなさい！鶴翼に構え撃沈する！撃てえい！」

イサリビは攻撃を最後まで捌き切ろうとしてみるのだが、捌き切れないダメージがイサリビに襲い来る。

「このままじゃブルワーズの船だつてもたねえぞ」

「そしたら次は俺達だ！もう仕掛けるしかねえ！」

「まだだ！もつと突っ込ませんだよ！あいつに頼まれた仕事だぞ！チャド！前の船のコ

ントロールもよこせー！」

「馬鹿言うなって！阿頼耶識で船を二隻も制御するなんて出来るわけが……」

「ここでカツコつけねえでどうすんだよ！」

チャドは「どうなっても知らねえぞ！」と言いながら二隻の船の制御をユージンにまわると同時に、ユージンの元に強烈な負荷が鼻血という形で現れる。

「見とけよ……お前らー！」

突っ込んで来ようとする船にカルタは砲撃を集中させる。

二隻の船の進路が別れ、ブルワーズの船の撃沈と共に周囲にナノラミネートチャフが播かれていく。

「光学照準が目標も完全にロスト！」

「LCS途絶。通信できません！」

「うろたえるな。全艦に光信号で通達。LCSを最大出力で全周囲に照射。同時に時限信管でミサイル発射。古臭いチャフなど焼き払いなさい！」

ミサイルの爆炎がチャフを焼き払う。

「LCS回復しました」

「まったく……さっさと位置の再特定急げ！よし。素早いのが取り柄のネズミでもこの短時間では何もできまい。どこだ？」

イサリビはナノミラーチャフで稼いだ時間で宇宙ステーションにぶつかり軌道を地球へと変更していく。

「グラスハイム1より救難信号を受信！軌道マイナス2。このままでは地球に落下します！」

「モビルスーツ隊の出撃後救援に向かいなさい……！」

カルタは悔しさを表情を歪ませ、ユージンは離脱しながらも鼻血を流す。

「後は任せるぞお前ら……！」

「ユージンやったな！」

「なあ……一つだけ……俺かっこいいか？」

ユージンの意識が途切れた頃、オルガ達はシャトルでの大気圏突入に動いており、オルガは去っていくイサリビの方を見る。

「最高にイカしてたぜユージン。ありがとな」

このまますんなり大気圏に突入できるかと思われたときに何処からともなくやってくる攻撃にシャトル内は不安な様子、しかしアインはシャトルを落とすために攻撃を仕掛けるのだが、カルタの方には更に最悪の情報が入っていた。

「別の企業から作戦宙域でのシャトル降下を行うので作戦を中止せよと！」

「今更!？」

「しかし、この作戦より前に決まっていたことらしく、統制局の指示ですー」

その指示はアインやガエリオの下にも届くが、既に戦いは始まっており作戦を今更中止させることもできそうになかった。

タービンスのアジーとラフタも百鍊を改装した『漏影』という名の機体で応援にあらわれており、複雑な戦局を見せている。

そんな状況で五隻のシャトルが作戦宙域内で降下を始めようとするのをアインは見つけ出した。

「まだ逃げようとするのか!？」

アインは容赦の無い攻撃をシャトルに向け、弾丸が一隻のシャトルに当たるのだが、一発程度で落ちるほどシャトルも弱くも無い。

「こちらは民間企業のシャトルである。ギャラルホルンであろうと一方的に攻撃を受ける権利は無い!この状況はしかるべき手段でギャラルホルンに通報させてもらう!そちらから攻撃をしてきたという事はこちらも防衛行動に移らせてもらう」

宣言と同時にシャトルの中からマルコシアスが姿を現し、アインのシュヴァルベに食いついてくる。

「新型?!お前達も火星ネズミの仲間か!」

「俺達は民間企業だったんだがな。先に仕掛けてきたのはそつちだ。死んでも後悔する

なよ」

シユヴァルベはマルコシアスにライフルを向けるが、引き金を引くよりも早くマルコシアスはライフルを掴んでいた。

ならとワイヤーを使ってマルコシアスを捕らえようと試みるが、マルコシアスは隠し腕を使ってワイヤーを掴んでいく。

マルコシアスは掴んだワイヤーをシユヴァルベの拘束用に使用する。

「火星ネズミが！」

「俺は阿頼耶識を持っていないんだけど……盲目的になっっているな」

「なら何故邪魔をする!? あいつらは克蘭ク二尉を殺した!」

「本人が望んだことだ」

サブレの落ち着いた声がアインの心に小さくは無いダメージを与えた。

「克蘭ク・ゼントは自らの死を望んだはずだ。あの男は死を望んでいたんじゃないのか?」

「そんなことは無い!」

「それはお前がそう思いたいことだ。彼は子供を殺す事がどうしてもできなかつた。今のアンタの姿を見たら彼はどう思うかな? 子供殺しの部下を持ったといえば……。自分の部下が自分の意思をまるで理解していないと知れば……」

「あ……?!? ああ………!」

アインの心は素早く音をたてて壊れ始め、その状況にガエリオが素早く反応して見せた。

「アインから離れろ!」

三日月と戦闘していたはずのガエリオが三日月の戦闘をカルタの部下に任せ、マルコシアスに乗るサブレへと近づいていく。

サブレはマルコシアスで拘束しているアインのシユヴァルベを盾にする。

「それ以上近づけばこいつを殺す。お前達がここから離れるなら開放する」

「お前達が邪魔しなければいい事だ」

「言い訳にもなっていない。こちらは数日前から降下すると予定した場所で勝手に作戦行動を開始した。結局はお前もアリアンロッド艦隊と同レベルの悪党だったわけだ」

「くっ! あんな連中と一緒にするな!」

「そう思うなら撤退すればいい。どっちを選ぶ? 部下を生かし、民間人を守る正義の軍人か、民間人も部下も殺す上司になるか………」

ガエリオに選択肢なんて存在しない。

アインを生かすためにもとるべき行動は一つしかなかった。

しかし、どんな理由であれど、カルタの部下もまたカルタからの指示が届いていない

状況。

目の前にいるマルコシアスがアインのシュヴァルベを拘束する為に制止している状況が目に入れば襲い掛かるのは確実な事だった。

「火星人の命一つで敵を道連れにできるんだ！」

「よ、止め！」

ガエリオの制止を聞かずカルタの部下はサブレへと攻撃を仕掛けるがサブレはとっさにアインのシュヴァルベを盾に攻撃を受け止めていた。

サブレ自身も咄嗟の事で特に意識していたわけじゃない。

アインのコックピットに深々と剣が突き刺さり、サブレはアインのシュヴァルベを手放しグレイズリッターにバスタードメイスを叩き込む。

意識の無くしたアイン。

ガエリオは心も体もダメージを受けてしまったアインを受け止めながら必死に呼びかける。

「アイン！返事をしろ！アイン！」

戦線を離脱していくガエリオとアイン。

それとは別に三日月達は大気圏を突破しながらカルタの部下との戦いを優先しているが、その内の一機が道連れ覚悟で攻撃を仕掛けていた。

しかし、三日月の前のメイス攻撃の前に敗北するが、同時に三日月は地球の重力に引かれていくので自然と逃げられない。

サブレが大気圏突破用の耐熱シールドを足場にして現れる。

「三日月、その機体を耐熱シールドにすれば耐えられるはずだ」

「あ、そっか。助かったよ。そっちも仕事？」

「お前達と同じ仕事だ。それより大気圏を突破したらシャトルまで一気に飛べ。いいな？」

サブレの指さす場所にあるシャトルの上には鉄華団のメンバーが三日月の無事を祈っている。

しかし、オルガにはデジャブに似た感覚が襲い掛かっていた。

相棒

「久しいのうマハラジャ」

「仕事しに来てやったぞジジイ。おいビスケット、お前んとこの団長を爺さんの邸宅まで連れてきな。サブレ！お前も来るんだ」

俺が適当に「はいはい」と返事をしながらモバイルスーツから降りてパイロットスーツから私服に着替える。

兄さんが森の中へと姿を消していき、絵里さんがシャトルから降りてくる。

「絵里さんもついてきていたんですね？」

「ええ、昭弘がいるらしいからね。久しぶりに会ってやりたいし」

まあ、分からないでもないけどさあ。

俺としてはさっさと父さんについて行かないとこの島で迷子になりそうだった。

オルガは奇妙なデジャブに襲われており、そのデジャブはこの島に足を下ろしてからもまるで変わることは無い。

周囲がシャトルから荷物を降ろす作業の真ただ中でも、オルガは呆然としていた。

「オルガ！ 蒔苗って人がオルガを呼んでるよ！」

全員が声のした方向に振り向くとビスケットが心配した素振りで見下ろしており、みんながいつせいに駆け付けようとしている。

しかし、オルガの脳裏にはビスケットが亡くなる光景が鮮明なビジョンとして思い浮かんでいた。

「そんな……はずは」

蒔苗邸に向かっていているオルガ達とは別に、昭弘達はフォートレスの人達と共に格納庫などでそれぞれの時間を費やしていた。

昭弘とシノが荷物を運んでいる最中、絵里の「昭弘」という声に昭弘自身が驚いていた。

「何年振りかね。幼いころに一度だけあったことがあるけど……私の事覚える？」

「……………絵里おばさん？」

二人の感動の再開を前にして明楽が勢いよく昭弘に突っ込んでいく。

「昭弘お兄ちゃん！」

嬉しそうに昭弘の周りをはしやぎ回る昭弘に困惑する昭弘、嬉しそうにしている絵里。

「あんたに会いたいわってはいしやぎ回っていたのさ。この子お兄ちゃんが欲しいってうるさかったからね。昌弘は一緒にやないのかい？生きているって聞いたけど？」

「はい。昌弘は上に……………でも」

「そうかい。あんた達が生きているって知ったら死んだ姉さんも喜ぶよ」

シノはあえて口出しが出来ず遠くから見守ってやることしかできなかつた。

蒔苗邸での話し合いはある意味混沌を極めようとしており、事のきつかけは蒔苗がアーブラウ議会から逃げ出してきたという一件だつた。

さすがにシヨックを隠し切れなかつたのはここまで必死にきたクーデリアであつたが、オルガはどこかでこの話を聞いたことがある様な錯覚を覚えていた。

しかし、心の底からやつてくる蒔苗への怒りだけは抑えきれなかつた。

「ちよつと待て！それじゃ俺達は何の力も無いじいさんに会う為にこんなとこまでわざわざ来たつてことなのか!？」

ビスケットはオルガを諫めようとするが、オルガ自身どうして自分がこんなにも興奮しているのかが分からなかつた。

「落ち着けガキ。お前がここで怒鳴りつけた所で状況は好転せん。とゆうより、蒔苗が失脚して亡命中だと知らんお前達が悪い」

オルガは突然声を放つマハラジャの方を睨むが、マハラジャはどこ吹く風と特にその鋭い睨みに真正面から見つめて返す。

オルガは視線を咄嗟にそらし、蒔苗の方をじっと見つめるが蒔苗は髭を弄りながらどこか楽しそうにしている。

「お前さんはきちんと策があるのじやろう？ 出なければお前さんが自らこの場所に姿を現さんからな」

「まあな、そのガキとは違うんだ。きちんとした策をもってこの地に降りている」

ガキと言われることに苛立ちを覚えたのか、オルガはマハラジャの襟を強くつかんで右拳を殴る為握りしめる。

しかし、殴るより早くサブレはナイフを抜き出してオルガの頸動脈を切る寸前まで突き出す。

「拳を下ろしてその手を放せ」

底冷えするサブレの声、オルガは鋭い睨みに怯んでしまった。

「サブレ……ナイフを下ろしてやれ。こんなガキのやる事に一々頭にきていたら時間がいくらあっても足りん」

「俺達は！」

「お前達とは言っていない。お前個人を指してガキだといったんだ」

言い争いにもならない醜いやり取り、サブレはあくまでもオルガに拳を下ろすようにと促し、オルガはその拳を下ろしながらそのまま怒りを抱えたまま部屋を出ていった。

「若い若い。昔のお主に似ておるかな？」

「蒔苗さんはこの男性をご存じなのですか？」

「無論じゃよ。儂が一番信頼しておる男じゃな」

マハラジャは胸ポケットから煙草を一本取り出し火をつけようとするところでサブレが「コホン」と席をする振りをする。

「まあいい。あのガキについてはこつちに任せてくれるな？お嬢さん型も手出し無用だ」

「しかし！団長さんに依頼したのは私で！」

「お嬢様。ここはこの男に任せておいた方が良いかと思えます」

「そつちのメイドのお嬢さんに言う通りだ。こつちはこつちでうまくやるさ。あんたと違って俺達は実働が仕事だ。それに、あのガキがあのままじゃ俺達としても命を預ける事は出来ん」

マハラジャの言い分にクーデリアは黙る事しかできなかつた。

ビスケットがオルガを追いかけようと立ち上がる瞬間、マハラジャが一枚のディスクを手渡した。

「お前の兄からだ。悪いが閲覧済みだ。お前のお兄さんは現在安心して火星に向かって
いる最中だ。それは安心しろ」

「サヴァラン兄さんの？」

「お前へのメッセージだ」

ビスケットはそれを手持ちの機器で再生しながら部屋を出ていった。

「あれを渡すんだ。父さんは地雷を二つも爆発させて何がしたいわけ？」

「別に……ガキを導いてやるのも大人のやる事だろ？お前は手を出すなよ」

サブレは部屋を出ていくマハラジャの背中をじつと見つめていた。

サヴァランのメールを見たビスケットは夜の海岸線の流木に腰掛けていると、後ろか
らオルガの声が聞こえてきた。

「俺達だけでやらないか？あのおっさんに手を借りなくても俺達だけでやれるだろ？蒔
苗のじいさんが何を望んでんのかよく分かんないけどさあ」

「帰ろう。目的はもう達したんだ。あとは皆で火星へ。テイワズに頼めば装備は無理で
も俺達だけなら……」

オルガの脳裏に再びビスケットの死がビジョンという形で降りてきた。

（そんなはずねえ！）

「それじゃダメだ。火星で細々やつてるだけじゃ俺達はただのちよつと目端の利いたガキでしかねえ。いずれまたいいように使われるだけだ。のし上がってみせるんだ。テイワズからも蒔苗のじじいからも奪えるものは全部奪って」

「止めてくれ！今のままで十分じゃないか……仲間の事もつと考えてくれ……」
「俺が仲間の事をかんがえてねえってか？」

「そうじゃないか！いつもいつも三日月の目を見て決めて！みんなを危険にさらして！なんでそんなに生き急ぐこうとするんだ!？」

「皆の事を考えたうえで決めてんだ！俺達の将来を考えているからこそ！」

オルガだけが聞えたあのかもしれない。

オルガの耳に「ほんとに？」という声が聞えた。

「ここで無理してまた誰かが死んだりしたらどうなる。こんなこと続けて将来も何も」

「決めたことだ！前に進む為にな！」

「だったら！だったら僕は……僕は鉄華団を降りる」

ビスケットは黙ってオルガから離れていった。

サブレはサヴァランからのメールの中身を知っていた。

「勝手なんだよ。今更『堅実』とか言われてもさ。そんなんだからあんなことになるんだ

ろ?」

オルガとビスケットの言い争いを影ながら見守っており、こうなる事を予想もしていた。

しかし、マハラジャから手を出すなと言われている以上自分がここで勝手な事は出来ないが、サブレにとって面倒ごととは隣で話を同じく聞いていた三日月だった。

「行かないの?」

「父さんから手を出さなつて言われているんだ。父さん達に作戦があるみたいだから黙つて見守っているさ」

オルガは施設の方へと立ち去つていき、三日月とサブレはそれを黙つて見守る。

「なあ、三日月。お前にとってオルガって何?」

「?.....なんだろう」

「これを機会に少し考えてみたらどうだ?お前にとってのオルガとは何なのか?それを知るだけで少し分かると思うぞ」

オルガが食堂に戻つてくるとそこにはマハラジャがコーヒーを飲みながら座り込んでいた。

オルガはバツが悪そうに視線を逸らして水道に右手を伸ばす。

「誰かとても喧嘩したのか？顔に書いてあるぞ……ガキ」
苛立ちが再びオルガの頭のとっぺんにまで登ってくる。

「俺はガキじゃねえ！」

「ガキだよ」

マハラジャの言葉に反応し襟を強くつかむ、しかしマハラジャは真直ぐオルガの目を見つめ返す。

「無い見栄を張り。仲間の為に危険な選択肢を取ろうとするのはお前が子供だからだ。大人として見られたい。早く大人になりたいとおもう反面、どうすれば大人になれるのかが分からないから年上に喧嘩を売り、大人のやる事を真似て生きる。はつきり言つてやろうお前じゃ名瀬・タービンにはなれん」

視線を逸らすオルガ。

「そうやって視線を逸らすのはお前自身が反論できないという証拠だ。ほら見ろ、お前が本当に大人だと、お前が俺より正しいと思うのならお前はきちんと反論出来るはずだ。でもしない。お前……夢つてあるのか？目標でもいいが？」

「俺達のがし上がる為に……」

「のし上がってどこに行く？世界を敵に回し続けて、何人の人間を敵に回し、何人を殺して、何人の仲間を犠牲にすれば納得できる場所に辿り着く？」

オルガは反論も言葉での指摘もできなかつた。

「お前の目標は漠然とし過ぎている」

「じゃああんのか!? あんたは!」

「ある。俺の目標を叶えるためにはギャラルホルンを潰す。そして……友を殺す。それが俺の目標を叶えるための条件だ」

まつすぐな目。その奥にある闘志と覚悟。

オルガはこの目をまつすぐ見ても敵う気がしなかつた。

だから視線を逸らし逃げてしまふ。

「だつたら……だつたら俺はどうすればいいんだよ!! 分かんねえんだよ! 目標も! 夢だつて! どこに行けばいいんだよ!」

まるですぎるような言葉にマハラジャは初めて……手を出した。

右拳で殴られたオルガの体は反対側の壁まで吹っ飛んでいく。

「いいか? お前一人で大勢の命を背負えるほどお前は強いのか? お前自身の両手を何回仲間の血で染め上げればいいんだ? お前が目標を見つけ出したとき、本当に鉄華団は一つにまとまるんじゃないのか!? そのお前がフラフラと! 情けない言葉を吐き出して、お前がしたいことはなんだ!? お前自身がまず決めることじゃないのか? そして、それを支えてくれる人間は誰だ!? お前のその両手をきちんと見てみる」

オルガ自らの両手をジツと見つめ、思い浮かべるその思いにオルガは表情をゆがめていく。

「お前がどうしたいのか……相棒ときちんと話し合ってきな」

「どうしたの？ ションポリした顔して……」

「ソニアさん？ いいえ……そのオルガと喧嘩しちゃって」

白衣を着て膝を付いて整備されているアガレスを見上げるソニアに話しかけられたビスケツト、ソニアは笑顔で返す。

「もつと穏やかな道だつてあるはずなのに……いつだつて生き急いだように……」

「そうだね。でもね。彼もまた必死なんじゃないかしら？ 見えない未来に怯えて、分からない選択肢に迷いながら歩いている子供よ。だから大人の前に無い見栄張つて、あなた達に誇れる『オルガ・イルカ』であろうとしているんじゃない？」

「だったら相談してくれてもいいのに」

「だから出来ないんでしょ？ 彼は仲間と一緒にいるつもりでも、本当の意味で一緒にはいないんだと思うよ」

「え？」

「あなたもそうだけど。皆「オルガなら何とかしてくれる」って信頼感がない？」

黙り込むビスケット、今までの事を思い出していく。

「信頼感は大事よ。でもね、行き過ぎればそれは押しつけと一緒。自分がやる事は自分で決めないかね。あなたはどうしたいの……フフ」

ビスケットは両目から大粒の涙を流していた。

「俺……オルガに……酷い事……」

「若いつていいわね。そう思うんなら……あなたがいまするべきこと、これからあなたが『オルガ・イルカ』という少年の為に出来る事は何？」

「仲直りをする事……一緒に歩く事」

「そうね。じゃあ行つてきなさい！あなた達子供尻拭い位きちんとしてあげるから」

ビスケットは海岸で座り込んでいると後ろからオルガが姿を現した。

「よおビスケット」

「あオルガ」

二人で海岸で座りながら黙り込んでしまう。

どちらが言い出すきっかけを探しだし、同時に声を出した途端二人は腹を抱えて笑つてしまった。

「悪かったなビスケット」

「僕もごめんねオルガ」

やつと心から謝ることができた二人、笑い終えたオルガは星空を眺めながら大きくため息を吐き出す。

「すげえよな……………あんなおっさん達が世界を相手に商売しているんだぜ。俺達はその足元でウロチョロしているタダのガキだ。こんなんじや俺達『ガキ』だって言われてもおかしくねえよ」

「でも……………いずれは大きくなつていくんだろ？このままじゃ終れない」

「そうだよな……………なあビスケット。俺な。この島にきてからお前が死ぬ夢を見たんだ。いや……………デジャブだな。なんかそなるような気がした。怖かったんだ。お前が止めて助かるならそれでいいんじゃないかって思った。でもさ、そうやって逃げてばりじや行けねえんだよな」

勢いよく立ち上がるオルガ。

「俺……………火星をもつともつと盛り上げてえ。そしてさ火星で生まれたことを、火星で育つたことを誇れるような場所にしたい！手伝つてくれよ」

「……………うん！」

「俺達が揃えばきつと運命だつて超えていけるさ！」

相棒と共にひたすら前に歩いていく。

別の未来へ

タービンスから参加しているエーコを含めて大急ぎでモビルスーツやモビルワーカーの支度が進んで行き、ソニアは一人最終チャックが進むアガレスを見上げていた。アガレスのバックパックには追加の大型コンテナのような物が積まれており、アガレスのツインアイは点滅を続けている。

時を同じくして話し合っていたオルガとビスケットは海岸から二人話し合いながら戻ってきている最中、施設の中は慌ただしい様子であり、二人は急いで施設の中へと入っていく。

するとマハラジャが廊下を横切ろうとしている真つ最中で、ビスケットが話しかけると二人の方に体を向けた。

「何があつたんですか!？」

「お前達が戦ったカルタ・イシユーが部隊を展開させていてな、要求内容はお前達とクーデリア・藍那・バーンスタインと蒔苗だ」

二人としては今すぐ襲い掛かってくるとは思ってもみなかった状況、正直フォートレスとの足並みが取れていない状況で一緒に戦うとなるとパイロット同士ギクシヤクす

るかもしれないという不安があった。

「これはチャンスだぞ。相手がわざわざ揚陸艇を用意してくれるんだから、これ以上なくチャンスだ。後はお前さん達次第だな」

ここでオルガが意地を張ればフォートレスは手伝ってくれないだろうし、ここで意地を張らなければ団員が納得しないだろう。

ビスケットが不安視している部分でもある。

三日月がサブレと一緒に事の成り行きを見守っていると、オルガは黙って頭を深々と下げる。

「今まですいませんでした！俺達を助けてくださいー！」

オルガは今までの非礼を頭を下げる事で詫び、他の団員が見ている前で初めて意地やプライドを捨てた。

ビスケットも同じく頭を下げてお願いするその姿勢に他の団員が不安そうに近づいて辞めさせるべきかと悩み始める。

「サブレ！モビルスーツのチェックを急がせるようにソニアに告げておけ、絵里には食事を人数分きつちり用意させておけ、今回はオルガ・イルカとビスケットと一緒に作戦を立てる。俺がこいつらの分の報酬を三倍にするように交渉しておく間に最低限の作戦を立てておくように」

「その全てを俺一人でやれと?」

サブレは少々不思議そうな表情をしてみる。

「そこに隠れている三日月と一緒にに行けばいいだろう」

「ええ〜」

「お前達………良いから黙って仕事に行け!! どうせモビルスーツに乗るまで暇だろう」

「待ってくれよ。三日月はともかくとして、俺は兄さんとの同調で時間取られるんだけど?」

「どうせ三十分ぐらいだろ! いいからいけ!」

二人は不満タップリの表情でトポトポと歩き出していく、三日月が黙って従っているその姿を見ていると他の団員も「やるか」という気持ちで行動を始める。

「ビスケットはおやつさんと呼んできてくれるか? 俺は他の奴らに一通り声を掛けてくる」

「分かった。作戦だけど……オルガの夢の話は俺達だけの秘密にしておいた方が良くと思うんだ。最低でもサブレと三日月程度にとどめておいた方が良くと思う」

「そうだな……夢の通りに行くとは思わねえしな……」

「だね。サブレでも止めると思うよ。不確定要素にしかならないし……あくまでもオルガの夢をベースにして作戦をたてよう」

あれから一時間サブレは会議室に重要メンバーを集め、ホワイトボードに細かい作戦を記載している。

「さて……作戦を告げるわけだけど……不満や意見は作戦終了後に五秒だけ設けてやる」

明楽が小声で「それって事実上意見は聞かないって事じゃ」と真実に気が付いたが、サブレは黙って黒ペンを明楽の額めがけて投げつけた。

明楽……ノックアウト！

「モビルスーツ隊は海岸から上陸隊と宇宙からの部隊の相手だ、モビルワーカー隊は蔭苗邸を中心に敵揚陸艇からおりてくるモビルワーカーの駆逐が目的だ。一機も取り逃がしてはいけない。モビルスーツ隊は第一陣はジョシユアの援護をしつつ上陸する敵モビルスーツ隊の撃退。配置はアジー機、ラフタ機、昭弘機、シノ機だ。第一陣の隊長期はアジーさんが担当。第二陣は滑走路で待機する。こっちは降りてくるモビルスーツの相手だ。第二陣は直接カルタの部隊を相手にすることになる。気を引き締めておけよ。俺と兄さんの乗るアガレスを隊長機とし、三日月機と明楽機をつける」

サブレが一気に説明する中、気絶している明楽に一瞬だけだが全員が向く。

「話聞いていないけど……大丈夫？」

「さて……モビルスーツ隊の総隊長は兄さんが、モビルワーカー隊の総隊長はオルガに担当してもらおう。第二陣の指揮は直接俺が取る。モビルワーカー隊の作戦はオルガから直接聞いてくれ」

「先輩！私どうすればいいんですか？」

「ジョシユアの機体には予め耐海水用コーティングをかけておく、これはもうソニアが作業を始めているはずだ。敵モビルスーツと戦艦が展開する前にひっそりと潜水して待機、アガレスの閃光弾で一気に上空へ飛翔、そのまま戦艦へと攻撃を仕掛けながら戦ってもらおう」

エーコが大きく前のめりに立ち上がった。

「耐海水用コーティングなんてあるんですか？ぜひ見せて欲しいですー」

「良いですけど？ソニアに言えば見せてくれるはずです。ちなみにマルコシアスと一緒に持ってきた『あの機体』は使わない」

一部が不満そうにしており、その不満をシノが代表して口を出し始めた。

「オルガ！本当に手を組むのかよ！俺達で出来るんじゃないのか!」

ライドなど一部は黙って頷くが、雪之丞やアトラなどは決して意見を言うことも無い。

「この人たちの実力は確かだ。それは俺達がよく知っていることだろ？」
「でもよお！三日月も何とか言えよ!!」

「俺は不満は無いよ。俺達だけで戦うよりずっと良いし……」

三日月は特に不満は無いようなそぶりを見せる。

そこに勇気をもつて一言を言い出したのはタカキだった。

「俺は！団長の一言に賛成です！ここで皆死なないように戦うためにはこの人たちの力を借りるべきだと思います！プライドを張って……そんなんで死んで何か意味があるんですか!？」

オルガは黙ってマハラジャの方を見る。

マハラジャは黙っているが、マハラジャだけが知っていた事であるが、タカキはオルガとの会話を聞いてしまっていた。オルガが何に悩み、自分達がオルガに対してどういう感情を持っていたのかを。

この瞬間をシチュエーションするための下準備、鉄華団の意識を変革させるための準備だった。

「俺達はまだまだガキだ。だけどいつか俺達は火星で一番大きな組織にする！火星で生まれ育ったことを誇りに思えるような場所にして見せる！それが……」
「気恥ずかしさが込み上げてくる。」

「それがお前の目標か？」

「……………はい。これが俺達の目標です。俺の……………夢です。こいつらが誇りに思えるような場所を作る！」

「いい夢だ。サブレ……………きっちり支えてやれよ」

サブレは小さな声で「了解」と呟いた。

ステンジャとという名前の艦長は空母の中で作戦時刻を待っていた。

「ステンジャ艦長。降伏勧告の刻限を過ぎました」

「そうでなくてはな。これで火星に散った我が弟オーリス・ステンジャの敵が取れるというものだ。全艦に通達。掃討作戦を開始する。カルタ様に戦場に花を添えよ！」

戦艦からの攻撃で島全体に火の手が上り始めていき、三日月はバルバトスを立ち上げらせていた。

足元はヒールのような装備に変わっており、武器コンテナを探しているとその途中にアガレス用にと用意されたレンチメイスを発見した。

「これでいいか……………」

そんなことを言いながら武器を拾って最前線へ向かい、サブレはコックピット内で大きなため息を吐いていた。

ビスケツトはどこか申し訳なきさそうにしながら、頭にまるでゴーグルのような装置を付けている。

「はあ……………本当に」

「本当にごめんなさい。初めての同調で緊張しちゃって」

「そういう問題か？頭の中が十八禁で一杯一杯になって……………そんな一緒に泊まった女の裸体が大事ですか？」

「本当にごめんなさい！」

ビスケツトの方を振り向くとビスケツトが帽子をしていないという事に気が付いてしまった。

「帽子どうしたの？」

「タカキに上げたよ。オルガの隣にいる自分は帽子で隠れるような自分で在りたくないから」

「そっか……………帽子取ったら髪薄く感じるね」

「え!?今なんて言った？」

サブレはビスケツトの言葉を無視しながら黙って戦場に向かう為にレンチメイスを探すがどうしても見つからない。

その代りに三日月が持つていくはずの刀がコンテナ内に置かれている。

また大きなため息を吐きながら刀を持って戦場に、青空を火力で埋め尽くされ、作戦が既に始まっていることに気が付いたサブレは砲台を黙って敵艦体の上空に向けて引き金を引く。

閃光弾が放射線状に飛んでいき、戦艦の上空で弾けて眩い光となした。

その瞬間ジョシユアの乗るフェネクスはマントを外し、海水からものすごい勢いで上昇を始める。

「エイハブ・リアクター反応場所は………真下!？」

それが彼らの最後の言葉になった。

フェネクスの強靱な翼は戦艦を真つ二つに切り裂き、フェネクスの体は上空に海水を吹き飛ばすように姿を現した。

戦艦の混乱をよそに、モビルスーツ隊が次々と発艦していくが、その邪魔をするようにフェネクスが飛行形態で海面ギリギリを襲ってくる。

完全にモビルスーツ隊は混乱を極め、前方から襲ってくる火力とフェネクスの連係プレイに全員が混乱していく。

「昭弘、そこから船は狙えるの?」

ビスケットの言葉に昭弘は「やってみる」と言って射撃するが、思いつきり外してしまふ。その姿をサブレは「へたくそ」とヤジを飛ばす。

「地上では重力や大気の影響を強く受ける。何やってるんだが」

アジーから不満がやってくる上、ラフタも「ちゃんと狙えバカ！」と言われる始末。三日月の「最初に撃った感覚が残ってるだろ？」とのアドバイスを元に撃ち直す。

「俺このスナイパーライフルで撃てる気がしねえよ」

シノが不満げにしながらもやってくるモビルスーツを一つ一つ迎撃していき、その後ろでサブレはコックピット内でラジカセを動かし始める。

大音量で鳴らせば指揮に影響が出ると音量を落としながらコックピット内にジャズ音楽を鳴らし始める。

「宇宙にいる部隊が降り始めた！皆構えて！」

「間違っても今は撃つなよ。耐熱シールドを下に敷いて降りてくるんだ。撃つてもダメージにならないぞ。各機散開！」

降りてくるモビルスーツ隊からの攻撃をきつちりかわしながらサブレは「プランA」と指示を出す。

三日月と明楽がアガレスの前に立ちふさがる。

「まずは敵の出口を見るぞ。兄さんはアガレスに記憶させるのを忘れないように」

現場を見ながら指示を飛ばすサブレ。

カルタの部隊が降り立つと全員が七機のモビルスーツが綺麗に並び始めるのを黙っ

てみていたサブレの操作で、アガレスのバックパックに備え付けてあるランチャーが火を噴いた。

「我ら！地球外縁軌道統制統合艦隊！面壁九年！堅牢堅固！」

サブレが撃った弾丸がもろに右から二番目の機体に着弾した。

「まさか戦場でカッコをつける馬鹿野郎がいるとは思わなかったな。さすがお飾り艦隊。噂以上だな」

明楽が爆笑している間にカルタは怒りで震えていた。

「なんと………不作法な！圏外圏の野蛮人に鉄の裁きを下す！」

カルタと共に敵モビルスーツが真正面からやってくるのをサブレはため息お共に不満を吐き出しそうになる。

明楽のアンドロマリウスは強靱な拳で一機を吹き飛ばし、三日月とサブレは機体を土台にして真後ろに移動する。

「カルタ様！我らの陣が！」

混戦状態に移行するのにそこまで時間は掛からなかった。

「サブレ、上陸したモビルワーカー隊が蒔苗邸にまっすぐ向かってる」

「そっちはオルガに任せる。他は？」

「海上からやってくるモビルスーツは上陸する前に叩けているね。ジョシユアさんがか

く乱してくれているお陰だね」

「だろうな。それぐらいしてもらわなくちゃ困る。問題はこつちがどれだけ早く決着をつけられるかだ」

サブレとビスケットの乗るアガレスは一步下がった立場から戦場を全体を見ており、アガレスの広範囲索敵システム『ウアサゴ』で戦場全体を調べながら戦い全体をコントロールしていく。

アガレスは黙って敵機の情報を検索し、やってくる敵にだけ黙って相手をするという作業が続いている。

蒔苗邸で戦っているモバイルワーカー隊は迫りくる敵に苦戦を強いられていた。

「よく我慢してお前ら。敵の誘い込みは成功だ。退くぞ」

「団長。ビスケットさん達は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ！ミカだっているんだ。信頼してやらねえとな。タカキだつてその帽子を託されたんだろ？」

モバイルワーカーの操縦をしているタカキは黙って帽子を触る。

オルガは双眼鏡で蒔苗邸の方をじつと眺め、爆弾のリモコンに指を置く、ギャラルホルンが誰かに連絡を取りながら蒔苗邸で搜索をしているところを狙ってオルガは爆弾のリモコンのスイッチを押した。

「よし！俺達はこのまま揚陸艇の確保をしてきているライドたちの部隊に合流だ！」
「はい！」

オルガが肩に冷たい物を感じた。

「何だ？水？」

雨が降り始めようとしていた。

雨が降っている。

カルタは焦りを感じていた。

海上から侵入する部隊は艦事叩き落され、自分と一緒に侵入した部隊もカルタを除いて三機になってしまった。

「明楽！そこは爆弾を仕掛けたはずだろ！」

明楽が「ヤバ！」と言いながら後退し、爆弾の爆発に巻き込まれる形でまた一機が大破してしまった。

しかし、カルタはその声をばっちり聞いていた。

「カルタ様！あの黒い機体が敵のリーダー機です！ここは我々が押さえます！」

カルタはアガレスに向かって機体を走らせ、三日月と明楽は二機のモビルスーツに足止めを食う。

しかし、この状況もサブレとビスケットの予測通り。

アガレスは瞬時にカルタの戦闘データから演算した予測演算結果を映像という形でサブレに見せる。

カルタが放つ剣の振り下ろし攻撃をギリギリまで引き付けつつ回避、そのまま流れるような速度で剣をカルタのコックピットに差し込む。

その動作はまるで鞘に剣を片付けるように滑らかに、一切の無駄の無く隙の無い攻撃だった。

それを見ていたほぼ全員が唾然としてしまうのはおかしなことではなかった。

「カルタ様!!」

サブレの冷めきった感覚をビスケットは怯えながら感じていた。

(何?この感覚……どうしてこんなに寒いのか?)

「これで一人目。一族よ。鉄血のオルフェンズの祖先よ。裏切り者に救いを……」

この小声はビスケットだけが聞いていたが、アガレスの後方から何かが近づいている事に気が付いたビスケット、サブレは黙ってそっちにカメラを向ける。

そこには海上を恐ろしい速度で近づいてくるキマリスが居た。

「カルタあ!!」

サブレはカルタの機体から刀を抜き、機体の隙間からカルタの状態が見えたが、胴体

を横から縦に真つ二つにされている。

即死だろうと感じてサブレは一旦カルタ機から離れていく。

ガエリオは咆哮を上げながらカルタの機体を回収する。

向かい合うキマリスとアガレス。

カルタの部下二名もカルタの側に寄り添う形で近づき、アガレスを守るようにバルバトスとアンドロマリウスが立ちふさがった。

一触即発の雰囲気の中ガエリオは部隊の全滅を確認した後黙って撤退していく。

「カルタ………すまない」

彼女は既に返事が出来ない体になっていた。

オルガがモビルワーカーから降り、揚陸艇で脱出の準備をしている真つ最中だった。

雨で体中が冷えていき、クーデリアはフミタンが差す傘の中へ、アトラも一緒にいれてもらい、タカキ達はモビルスーツ隊の戦局がどうしても気になっていた。

マハラジャと蒔苗だけは余裕たっぷりの表情でいたが、その余裕に答えるようにモビルスーツが一機、また一機と近づいてくる。

最後にアガレスが姿を現すとオルガは大きな安堵の息を漏らした。

「行こう………オルガ！」

「ああ！行くぞ！お前ら!!」

彼らは別の未来へと歩き出す。

まだ見ぬ白紙の未来へと。

愛シテイマス

ビスケットは頭を悩ませるような状況に追い込まれていた。

アトラは三日月に対して怒りを滲ませ、シノとライドは顔に「やらかした」と書いてあるような気がするし、キッチンで何かを調理しているサブレはそもそも興味すらない様な表情をしている。

何よりアトラがビスケットの右腕に絡みついて離そうとはせず、三日月は何で自分が怒られているのかがよく分かっていない様な表情をしている。

いや、三日月は本当の意味ではまるで理解していなかった。

何故自分が怒られているのか、アトラが何に怒っているのかをまるで理解できていない。

「要するに三日月は私はビスケットとお似合いだつて言いたいんだよね!」

「うん。お似合いだと思うよ。アトラとビスケットなら幸せな家庭が築けそうだなって思うし」

ビスケットは怖くてアトラの表情を見る事が出来なかったが、アトラの顔が見えてしまふシノたちの顔が真っ青に染まっていくのが見えたので相当怒りを表情に浮かべて

いるのが想像できた。

内心どうしても考えてしまう。

(どうしてこんなことに……………?)

全ての切っ掛けを話し始めたらきりが無いが、ビスケットはここ数日アトラと気まずい関係を続けており、その理由はアトラとビスケットがサブレの自宅に泊まってしまったのが理由だった。

二人は少々危ない一夜を共にし、下手をすれば一線を越えかねない状況だった。一緒にお風呂に入り、その後半裸で一夜をベットで共にする。

明らかに危ない関係だったし、サブレからも誤解を受けそうになってしまった。

それについてはお互いに反省しているし、お互いに謝って終わった話だが、そう簡単に割り切れる事では無かった。

なんだかんだあり、戦いを挟んだ結果気まずい関係に拍車をかける結果になった。

その結果ビスケットはアトラに話しかけずらい状況が完成し、それ故に食堂に行かないようにしていた。

それが、食堂で起きていたあの事態をビスケットは阻止できなかつたきつかけになった。

全ての切っ掛けはシノとライドが話していたどの女性が一番好みか、なんて言うビスケットからすれば話そのものが馬鹿らしい内容だったが、本人達は意外と真剣に語り合っており、それ故に本人達はアトラが物陰に隠れており、食堂にいるという事に気が付かなかった。

そんな時、食堂で食べていた三日月にシノが話を振った。

「お前はクーデリアさんとアトラどっちが好みなんだ？」

三日月には特別好みという考え方は無かっただろうし、だから別段考えることは無かったが、シノたちの返答に対して少々困った顔をした。

そんな中シノの「クーデリアさんの方がボンキュッボンだろ!」なんて言うものだから、三日月の中で「クーデリアの方がいいんだ」という考え方が浮かんだ。

その結果三日月は「じゃあクーデリア」というのだが、サブレはその時マハラジャから頼まれたうなぎを焼いている最中、下にいたアトラに視線を移した。

そこには体を震わせるアトラの姿があった。

「三日月は私よりクーデリアさんが良いの!？」

アトラ怒りの登場。

「え?！」

「じゃあ三日月は私と誰がくっつけば納得いくの?！」

「うーん………バスケットかな？」

シノ達の顔に「空気読め！」と書いてあるのだが、そういう空気や雰囲気を読めないことでは有名な三日月、アトラは顔を真っ赤にしたり、三日月への怒りなんかで態度がおかしくなっていく。

「でも、アトラはバスケットが好きでしょう？」

全員が心の中で「何でそうなる!？」と叫びそうになり、一触即発の雰囲気の中これまたタイミング悪くバスケットが入室した。

なんとなくの雰囲気を感じ取り、嫌な予感やアトラに対して合わせる顔が無いビスケットは逃げ出そうとするのだが、それ以上の速度でアトラがバスケットの腕をつかんでいた。

そして現在に至る。

バスケットは表情で「助けて」とサブレの方を見るが、完全無視を決め込んでいる。

「後になって私と付き合っておけばよかったって言っても遅いからね！」

「う、うん」

特に何とも思っていない様な表情を浮かべる三日月に怒りを見せるアトラはそのままバスケットを連れて食堂から出ていった。

ビスケットとアトラは食堂から離れた廊下の突き当りで一旦止まる。

「アトラ？ 三日月も決して本気だったわけじゃないんだよ？ 周囲からああ言われちゃったからああいっただけで」

「分かつてる。でも……嘘でも言つて欲しくなかった」

アトラの気持ちが最低限でもよく分かる。

好きな人にたとえ嘘でもあんな風に言つて欲しくなかったし、そういう鈍感な所があるとアトラ自身知つていた所だった。

「お、俺から言つておこうか？ 多分三日月も俺かオルガが言えば反省すると思うし、シノ達にも俺達から叱つておくとよ」

「ねえ、ビスケットは私の事が嫌いなもの!？」

「ええ!?! いきなり何の話?！」

「良いから答えてよ」

「す、好きだよ」

アトラはビスケットの右手を恋人繋ぎで手を握りしめ、「じゃあこれでいいの」とビスケットに語り掛ける。

「で、でも……」

「ビスケットは私の事が好きなんですよ？ 私もビスケットの事好きだし。これでいい

の……ねえ、ビスケットと私が初めて会った時の事覚えてる？」

「うん。確か女将さんのお手伝いでCGSに配達に来たんだよね？」

「その時私女将さんに止めておけって言われたのに三日月を探しに行つて……一軍の人達に囲まれていた所をビスケットに助けられた。でも、その次の日会いに行つたとき、ビスケットは顔に殴られた跡があつたとね？ あれ……私を庇つたせいなんだよね？」

「そつか……アトラ氣にするかなつて」

「氣にするよ！ でも教えて欲しかった。じゃないと……今になつてこんな氣持ちになることだつて無かつたもん」

アトラがこの話を知つたのはここ最近の話だつた。

オルガからその話を聞き始めて知つたアトラの中にビスケットへの恋心が目覚めた。

それは明らかに遅い恋心で、三日月への想いに比べたら小さいのかもしれないが、確かに存在する思い。

サブレの家に泊まつた時アトラはその氣持ちを確かめたかつた。

自分の中に存在する恋心。

三日月の事を今でも好きだし、ビスケットの事も好きになつてしまつた。

だからビスケットの裸を思い出しては赤面するし、一緒に寝たと思うと興奮してし

まって眠れない。

三日月が優しくすると熱くなるし、手伝ってくれと嬉しいという感情が生まれる。大小なんて無いのだとようやく気が付いた。

でも、どっちかをはっきり決めることなんてアトラにはできなかつた。

だつて、どっちに好きだから。

だから自分から言い出す事が出来なかつたが、三日月とビスケットに違いがあるとすればそういう機微が分かるかどうかだと思つた。

ビスケットはずつと知つていた。

アトラは三日月が好きなのだ、だから自分が告白するわけにはいかないと思ひ踏みとどまつた。

「私……………」

アトラが顔を真っ赤にしている姿を見てビスケットはようやくアトラの本心に気が付いた。

『嫌いな奴と一緒に風呂入ったり、一緒にベットに入つて寝たりできないと思うけどね』

（そうだね。サブレの言う通りだつた）

サブレと一緒に地球に行くシャトルに乗り込むとき、サブレから言われた通りだつ

た。

バスケットは「ここは男らしく俺から」なんて思いながらアトラの方に顔を向ける。

「俺……………アトラの事が好きです！ 付き合ってください」

「！……………うん！」

サブレは頼まれていたうな重を父親であるマハラジャに渡し、その足でソニアから頼まれていた戦闘シミュレーションをこなした後、コックピットをでた所でモビルワーカーを見上げるタカキの姿を見かけた。

特にどう思ったわけでもないが、右手に握りしめられた元々バスケットが被っていた帽子や、哀愁を感じさせる背中を見ていると放っておけなくなつた。

「どうした？ 訓練なら勝手にしても怒られないと思うぞ」

「え？ そういう訳じゃ……………ただこの先やって聞けるのかつて不安で、皆ドンドンうまくなつていくし、俺なんかがこの先団長を乗せて守り切れるのかつて」

かつての失敗を気にしていて、バスケットから託された帽子を被る覚悟もやってこないタカキ、不安はいつだって彼を襲い掛かつてくる。

「不安を払拭したいのなら努力するしかない。どれだけ努力しても足りないんだ。不安や周囲からくる期待、目的に向かう為には努力するしかない。必死になって勉強し、必

死になって訓練する。そうすることでしか払拭できないんだ」

「あなたにもありますか？」

「あるさ。俺が戦う目的、俺が周囲から感じる期待に答える為にも努力するしかないんだ。生きていけばいくらでも挑戦することは出来るはずだ。お前は生きている。それ以上に必要な事があるのか？」

「努力するしかない……三日月さんみたいになれますか？」

「無理だな。あれはあれで特別な人間だ。でも、お前がああなる必要はないだろ？ お前にしかない才能を見付けて伸ばせばいいんだよ。何もお前が三日月になる必要はない」

「でも……皆三日月さんに憧れていて、みんながあんな風になりたいって」

「それこそ幻想だな。俺はなりたいたいと思わないけどな。言っておくが、そんな三日月は俺に負けたんだぞ？ それこそ三日月だって万能や完全からは程遠いという意味じゃないのか？ だからこそ人間ていうのはお互いに弱点を補い合い、補完し合う事が出来るんだ。お前が成りたいのは三日月のように戦える人間なのか、それとも誰かを支える人間になるのか？ どっちだ？」

タカキは俯きながら少しだけ考え込む。

「俺になれますか？」

「成れるさ。人を支える人間になりたいと真剣に思い、その為に努力を重ねる事が出来るのなら成れる。少なくとも三日月になるよりは確実に成れるさ」

「俺……………頑張ってみます!」

そう言つてタカキはサブレの元から立ち去つていき、サブレは格納庫へと戻つていく道すがらオルガを見かけた。

「悪かつたな……うちの団員が迷惑をかけた」

「あの程度の迷惑なら可愛い物だな。でも、良くも悪くもこの鉄華団は三日月が中心に居るな。ある意味危うい状況だ」

「その辺はうちの今後の課題だな。それより、意外だつたな、お前にも目標があるだな。なんか誰よりも大人びて見えるけどな」

「そう見えるなら俺の目的が後ろめたい気持ちからくる目的だからだな。オルガ達のように前向きじゃないからじゃないか?」

「お前の目的って?」

サブレは立ち止まりオルガの方を振り返り、オルガもそれに合わせるように立ち止まる。

「ギヤラルホルンを壊滅させて、裏切り者を肅正する事。俺達の一族や、かつての仲間達を裏切り世界の覇権を握りしめ、多くの人を犠牲にしても自分達の私腹を肥やそうと

する奴らに裏切りの代償を支払わせる。それが俺とアガレスの戦う理由だ」

「それって……セブンスターズに戦いを挑むって事か？」

「殺すって意味さ。一人残らずぶち殺す」

「それが幼い子供でもか？」

「それがはるか昔に交わされた契約でもある。それを果たす為にもアガレスとグリフオン家が存在しているんだ。俺達がこの世界で唯一ギャラルホルンを裁くことができる人間でもある。それにこれはセブンスターズやギャラルホルンの貴族たちの祖先が一度認めた内容だ。これを破る事が許されない」

「なんかわかつた気がするぜ。お前達が戦う理由っていうのが……まつすぐな理由が。お前達はある意味真直ぐなんだな」

オルガのまつすぐな問いに対してサブレある数字『七十五』と揚げて見せた。

「この数字が何を指すのか分かるか？」

「いいや、何なんだ？」

「俺達フオートレスを支えている財政界や政治家や企業の数だ。これでも数は完全に信頼できる人間に限っている。大半は企業だから実際の数はかなり多い。地球圏にいる人間の半分以上は俺達フオートレスに投資をしている。その目的は……」

「ギャラルホルンの壊滅……か。そいつら皆が望んでいるんだな」

「そういう人たちというのは厄祭戦の際に亡くなったガンダムのパイロットたちの遺族や親戚の血縁者だ。父さんはああいつているが、最近ではアガレスが見つかったこともあり、今の経済圏でもギャラルホルンを裁けるとあつてほぼ皆が「ギャラルホルンとの戦争」を望んでいるんだ」

抑えきれないほどの怒りの渦。

それはフォートレスに「早く戦え」や「早く一族の悲願を！」と願う者達の声として襲い掛かってくる。

「だからこそ戦力になりそうな組織は積極的に勧誘するし、自分達の意にそぐわない組織は情報を漏らす前に滅ぼすようにしている。これの意味がオルガなら分かるだろ？」
「俺達は試されているってわけだ」

「そう言う事さ。もう戦争は避けられないんだよ」

オルガの目の前にいるサブレ、オルガには目の前にいる少年の背中に大きすぎる物を背負っているように見えた。

それは一人の少年が背負うにはあまりにも重たすぎる宿命。

それでもそれから決して逃げず、自らの一族の宿命にたった一人で果たそうとする。
「嫌になつたろ？」 面倒に感じたろ？ なら今からでも避ければいいさ。父さんだつてオルガ達が裏切るわけじゃないと知れば本気で肅清しようとは思わないさ。それでも

……兄さんだけは引き抜くとは思うけどな。あの人がいないとアガレスの真価アガレスの真価は発揮できないわけだしな」

「俺達は一度信じた人間から今更逃げるつもりはないぜ。それに……俺はお前がそんなに悪い人間には見えないしな」

サブレは大きなため息を吐き出しながら「好きにすれば」と言いながら立ち去っていく。

「それに……お前達のお陰で俺達がいるんだ。今更裏切れねえし、義理を返せたとも思えてねえしな。少しでも分かった気がする。お前達の戦う本当の理由ってやつが」

オルガは立ち去っていくその後姿を見ながら肌寒さを感じていた。

エドモントン編

暗躍と復讐

ガエリオは俯きながらカルタの死を耐え忍んでいたが、正直に言えばカルタの遺体はもう本人なのかを判断することすら難しいほどの肉塊になり果てていた。

即死だろうと判断され、痛みを感じる間もなく殺されたと聞いたガエリオは怒りを胸の内に抱擁し、マクギリスから説得される形でアイン・ダルトンに阿頼耶識の手術を施す事になった。

いや、彼も気が付いていたのかもしれない。

自らの復讐心がガエリオに非情な行動を心がけようとしていたことに、鉄華団の行方が分からない現在、ガエリオは耐えることしかできなかつた。

でも、彼は知らない。

自らもフォートレスのターゲットに入っていることに。

船がアラスカの港に辿り着く頃には寒さでおかしくなりそうになっており、ビスケットはニット帽にダウンジャケットを鉄華団のジャケットの上から来ている。

隣では同じ格好で寒そうにしている三日月、オルガは防寒ジャケットを上から羽織っている。

そんな彼らの前では同じように防寒ジャケットを着ているマハラジャがモビルワーカーの購入金額のチェックをしている。

その後目の前でニコニコしている恰幅の良い男性から渡されたタブレットをオルガへと渡す。

そこにはオルガやビスケットが見たことが無い金額が掛かっていた。

「お金はもうアルベルト様からもらっておりますので、大丈夫でございます。これから我々の商會を」

「ああ、鼻屑にさせてもらう。あと済まないがこのモビルワーカーを列車内に積み込んで欲しい。できれば明日の朝にでも出発するつもりだ」

「お代はこちらで持たせ貰いますので安心してください」

「いや、こういう時はちゃんとしたい。お金は支払う」

大人のやり取りをしているのを目の前で見守っていると、終わったばかりのマハラジャオルガに近づいていく。

「この金額はこの仕事が終わった後に、我々の仕事をしつつ返してもらおう。利子無しで構わん。その代りこのモビルワーカーは全部お前さん達にやるから好きに使い。出発

は明日の朝だ」

「そんな時刻で大丈夫ですか？ 早めに行った方が良いんじゃないや？」

「向こうは理由があつて下手に戦力を割くことができない上、最低限でもバッチリ配置している。セブンスターズを相手にするというのはそう言う事だ。持久戦になる上、こういう場合はしつかり準備をすることが大切だ。たくさん怪我人も死人も出るぞ。今のうちに包帯などの消耗品を購入しておけ、こういう時に人数がいる鉄華団が有利だ」

オルガはビスケットと視線を合わせた。

「こっちの足元を見ているところが少々気に食わないけど、言う通りだな。ビスケット、他の奴等に買い出しを命じておいてくれ。俺はその間に作戦の詳細を詰めておくから」

「了解。三日月はどうする？」

「……………寒いから中入りしたい」

その後ビスケットはアトラと一緒に食料の買い出し、特に市場へと買い出しにきている中、アトラに気になったことを尋ねたビスケット。

「アトラから見てサブレってどんなイメージ？」

「え？ う〜ん大人びているようなイメージかな？ でも、時折冷たいイメージがある

かな？ 時々だけど怖い時がある」

「そっか………、昔っからああいうところはあつたんだけど、一緒に戦っていた時、アガレスを通じてサブレの冷たいイメージが流れ込んできたときがあつたから」

「? どんな感じのイメージ?」

「復讐かな? 深い怒り見たいなイメージがあるんだよね」

アトラは魚介類を探っている手を一旦止めて考え込む。

「でもね。私はそういう復讐とかよく分からないけど、そういう冷めきつたイメージはないんだ。なんていうか、明楽君と話しているときとか時折楽しそうにしているし、人って多面性を持っているじゃない? ビスケットだつてそういう複雑な一面を持っているし」

「まあね」

「サブレしか知らない事って多いと思うよ。それだつて家族の事もビスケット達は知らなかったでしょ?」

サブレはビスケットやサヴァラン達より早く両親の死の真相に気が付いていた。

「なんていうのかな、物事の一つ近い近い場所にいるつてイメージなんだよね。どうしても気になるならビスケットが思い切つて聞いてみたらどう?」

サブレがどんなことを考え、どんな風に悩んでいるのかをビスケットは必要以上に気

にしていたのかも知れなかった。

サブレから感じた途轍もない寒気。

格納庫に入り温かい空気に服の中が熱くなってきた。ビスケットはマフラーとニット帽を外す。

するとアガレスを見上げているサブレを見つけ出した。

「買い出しご苦労さん。さつきシノ達も帰ってきて一通りの買い物は終わったってさ。作戦もおおよそ決まったみたいだし、あとは向こうにつくだけだ。取り敢えず俺達としてはマクギリスが連れてくるであろうガエリオを利用する算段だ」

「どういう事?」

「議会に目的の人物を当選させようとするれば相手の目的は何だと思う?」

「? 当選するまでの時間稼ぎ?」

「そうだ。それさえすれば俺達を相当するなんてその後本部から応援を頼めばいいんだ。その間に自分とはんざらすればいいんだからな。だからこそ蒔苗氏を島に押し付けていたわけだし、しかし、カルタ・イシューの独断専行で蒔苗は自由の身になった。その上、まだ本人は気が付いていないだろうが、マクギリスの所為で俺達の行方すら掴めていない。ならどうするか」

「……………えっと。あ、防衛に尽力する? それも持久戦に徹する為に戦力の出し惜しみ

はしない」

「そう言う事だ。そこでガエリオ・ボードウィンなんだ。俺達に個人的な恨みを持っており、いざとなったらその未熟さ故に戦力を出し惜しみなく前面に押し出してくれる人間。そこをこちらは利用する。まあ、それまで蒔苗氏の協力者が時間を稼げるかが肝だけど。それより何か話があつたんじやないのか？」

ビスケットは言い出しにくそうにしていると、サブレの目をまつすぐに見つめて問いかけた。

「サブレはカルタつて人に恨みがあつたの？ アガレスを通じて伝わってきた感情はものすごい黒い感情だったから」

サブレはアガレスの方へと再び視線を落とす。まるで昔話を語りだすかのように語り始める。

「その昔『鉄血のオルフェンズ』と呼ばれていた者達がいた。彼らは悪魔と呼ばれる mobile スーツに乗り、災いとなっていた存在に挑んでいた。しかし、戦いが終盤になると世界の支配権を握っていた者達は自分達に断罪の手が伸びるのを恐れた。だから『鉄血のオルフェンズ』の中に裏切り者を作り出した。権利を与える事だな。それが………ギャラルホルンとセブンスターズの始まりだ」

「え？」

「そして、当時の組織のトップを張っていたのが俺達の祖先。俺達の祖先は世界を変えようとしていた。等しく平等何て都合のいい話なのかもしれない。でも、この世界からオルフェンズを無くそうと努力しようとしていた。でも、それは彼らの裏切りによって邪魔されてしまった。この世界は始めつからおかしいんだよ。笑うだろ？ 自らの行いを正義だと言っている彼らに始めつから正義何て存在しないんだ」

「そ、それは……、でも証拠何て！」

「あるんだ。それは彼らがどうしても見つけない存在。それがアガレスなんだ。このアガレスは三百年前を正しい記録として記憶し続けている。こいつは彼らを裁くことができる機体。そして、フォートレスは三百年間待っていたんだ。現れるのを……裏切り者に断罪の裁きを与え、裏切り者を世界から迫害できる存在を」
笑っているサブレの瞳の奥は決して笑っていない。

どこか悲しそうにも見えるその瞳。

「虐げられてきた人達は多いんだ。彼らの家族や遺族は許さない。いつだって復讐心を燃やしており、それがフォートレスの暗躍へと繋がっている。期待だつてあるし、俺がやらなくちゃいけないだろ？」

「サ、サブレがする事じゃないよ」

「でも、アガレスが俺達一族しかにしか扱えない以上は俺達がするしかないだろ？ そ

れに兄さんだつて他人事じゃないぞ。父さんはもう兄さんを巻き込む気満々なんだ。そのうち分かるさ。それに……兄さんが感じた怒りは多分……俺の心が感じたアガレスの怒りじゃないのか？」

「え？ アガレスの怒り？」

「ああ、アガレスが兄さんに見せている怒り。機械だからって感情が無いとも言えないだろ？ 三百年も動き続けている機械だぞ？ 怒りだったあるのかもしれないだろ？」

「へえ……そんな話にな。でもどうなんだろうな。信憑性は無いと思うぜ」

オルガは背中に車両の壁に付けながらもたれかかり、ビスケットは窓から真つ暗な夜空を眺めている。

「まあね。でも、虐げられている人なんて地球にもいるんだね。なんとなくだけど、地球に暮らしている人は不自由なく暮らしているんだってイメージだったから」

「まあ、それも俺達の勝手なイメージなんだろうけどな。遠すぎて分かんねえよ」
「だね。でも、虐げられている人ってどこにでもいるんだね」

オルガは腕を組みながら少しだけ思案顔を作り出し、ビスケットは顔をオルガの方へと向ける。

「オルガは地球に来て何かしたい事ってある？」

「え？ どうだろうな？　　そういやあ考えたことも無かった。ビスケットはあんのか？
ここにきてやりたい事」

「やりたい事じゃないけど。見たい物ならあるよ。だからこそこうして窓を眺めているんだもん。オーロラが見たいんだよね」

「オーロラ？」

「うん。虹色のカーテンみたいな現象が起きてすごく綺麗なんだって」

「へえ……なら俺も見てみたいな」

ビスケットは窓の方へと振り返るとため息を漏らしてしまった。

オルガも一緒に見ようと窓から覗き込むと、虹色のカーテンのように見える現象が窓一杯に写されている。

「見れたな」

「うん……」

「なあ、ビスケット。俺な多分地球の奴らが気に食わなかったんだと思うんだ。いや、多分幸せな奴らだろうな。皆俺達を下に見て俺達に無理矢理命令していつか俺達を食い物にするんだだろうなって。テイワズに入って上にのし上がっていけばいつか俺達が馬鹿にした奴らに仕返しできるって信じてた」

「知ってる」

「でも、始めてんだよ。俺達をまつすぐに見てくれる人に出会えたのは。対等じゃなく、まるで駄々をこねるガキを叱るみたいにさ。俺達……ああいう人に始めっから出会えていたららもつと違う道があつたんだと思うか？」

「多分ね。でも、終わったことだろ？ 俺達はこれからできるって証明しないと。それに、オルガは火星を独立させたいんだろ？ 誇れるような場所にしたくないんだろ？」

「まあな。俺にできるのかな？」

珍しく落ち込み気味のオルガの背中を誰かが叩いた。

「？ 三日月？」

「らしくないな。オルガらしくない。オルガだったらやつてやるっていつだって前を向いているよ」

「そうだよ。俺達で支えるんだよ」

三日月から続くように現れるサブレ。

「今更臆病にでもなつた？ やりたい事があつてその為の道が目の前にあるんだろ？ だつたら今更尻込みするな」

「そうだよ。一人で背負わないで欲しいな」

「俺達だつてここにいます。オルガを支える為に皆がいる」

オルガはニヒルに笑いながら「だな」と呟いた。

太陽が上がっていくとエドモントンが目の前に近づいていき、オルガ達の目の前に近づいていく中、格納庫ではモビルスーツが出撃準備に追われていた。

ビスケットは頭に脳波受信装置を付けながら、アガレスから送り込まれてくる情報を処理する。

すると、サブレの言う通りアガレスの奥に怒りに似た記録があるのに気が付いた。

それはかつての一族の怒りなのかもしれないなかった。

「兄さん情報処理はそっちに任せるぞ。俺は戦う方に集中する。前回と違って今回は戦う事になる。できれば討ち取られたくないんだ。アガレスは疑似リアクターを上から備え付けて固有周波数を誤魔化している。捕まれば一巻の終わりだ。それこそ、フォートレスとギヤラルホルンの全面戦争になりかねない」

「そうなれば世界の終わり?」

「そうなるな。技術衰退で終ればいいが、最悪地球が火星や木星圏の支配下なんて事になりかねない」

「それだけは何とか回避しないとね」

アガレスの目の前に明るい太陽の光と、更に奥に見える見慣れぬ大地が見えた。

『オルガだ。作戦を伝える。まずはモビルスーツ隊が活動拠点である駅周辺を確保。そ

の後、モビルスーツ隊は後方からやってくる敵モビルスーツ隊を引きつけ、モビルワーカーはその間にエドモントンへと進行する』

「作戦通りにいくよ。三日月とサブレでまずは血路を切り開く。作戦開始！」

アガレスとバルバトスがレンチメイスを装備して、一気に血路を切り開くために列車から飛び降りた。

悪魔と呼ばれた者達と希望と恨まれた者達

鉄華団とギャラルホルンが交戦を初めてはや三日、エドモントンへの侵入を防ぐギャラルホルンと侵入を果たしたい鉄華団の戦いは平行線を描いていた。

エドモントン郊外の平原での戦い、鉄華団の犠牲は次第に募っていき、決定打を打てずにいる中、メリビットなどの一部の者達には不安が高まっているような状況だった。

モビルスーツ部隊はビスケットとサブレの指揮の元、疲弊が少なく済んでいるが問題はモビルワーカー隊である。

ギャラルホルンは基地からの補充が効くが、補充のきかない鉄華団は適度に撤退に追い込まれている状況。

問題なのはエドモントンへと侵入する唯一の道である橋を完全に抑えられている事だが、ギャラルホルンも選挙の終了までは下手に進撃できない状況が続いていた。

もどかしい時間が過ぎ去り、モビルスーツ部隊にも多少だが疲弊が高まりつつあるような状況が続いていた。

「ああもう！　また逃げた！」

ラフタの悲鳴のように聞こえる声にアジーが感心したように呟く。

「乱戦になったら不利だつて学習したんだね。向こうもよくやってる」

「敵を褒めんな！」

「私達もよくやっているよ。もう三日もここで耐えている。これもあの兄弟の采配のお陰だね。でも……」

「うん……モビルワーカーは限界に近いかもね」

サブレとタブレットを片手に操作をし、ビスケットはその後ろで大きく息を吐き出す。

首に巻いたタオルで汗を拭うビスケット、そんな中ビスケットはサブレが覗いているタブレットが気になってしまった。

「どうしたの？」

「川の水位が下がってきている。この調子でいけばモビルワーカー……いや、車ぐらいなら通れそうだな」

「そうだけど。モビルワーカー隊を犠牲にする必要が……」

「犠牲の無い勝利はありえないと思うけどね。でも、そろそろ決めたいのは事実なんだ。向こうからだとかガエリオが次の戦いの準備をしているらしいし」

ビスケットが黙り込んでしまう。

ビスケットとしてはこれ以上犠牲が出るような戦いはしたくないが、このままでは勝

ち目がないのも事実。

予想以上にモビルワーカー隊が疲弊してしまった。

バスケットはサブレに「オルガに会ってくる」とアガレスから飛び降る。

サブレにもバスケットの言いたいことも分かるが、しかし、ここで犠牲を出す以外に勝利の方法がないのも事実。

躊躇していたら勝てない。

同じ時、マハラジャは一人煙草を吸いながら格納庫に隠している青いハンマーを背負ったガンダムフェイイスのモビルスーツを見上げる。

「そろそろ俺も出るか………これに乗るのも久しぶりだな」

ガンダムフェイイスには『ガンダムパイモン』と書かれていた。

慌ただしく整備の時間が過ぎる中、バスケットはオルガの元へと駆け寄っていく。

「オルガ時間は？」

「もうあまり時間はねえ。次が最後のチャンスだ」

「川の水位が下がってきている。今なら……」

「俺もそれしかねえと思ったが、モビルワーカー隊を犠牲にするしかねえ」

「こればかりはバスケットもこれ以上意見を押し通すわけにはいかないし、二人で黙り込んでいると三日月からの連絡が入った。」

「オルガもビスケットも俺達に賭けてみなよ。俺もみんなも賭けてるよ。最初っからね」

サブレは笑いながら操縦桿を優しく触れる。

これが最後の戦い、どれだけ悔やんでも最後になる。

「ありがとなミカ」

「聞いてくれ。もう時間がねえ。うまくいこうがいくまいが次が最後の作戦だ。メリビットさん。あなたは負傷した奴らを連れてここから離脱してくれ」

「え？ それは…」

「そして、お前達には囷としてギャラルホルンを全力で引き付けてもらおう。正直無茶苦茶な作戦だ。だが目的を達成するために今俺達が考えられる唯一の手だ。もしこの作戦に乗れねえんなら、負傷した奴らと一緒に引いてくれて構わねえ。乗ってくれるなら……お前らの命って名前のチップをこの作戦に賭けてくれ！」

メリビットが何か言おうと前に進み出るが、それをビスケットが首を横に振って拒否する。

もう作戦が無い。

ここで引けば今までの犠牲が無駄になる。

何より更に多くの犠牲者を出す事になる。

「俺達が前に進む為に………鉄華団が未来に大きな花を咲かせるために今ここでお前らの命をくれ！」

その様子をマハラジャが遠くから見守っていた。

「その命俺達で拾ってやるか………なあサブレ」

「そうだね」

「全く………手のかかる子供を持つと苦労する」

マハラジャは煙草を吸いながら通信機越しに喋っているサブレに対して「ククク」とどこか楽しそうに笑う。

しかし、それでいた本当に仕方なさそうな表情をする。

「そう思うんなら今からでも手を切る？」

「まさか………やっと来た悪魔を狩るチャンスだぞ。ここを逃せば作戦が十年以上長引く。俺達は希望と恨まれた者達なのさ。悪魔を狩るまでは………止まらない」

クーデリアが車の助手席に乗り込むと、隣の運転席にアトラが乗り込んだ。

ビスケットがアトラの足元にあるアクセルやハンドルをアトラ用に調整し、クーデリアはその様子を驚きながら見ていた。

「アトラさん!? なんでも…?」

「戦う人の手が足りないんで運転は私がします」

「アトラは危険な事はしないでね? クーデリアさん多分大丈夫ですからアトラをよろしくお願いします」

「もう! 私がクーデリアさんを守るの!」

「彼氏としてはアトラが心配というか……」

急に訪れる二人だけの時間に戸惑うクーデリア、そんな中フミタンが助手席の窓から顔を覗かせる。

「フミタンは来ないの?」

「申し訳ありませんお嬢様。作戦が成功した時の為に私もおきたいことがあるので」

「……分かったわ。でも」

そう言っただけでクーデリアはフミタンのポケットからフミタンが付けようとしなかったペンダントを首につける。

「いつでも一緒よ」

「ええ。行つてらっしゃいませ」

アトラがアクセルを勢い良く踏み、後部座席に座っていた蒔苗がニコニコと笑い、

クーデリアは真剣な面持ちで立ち去っていく。

「フミタンさん。例の件お願ひします」

「分かりました。では…」

立ち去っていくフミタンを見送り、ビスケットはアガレスへと急ぐ。

敵陣地に奇襲をかけるという作戦はサブレが立案した。

その理由としては混乱中の敵なら撤退が出来ないという理由と、これ以上モビルワーカー隊の補充をさせるわけにもいかなかったからだ。

一つでも数を減らそうと三日月が突っ込んでいこうとしたところでガエリオのキマリストルーパーが進路の妨害に現れた。

「カルタ。任せてくれ。お前の無念は俺が晴らして見せる。そして、ギャラルホルンの未来を俺達の手に！」

「間違った未来を手に入れてどうなる？ お前達の存在が間違いだというのに」

ガエリオの前にサブレとビスケットが乗るアガレスが立ちふさがった。

レンチメイスを両手で装備し、背中には念の為に刀も装備しておく。

「我々が間違っている?!」

「そうだよ。お前達ギャラルホルンは悪魔と呼ばれた者達さ。お前は子供ゆえにそれを

知らない」

「悪魔はお前達だ！」

「お前の乗っている機体もまた悪魔なのにか？ それを何故否定する？ 悪魔を否定するならお前達の行いを否定している事と同じだ！」

アガレスとキマリスがぶつかり合う中、エドモントン前の橋での戦闘は苛烈を見せており、橋の下を降りて進もうとするオルガ達が見えても戦いがまともに終われないだろうことは分かっていた。

タカキは橋の方が先に終るのではと懸念するが、ここで停まって引けば全てが無駄になるとあえて突き進もうとする。

ノイズが掛かったような音声の周波数にオルガにとつて懐かしい声が聞こえてきた。

「ようオルガ！ ヒーローのお出ましだ！」

「その声は……ユージン!? どうしてここに！」

「ビスケットがおおよその進路を告げてくれたからな。作戦のタイミングもあいつが教えてくれたぜ！ 最も、通信できるようになったのはフミタンさんがドローンを打ち上げてくれたからだだけだな」

ビスケットとフミタンが予め手を打ってくれていたことに感謝しかなかった。

「敵は俺達で引き受ける！ 行けよオルガ！」

「よし！……行くぞ！」

時を同じくしてモビルスーツ隊は混戦の状況になりつつある中、見たことの無いグレイスタイプが奇襲を仕掛けてきた。

アジィがあつという間にやられてしまい、そのままラフタとシノがやられてしまう。

戦場にはガンダムタイプだけが残っていた。

「ユーリス・ステンジャ。お前達はモビルワーカー隊の援護に向かえ！」

「昭弘と明樂は敵モビルスーツをこれ以上先に行かせるな。それと………ジョシユア！」

お前は……」

サブレは意図的にガエリオに聞こえるように命令を下す。

「施設内にいる人間を……皆殺しにしろ！」

「き、貴様!! 卑怯だぞ！」

「何が卑怯なんだ？　ここは戦場で、お前達は皆兵士だ。いつまで子供っぽい正義感で戦うつもりなんだ！　勝つつもりなら俺を見ていればいい。三日月はその気持ち悪いモビルスーツを！」

しかし、内心あのモビルスーツの気持ち悪さに吐き気を覚えているのは事実、何か違和感を覚えながら取っ組み合いになっていると、ガエリオの声がかすかに聞こえてきた。

「お前達はここで終わりだ！ あれこそ阿頼耶識の本来の姿！ モビルスーツと一体化を果たしたアインの覚悟はまがい物のお前達を凌駕する！」

その声を聞いたサブレの心からどす黒い感情がアガレスと共に溢れ出ていく。

「ふざけるな!!! 貴様はあの禁忌に手を触れたのか!? お前達はいくつ罪を重ねれば気がすむ!？」

ガエリオはその憤怒のような怒りに怯えを見せた。

「もう止まらないぞ！ 完全な阿頼耶識を生半可な知識で再生させればどうなるのか!？」

実際アインは敵を失った状態から真直ぐにシノ機の通信機からモビルワーカー隊のからクーデリアの状況を聞いていた。

「モビルスーツ隊聞こえるか!? オルガとクーデリア達は市街地に入ったぞ！」

「ク…ク…クーデリア・藍那・バースタイン！」

アインはクーデリアを追いかける為にエドモントンへと急ぐ。

「待て！ アイン！」

「もう聞こえやしない！ 完全な阿頼耶識は完全な戦闘能力を再現する代償に生半可な知識で使えば思考能力を大幅に削られる！ これが阿頼耶識が時代と共に封印された理由だ！ お前はお前の判断で民間人に被害を出そうとしているんだぞ！」

「ア、アインがそんな事をするわけが！」

「己のした行いから逃げるな！ お前がしたんだ！ これはお前の罪だ！」

「マクギリスとよく話し合って決めたことだ!!」

「……………今なんて言った？ マクギリスだと？」

腹の底から怒りが溢れ出ていき、同時に目の前にいるガエリオがどうしようもなく哀れに見えた。

「要するにお前は操り人形だったわけだ」

「何を!? なんだ？」

サブレとガエリオの間に赤いモバイルスーツが立ちふさがった。

会議が始まるか始まらないかの瀬戸際、信号が停止しているのを市街地に侵入した全員が目撃していた。

「団長！ L C Sを除く全ての通信が切断、レーダーも消えました！これって……………」

「正気か!! 奴等こんな街中にモバイルスーツだと!!」

アイングレイズが立ちふさがるが、明らかな命令違反行為に何よりも動揺したのはギヤラルホルンだった。

しかし、アインは記憶と意識が混雑とした状況の中暴走状態に移行している。

「そうだ…思い出しました。俺はあなたの命令に従いクーデリア・藍那・バーンスタインを捕獲しなければならなかった!」

「私がクーデリア・藍那・バーンスタインです! 私に御用がありますか!」

「ああこんな所にいたのですね。CGSまでお迎えに上がったのですが…:こちらについてくださればクランク二尉が死ぬことも無かった! そもそもあなたが独立運動など…ああ、そうかあなたの所為でクランク二尉は…」

「私の行動の所為で多くの犠牲が生まれました! しかし、だからこそ私はもう立ち止まれない!」

「その思い上がり…:この私が正す!」

剣を振り下ろそうとするアインの目の前に三日月のバルバトスが立ちふさがった。

「オルガ無事!?!」

「ビスケットか?」

「フミタンさんがあちらこちらでドローンを上げてくれてる。今のうちに議会に!」

オルガは立ち上がって三人をモビルワーカーの上に乗せ込ませる。

「助かった! 爺さんのことはこっちに任せろ! ミカ、ビスケット、サブレ、昭弘、ユージン! そっちは全部お前らに任せろぞ!」

「「ああ! 任された!!」」

鉄華団

俺とガエリオの戦いに割って入って来たのは真つ赤な細身の機体、まるでその姿は騎士のようにも見える。

同じときアインが乗っていたグレイズタイプに良く似たグレイズが戦場に割って入ろうとしているのが見えた。

あれが戦場に割って入れば間違いなく今の昭弘やジョシユアや明楽では太刀打ちが出来ない。

「……お前は……：マクギリスか？」

「不思議だな。君と話をした事が無いんだけどな」

「何が目的だ？ お前は何がしたい？」

「ここは私に任せたまえ。君はあちらを」

どうやらこの男の言う通り今はガエリオにこだわっている場合じゃないらしい。

「お前を信じるわけじゃない。俺は……お前を信じない」

それだけと言って俺は目の前に現れた新たなアイン・グレイズへと向かって走っている、二体同時にしかも恐らく完成型に近い阿頼耶識を付けている人間が操縦しているの

だろう。

「サブレ……あれも同じかな？」

「多分な。兄さんの方も集中してくれよ。アガレスの力を最大まで高める必要があるみたいだし」

「俺………出来るかな？」

「やるしかない」

俺達の目の前にある新しいグレイズタイプを前にアガレスを動かしていく、完全な阿頼耶識の前に俺達のアガレスで、しかも二体同時に戦えるだろうか？

戦うしかないと分かっている、それでも戦うしかない。

マクギリスはガエリオの前に立ちふさがる。

「彼らには我々の追い求める理想を具現化する手助けをしてもらわなければならない」「マクギリス……なぜ？意味が分からない……理想？お前は何を……」

ガエリオは絶望的な表情をし、そのまま立ち尽くす。

マクギリスが自分たちを裏切っていたという絶望、それが今のガエリオには受け入れがたい現実だった。

「ギャラルホルンが提唱してきた人体改造は悪であるという理想を真つ向から否定する

存在をギャラルホルン自らが生み出した」

「何を……」

「アインは組織の混乱した内情を示す生きて証拠だ。彼の姿は多くの人の目に忌むべき恐怖と映るだろう」

ガエリオは絶望的な表情に変わる。

アインはもはや正常な状態でいられるような状況ではなく、三日月との戦いの中でもはや正常な判断が下せていない。

「これが『阿頼耶識』の完全なる姿。貴様のような半端なものではない。文字通り人とモビルスーツを一つに繋ぐ力。所詮貴様などただの出来損ないにすぎない！」

アインの攻撃を何とか回避する三日月だが、その回避も正直に言えば奇跡と言ってもいい回避だった。

同じときガエリオの前に立ちふさがるマクギリス。

「その唾棄すべき存在と戦うのは革命の乙女を守りし英雄として名を上げはじめた鉄華団。そして乗り込むのは伝説のガンダムフレーム。同時に行われる代表選で蒔苗が勝利すれば政敵であるアンリとわが義父イズナリオの癒着が明るみになる。世界を外側から監視するという建前も崩れ去りギャラルホルンの歪みは白日の下に晒される。劇的な舞台に似つかわしい劇的な演出だろ？」

ガエリオの絶望はマクギリスに対して怒りへと変わり始める。

「マクギリス……お前はギヤラルホルンを陥れる手段としてアインを……アインの誇りを！　なんてことを！　たとえ親友でもそんな非道は許されるはずがない」

ガエリオが叫び攻撃を浴びせようとするが、それより早くマクギリスが連続で攻撃を浴びせる。

キマリスの体中に切り傷が傷つき、まるで太刀打ちが出来ない。

「君という跡取りを失ったボードウィン家はいずれ娘婿である私が継ぐことになる」

マクギリスはキマリスのランスを持ち上げる。

「セブンスターズ第一席であるイシユ一家の一人娘、カルタも死んだ」

ランスがキマリスの盾を奪った。

「ギヤラルホルン内部の力関係は一気に乱れるだろう。そこから私の出番だ」

「う……嘘だ……お前はカルタの命も俺の命も利用しよう……う……嘘だああああああああああああああああああ！　マクギリスウウウウウウウウウウ！」

ガエリオは大きく飛びマクギリスにとびかかる。

議長が延期を申し出ようとしていると議会のドアから蒔苗が姿を現した。

「騒がしいのう。まるで動物園だ」

「バカな！どうやってここに！」

「どうやって？わしはこの元代表だぞ。少々外がさわがしかろうとここの造りは貴様よりよく知っておる」

オルガは近くのセーフハウスを借りていた。

「団長！アトラさんから連絡が来ました！会議には無事間に合ったそうです。これで仕事は終わりなんですよね？」

「ああ終わる。終わりにする。タカキ……頼みがある」

「頼みって……団長は？」

「ミカを一人にさせとくわけにはいかねえからな」

「まさかモビルスーツの戦場に！」

「団長としての俺の仕事だ。見届ける責任があるんだよ。全部をな」

二体の阿頼耶識を扱う化け物がカルタ・イシューの部下なのだとは知ったのは戦いが始まってからすぐの事であり、正直明楽や昭弘やジョシユアの方も押され気味なので手伝いにまわりたい。

一体だけならアガレスの機能で戦えそうだったが、二対一ではそれでもできそうになかった。

そんな中、その内の一体が戦場に割って入ってくる。

「やれやれ。年寄りを最前線に引きずり込むとはな……」

「父さん……」

「サブレ、こっちは私がやるからせめて一体位何とかして見せる」

パイモンと俺達と呼んでいるガンダムフレームの一体、角張ったデザインのガンダムで機体は他の機体より明らかに推力が高い。

武装は大きなハンマー一つ。

「兄さん！ 少し頭痛くなるから」

俺は予めそう宣言するとアガレスのシステムの中にある機能を目覚めさせていく、アガレスからある信号が受信されていく。

頭痛が強烈にかつ強くなっていくが、その代りアガレス本来の機能へと戻っていくのが目の前にある小さな画面で分かる。

サブレは操作系列を変更すると、目の前の画面に赤い文字で表示を映す。

『ガンダムフレームアガレス……システムウアサゴ始動』

サブレとビスケットの阿頼耶識に負担がかかる。

『阿頼耶識の負担を両パイロットに分散することにより五分の間だけ全システムを開放します』

アガレスの目が赤く光り、悪魔の力を開放した。

「これでお前を潰すことができる！」

ガエリオは涙を流しそれでも攻撃の手を休めようとはしなかった。

「マクギリス！カルタはお前に恋焦がれていたんだぞ！今際の際もお前の名前を呼んでお前を想って死んでいった！妹だって！お前にならば信頼して任せられると……」

「アルミリアについては安心するといい。彼女の幸せは保証しよう」

もうガエリオには何も言葉が出なかった。

「マクギリスウウウウウウウウウウウ！！」

キマリスの攻撃をマクギリスは受け止める。

「そうだガエリオ。私への憎しみを怒りをぶつけてくるといい。友情・愛情・信頼……そんな生ぬるい感情は私には残念ながら届かない。怒りの中で生きていた私には」

マクギリスは容赦のない攻撃をコックピットに浴びせた。

「ガエリオ……お前に語った言葉に嘘はない。ギャラルホルンを正しい方向に導くためにはお前とアインが必要だった。そしてお前は私の生涯、ただ一人の友人だったよ。……あとは頼んだぞ、鉄華団」

「プハア！ やれやれ五分も戦えないとはこれで完全な阿頼耶識とはな……情けない。

さて……アガレスの本来の機能たつぷりと見せてもらおうぞ」

マハラジャはすっかり戦いを終え、コックピットの中で煙草を吸っていると目の前にソニアが現れた。

「コックピットの中で煙草を吸わない」

「へいへい」

アガレスは装甲の一部を解除し、武器を刀に変更する。

「こいつ相手にレンチメイスじゃ無理だ」

「カルタ様！見ていてください！あなたの敵をぜひ！」

「敵、敵つてうるさいな」

「お前たちさえいなければ！お前たちさえ現れなければ！！カルタ様を失うことさえなかつたのに！！」

「それが戦うつてことだろ！そんな覚悟がない奴に負ける道理は無いし、殺される道理もない！」

「お前たちのようなネズミに何が分かる！！カルタ様は我々のお！！」

「俺達はネズミじゃないんだよ！！この化け物が！」

刀を持っていないほうの手で攻撃をそらし、刀で左の腕を切り落とした。敵は足で蹴りつけようとするが、それをぎりぎり回避する。そして、そのまま足を切り落とすと、

そのまま刀で右腕を切り落とす。

「なぜだ!?なぜ倒れない!私はここまで落ちたのに……なぜ」

「俺が人間だからだ」

アガレスは刀を振り下ろし刀をコックピットを切り裂いた。アガレスの目が赤から緑に戻ると二人への負担の一気に軽くなる。

「ソニア! マルコシアス!」

「サブレ何をするつもり?」

「もうアガレスが当分動けない。なら俺はこのままマルコシアスで行く!」

ソニアはまるでサブレが言う事が理解できていたように目の前にマルコシアスを持つてくる。

そのままマルコシアスに乗り込んだ状態でバスタードソードを抜いて大軍へと突っ込んでいく。

「ジョシユアと明楽と昭弘はモビルワーカー隊の援護!」

「はあ? 何で先輩にそんな事を言われなくちやいけないんですか?」

「早く行け。今………俺は最大に機嫌が悪いだ!」

そう言つてマルコシアスは一気に大軍へと斬りかかつていく。

「罪深き子供。克蘭ク二尉はお前たちと戦うつもりなどなかった」

バルバトスのコックピットの中で三日月は現在の状況を大人しく冷静に考察していた。

（スラストアーのガスは残り僅か。ガトリングの残弾も……どっちにしろこれじゃ殺しきれない）

「あのおっさんは自分で死にたがってたよ」

「やはり貴様は出来損ない！ 清廉なる正しい人道を理解しようとしないう野蠻な獣！

なのに！ あろうことかその救いの手を掛け冷たい墓標の下に引きずり込んだ」

アインの攻撃が胸を軽く傷つけ、斧を振り下ろしそれを刀で受け止める。

「単純な速度……じゃなく反応速度か。これが阿頼耶識の差ってわけか」

「もう貴様は救えない。その身にこびりついた罪の穢れは決して救えはしない。貴様も

あの女もお前の仲間も決して！ 貴様の……貴様らの死をもって罪を祓う！」

「罪？ 救う？ それを決めるのはお前じゃないんだよ。おいバルバトス……いいから

寄越せ、お前の全部」

バルバトスの反応が著しく上昇した。

「な……なんだ？ 今の反応は……」

「まだだ、もつと……もつと……もつとよこせ、バルバトス！」

三日月は右目と鼻から血を大量に出し始めていた。

「蒔苗先生所信表明をお願いします。後は先生だけで……」

「その時間をもらえるなら今わしよりも話がしたい者がいるんだが。お前さんがため込んどるもの吐き出してこい」

「クーデリアさん。クーデリアさんならできるよきつと」

アトラがそつと背中を押してくれるとクーデリアは覚悟を決める。单身壇上に上がる。

「私はクーデリア・藍那・バーンスタイン。火星から前代表である蒔苗氏との交渉のためにやってきました」

「議会に関係のないものが何を……」

アンリが叫ぶが、アンリ以外の議員は誰も止めず、クーデリアの演説に聞き入っていた。

「ここに来るまでの間私は幾度となくギャラルホルンからの妨害を受けました。そして、今まさに私の仲間たちがその妨害と戦っています！」

そして議会の外ではタカキが残りのLCS用のドローンを打ち上げていた。

「団長聞こえますか？ LCS用のドローンをアドモスさんと一緒に打ち上げました！」

これでみんなに連絡できるはずですよ！」

「よくやった！ お前から聞こえるか!? 蒔苗とクーデリアは議事堂へ送り届けた。俺たちの仕事は成功したんだ。だから……こつから先、誰も死ぬな！ もう死ぬんじゃないぞぞ！ こつから先に死んだ奴らは団長命令違反で俺がもういつペン殺す！ だからいいか！ なんとしてでも這つてでもそれでも死んでも生きやがれ！」

「オルガ！ そつちは無事？」

「ビスケットか？ そつちは無事なんだな!？」

「大丈夫だよ！ でもアガレスは戦えそうにないんだ。ごめん。でも今昭弘達がモビルワーカー隊の援護に向かったからもう犠牲が出ることは無いと思うよ」

「いい！ あとは任せろ！」

雪之丞たちは戦場から離れていった。

「あいつは指揮官としてこの命令を出したかったんだ。ずつとな「死ぬな生きろ」なんと言葉にしちまえばあつさりしたもんだ。けどよあいつにや言えなかった」

バルバトスの一撃がアインを吹き飛ばす。

「こいつ急に動きが……」

時を同じくしてクーデリアの演説も続いていた。

「火星と地球の歪んだ関係を少しでも正そうと始めたこの旅で私は世界中に広がる大きな歪みを知りました。そして歪みを正そうと訪れたこの地でもまたその歪みに飲み込まれようとしている。しかし、ここにいるあなた方は今まさにその歪みと対峙し、それを正す力を持っているはずですよ。選んでください誇れる選択を。希望となる未来を！」

クーデリアの演説が終わるころ三日月の戦いも終局に向かおうとしていた。アインはバルバトスの顔面に拳をたたきつけ、足で蹴りつけた。

「ネズミの悪あがきもこれで終わりだー！」

アインが斧を振り下ろそうとする中オルガの声が戦場に響いた。

「何やってんだミカアアアアアア!!」

バルバトスの追加装甲をパージし、身軽になった姿で攻撃を回避し、刀を振り下して、斧を持った腕を切り落とす。

「モビルスーツの装甲をフレーム毎!？」

「サブレの言ったとおりだ……叩くんじゃなくて……斬る！」

「この……化け物が〜！」

再び拳をたたきつけようとするがそれを再び刀で斬り捨てる。

「お前にだけは言われたくないよ」

「クランク二尉！ ボードウイン特務三佐！私は私の正し……」

三日月は刀でコックピットを貫く。

「うるさいなあ……オルガの声が……聞こえないだろ……。」

同時に停戦信号が打ち上げられた。

代表選は蒔苗の当選によって締めくくられた。アンリは怒りのままかつらをたたきつける。

「これで終わったのでしょうか？」

「うん。きつとクーデリアさんかっこよかったよ」

「私もそう思います」

フミタンがそばまでくると、今までため込んでいたものをクーデリアはフミタンの胸の中で流した。

三日月の元までたどり着いたオルガ。

「ねえオルガ。ここがそうなの？俺たちの本当の居場所？」

「いいや。ここじゃねえさ」

「そうか……でも、綺麗だね」

オルガと三日月の目の前には真っ赤な夕日が落ちていった。

「マクギリスめ……」

マクギリスの事を忌々しいと思わせるほどの表情を浮かべ、議会の一室に立てこもっていた。

イズナリオは鉄華団に敗北し、周囲に自分を助ける人間が居ない以上彼はここで大人しくしているしかなかった。

そんな時の事。部屋の中に一人の金髪の女性が姿を現した。

ギヤラルホルンの制服を着たジュリエッタ。

「ようやく迎えに来たか……まさかラスタルの部下が来るとはな……!?!」

そしてジュリエッタと共に部屋に入っていくマハラジャ、その姿にイズナリオは恐怖の表情へと変貌する。

「俺の仕事を果たさなければならぬからな。この機会を逃せば貴様がどこへ逃亡するか分かったものではない。さすがにギヤラルホルン本部に乗り込むわけにもいかんしな。まあ、俺なりのけじめだ」

「ま、待て！手を組もう！お前と私が手を組めばギヤラルホルンに乗っ取ることもしつと夢ではない！そうだろう？それともラスタルへの復讐が目的か？だったらそれも手伝おう！どうだ？」

「勘違いをするな………お前を殺しに来ただけなのにどうしてお前と手を組まなくては

いけない。お前達……周囲に誰もいない事を確認しろよ」

部屋の向こう側からも複数の人間の声が聞えてきた。

「や、止めろ……」

「あの世でかつての同胞に謝罪をして来い」

一発の発砲でイズナリオは静かに天に召された。

この日……鉄華団の名前は一躍有名になった。

未だ見ぬ未来へ

エドモントンで行われていたギャラルホルンと鉄華団の戦いから翌日、鉄華団の多くのメンバーは病院へと搬送され怪我をしていない者は数日の間休暇を貰う事になった。

オルガはクーデリアやメリビットと共に蒔苗の元へ今回の仕事の料金の相談に向かうと朝早くに出ていったが、ビスケットも当初はついて行こうとしたが、オルガはビスケットにも休息を言い渡した。

昨日モビルスーツやモビルワーカーで戦ったメンバーの大半は病院送りになったが一部は未だに元気よく動き回っている。

しかし、ビスケットは今朝のニュースを見てどうしても内心納得できない気持ちを抱き、アトラと一緒にした食事にもイマイチテンションが上がらなかった。

そのニュースというのもアフリカン・ユニオンで反政府デモが行われ、議長が引退に追い込まれたそうで、その内容もドルトコロニーで行われた反政府運動に対するギャラルホルンの行動が問題視されていたからだ。

この反政府運動をギャラルホルンが政府と繋がっていたのではと疑われ、新議長は反ギャラルホルンを訴え掛け、先ほど蒔苗の元にコンタクトが来ていた。

ビスケットはあまりにもフォートレスにとつての都合のいい展開に悩みを抱いてしまっている。

この戦いを含めて実は全部がフォートレスが裏で仕組んでいる事なのでは、そう思っ
てしまうと素直に勝利を喜べなかつたりする。

ホテルからフラフラと歩き出して大きな通りを歩いていると、真つ青な空と雲が空一杯に見えてきて、人のいない通りはまるでこの街がゴーストタウンなのではと思わせてくれる。

朝食を殆ど呆けながら食べていたのでお昼を前にしてビスケットのお腹がグウーと音を鳴らしている。

「お腹空いたなあ、何か食べようかなあ」

昼食まであと少しだと思うとここで食べてしまうのもどうかと思つたし、クッキーやクラツカにお土産だつて買わなければならない状態、なのにそれすら考えられ無いぐらいビスケットは考え込んでいた。

結局川岸までやってきて、上から川を覗き込んでいる時、近くの防衛軍相手に会話をしている弟のサブレを発見し、そつと近づいていく。

するとまるでビスケットが近づいていくのが分かつていたかのように会話を打ち切つて振り返るサブレ。

「どうしたの?」

サブレのそんな言い方に少しだけムツとしており、ビスケットは明らかに不機嫌になつてしまふが、サブレはそんな事とはお構いなしに川岸へと更に降りていく。

「どうしたのかはこつちのセリフだよ。ねえ……聞いてもいい?」

「俺の仕事の邪魔をしないって約束するならな」

ビスケットはサブレが仕事をしているという事を初めて聞いたのだが、サブレは川へと近づくと橋下を覗き込んだ。

何もない橋下、特に変わった様子もない橋下へと歩いて行くサブレは一本のロープを見つけ出した。

「これだな……」

「それなに? 何をしているの?」

サブレはビスケットの方をちらりと見て、「まあいいか」と呟く。

「昨日イズナリオが自殺した後の夜中に、一人の子供が行方不明になつたんだ。誰かが連れ去つたらしくて、其の人物はどういう訳かイズナリオの血液を採取して消えたらしい」

「その人物がこの川を下つていった?」

「その可能性が高いだけだけどな。今この辺りでこの街から出ていく手段が他にない以

上はここ以外に無いと感じていた所だ」

「そういえば明楽君とジョシユアちゃんはどうしたの？」

「あの二人は父さんからの指示でうちの証拠潰しをしているところだよ。何せ市街地で暴れ回った奴が二名ほどいるからな」

ビスケットはその内の一人が身内なので何も言えない気分になってしまった。

昨日三日月は市街地に侵入したアイン・ダルトンが駆るグレイズ・アイン相手に暴れ回り、その結果現在ニユースはどこもギャラルホルンの暴走の記事で一杯一杯になっている。

「そうだ！ 聞きたいことがあるんだ！ さつき……」

「さつきニユースで見えていたアフリカン・ユニオンのニユースにフォートレスは関わっているのか？ だろ？ 答えはイエス。あれはうちの作業だ。と言つてもうちは唆しただけで、実際の実行役は別にいる。俺達や兄さん達はその作戦が上手くいくための陽動役だ」

「陽動？」

「ギャラルホルンは暴動の鎮圧さえもモバイルスーツやモバイルワーカーを使いかねなかったからな。でも、それ以外の所でモバイルスーツを大量動員しなくてはいけない事態になれば目はそっちに行くだろ？ 本来暴動っていうのは防衛軍が解決すべき問題だから

な」

「そ、それで……僕たちを陽動役に!? 成功したからいいけど下手をすれば……」

「成功すると感じたからこそ父さんは鉄華団に賭けると決めたんだ。勝てない見込みの無い勝負はしない人だよ」

勝てると分かったからこそマハラジャはこの作戦に乗ったとサブレは説明しながら川岸から離れていくと、ビスケットのお腹から「お腹が空きました」つという声が聞えてきた気がした。

「素直なお腹だな。全く……この近くにラーメン屋さんがあった気がするからそこで食べるか?」

「ら、らーめんやさん? 何?」

聞きなれないお店の名前に首を傾げていると、サブレの案内の元に進んで行くと路地裏にひっそりと構える露店を見付けた。

サブレについて入っていくと露店から漂う醤油ラーメンの匂いにビスケットのお腹が響きまくっている。

サブレが注文したラーメンが目の前に出てくるとビスケットは見慣れない食べ物に悪戦苦闘しながら食する。

お腹いっぱいになったわけでもないが、それでも妙に満たされた気持ちになったビスケットだが、この際キチンと聞いておきたい事が存在していた。

それはサブレ達フオートレスの今後の予定である。

「俺達は当分は大人しくしているつもりだよ。まあ、パーティーとかには参加するとは思うけど」

「パーティー？」

「俺達フオートレスは反ギャラルホルン運動を名目に動く組織だ。その運動の協賛する出資者が多くて出資者が開催するパーティーに参加する事があるんだ。何？ 参加したいの？」

「べ、別に…」

「そんな珍しいパーティーに参加したいとは思わなかったが、しかし少しだけ悔しいと感じているのは確か。」

「まあ……教えてやる事なら少しだけ…蒔苗とアフリカン・ユニオンの新議長の会談が近日中に始まり、ギャラルホルンに対して軍備縮小と部隊の小規模化を訴え掛けるはずだ。手始めにギャラルホルンが独占しているエイハブ・リアクターの独占解除を訴えるはずだ」

「それに乗ると思う？」

「乗る。乗るといふよりは乗らざる終えない。ギャラルホルン最強を訴えるアリアンロッド艦隊が問題を起こしたんだ。その上セブンスターズの一角が犯罪行為を行い、その上自殺をしたとなれば問題はギャラルホルン全体で解決しないと周囲へのけじめにもならない」

「だからって乗るかな」

「勿論セブンスターズの一部は嫌がるだろうが、それでもそれ以外に解決方法が存在しない上に、アーブラウ政府とアフリカン・ユニオン政府からすれば自分達の政治内容に入り込んだ罪を裁きたいはず。それでなくてはイシュー家の跡継ぎがいなくなり、フリード家とエリオン家とクジヤン家が問題行動を起こした以上は反対する事が出来なくなる。まあ、粘るだろうけどな。それでも半年から一年ほどで実行に移される」

「な、なるほど…」

「アリアンロッド艦隊は当信頼を得る為に意図的にコロニー中で問題を起こし、それを解決していくはずだ。うちはその裏で奴らの不正の証拠を少しずつ押さえていく。その陰で俺達はギャラルホルンから奪ったエイハブ・リアクターの製造権を使ってモビルスーツを大量配備する。そこで……兄さん達の出番だ。俺達は『ある男』を捕まえる」

「ラストタルの腹心？」

オルガは一人マハラジャの元へと赴いていた。

今回の任務を解決できた裏には間違いないくマハラジャたちの協力があってこそ、だが同時に今回フォートレスに作ってしまった借りをまとめて支払う為に、しかし、マハラジャは「いい」と言つて金の受け入れを拒否した。

「そのラストルの腹心が二年後に行動に移すから俺達に協力という事ですか？」

「そうだ……奴はここ最近俺の周りを探つていたからな、俺達フォートレスが動くわけにはいかないんだ。お前達は今回の一件で大きく目立っているうえ、ラストルからすれば蒔苗は驚異のはずだ。必ず動く。それは今直ぐじゃない。二年後以降には動くから、その時お前達を使いたい」

「……要するに俺達を利用するつてわけか」

「いやか？ 嫌なら断つてもいい。その代り膨大な料金をせしめるというだけさ」

「嫌なんて言つていないさ。むしろ俺達を信頼してくれているつて事だろ？ 受けるさ。まあビスケットに相談してからだけだな」

マハラジャは「ならいい」と言つて煙草に手を伸ばす。

「俺達は当面はここで事後処理をするが、お前達はどうする」

「怪我の治療が終わり次第出立します。もうここでの俺達の仕事は存在しないですか」

「そうか…なら見送りぐらいはしてやるか」

鉄華団が駅で待機状態が続いていると、ユージン達はポーと話していた。
「俺ら本当に帰るんだな」

ユージン達が話し込んでいると買い物を終えたビスケットが近づいてくる。

「お疲れ様？ ユージン、何か問題あった？ 俺がいない間」

「特にねえよ。ビスケット、お前こそクッキーとクラッカへのお土産は買ったのか？」

「うん、おかげだね。シノはジツとしてなくていいの？」

「大丈夫だよ。それより、死んじまった奴らの事報告してやらねえとな。泣く奴らだつているだろうし……がんばれよユージン」

「はあ!? ざけんな!」

「俺がするよ。そういうのは俺の仕事だし」

「ダメだ! なんでもかんでも背負おうとするんじゃないやねえよ!」

そこでライドが何でもなさそうな顔をしながら近づいてくる。

「じゃあ、俺が言っちゃおっか？」

「ダメだ! ダメだ! つていうかお前はおとなしくしてろ!」

「大丈夫だつて……このぐら!」

なんでもなさそうな表情を浮かべるライドの後ろから気配を消して近づいていくサブレ。

サブレが後ろから傷口をつつく。

「何すんだよ！」

「怪我してんだからおとなしくしてろって。そういう報告はユージンの仕事なんだから」

「そうそう……つてちよつとまって！ お前ら俺にやらせようとしてねえか!？」

「そういえばオルガは？」

「向こうだよ」

ビスケツトは持っていた買い物袋をサブレに預けてしまう。

ビスケツトはオルガがいる方へと歩き出す。

オルガは降りてきていた名瀬と会っていた。

「兄貴。いろいろ迷惑をおかけしました」

「何言ってる。お前らはきつちり仕事をしたんだ。胸を張れよ。お前いつか俺に言った言葉は嘘だったのか？ 『訳も分からねえ命令で仲間が無駄死にさせられんのは御免だ。あいつらの死に場所は鉄華団の団長として』」

「俺が……作る……」

「あいつらはお前の作った場所で散っていった。胸を張れよ。今を生きている奴の為に」

「大丈夫ですよ。一緒に支えてくれる奴がいますから」

オルガが向けた視線の先を名瀬も見ると、そこには心配そうに歩いてくるビスケットの姿があった。名瀬はすべてを理解し、背中を強く叩く。

「だったら行ってやれ！ 相棒が待つてるぜ」

オルガの元気の良い「はい！」という言葉に表情が緩む名瀬の前にマハラジャが現れた。

「色男。近々お前の所のボスに会いに行くからよろしく頼むな」

「……………うちのボスもあんたに会いたがっていたよ」

二人はこそこそと話す姿を見ていたオルガとビスケットはその場から後にした。

「もう良いの？」

「いいんだ。それよりそろそろ行こうぜ」

オルガとビスケットは列車に乗り込む前に団員を集めた。

「みんなよく頑張ってくれた。鉄華団としての初仕事、お前らのおかげでやりきることができた。けどなここで終わりじゃねえぞ。俺たちはもつともつとでつかくなる！」

「ゆっくりとね」

ビスケットがさりげなくフォローする。

「けどまあ次の仕事まで間がある。お前らの成功祝のボーナスは期待しとけよ！　ビスケットが算出してってくれるからな！」

皆が話し込んでいるとアトラはビスケットにとお守りを手渡す。

「私達は家族ですから。三日月ももう無理をしてはいけませんよ」

「そつちももう泣くなよ。この腕じゃ抱けないから」

「そうですね……では」

クーデリアは三日月をそつと抱きしめた。

「なにこれ？」

「帰ったら一杯話をしましょう。三日月」

「うん……」

オルガとビスケットと三日月が話していると、サブレがタカキと一緒にやってきた。

「オルガ。タカキ達が写真を撮ってるんだけど。成功祝いで一枚どう？」

「いいんじゃないか？　なあ？」

「俺はいいや」

三日月がそばから離れようとするのをオルガが襟をつかんで引き寄せる。

「ダメだ！　サブレ！」

「了解」

「さ、サブレ？ 何を」

「兄さんが詰めないで俺が入れないだろ？」

サブレがビスケットを押すと、オルガはビスケットに腕をかけ、逃げないようにしている、タカキが写真を撮った。

四人が一緒に笑った写真を――

外伝

グリフォン家の受難

クッキーとクラツカは現在困り果てていた。

ビスケット達鉄華団が帰ってきてからは一か月が経過しており、宴をしたいという気持ちを抑えてオルガ達鉄華団は仕事に勤しんできた。

というのもサブレ達フォートレスが帰ってきてから焼肉パーティーをすると楽しみにしていたからだ。

名瀬達も参加するという事もあり、本人達はそれまで仕事をしようという話になったが、ビスケット達のように家族がいる人達は家族の元に帰省しよう命令が下り、結果ビスケットは帰ってきたわけだが、先に帰ってきていたサヴァランとの間に微妙な距離感が生まれてしまった。

というのもビスケット自身ゴタゴタがあったせいで忘れかけていた事だが、サヴァランがドルトでアトラやクーデリアにしようとしたことを決して忘れたわけではない。

しかし、それはサヴァランとて同じことだった。

結果から見ればビスケットがしたことはドルトのスラムに生きる人達を見殺しにし

たこと、その上生きると勝手に決めつけたことは未だにサヴァランの心に深く残っている。

お互いに納得が出来ない状態だが、それは逆に言えば二人に取って起きてしまった出来事は決して無視できない範囲の事であったが、それを口実に殴り合いの喧嘩なんて出来なかつた。

というか殴り合いの喧嘩になればサヴァランが勝てない事なんてサヴァラン自身がよく知っている事だし、兄を殴りたくないというのはビスケット自身の本音である。

だからこそ異様なほど静まり返った黙する喧嘩というべき状態になったわけだが、それを本気で困った状態だと思っていたのは二人の妹である。

一緒に過ごす事は楽しいし、兄が増えたこと素直に嬉しかったが、それ以上にこの二人の異様な空気が二人の妹には耐えがたい事だった。

何があつたのか聞きたかつたが、それを聞いても二人はまともに答えてくれなかつた。

結果二人の妹でもどうしようもない状況に祖母に期待をかけたが、祖母は二人の問題だからとあまり手を出そうとしなかつた。

そんな中やってきたサブレと父代わりであるマハラジャが帰ってくるという話にクツキーとクラツカは仄かな期待をかけていた。

マハラジャは非常にご機嫌だった。

サブレと共に両手一杯に買ってきたお土産をクッキーとクラツカに渡す際の二人の笑顔を想像するだけでウキウキしてしまう。

ジュリエッタもサブレもある程度大きくなると直ぐにツンツンするようになり、そういう意味ではクッキーとクラツカの幼いデレは今まで感じたことも無いほどに快感であつた。

だからこそ二人になんでも買ってあげたいという感情の高まりはサブレに最大値の呆れを与えていた。

そんな時家の前に車を止め、家の中に入るとすると家の中からクッキーとクラツカが家から出てくるのが見えた。

マハラジャが寄って行こうとすると気が付いて二人の妹は父親目掛けて走り出していく。

そのまま抱きしめるマハラジャは心の中で「これだよ」と快感に満ちていた。

基本デレない二人の子供達と比べての思いにサブレは多少の苛立ちを覚えている。

しかし、その先二人の妹から出てきた言葉は二人にとって予想外の言葉だった。

「お兄ちゃん達を何とかして！」

「任せて置け！」

「軽く受けるな！　ちゃんと聞いてから受けるよ！」

サブレがきちんとツツコんでから二人の妹から詳しい事情を聴いた。

「要するにあの二人が水面下で喧嘩していると……ガキじゃあるまいに」

サブレが面倒なと思いながらそう呆れていると、マハラジャは少しだけ考え込む。

「あの二人の喧嘩の切っ掛けは……」

「ドルトコロニーで起きたあの事件でしょ？　引きずっているんだよ。いい加減忘れて

しまえばいいのに」

「お兄ちゃん達は何で喧嘩しているの？」

「……………価値観の違いかな。お互いに守りたいと思う者が違っただけで話。それで喧嘩して」

内心くだらないと本気で思うサブレ。

サブレはそういう事を引きずらないようにしている。

「お前だけだろ。仲直り……私やお前達の祖母が言えばすぐだろうが、表面的な仲直りなんて意味が無いだろうしな」

「そうだね。それで良いのならお祖母ちゃんが手を打つはずだし。それをしなかったというのはしたくなかったのが理由だろうしね」

「そうだな。今日は焼肉パーティーだ、できればそれまでに仲直りしてほしいが……む」

サブレはマハラジャの目が怪しく輝いたのが見て取れ、本能が逃げた方が良いと告げるとそのまま回れ右して逃げようとするが、それより早くマハラジャがサブレの右腕を強めに掴んだ。

「サブレ………逃げるな」

焼肉パーティーが午後から桜の家の前で行われると分かっている、それでもビスケットとサヴァランの気持ちはまるで晴れなかった。

これじゃいけないと分かっている、それでもまるで行動として起きないのは自分がいつまでも幼いからなんじゃないかと思ってしまうビスケット。

結局の所で午前中はパジャマ姿でうろうろしてしまい、二人の妹がどこかに出かけていることにも気が付かなかったほど。

これじゃいけないとずっと悩んでいたが、それでも兄に何を言えばいいのかまるで分からなかった。

だって、ビスケットは自分が悪い事をしたという気持ちはあまり感じていなかったし、むしろ兄には自分達を大事にしてほしいと感じていた。

サヴァランからすれば自分が過ごしてきたドルトのスラム街を大切にしたかったという気持ちは非常に大きく、それをある意味踏みにじったビスケットを多少形許せなかった。

しかし、同時にサヴァランにはビスケットが大切にしているものを踏みにじったという気持ちは多少形は存在しており、結果動けない。

分かっているのだ。

自分達はお互いに譲れない物の為に対立してしまったという事でしか無い。

サブレのように多少なり切り替えが出来ればいいのだが、ビスケットとサヴァランはずっと引きずっている。

そんな時だった。夕方になっているのだと気が付いたころにはアトラの元気のいい声がビスケットの耳もとにも聞えてきた。

「ビスケット！ もう焼肉パーティー始まっているよ」

その声に誘われて外に出ていくと三日月やヤマギたちが野菜だけを食べようとして、それをアトラやシノたちが肉も食うようにと論している現場だった。

皆がはしゃぎ回っており、中には肉の取り合いをしている者達まで居る始末。

しかし、そんな中ビスケットは端っこの方で一人座っている兄サヴァランを見つけ出した。

近くに寄っていくべきなのかと悩んでいると、足元にハロが近づいてくる。

「勇気出せ！ 勇気出せ！」

「そうだね……仲直りしないとね」

ビスケットのハロは仲直りをしろと足元で五月蠅く叫んでおり、ビスケットは兄サヴァランへと近づいていく。

近づいても何を話していいモノかどうかがどうしても分からなかった。

ビスケットもサヴァランも何を話していいのかと少し間が開いてしまうとクツキークラツカが自分のハロを連れながら大きなケーキを持って現れた。

その後ろからサブレが自分のハロを引き連れているが、サブレの腕の中には人一倍大きなハロが抱えられていた。

「お兄ちゃん！ はいプレゼント！」

そう言ってクツキークラツカが代表してサブレを前に連れ出し、サブレは代表してハロをサヴァランにあげた。

「サブレお兄に頼んで作ってもらったの！ これで私達兄妹お揃いだね！」

サヴァランのハロは控えめに見上げるだけだが、そのハロにサブレのハロが追い打ちをかけるように追いかける。

それから逃げるように追いかけてこが始まるグリフォン家のハロ達。

「これはクッキーとクラツカからのプレゼント！ アトラと一緒に作ったんだよ。食べよ」

差し出されるケーキを受け取ったビスケットとサヴァランは自分達が兄妹にどれだけ心配をかけていたのかを思い知った。

それこそがマハラジャの狙いでもある。

サブレやクッキーとクラツカがお手製の『何か』をプレゼントすればあの二人は考えを改めるのでは？と進言したのだ。

「兄さん……ごめんなさい。でも、俺にとってアトラもクーデリアも大切な人なんだ！ それを差し出すのは」

サヴァランだつて本当は分かっていた。

でも、認めたくなかっただけ。

「認めたくなかったんだ。故郷だつたスラム街をお前達を見捨てて私は上にのし上がった。ここで見捨てれば……」

サブレが近づいていく。

「考えすぎだ。スラム街の人達は自分の為に戦っただけだろう？ 兄さんを一方的にさ。俺達を優先して欲しいね。家族だろ？ 俺や兄さんはいいよ。でも……クッキーやクラツカぐらいには償いをしてほしいね。あの二人は俺達を知らないわけだし。それと

も新しい父さんに全ても持っていかれてもいいの？」

マハラジャは持ってきた新しい洋服を両手に持ち、二人に似合うかと試している現場を目の当たりにしてしまった。

サブレはずっと気が付いていた事だが、マハラジャがどうにもクツキーとクラツカをお気に入りにしてしまっている事に。

過保護な二人の兄は急いでマハラジャの元へと歩いて行く。

サブレはその後姿を微笑みながら見守っていた。

結局の所で喧嘩なんて些細な事で簡単に終わるもので、まだ休暇が続いているビスケット兄さんの方はゆつくりと過ごしている。

サヴァラン兄さんの方はクリュセの方で新しい仕事先を探しているらしく、クツキーとクラツカが学校に通っている間に一緒に暮らせる家を探すのだと躍起になっている。

そんな時だった。

父さんがビスケット兄さんにふとした事を言い始めた。

「最低で良いから学校で卒業した方が良いな。勿論鉄華団の仕事を優先してもいい。だがせめて学校ぐらいは卒業しておけ」

そこにサヴァラン兄さんまでもが追い打ちをかける。

「サブレでも学校に通っているんだ。ビスケットもせめて学校に通って卒業しておくべきだろう」

「俺を引き合いに出さないでよ。まあ俺と一緒にの学校でいいんじゃない？ フォートレスの下部組織の火星支部が完成したし当面はこっちの防衛要員になるから学校もこっちになるしね」

「そうだな。そうだ。鉄華団のガキたちにも告げておけ。学校に通いたいのならフォートレスが学費を出してやる。まあ、働いて返してもらうがな」

「コーヒーを飲みながら言う父さんの言葉にビスケット兄さんは本当は嬉しい癖に我慢している。」

鉄華団の中には学校に行きたい人間だっているだろうし、しかし、その為の学費も時間も存在しないのが現状だろう。

「仕事も当面は俺の方から回してやる。うちも火星で事業を拡大していくのにどうしても必要な事だ」

素直ではない父さんの言葉なので俺は黙ってスルーすることにした。

火星で事業を拡大する程度ならその辺の戦力を頼ればいいのと思うが、そこにあって鉄華団を使うあたりまだまだ甘い。

「……………はい」

兄さんを丸め込もうとする父と兄の策略にやられたビスケット兄さんは黙って学校への編入を決めた。

そして数か月が経過し、俺達はクリュセの方に仮の拠点を設け、改めてマンシヨンの一角に部屋を借りられることになった。

今日はクツキーとクラツカの入学式が行われるはずで、俺達は仕事を休んでまで入学式に参加してくれるサヴァラン兄さんと一緒にクツキーとクラツカの学校へと向かった。

結構なお嬢様学校だと思うので俺個人の感想を言えばいけ好かない学校だと思うんだけど、それを顔や口にだせば二人の兄から間違いなく説教を受けるので止めて置き、今日の日の為にと仕事を片づけた父さんを出入り口で待つことに。

車でやってきた父さんと一緒に入学式に向かうビスケット兄さんと俺は新しいクリュセにある高校の黒い学ランに身を包んでいた。

鉄華団の制服は目立つからやめなさいとサヴァラン兄さんや父さんからしつこく言われた結果である。

「変じゃないかな？」

ビスケット兄さんが物凄く気にしているがクツキーとクラツカの方は「似合っているよ！」とべた褒めする。

俺個人から言われたその辺にいる普通の高校生というイメージでしかない。

「帽子なんて被らなくていいのに」

俺がボソツと呟くと黒い帽子を触って確かめる。

どうも帽子が気に入ったらしく、明日から本格的に始まる授業に多少形心がウキウキしているようだ。

といつても俺と違ってあくまでも鉄華団の仕事を優先する兄さんはいくつかの授業の代わりに課題が出されるはずだ。

家族で歩いていると学校の前で写真を撮っている家族を見付けてしまったクツキークラツカは「写真を撮りたい」とおねだりを始めた。

「クーデリアさん達が来るまで時間があるから取ろうか」

そんな風に言う兄さんに言われるがまま俺達兄妹は一か所に集まって写真を撮ってもらおうとカメラを預ける。

預けられた男性がカメラをこちらに構えて「取りますよ」といいながらレンズを覗き込む。

合図と同時に取った写真にグリフォン家の受難などもう見受けられなかった。

温泉旅行記

温かい温泉に身を委ねていると疲れが全て吹っ飛ぶような気持ちになっ
ていき、ゆつたりとした気持ちでいると自分はこんなことをしていいのかと頭
の中で考えてしま
う。

火星に帰ってきてからクーデリアは事業立ち上げや、新しい仕事に精
を出すようになったが、それは同時にクーデリアへの負担へとなっ
ていった。

それを心配したフミタンとアトラはクーデリアを温泉旅行へと招待
しようと考えたが、最初こそクーデリアはそれを断った。

忙しい時期に社長である自分がいなくなるわけにはいかないと、
しかしある問題がクーデリア周辺で起きたことが新たな問題として浮上
してしまふ。

これはクーデリアが火星に帰ってきてから三か月が経過した頃
の事だった。

バーンスタイン商会を立ち上げ忙しい毎日を送っていたクーデ
リア、近くにはフォーレスが隠れ蓑に使っていた傭兵商会企業『レ
ストア』が本社を構え、火星の裏社会を牛耳っていたノブリスは
急速にその勢力を衰えさせていった。

クリュセから撤退こそはしなかったノブリスだが、クーデリアが
輸出入の一端を

フオートレスとテイワズが管理したことで追い詰められていった。

その原因はクーデリアがエドモントン議会で行ったあの演説と、ギャラルホルンの失態によるツケだった。

ギャラルホルンは前の戦いの際、ドルトとエドモントンでの叱責によって、フェアリド家とエリオン家、ボードウイン家は一連の責任を取る形で発言権の剥奪とエイハブ・リアクターの製造権をアーブラウ政府への譲渡を約束させられた。

それによってアーブラウ政府はエイハブ・リアクターの製造権を獲得、フオートレスに譲渡する形で新型のエイハブ・リアクターを製造するという話になったのまではよかったが、ハーフメタルの権利を獲得したクーデリアは、一連の事件の立役者として日夜噂されるようになった。

そんな時、クーデリアに向けて放たれた犯行予告状、出所が全く不明だったが故に、クーデリアは当面大人しくしておくことになったが、その問題はその翌日に起きた。

一台の車がバーンスタイン商会前で爆発した。

直ぐにレストアと鉄華団が調査に乗り出したところ、ノブリスと思われる痕跡を発見、マハラジャはこれをノブリスからクーデリアとフミタンへの見せしめであると判断、危険性が高い案件だという事で、いったんクーデリア達に退いてもらう事になった。

その際にクーデリアとフミタンの側にいる人間としてアトラとビスケットが選ばれ

たという経緯だった。

クーデリアは一人湯船につかりながら物思いにふけていた。

（フミタンは今頃ホテルのチェックイン。アトラさんとビスケットさんは二人で周囲のチェックに……私だけ……）

ノブリスをクリュセから追い出そうというこの計画、クーデリアは一時表舞台から隠れ温泉郷で大人しくしておくことになっていた。

しかし、どうしても一人でゆっくりしているこの状態が慣れず、この場所に来てからずっとソワソワしていた。

近くに言い温泉があるからと案内されたが、入っただけでも本当の意味で心から休めるわけではなかった。

こうしている間も皆が戦っており、自分だけがここに引きこもっているような感じがしてならない。

「フミタンはなんていうかしら……」

時を同じくしてフミタンはホテルのチェックインを済ませ、クーデリアと合流する為に移動していた。

周囲を断崖絶壁に囲まれたようなこの時は火星圏では密かな人気のある隠れ里、知る

人ぞ知る名所である。

実際火星に住んで長いクーデリアやアトラたちですら知らなかったほどだ。

「フミタンさん！ 今からクーデリアさんの所ですか？」

「はい。お二人は？」

「僕たちはさきほどようやくチェックが終わった所です。やっぱりこの場所までノブリスは手が届いていないようですね」

ノブリスはこの辺り一帯までは手が伸びていない事を確認したビスケット達が合流すると三人でクーデリアの元まで歩いて移動して行った。

「サブレは知っていたみたいですけどね。何度か連れてきてもらったと聞いています」

「そういえばこの辺りの店は基本フォートレスの手が入っているそうですね」

「ですね。昔頃から火星圏の中でも隠れ蓑を探していたようですから」

美味しそうな匂いのする出店を通り過ぎ目的の場所までたどり着くと、温泉から出てきたクーデリアが憂鬱な表情をさせながら現れた。

フミタン達を見付けると笑顔を作りながら近づいて行く。

「クーデリアさんまだ気にしているの？」

「そ、そのように見えますか？ そのようなつもりではなかったのですが……いいえ。多分気にしているのでしょうか。私の所為で皆さんに迷惑を掛けているのに、今この時

「何も出来ない自分が憂鬱なのです」

何かできるわけでもない事ぐらいはよく分かる。

前の戦いの時はクーデリア自身やるべきことがあったからそこまで感じなかったが、こういう状況になるとどうしてそう感じてしまう。

自分は無力だと。

「クーデリアさん……」

アトラは無力さを感じ取っているクーデリアに何ができるのか、何かしてやれるのかを考えていた。

それはフミタンもビスケットだって同じことを考えていた。

やりたい事や目標はハッキリしているのに、その過程で自分は何もできない状況があると思うとどうしてもやるせないと思ってしまう。

今頃オルガ達がクーデリアの為に動いていると思うとどうしてもと考える。

「何か自分にも何か出来ることがあるんじゃないかと考えてしまっんです。自分も何か戦えるんじゃないかって」

ビスケット達は内心「サブレ辺りに否定されそう」と思ってしまったが、口に出す事なんて出来ないし、何よりそういう意思で介入されることを嫌がるのがサブレだった。

今こうしている間も何かしらの作戦が建てられているだろうけれど、作戦内容を知ら

されていないバスケット達は何もできない。

「そう言えばバスケットは学校の宿題をしなくていいの？」

「うん。夜にこそつとしようかなって」

「だったらクーデリアさんに見てもらおうよ。クーデリアさんもそれでいいよね？」

アトラはクーデリアにそう尋ねると笑顔で答えた。

と言ったものの宿題をどこでやるのかと疑問を抱いてしまったバスケットだが、案内されるまま連れていかれた場所はクーデリア達の部屋だった。

「ダメダメ！ 女性の部屋に男性が一人で入っていくつて駄目だから！」

「でもバスケットは変な事をしないでしょ？」

バスケットとしては信頼を寄せてくれている事に嬉しさを、男として女性に何もしいと思われる事への不満がせめぎ合ったが、素直に嬉しいとは思った。

が、それでもここで入る事はどうしても嫌だった。

頑固として拒否されたので、アトラたちは仕方なしにホテル一階にあるレストランで勉強を見ることになった。

アトラはパフェを注文し、バスケットの学校の課題をクーデリアに見てもらうなか、アトラは興味津々で見守っていた。

「学校に行くようになってからバスケットは凄く生き生きしているよね。三日月なんて

もう勉強はほとんどしてないもん」

「そうなのですか？」

「うん！ 普段から寝てばかりでたまに起きたかと思えば筋トレしてるし。折角クーデリアさんから勉強見てもらっているのに」

呆れたような表情を造るアトラにたいし苦笑いを浮かべるクーデリアだが、なんとなくそんな三日月の姿を想像できてしまった。

「他の皆はちゃんと勉強してるのに、三日月ぐらいだよ」

「でも、三日月最近野菜の勉強をするようになってね。うちの家の裏庭で家庭菜園みたいなのしているんだ。アトラとか時々面倒見てくれて」

「バスケットが勉強を見ている最中の出来事なのに、フミタンは旅の最中の事を思い出して苦笑してしまいそうになる。」

「今こうしてクーデリアが立派に成長し、一人前になっていく事は決して他人事ではなかったからだ。」

「あの旅の中でクーデリアが手に入れたものは大きく、同時にかけがえのないモノばかり。」

「だからこそフミタンは思ってしまう。」

「自分はその中に入っているのだろうか？」と。

クーデリアは「少し」とトイレの方を指さして出て行ってしまったが、この時三人はクーデリアを一人にするべきではなかったとそう思ってしまった。

この街がマハラジャの息のかかった街であると油断しきっていた事は否めないが、結果クーデリアを拉致されてしまう。

完全に油断していたとはいえ、フミタンですら拉致されたと悔やんでいたが、この時じつはずっとこの四人を尾行していたもう一人がクーデリアの方を追いかけていた。

それこそが本来の作戦だったのだと言えば、アトラやフミタンはともかくビスケットは猛烈に反発すると分かっていたので全会一致で告げないことになった。

しかし、その際にサブレが言ったのは、他の三人に言えば漏らす可能性が高いと告げた。

「兄さんらしいとは思うけどね。さてさて……追いかけてきたのは良いが、実家となると簡単にはいかないな」

などといいながら執事服に着替えながらサブレは静かにバーンスタイン邸へと入っていく。

ピッキングで裏口のドアを開け、中に音を立てないように入り込んでクーデリアが軟

禁されている部屋へとまっすぐ迷うことなく進んで行くが、そんなサブレの前にクーデリアの母親を二階で発見した。

軟禁されている部屋へとまっすぐ迷うことなく進んで行くが、そんなサブレの前にクーデリアの母親を二階で発見した。

「あの部屋にクーデリアがいるわけだ。しかし、無駄に豪華な装飾だな。目がチカチカするねえ。うちの家とどっちが大きいのかね」

クーデリアの母親がそつと一階にあるキッチンに入っていくのを物陰から見守り、その後執事のようにクーデリアの部屋へと入っていく。

クーデリアはシヨンボリしたままベットに腰を落として大人しくしており、サブレは執事のふりをしながら窓をそつと覗き込む。

正面に大きな通りがあると視認し、裏口から出るかどうかをずつと考える。

クーデリアからすれば突然入ってきた執事が突然部屋中を見て回ったかと思えば、突然窓をずつと見ている執事を懐疑的な目で見ていた。

しかし、よく見ていくとその顔はどこか知っている人に見えてしまう。

「もしかして……サブレさんですか？ 何故ここに？」

「温泉旅行中に拉致された人がいるからな、追いかけてきたんだけど？ それよりさつさとここから去るぞ」

サブレはそつと右手を伸ばし、クーデリアはその手を躊躇なく受け取ると部屋の中にクーデリアの母親が現れた。

最初こそ驚いていたが、クーデリアの母親はまるで理解していたかのようにそつとクーデリアにお弁当を手渡した。

「辛いと感じたらいつでも帰ってきていいからね」

「お母様……やっぱり私納得できません。お父様がしようとしていたことも、今世界はギャラルホルンに反発する人が多くいます。今の状態が良いとは思えないし、私自身の道が決して最良と思えません」

一瞬だけ俯きながらも一度顔を上げたクーデリアは決意をその瞳に宿らせる。

「でも、自分が信じたこの道を、信じた人達と一緒に歩いていきたいんです」

「……あの時の子がこんなにも大きくなっていたのね。好きにきなさい。たとえどんな状況でも私はあなたの味方だという事は分かってね」

「……………はい！」

サブレは改めてクーデリアをお姫様抱っこしながら窓から外へと出ようとする中、クーデリアの父親が驚きながらやってきた。

「な、何をしている!? クーデリア! いい加減にしなさい! 何故こんなに私を困らせようとする!」

クーデリアの父親はこれ以上クーデリアに自由に動かれたら困ると言わんばかりの表情を浮かべ、ソラはそんな父親らしくない人間に軽蔑の目を向ける。

「お父様こそ……どうして火星の人々の苦しむ目から逃げようとするんですか？ 私はあの度で多くの事を知りました！ 今いる仲間達と一緒に今一度立ち上がりたいのです！」

サブレはそのクーデリアの言葉を最後に部屋から飛び出ていく。

そのまま近くに止めておいたバイクに乗って元の温泉郷まで戻っていく過程でクーデリアはサブレの背中に「ありがとうございます」と告げておいた。

「礼を言われる事じゃない。今回の一件でノブリスと繋がっているのはあんたのお父さんだ。それに対する内からの牽制と、ノブリスを動かすきっかけを作る事だったからな。ウチが見張っている縄張り内で動けばノブリスの動きが分かると思っている行動だ。俺こそ直ぐに動けなくて悪かったな。兄さんに近づきすぎれば過ぎに勘づかれるからな」

「お父様はこれを切っ掛けに手を出さなくなるでしょうか？」

「多分な。俺達を敵に回して今後やりにくいだろうからな。いくら火星のアーブラウ領を任されているとはいってもな、今後は事実上傀儡となるだろう。名ばかりの人間だ。多分それを惨めに感じていたんだと思うけどな」

サブレの言葉に驚きながら顔を上げる。

「そりやあ娘に立場を奪われたら父親としては顔が上がらないだろ？ それに、ビビツて手が出せずノブリスやギャラルホルンに逆らうことも無く、本来なら政府の代理としてしつかりしなくてはいけないのにな」

「私は……お父様を」

「胸は張っていれればいいさ。あんたのお母さんの言う通りで好きにすればいいだよ。本来親っていうのは子供を支えるものだし、何よりあんたの母親は味方でいてくれるんだから。それこそあんたの両親が職を失えば今度はあんたが支えてやればいいさ」

サブレの言葉にふと後ろを振り返り遠くなつていく自分の家を見つめる。

「いつか帰ってくる日が来る……」

「かもしれないな。俺は出入り口までは送っていくから、そこから別の人が兄さん達まで連れていってくれる。適当に言い訳しておいてくれ。バレたら鬱陶しいからな」

「……分かりました。本当に今回はありがとうございます」

サブレは最後に「別にいいさ」と気にしていなかった。

ネクストステージ

アーブラウ政府がギャラルホルンから獲得したエイハブ・リアクターの製造権でフォートレスが活用し新開発した新型エイハブ・リアクター。

新型エイハブ・リアクターの最大の特徴はアーブラウ政府からの要請に答え都市部での使用が出来るようにと開発されたことだった。

その為エイハブ・リアクターの構造を素早く理解し、その原因を探り出して改良をしなくてはならず、その改造までを最短で一か月か二か月後には終えなくてはいけなかった。

フォートレスは開発した新型エイハブ・リアクターを従来機に搭載しようと考えたが、更に問題が浮上してしまう。

新型エイハブ・リアクターが従来のエイハブ・リアクターに比べて大型で、微かに入らないというデメリットが生じてしまった。

こればかりはフォートレスも想定しておらず、本来のスケジュールには無かった新型モビルスーツを開発しなくてはいけなくなり、その最終テストが現在金星のコロニー近辺で行われようとしていた。

窓の向こう側に広がる広大な宇宙空間、その宇宙空間に広がるデブリや小惑星のような小さな岩石体、それを物凄い勢いで通り過ぎデブリなどを足場に変えて近づいて行く新たなモビルスーツ。

濃い緑色の体色をしており、両腕を隠すように広がる両肩のアーマーと背中についている突起物、カメラはゴーグル型を採用している新型モビルスーツ。

「従来式のモビルスーツとは違い今回のモビルスーツは水素エンジンとエイハブ・リアクターから供給される高純度のエネルギーのハイブリットとなっており、従来のギャラルホルン製のモビルスーツと比べても四倍以上の稼働可能時間を獲得しています。旧型のエイハブ・リアクターにあったデメリットである電波障害などはこのエイハブ・リアクターは克服しておりますが、その分従来之物より大型になっており標準のモビルスーツには搭載できないというデメリットがございます」

多少早口で説明する開発者の言葉を聞きながらモビルスーツの動きを目で追うマハラジャとアルベルト。

「あのモビルスーツはそこから更に開発ルートを広げ、本人が専用機として開発したものでして、あのモビルスーツはシステムのカスタム具合で玄人向けから素人向けまで組み合わせる事が可能です。アーブラウ政府に譲渡予定のモビルスーツに関してはモビルスーツを使った事の無い者達でも扱う事が出来るようシンプルなデザインをして

おります」

そう言いながら歩いていきそのモビルスーツの前に立って見上げる。

水色と白色の二色に分けられている角張ったデザインと同じく、ゴーグル型のカメラを持ったシンプルなモビルスーツ。

「こちらのモビルスーツは従来の兵器がそのまま活用でき、新規に武器開発をする必要はございません。しかし、このモビルスーツは念の為に高電圧ナイフが仕込まれています」

「まあ……その程度は存在しないとな……」

そして次の場所に案内を受けるとそこには一丁のアサルトライフルのような形状の武器が飾られている。

「これは代表に頼まれて開発している最新型の遠距離武器です。例の兵器を調べて完全な形でのレールガンの小型化に成功しました。まだ完全な安定までは時間が掛かりませんが、必ず計画実行までには完成させます。これらの機体と武器を我々開発陣は『ネクストステージ』と呼称しております」

「ネクスト……ステージね」

マハラジャは歩き出しながら「アルベルト」と呼ぶ。

「二週間後にエドモントン近郊で行われる予定の新型モビルスーツのお披露目会。どう

転ぶと思う？」

「間違いなくギャラルホルンからのちよつかいはあるでしょうが……正直ラスタルが直接来るかどうかで言えば判断しきれませんね」

「予想だと？」

「無いと思いますよ。ラスタルは前の戦いで信頼を失っているでしょうし、発言権の無いラスタルが作戦の指揮をとれるとは思えないですし、今の所ルールを破っていないアーブラウ政府を攻撃する理由がありませんからね」

「そうだろうな。少なくとも奴自身がアーブラウ政府を攻撃するのなら念入りに下準備をするだろうしな……でも、ギャラルホルン自体がちよつかいをかけることはあるだろうな。それを利用すれば再びラスタルに発言権を取り戻させることは出来るか？」

「可能だ。我々としてもラスタルが直接動いてもらわなければ困るしな……防衛の要は誰がする？」

マハラジャが少しだけ考え込んで「サブレ」と小声を出す。

ネクストステージと名付けられた機体から息を吐き出しながら降り、そのまま無重力の状態で格納庫から出ていくとサブレはパイロットスーツのヘルメットを脱ぎ捨てる。

「この新型のヘルメット……着脱しやすいのは良いけど……もうちよつとこう視界を確

保できないかね」

新型のパイロットスーツはフォートレスが開発した新型で、ヘルメット部分が着脱式に変更した代わり、装着する際に視界が多少塞がれてしまう。

サブレはこれを安全性を上昇させることが目的だといわれたが、イマイチ納得できない話だった。

「音声があるから最悪どこから攻撃が来るか分かるだつて言うけどさ……俺としては視界がふさがれるのは困るんだよな」

サブレは緑色のジャケットの服に着替えて部屋から出ていくとビスケットが飲み物を持った状態で待っていた。

「兄さんはテストしないでもいいのか？」

飲み物を受け取りながらそう尋ねるとビスケットは頷いた。

「俺は昨日のうちにやったからね。それよりさつき話を聞いたんだけど、今度行われるお披露目にギヤラルホルンからちよつかいがあるかもつて」

「だろいな……そりゃあギヤラルホルンからすれば面白くないだろうし、かといって自分達の不手際で起きた事態だから文句も言い難い。なら相手にミスを誘発させて「ギヤラルホルンが居ればいい」という認識を植え付けてモビルスーツも没収した方が楽だろ？」

「まあ……でもやりかねないかな」

ギャラルホルンがそういう雑な所があるとビスケットはよく知っているし、その辺の悪影響をある意味身をもって受けてきた人間でもある。

「地球に行けばクッキーとクラツカのお土産買わないと……何が良いかな」

「前に地球に言った時に大量購入しているだろうに……それにクッキーとクラツカにだけ購入すれば兄さんの分が無いって二人が文句言うぞ」

「勿論サヴァラン兄さんの分も買うよ……フフ」

サブレが笑うビスケットの方を見ながら気持ち悪いという。

「何なんだ？　気持ちが悪いなあ……突然」

「だって！　だって……こんな風に兄妹皆で暮らす事が出来るとは思わなかったし……マハラジャさんには感謝しているんだ。今回の仕事だってそれなりの報酬があるし、兄さんの仕事先の紹介や、クッキーとクラツカの学費代。勿論俺達の学費代だって出してもらったし……」

「好きでしている事なんだから無理に感謝する必要も無いだろうに……」

一緒の家で暮らす事が出来ることをビスケットは幸せに感じており、休学気味とはいえ学校に通えているという現実嬉しさを感じるのをおかしなことではない。

「俺は時々親父がやってくるのがめんどくさくて仕方がないけどな。まあいいや。全

くテストだってこんな辺境の地にまでやってこなくても……この金星は俺にとってあまりいいイメージの無い場所だし」

「サブレが前に死にかけた場所何だっけ？」

「心外だな。明楽の尻拭いをさせられた場所と言って欲しいね。コロニー一つを犠牲にしてしまったけど……結果オーライだろうに」

「コロニー一つを犠牲にしてそれは無いと思うけど……」

「何か言いましたか？」

「いいえ何でもないです……それよりこの後どうする？ 俺は金星土産を買おうかと思っているんだけどさあ……」

サブレが顔で「良いけどさあ」と言いながら買い物に付き合う事になったが、その前にアルベルトに引き留められた。

「待て。お前達はまだすることがある」

サブレとビスケットはそのままアルベルトにつれていかれる事三十分、再び訪れたのはある格納庫だった。

サブレは振り返り「何？」とアルベルトに尋ねるとアルベルトは小さく格納庫の端に隠れているハ口を指さした。

「今度開発されるネクストステージの機体にはサポートシステムも付けたいとマハラ

ジャの意見でな。特にモバイルスーツの訓練を受けていない人間が実戦に出るにあたりサポートしてくれる存在が必要だ」

「それであのハロってわけだ」

「ああ、作業サポート用として提示して欲しいという訳だが、お前達が個人使用しているハロをくれというつもりも無い。だから…」

「設計して欲しいと？ 設計図だったら提供するよ？」

「そうじゃない。あれが新しく作ったハロなんだ。だからお前達でOS面を見てやって欲しい」

サブレが表情で露骨に「めんどくさい」と告げ、アルベルトは最後に「任せたからな」と言って立ち去っていく。

「兄さん先に買い物に行ってもいいよ。俺はこいつのOS設計に入るから」

「俺も手伝うよ？」

「兄さんが手伝えることがあると？」

「まあ……無いけどさ」

サブレに後押しされるままに部屋から出ていくと、それとすれ違う形でマハラジャが部屋の中に煙草を吸いながら入ってきた。

サブレはハロの口にケーブルを差し込んでパソコンと接続し、そのままOSを入力し

ていく。

「どうなの？ 父さんの予想としてはギャラルホルンがどうでるのか」

「そうだな…」

そういうしながらマハラジャは近くのコンテナに座って考えるそぶりを見せる。

「海賊が襲ってくるというのが一つのパターンだな。もう一つが海賊になりましたギャラルホルンが襲ってくるパターン。どちらかだな…」

「海賊になりすますのはともかくとして…海賊が襲ってくるパターンは無いんじゃないか？」

マハラジャは笑いながら「やっぱりそう思うか？」と尋ねるとサブレは「まあね」と言つてキーボードを打つ速度を緩めない。

「海賊が失敗したパターンを考えれば直接手を下す事は止めるだろう。これ以上失態を重ねるわけにはいかないんだから」

「そうだろうな。彼等からすれば失敗できない所にまで来ているわけだしな…かなりの手練れが現れることになるな。海賊の方が正直気が楽なんだがな…」

「何で？ セオリーを無駄に守るギャラルホルンの方が気が楽でしょ。海賊はセオリー守らないからむしろ面倒でしょ？」

「いやいや…セオリーを守るとかそういう話じゃない。海賊が相手だと相手にとって

不利な状態だからな。地球での戦いに慣れていない彼らは地球でのやり方に慣れない。ギャラルホルンはその分重力下での訓練をしているからな。面倒で言えばそっちの方が面倒だ」

サブレが実際に想像してみても確かにそっちの方が面倒だなっと感じてしまった。

「まあいいさ。どっちが来てもいいように策を練る必要があるしな。実際の戦闘の場合お前にも出てもらうぞ」

キーボードを打つ手を一旦止めて「良いけど」と言いながら振り返る。

「でもさ。それって防衛力強化という点ではマイナスイメージじゃない？ 部外者が多くて簡単じゃ」

「？ それを公表しなければいいだけだろ」

サブレは内心「ズルい」と思ったがそれが正攻法でもあると思うと否定もできなかった。

「ネクストステージね……まあ次世代という意味では『ネクスト』になるのかも知れないけどさ……でも個人的にもうちよつと何か良いネーミングが無かったのかねとは思うけどさ」

「……………そうか？ 良いネーミングだと思うが。ギャラルホルンが停滞させてきた三百年を終わらせるという意味ではな。終わらせて次に投げるという意味を持って『ネクス

ト』だ」

終わらせて次に引き継がせる。

エンジンからシステムまで全てが全くの新規で、そういう意味ではギャラルホルンの疑似的な支配からの脱却を訴えるフォートレスからすれば『ネクスト』という言葉をつけたくなる気持ちをサブレとしても理解は出来る。

出資者から常に「金は出すから早く開発しろ」と急かされてきたマハラジャ。

「戦争ね………そういう時代を経験しないで済む時代はあるのかね……」

「無いだろうな。人間が人間である限り争いとは常に縁がある。それはお前もよく分かっている事だろう？」

支配をする者が居る限り、それを維持する者が居る限り争いとは無縁だ。

だからこそ、マハラジャはラスタルを殺したいと願っている。

ラスタルがどう支配をしてもラスタルが居る限り偽りの平和ですら難しいのだ。

ラスタルの思考は過激で、常に争いと共にある。

彼は意図的に争いを引き起こさせ、それを力で解決することで表面上の平和を維持してきたのだから。

サブレがOS入力を終えた時、アルベルトはネクストステージ機をシャトルへと積み込んでいった。

次へ

新型モバイルスーツの開発セレモニーがエドモントンで行われるという話はあつという間に各メディアを通じて報道され、当日になるとセレモニーの会場一帯では異様な賑わいを見せており、それをギャラルホルンのエドモントン支部では苦々しい表情で見守っていた。

いや、忌々しい表情と言った方が良いかもしれない。

彼等からすれば今までギャラルホルンが独占していた技術が遂に流出を許し、最短で開発された新型モバイルスーツの開発セレモニーを黙って見ていなくてはいけないのだから。

それがどれだけ忌々しい事なのかはギャラルホルンであれば誰でもわかる話だし、その原因が誰にあるのかなんてそれこそ子供でも分かる話。

内部ではセブンスターズの一族が権利の奪い合い、疑似的な貴族制度のようなやり方に対する不満が徐々に表れていた。

実際今日行われる開発セレモニーにセブンスターズが裏で妨害しようとしていると事前にフォートレスへと漏れていたのだから。

「結局の所はどういう事？ セブンスターズが直接来るわけじゃないの？」

ビスケットはアーブラウ政府の軍服に着替えてあくまでも自分達がアーブラウ防衛軍だと思わせる作戦だといわれて違和感なく着替えている最中目の前では既に着替え終わっているサブレにそう尋ねた。

サブレは「ああ」と言いながらタブレット越しに情報を整理しながら語りだす。

「セブンスターズが裏で造った海賊モドキ…要するに偽者だ。元ギヤラルホルンの人間をいなかった事にするなんて言うのは今更の手段さ。セブンスターズクラスの権力者なら出来るよ」

「でも……そこまでするかな？ 海賊を雇えばいいだけの話じゃ」

「宇宙海賊は地球での戦いになれていないし、負けたときにいざとなったら情報を漏らす可能性も高い。何より欲深い連中に余計な戦力を与えたくないんだよ」

「処理するのが面倒だから？」

「それもあるな。もう一つの理由は現在セブンスターズのトップは『イシュー家』だ。しかし、イシュー家は跡取りを失い今の代で終わるだろう。そうなれば初めてセブンスターズのトップの座が空白になる。今セブンスターズはその奪い合いだ」

ビスケットは小さく「奪い合い」と呟くが、サブレの瞳はその奪い合いにまるで興味

を抱いていなかった。

それもそのはず。

サブレ達にとってその奪い合いは自分たちの計画を進める為に利用する為であつて、その理由にまるで興味を持てなかつた。

だつて……本来そのトップにいるべき人間達を騙して上に登つた裏切り者。

それこそがギャラルホルンという組織の基盤であり、どこまで遡つてもその起源は「裏切り」なのだから。

裏切つた理由なんて三百年後の現在においてまるで意味のない事でしかなく、今更その問いに答えてもらつてももうつもりはなかつた。

ただ、当時の盟約上裏切り者には『死』という制約を果たさねばならない。

「新型モビルスーツに搭載されている新型リアクターは都市部での使用が出来るという点でギャラルホルンからすれば喉から手が出る存在だ。しかし、前の事件の時にフアリド家とエリオン家とボードウィン家とイシユウ家とクジヤン家は現在エイハブ・リアクターの製造権利を失っている」

「という事は今回の事態は……」

「そう残りの二家による仕業という事になるな」

サブレにとってこれはギャラルホルン内で『ある人物』が自由に動けるようにするた

めの行為でしかない。

「でもさ……俺達が戦ったら意味がない？」

外部の人間が戦っては意味がないのではと尋ねるビスケットにサブレは呆れかえる様な顔をしながら言つて見せた。

「何を言っているんだ？ それを明かさなければいいだけだろ。俺達は今だけは防衛軍なんだよ」

堂々と告げるサブレにビスケットは口を開けたまま間抜け面をする事しかできなかった。

歩いて部屋から出ていくサブレは防衛軍の帽子を深々と被り顔を見られないように廊下を歩いて行き、ビスケットもその真似事をしながら歩いて行く。

しかし、真似事をするのならと思つたビスケットは自分の疑問を素直にサブレに告げてみた。

「だつたもつと人員を連れてきた方が良くないんじゃない？ ほら、昭弘とかシノとか」「シノや昭弘に芝居が打てると？」

そうハッキリと尋ねられると答えずらいものがあり、正直に言えば無理だろうことは簡単に想像できた。

しかし、黙っているぐらいなら出来そうだと告げると大きなため息が帰つて来た。

「どこかでボロが出る。それに防衛軍にいる人間もこっちの人間で構成されているから安心しろ」

「……………一から十まで全部自作自演の匂いを感じるよ」

「一は俺達じゃないから完全な自作自演じゃないな」

「待って！ さっきの発言なら二から十までは自作自演だつて自白したようなものじゃない!？」

サブレは黙り込んだまま前をひたすら歩いて行き、その沈黙こそがサブレの答えのような気がしてならなかった。

ビスケットから受ける疑惑の目にサブレはため息で答える。

「兄さんは分からないようだから言っておくが、相手がいつ仕掛けるか、そんな不安を抱えておくより誘導してある程度こっちの思惑通りにしておいた方が楽だろ？」

「サブレ達が楽しただけじゃ…」

「まさかだよ。俺達の掌の上に転がしておくことで今後の作戦を行いやすくなるだけで、それ以上の他意はない。強いて言うなら『ある人物を動きやすくする』という名目はある」

はつきりと人名を出さない理由はそれを教えるレベルに無いという事でもあり、そう言う時に秘密にされるとビスケットは面白くない。

しかし、結局の所でどれだけ信用されても自分達が部外者であるという点は変わりはない。

それに対してサブレはフォートレスの中核に組み込まれている重要人物。

それこそビスケットではどうしようもない差でもある。

小さな頃からマハラジャからの英才教育を受け、同時に計画の重要人物として育てられたサブレは同時に秘密ごことが多い。

仕方がないのだと自分に言い聞かせてサブレの跡をついて行く。

サブレの元に一人の男性が歩いてきて小声で話しかけてくると人一倍大きなため息を吐き出して男について行く。

ある個室の中に置かれている通信端末の前で座り込み受話器を耳に当てながら相手と話し始めるサブレ。

『こちらギャラルホルンのアーブラウ支部。そちらに宇宙海賊が向かっていると報告を得た。こちらで迎撃をしたい』

「お断りする。今回の式典の防衛はこちらに任されているはず。迎撃したいのなら会場より遙か外で願ひ出る」

『もうそちらに到着まで三十分も無い』

「三十分もあれば外での排除は可能であると考えるが?」

サブレが真顔で話をしているが、話をしている相手の声が震えているのが声質からよく分かる。

思った通りに会話が進まない事への苛立ちか、それとも何かをこらえているのか。

『最悪の事態を想定して動くべきだ』

「だったら自分の首が飛ばないように考えて動けばよろしいのでは?」

サブレがそう告げると通信が強引に切れてしまう。

「さっきの話仕方。よっぽど上からせつつかれていたみたいだな。まあ、お陰でギャラルホルンの背後関係がよく分かったよ」

「どういう事?」

「今回の一件はセブンスターズクラスの間人間が動いた一件だ。それを事前に阻止しようと動いた」

「どうしてそう思うの? ただ単純に責務を全うしようと思っただけじゃない?」

「いやいや。だったら今回の一件に介入しようとしないだろうに。元々今回はギャラルホルンが介入する余地が無いわけだし」

「じゃあ……」

「さっきの人苛立ちと同時に感じたのは焦りと動揺。最悪の事態を想定して動くべきと

「いう言葉はセブンスターズクラスに挟まれている自分の状況にも言えるんだと思うぞ。だからこそ俺の最後の言葉に反応して切ったんだよ。恐らくでしか語れないが、今回の一件は現在発言力を持っているセブンスターズが動いて海賊を意図的に作り出して自作自演をしようとした。それをギャラルホルンが動いて相手を追い払えば経済圏の信頼を失う事が出来るうえ、自分たちの信用を取り戻す事が出来る一石二鳥の作戦だからな」

「でも、それって欲張り過ぎじゃない？ 策として不十分に見えるし」

「不十分だと思うよ。長年こういう事態に陥ったことが無い彼等だからこそこれで大丈夫だろうという思い込みが存在しているんだ。しかし、全部のセブンスターズがそう考えているわけじゃない。だから『阻止しろ』と言われた。多分『エリオン家』だな。だからこの状況だろうな…」

「どうしてそう思うの？」

「？ クジャン家はそんな事を考える程大人じゃないし、現在のフェアリド家は………まあ置いておこうか。これは語るだけ無駄だし。ボードウィン家はそんな事を考えるだけの度胸はない。それに、こういう状況で裏でこそそこそ動くのはエリオン家ぐらいだ。さあ………さっさと迎撃しに行こうか…」

結果だけを言えば苦戦する事すら存在しなくアツサリ終えた戦いは既に戦いと呼べないほどに一方的だった。

モビルスーツ自体の性能差だけじゃない圧倒的な戦力差。

サブレの予想通り敵は海賊になりましたギャラルホルンで、モビルスーツも中古品を持ち込んで戦っているうえに、慣れないモビルスーツ相手にうまく立ち回ったサブレ達に勝ち目など存在しなかった。

むしろ蒔苗氏はその闘いぶりを世界中に中継することで自分達が委託開発したモビルスーツの有効性を証明する結果に終わった。

それこそサブレが言う「ラスタル・エリオンが阻止しなかった未来」らしく、結果からすればセブンスターズ間の戦力バランスを統一する結果に終わった。

それがフォートレスの目的であり、その結果を望んでいた理由はラスタルの影の腹心を表に引きずり出す為であり、サブレ曰く「目的はおおよそ達した」と言っていた。

それこそ先ほどの通信でギャラルホルンの裏事情を察したらしく、サブレは「これだ『あの男』を引きずり出す事が出来る」と言っていたが、その男については全く教えてくれなかった。

「いずれ父さんが教えてくれるさ……、これだけは知っておけばいい。今回の戦いは新型モビルスーツの性能を探り出し、現存するモビルスーツとの性能差を図る事と前の戦

いの時に生じたセブンスターズ間の戦力バランスを元に戻す」

「何で?」

「詳しくは次だが、ギャラルホルンがある程度こつちの都合のいいように動かす為には考えを読みやすい人間を自由にする必要がある。その上で相手の行動パターンを絞り込む」

「要するに読みやすくしたい?」

「そう言う事だな。その為に必要な計画だった」

「だったモビルスーツの性能差も完璧だったし……上々?」

そう聞いたのだが、サブレは渋顔を造って固まる。

「いや……はつきりいうが今回のモビルスーツの性能差は様々な要因を経ていてまるでいい結果を取れなかったが、はつきり言えば兄さんが感じたほどの性能差を現しているほど優秀じゃない。でも、今はそれだけでいいんだよ」

サブレは前を歩きながらはつきりと告げる。

「これは基礎モデル。ここからなんだから。だから兄さん達にも期待しているんだよ。これから色んな人が戦いに使い、その度に得られる戦闘データを反映して作られる完成型を目指しているんだから」

「俺達にもくれるの?」

正直に言つて嬉しく思っていると悪魔のような微笑みを浮かべる。

「……………有料ですが何か？」

「金……………取るの？」

「当たり前でしょ……………次世代機の為にも貴重な投資を」

そう言つて歩き出すサブレ。

どこまでが本心なのかまるで分からないが、そろそろ帰らないといけない時間を迎えようとしていると気が付いて俺も歩き出す。

「俺は一旦フオートレス本部に帰るけど兄さんは？」

「俺は火星に帰るよ。そろそろ帰つてテイワズ本部に行かなくちゃね。俺達も名瀬さん達と肩を並べる組織になるし…」

「……………調子に乗らないようにね。そういう時こそ気を引き締めて。次があるんだから……………」

「分かつてるつて。皆にはちゃんと釘を刺しておくよ」

「そう言えば前みたいにもオルガは一人で抱え込んでいないみたいだな」

「うん……………俺と相談しながらだよ。サブレのお陰だね」

「俺は何もしていないけどな」

「サブレがいなかったら俺達どうなっていたか……………色々あつただけど感謝しているんだ」

「そうか………だったら次の作戦はこき使ってもいいわけだ」

「て、手加減をしてくれると……」

ニヤニヤと笑うサブレをしり目に苦笑いを浮かべるしかなかったが、サブレの言う『次』という言葉が何故か嬉しく感じてしまった。

それが何故なのかまるで理解できない。

次へと向かう俺達の戦いがどこに向かうのか誰にも分からないのだろう。

黙する戦争編

新たな血

丘の上に建てられた慰霊碑の前でオルガとビスケットが立ち尽くしており、慰霊碑には今までの鉄華団の犠牲者が名を連ねていた。

目の前に広がるのは桜農場のトウモロコシ畑と、その端の方に見える近代的な建物であるフォートレスの隠れ会社がチラツとだけ見えた。

オルガとビスケットの後ろでは三日月と呼ばれている黒髪の少年が暇そうに佇んでおり、オルガはそれを見ながらそつとため息を吐き出す。

「いよいよ歳星へ出発だ。そこでテイワズと盃を交わしやあ俺らはいよいよ名瀬の兄貴と肩を並べることになる。テイワズの直系団体だ。この規模の農場だけじゃまだ金は足りねえ。鉄華団に入りてえって居場所のねえ奴らもわんさと集まってくる。お前は止めると思つたんだがな」

「言つたら止めたの？ 絶対やめなかつたよ。俺が地球に行っている間に勝手に決めるんだもん」

「事後報告みたいに言うなよ、完全に伝える前には言つたら？」

「それを聞いた時には既に時遅しだったけどね」

肩をすかして「やれやれ」みたいな態度を取られるとオルガとしても反論の余地は全く起きなかった。

三日月はその姿を見て更に大きなあくびを上げる。

「そろそろ出発しようか。もう……皆への報告もいいだろう？」

「ああ。でも……お前の親父さんは反対されるかと思っただけだな」

「その辺も込みで利用するつもりなんじゃない？ 二年前に釘だけは指しているって言うっていたし」

太陽が地平線の向こう側から姿を現し、二人は目を細める。

蒔苗がアーブラウ代表となりギャラルホルンの腐敗が暴かれたことで世界は少しずつ変わり始めていた。

鉄華団は代表指名選挙を巡る戦いで一躍名を上げ、彼らはハーフメタル権利を手土産についてテイワズ直系団体となる。

その背後に『フォートレス』と呼ばれる反ギャラルホルン組織とのつながりがある事は極秘扱いとされ、ギャラルホルン頼みだったアーブラウの防衛力強化のため正規軍の軍事顧問に任命され、地球支部を開設した。

混乱する情勢の中でその実績を買われるも、ビスケットの判断で組織はゆつくりと成長を続けていた。

クーデリアはテイワズと協力し、アーブラウ植民地域のハーフメタルの採掘一次加工及び輸送業務を行う『バーンスタイン商会』を設立し、鉄華団と提携して桜農場の敷地内に孤児院を設立。

社会的弱者への能動的支援と火星全土の経済的独立のため日々奔走していた。

その陰で『フォートレス』が次第に火星と木星を中心に勢力を増していく一方で、ギャラルホルンは社会的信用を失い世界の治安はより悪化する結果となった。

各経済圏は経済圏防衛用のモビルスーツを配備するとギャラルホルンへの反発がさらに増していく結果に落ち着く。

鉄華団の活躍によって少年兵の有効性が示された結果子供達は戦場へ大量に投入されヒューマンデブリも増加、また戦力としてのモビルスーツの重要性も再確認され、各地で大戦期のモビルスーツの復元と改修が進みモビルスーツの総数は爆発的に伸びている。

力なき子供達が搾取される世の中はいまだ続く。

「失礼しま〜す」

ハツシュ・ミデイと呼ばれている若者が暗い部屋に入ると、そのまま部屋の中を見回す。

「予備隊のハツシュ・ミデイですけど、獅電の動作テストが始まるって……んだよ。誰もいねえじゃんか……つたく……」

部屋の中へまた一歩踏み出すと、足元にいた三日月に驚く。

「うわっ！……なんだこの人か」

三日月はジャケットを布団代わりにして眠っており、ハツシュの事にも気が付いていないようだった。

「まくた寝てる。なんだろうなほんと。他の人は鬼神とか悪魔とか言ってるけど、こんなただの産廃だろ……」

三日月に対して失礼なことを言うのとそれに反応するように上から声が聞こえた。

「そういうのは俺に聞こえないところで言っただけこれからは」

ヤマギと呼ばれている少年はため息を吐き出す。

「まあ、仕方ないか。バルバトスもグシオンも今はテイワズで改修中。入ってきたばかりの君はまだ本当の三日月を見てないからね。それよりシノの所で訓練の時間じゃなかったけ？」

「そ、そうでした！」

そういうとハツシユはそのまま走り去っていった。

「おらあく！ペース落ちてんぞ！走れ走れ新入りども！」

多くの新人が訓練の為に敷地内をひたすら走っており、その中にハツシユもいた。シノの後ろからユージンが話しかけてくる。

「おいシノ、あんま厳しくすと一軍のじじい共と変わらねえぞ」

「分かってるけどよお、適当に甘くしてそれで死なれたら目覚めわりいしよ。嫌われんのは俺だけで十分だからよ。副団長さん！」

「……あつちはもう模擬戦かよ」

シノたちの目の前ではラフタ達が獅電での模擬戦で直接訓練していた。

「ダンテ！ 反応遅い！」

「んなこと言われても……」

「まったくダンテの野郎……」

「獅電のイオフレームは百里・百鍊をベースにしたテイワズが開発したマスプロダクトタイプですからね」

「さすがに練度が違うか。まあサブレの奴は阿頼耶識なしであの二人に勝っちゃうんだから、さすがというしかねえな」

ダンテはラフタの武器に気を取られて、ラフタからの攻撃をまともに受けてしまう。

「もう勘弁してよね！あんならが使い物にならないと……」

「うちらが名瀬のところに帰れないんだからね！」

「なんかすまねえな……今度サブレの所の会社に定期的な訓練をさせておく」

「いえ……その場合だと、サブレ君が暴れだしそうで……、この間も獅電を壊しかけるほどに暴れてたし」

その模擬戦を遠くから見つめていた新人たちは感心し、戦いに夢中になっていた。

「はあくすつげえな。あれ初めて乗ってんだろ？」

「あれが阿頼耶識の力か」

「獅電に阿頼耶識はついてねえよ。あれは厄祭戦時代のシステムで今じゃよく分かんねえことが多すぎてテイワズの新しいシステムには載せられねえんだと」

「でも、それモビルスーツ以外でも使えるんですよ？」

「ちよつと手術するだけでそんな力が手に入るんだもんなあ」

「なくんで団長と団長補佐は俺らにはしてくれねえんだらう？」

「お前ら……」

「俺らは何もすき好んで手術を受けたわけじゃねえ。こんな博打みてえな手術に頼んなくていい、そういう世界をこれからお前らと作っていくんだよ。それにうちの団長補

佐は猛烈に反対するからな。手術をするってわかったら何時間説教がくるかわからねえよ」

「さすがいいこと言うね副団長」

「オルガとバスケットがよお……似合わねえ真似やってんだ。俺もちったあ役に立たねえとよ。じゃねえと、バスケットから副団長を指名してもらった身としては、情けねえからな」

「だな」

「なあバスケット、ここ数字違わねえか？」

「うん？ えつと……だね」

バスケットが端末を使って直していると、メリビットさんがそばまで寄ってくる。

「団長さん。名瀬さんからQCCSで連絡が入ってま……」

「兄貴が!? あつ……」

オルガはやってしまったという表情になるとそつと横を向く。隣ではバスケットがクスクスと笑っていた。オルガすこし顔を赤らめると席を離れた。

「ああ分かった。行くぞバスケット」

バスケットは返事しつつ一緒に部屋から出ていった。

「頑張ってますね団長。最初は机に座ってるのも辛そうだったのに。ビスケット君が良く説教してましたっけ」

「ええ、本当に」

オルガとビスケットが団長室に行くとき名瀬からの連絡が入った。

「どうだ調子は？ オルガ」

「まあぼちぼちです」

「何言ってるんだ。お前はハーフメタルってシノギをテイワズにもたらした英雄だぜ。まあそれを疎ましく思うやつもいるだろうが……まあそりゃ俺も同じだ。お互いぽっと出は疎まれるもんさ」

「まあ気を付けますよ。ビスケットに説教されたくありませんからね」

「まあビスケット、お前がちゃんと手綱を握っとけよ。オルガの奴はお前がいねえとすぐに暴走するからな」

「はい。そこはちゃんとしてます」

「まあ、気をつけろよ。バルバトスとグシオンが大幅改修してるってテイワズ内でちよつとした噂だ」

「ええ、気を付けておきます」

通信を切ると、オルガは時計にふと目がいく。

「そろそろ出発の時間じゃねえか？」

「え？あ、そうだね。そろそろ行つてくるよ」

「気をつけろよ」

ビスケツトは部屋から出ていった。

「いや〜私も鼻が高い。あの『ノアキスの七月会議』にまだ無名だったあなたを登壇させた甲斐があつたというものです。革命の乙女クーデリア・藍那・バーンスタイン」

「その節はお世話になりましたギョウジャンさん」

バーンスタイン商会のもとにギョウジャンという男が訪ねてきていた。

「来月クリュセで再びこのアリウム・ギョウジャンが主催する大きな集会を開くのですが、ぜひそこで再び一言……」

「申し訳ありませんが、今は公式の場での発言は控えたいと考えています」

「ふむ……なるほど。『今は』ですか。そういえば月末にアーブラウ以外の植民地の方々を招いてハーフメタル採掘現場の視察を行うそうですねえ」

ギョウジャンの言葉にクーデリアと隣で話を聞いていたフミタンが反応した。

「その話どこで……」

「その視察私もクリュセの思想家の代表としてお手伝いしましょう」

「はい？」

「あなたの思想は元々私の影響を強く受けていた。その私が隣に立てば必ずお力になれるでしょう」

クーデリアを勧誘しようとする中、秘書の女性がドアを開ける。

「失礼します。社長そろそろ次の予定の時間ですが」

「失礼だな。まだ私が……」

「ありがとうククビータさん。ギョウジャンさん。今のお話はお断りします。私の今の活動に特定の思想は必要ありません。今は口だけで動ける時代ではないのです」

ギョウジャンは黙ってバーンスタイン商会から出ていった。

「あの男の率いる活動家団体テラ・リベリオニスは今や風前の灯ですからねえ。有名人の社長の名前を使ってもう一度いい思いをしたいんでしょう。全くなんて小さな男だ」

「ですがお嬢様」

「ええ、彼は視察の件を知っていました。侮っていい相手ではありません」

そして、車に乗っていたギョウジャンは運転手と話をしていた。

「どうでした？ 反応は」

「話にならん」

「では……」

「あの男に連絡を取れ」

そしてクーデリアもある人物たちに連絡を取ろうとしていた。

「鉄華団に連絡を取ってください」

「……こつちは任せろ。お前は休みが終わり次第こつちに合流してくれ」

「分かった」

「で？オルガ何？」

三日月が部屋に入ると、オルガは通信機でビスケットと会話をしていた。

「ミカには悪いが明日一番でおやっさんとバルバトスを受取りに行ってもらおう」

「分かった」

「普通「なんで？」とか……」

「仕事でしょ？」

通信機の奥でビスケットの「クスクス」という笑い声が聞こえてくる。

その奥からはマハラジャとサブレの声と同時に双子や兄であるサヴァランの声までもが聞えてきて、それを聞いているだけでオルガは少しだけ心が穏やかになれた。

あの兄弟が幸せそうにしているなら、それだけでなんとなくだがオルガまで幸せに感じてしまう。

「二週間後お嬢さんの案件だ。少しきな臭くてな。まあそれでも間に合うかは微妙だが……」

「間に合わせるよ。それがオルガの命令ならね」

「ああ、頼むぜミカ、ビスケット」

時を同じくして格納庫ではきな臭くなつていく空気に昭弘達二番隊が動き出そうとしていた。

「了解」

「お嬢さんの護衛が俺たちの次の仕事つてわけだ」

「うわっ！ お姫様と一緒に?」

「いいか？ これがお前らの初陣になる。とりあえずモバイルワーカー隊として昭弘の二番隊に入ってもらおう」

「ああ。いいか……」

昭弘が声かけをしようとするのをライドが横からかっさらった。

「いいか！ 訓練じゃねえんだぞ。しっかり気い入れろよ！俺ら二番隊は甘くねえぞ！」

昭弘は何とも言えない様な顔をしていた。

その横で昌弘がため息を吐いているとは誰も思わなかった。

護衛任務は何も起こらないまま一週間が過ぎようとしていた。すると、昭弘がすぐにモビルワーカーで駆け寄ってくる。

焦った様子の昭弘が周囲に声を上げて指示を出す。

「お前ら！早く持ち場につけ！団長から連絡が来た！来るんだよ敵が！」

クーデリアは空気が変わった現場を前にオルガの元へと向かっていった。

「ビスケットからの連絡だ。『夜明けの地平線団』が三日前に火星に降り立ったって情報だ。そいつがあんたの言っていたテラ・リベリオニスの依頼を受けたらしい。くそつ……もうきやがった」

「あの……三日月は？」

「ちよつと出張中だな。こっちに向かっているはずだが。何心配いらねえさ。俺たちは……鉄華団だ」

前線では新人たちがモビルワーカーで応戦していた。

モビルワーカー同士の戦いはほぼ互角の勝負を見せようとしていた。

「ザック！俺たちも前にでるぞ！こんなところにいたんじや手柄もたてらんねえ！」

しかし、そんなモビルワーカー隊の前にモビルスーツが立ちふさがる。

「モビルスーツ……モビルスーツだ！」

「モビルワーカー隊は後退！モビルスーツ隊はこのまま突撃！」

「出て来いよ悪魔とやら。虚名を暴きお頭への土産にしてやるよ」

モビルワーカーの一機がやられていく。

「くそっ！俺はこんなところで……」

すると、鉄華団もモビルスーツを出撃させる。

「待たせたなてめえら！」

「遅えんだよ！とつとと働け！」

「つたりめえだ！鉄華団実働一番隊！いや、流星隊！いつくぜ〜！」

シノの元気のいい声と同時にビスケットがフォートレスから購入した新型の『ネクストステージ機』に乗って姿を現し、ごっつい装甲にロングライフルとミサイルポットという重装備を持って現場に現れた。

「大丈夫かよビスケット。そいつ初陣だろ？」

「だからって後ろで見ているわけには行かないよ。こいつのテストも兼ねているんだから……」

ビスケットのロングライフルの銃弾が敵モビルスーツのコックピットに着弾し、相手を沈黙させ、シノたちの戦いも激しさを増していく中オルガの近くにクーデリアが近づいて来た。

「団長。視察団の避難終わりました」

「あんたも避難しろよ」

「その言葉そのままお返しします」

「……まああんたならそういうだろうとビスケットが予想してたがな。安心しな、俺たちの居場所は俺たちで守っていく」

上空ではサブレが乗るアガレスと三日月の乗るバルバトスが降下していた。

雪之丞の乗る機体から切り離れた三日月はサブレと共に敵上空から思いつ切り衝撃と共に降り立った。

「お待たせ、ビスケット。遅れてごめん」

「お帰り三日月。サブレもご苦労様」

アガレスはバルバトスと違い落ち着きながら着地、敵集団を一撃で落ち着かせてしま
う。

「良く帰ってきたな二人共……」

嫉心の渦中

新たな装いとなったバルバトスと単身用に改造を受けているアガレスが地に落ち立つのだが、バルバトスは派手に降り立つたのに対しアガレスは静かに落ち着いて着地を決めていた。

二機のモビルスーツが現れた衝撃は計り知れず、結果として敵モビルスーツ群はあつという間に戦場から離れていくのだが、シノが追いかけてしようとしたときサブレがそれを制止する。

「バルバトスが壊れたらしい。全く動かなくなつたよ」

「あれ？ おかしいな……」

「おかしいわけねえだろ！ さつさと降りて来い三日月！」

同じ時下の方でハツシユという新人がボソリと呟いていた。

「あれが……バルバトス」

夜明けの地平線団の主力艦隊に一人の人物からの連絡が入った。

「なんてザマだ！ 子供相手にいいように遊ばれて。これではますますあの小娘をつけ

あがらせるだけじゃないか！」

「鉄華団との件はすでに貴様とは関係がない。夜明けの地平線団の名誉と誇りに懸けて奴らは必ず始末する」

「こちらは大金を払ってるわけだし、もう少し情報を共有しあっても……」

「活動家風情が誰に物ぬかしてやがる！」

苛立っているのだろうかとは誰の目にも明らかだったが、そんな夜明けの地平線団の行方を追っていたのはフォートレスだった。

マハラジャは一人部屋で煙草を吸い、目の前に広げている地図相手に睨めっこである。

その地図にはこの周辺の詳細な情報が記されており、それはここ一か月ほどサブレ達
が調べた結果。

そして、確信を持ったのはこの辺りに夜明けの地平線団の根城があるという話だった。

「さてさて……どこに隠れているのやら？ サブレ達はそろそろ到着した頃かな？」

「恐らくはな……それより……いるまでそこでコーヒーを飲みながら煙草を吸っているつもりなんだ？ いい加減支度をしてくれないか？」

「良いじゃないか。お前こそもう少しゆっくりした方がいいんじゃないのか？」

隣で仕事をしているアルベルトが苛立ったような目で静かに睨みつけ、その目を見たマハラジャは誤魔化すようにタバコの火を消した。

クーデリアとオルガ、ビスケットとユージンは団長室で話し合っていた。

「しばらくあんたには桜農場に避難してもらおう」

クーデリアは仕方なさそうな顔をしていたが、これだけはオルガは譲るつもり何て存在しなかった。

そんなオルガに対してユージンが食って掛かる。

「でどうすんだよ？ 夜明けの地平線団相手にやらかすか？」

「可能だと思うか？」

オルガはビスケットの方を見るが、肩をすくめながら呟いた。

「無理だろうね。夜明けの地平線団ついていえば艦隊十隻の巨大集団だよ。無謀にもほどがある」

「だよな。けどどうすんだ？」

「だがそいつらに鉄華団が目を付けられた事実が変わらねえ。遠くない未来に一戦交えるのは避けられねえだろう」

「それまでになんとかしないと……」

もはや他人事では済まされないと、ころにまで問題は差し掛かっていた。

「死んだっていいから戦ってみてえって思ってたけど、まさか本当に死んじゃうなんて……」

落ち込む仲間達に昭弘の言葉が突き刺さる。

「辞めるんなら今のうちだぞ。鉄華団は辞めるのも辞めないのも自由だ。生きるも死ぬも自分で選んでいいんだ」

昭弘がそう言っているころダンテはエーコに頼みごとをしていた。

「なあなあいいだろ？ こいつでプシューっとスプレーするだけ！」

「はあ？ 何それ？」

「撃墜マークだよ！ 俺の獅電にさ……」

ダンテが星形のマークを付けてもらおうとすると、後ろからラフタとアジの声が聞こえてくる。

「ダンテ！ あんた一人で倒してないでしょ!？」

「ちゃんとレコーダーに残ってんだよ」

「つたく何を言い出すのかと思えば……」

「いやでも……」

ダンテがつけてほしそうにしていると、上の方からライドの声が聞こえてくる。

「そうだぞ！ 調子乗ってんじやねえよダンテ！ 大体三日月さんがバルバトスと一緒に持ってきた追加の獅電が来るまではお前の専用ってわけじゃねえんだからな」

「そりやもう昭弘のグシオンは衛星軌道上来てんだろ？ 地球支部に送る分と一緒に！」

「あーあ。もう一日早く着いてりや俺ら二番隊も実戦に出れたのに」

ライドは悔しそうにしているとアジーが声をかける。

「んじやあいつ実戦に出てもいいようにまたしごいてあげるよ。ダンテあんたもね」

「お……俺もう実戦やったんすけど！」

「うるさい」

「いいから手え動かして！」

バルバトスがその間修理が行われており、雪之丞はさっそく壊したバルバトスをため息を吐きながら見上げた。

そして、その後ろでは三日月がソニアからマジな説教を受けており、多少俯いている姿は中々見れるモノではない。

そんな時、三日月の後ろからクーデリアが歩いて現れるとソニアと雪之丞が三日月をそつと促す。

三日月は逃げられると判断したのかそのまま逃げていった。

「何度かここにも足を運びましたが三日月はいつもいないので」

「ああ……うん」

エレベーターから外に出る二人は外を歩きながら話し始めた。

「団長が言っていました。戦闘の必要があるときはいつもバルバトスとアガレスが一番前にいると」

「まあ他の奴と違って俺にできる仕事はそれくらいだから」

すると、奥の施設からアトラが駆け足で駆け寄ってきた。

「クーデリアさん！ 来てたの？ ちょうどよかった！」

そういつてアトラはクーデリアにミサンガを手渡す。

「あのね。クーデリアさんに渡したいものあったの！ これ！ それと……ビスケット知らない？」

「いいえ見てませんが……三日月は見ましたか？」

「ううん……でも、確かオルガと話してるんじゃないかな？」

「そっか……渡したいものがあつただけだな」

少しか残念そうにしているアトラ。

アトラがポケットから緑色のミサンガを取り出したため息を吐くと、後ろからビスケッ

トの声が聞こえてきた。

驚き心臓が飛び出るのではと思われるほどの衝撃を受けながら振り返るアトラ。

「何してるの？アトラ」

「きゃー！ビスケット？」

「アトラさんがビスケットさんを探していましたよ？」

アトラはゆつくりとビスケットにミサンガを手渡し、ビスケットはそれを照れながら受け取ると周囲が照れくさくなっていく。

「これ……ビスケットへのプレゼント。前に渡すつて約束したでしょ？」

「あ……ありがと」

ビスケットは照れながらミサンガを左手につけると、アトラと二人で顔を赤くさせる。

するとアトラとビスケットの間にサブレとクッキーとクラッカとサヴァランが現れた。

人数分のお弁当を持って現れた四人、照れくさい空気を造るビスケットとアトラ、その空気に鈍感な三日月と照れくさくて顔を真っ赤にさせるクーデリア。

「どうしたのアトラ？ 顔赤いよ」

「うん！ 真っ赤だ！」

「な、なんでもない！」

「こら！　そう言う事は言うんじゃない」

サヴァランから怒られることで揶揄う事を止める二人、しかしそんな事でやめるサブレではない。

ここからが揶揄いの本番なのだと言えさるかの様に目を獐猛なライオンを思わせる目つきへと変えて口を開く。

「そう言う子供に悪い影響を与えるような事は止めて欲しいね。全く…バスケット兄さんの頭の中では常に十八禁的な事を想像しているんだろうな」

「してない！　勝手な事を言わないで！」

「頭の中はピンク色なんだろうな…」

「そろそろ見えてこない？　ストップのライン」

「いいや？　兄さんは自分を過小評価しているよ。まだ揶揄える」

「いいや。俺は限界だよ！」

「実際兄さんが怒っても怖くないしね…」

サブレの耳にバスケットの堪忍袋の緒が切れる音が聞こえた気がして身を翻して逃げ出し、そんなサブレを追うバスケット。

「何なんだよこのくそ忙しい時に！」

ユージンは不機嫌そうな面持ちで団員のそばに行くと、団員が申し訳なさそうな表情をする。

「すみません。なんか変なおっさんが……」

そういうとユージンの目の前にトドが姿を現した。

「よう！ユージン副団長。こいつら新入りか？取引先の顔と名前ぐらいお前ちゃんと覚え込んでかなきゃだめだよチミ」

「偉い人なんですか？」

「あえて言うならえらい面倒な人だな」

「さすが副団長。いうことがウイットに富んでるねえ。俺が目を掛けてやっただけのことはある」

「ああ、殺してえ」

「まあまあそうカリカリすんなって。栄養足りねえんだろう。あつそうだがキ。飴ちゃんあげようか？」

「マジっすか！」

「んなもんで喜ぶな！」

「まあまあ。おめえにも喜ぶ知らせがちやくんとあるんだぜ。うちのボスからな」

少しだけ進んでオルガの前にモンタークの名を名乗って現れたマクギリス。

「仕事をいただけるのはありがたいんですがねえ、こっちは今立て込んでるんですよ。ええ〜……」

「モンタークで構わないさ。私が君たちの力を借りているのはすでに公然の秘密になっているからな」

「で要件は？」

素直に尋ねるオルガ。

「夜明けの地平線団の討伐だ」

「なっ!?!……こっちの動きは全部お見通しってか」

「夜明けの地平線団は地球圏にまで手を伸ばす神出鬼没の大海賊だ。その補足には我々も手を焼いていてね。できる限りのことはしよう。石動という部下をそちらへ向かわせた。彼は夜明けの地平線団の内情に詳しく腕も確かだ」

「俺らは餌つてわけか」

「信用してもらえないかな？」

「元々あんたを信用なんてしちゃいない。だが引き受けさせてもらいますよ」

「ほう。疑いながらなぜ？」

「別に……俺たちは夜明けの地平線団に目を付けられてる。俺たちが勝つために必要な

「ことだからですよ」

マクマードのところにオルガが話を付けていた。

「お前らが夜明けの地平線団を？」

「テイワズにとつても航路を荒らす奴らは目障りかと」

「まあな。だが……」

「獅電の実力を見せるテイワズの新型フレームを売り込むチャンスでもあります」

「なるほどな。分かった好きにやれ」

「はい。親父に恥はかせません」

そういうとオルガとの通信が切れる。途端にジャスレイが食って掛かる。

「親父。何あいつらを好き勝手やらせんのだよ。ガキら相手に好々爺気取つても意味ないでしょー」

「ならお前がいくか？」

「いや、御冗談でしょ。海賊なんてゴリゴリした奴らを相手にすんのは下の奴らで十分です」

「なら文句はねえだろ。面白い育ち方してるじゃないか名瀬。あの坊主どもは」

エドモントン近郊に位置する鉄華団の地球支部では獅電が月末までに届かない問題

が発生していた。

「話が違うでしょ。月末までには獅電を地球支部に送ってくれる手筈になっていたじゃないですか。今あるランドマン・ロディだけじゃ限界だつてご存じでしょう?」

「けど本部は夜明けの地平線団を相手にするんだ。頭数が必要なのはわかるだろ?」

「それは本部の問題でしょう?地球支部はその戦闘には関与しないので関係は……」

「本来ならこつちから増援を送るべきところだ。それを団長はこつちの現状を考えてそれは言つてこない」

「現状……ね。備品の不足にアーブラウ正規兵との関係性。こちらの現状は問題が山積みです。しかし本部は改善策を出すどころか足を引っ張るばかり……」

「ラディーチェさん地球支部も本部も同じ鉄華団だ。俺たちはオルガの……団長の言葉を信じてついていく。それが鉄華団だ」

「……話にならない」

雪之丞たちが食事をしながら話しているとハツシユが真剣な面持ちで話しかけてきた。

「雪之丞さん。俺をモバイルスーツに乗せてもらえませんか? マニユアルなら全部読みました」

「モビルスーツを操縦するにはそれだけじゃ……」

「必要なら阿頼耶識の手術も受けます」

「ダメだよ」

「あつビスケット」

アトラが気が付きそつちの方へと顔を向けた。

ハツシユが振り向くとそこには真剣な面持ちでハツシユを見つめるビスケットの姿が有った。

「ダメだよ。阿頼耶識の手術は俺たちはもうしないって決めてるんだ。これは俺が決めたルールだよ」

「失敗なんて恐れませんか！ 阿頼耶識の手術を受けることで戦えるようになるんなら何だってします。俺は……」

ビスケットは思いっきりハツシユのほっぺを叩く。

「阿頼耶識の手術をするとか簡単に言わないで。君が考えていることより数割増しで危険なんだ。俺は君たちにそんな手術を受けてまで戦ってほしいとは思わない。……とにかく、阿頼耶識の手術の話はなしだから」

そういうとビスケットは食堂から出ていった。ハツシユは啞然とした表情で通路を見つめると、後ろから雪之丞が話しかけてくる。

「おめえ年はいくつだ？」

「17です」

「その年じゃ阿頼耶識の適合手術はもう受けらんねえ。おめえの年じゃもうナノマシンが定着しねえんだよ」

「とりあえず試してくださいよ。いいつすよ別に失敗したつて……」

「ダメだよ！ 阿頼耶識の手術つてとつても危険なんだよ！？ 下手したら死んじやうんだからー！」

「分かつてますよ……」

「ビスケットはみんなの為を思つて手術を禁止したんだから！」

「あんたに何が分かんだよ。いいからどけ……」

アトラを強引にどかさうとするとそこに三日月が現れた。三日月はハツシユの手首をがっちりつかんだ。

「何これ？ これは何？」

三日月は握る力を強めていく。

「ほんとにただおしやべりしてただけだから」

「そう？ いじめられてなかつた？」

「私いじめられっ子じゃないよ！」

「なんで……なんであんたはよくってあいつは……。くつ……。もういいです。すいませんした」

一人出ていったハッシユの目の前にデインが姿を現した。

「死ぬのは怖くないのか？」

「怖くねえ奴いんのか？」

「だな」

ハッシユの近くに座ると、ハッシユは語り始め。

「でももつと怖えもんがある。俺はスラムの出でさ。親のいないガキ同士で集まって暮らしてたんだ。ビルスは俺らの兄貴分だった。俺たちの生活を楽にしてやるって兵士になるってスラムを出てった。なのに戻ってきたビルスは腰から下が動かなくなってた。俺達みんな思ってたんだ。ビルスについていきやあなんとかなるって。なのに……。だから俺が次のビルスにならなきゃなんねえんだ。俺は絶対にモビルスーツに乗ってみせる。そして三日月・オーガスを超えてみせる。俺についてきやこんなクソみてえな世界でもなんとかなるって。お……。おい」

デインは話の途中で去っていった。

「がんばれ」

「よう。ここにいたのかミカ」

「オルガどうしたの？」

「なあに。まあ、さつき勝手にモンタークと取引をしちまったことをバスケットに説教されちまつてな。反省がてらにな……頼むぜミカ」

「うん」

夜明け前の戦い

ピスケットの追手を振り切ったサブレは物陰に隠れて通信機を耳に当てており、通信機の向こう側からマハラジャの声がハッキリと聞こえてくる。

「……というわけだ。そちらはおそらく本隊が相手をする事になるだろう。情報ではアリアンロッド艦隊が直接動いているという情報もある。うまく活用できれば素早く敵を制圧できるだろう。我々の本命は夜明けの地平線団の本拠地を潰して戦力増強だ」

「はあ……また鉄華団の内情を探れっという内容の命令な訳？ いい加減信用してあげたら？」

「まだだ。彼等がこの火星という場所を任せるに値する存在かどうかはこれから決める。だからこそお前を送り込んでいるんだ。お前はその見極め役でもある。その為にわざわざ夜明けの地平線団を上手く送り込んだんだ」

フォートレスのエージェントであるサブレは本来マハラジャのように上層部から直接的な命令に従うのがモットーであり、その分重要な任務を任されることが多い。

この約二年間に及ぶ任務は鉄華団を見極めることで、いずれは火星圏など各惑星に代表組織を造る計画であり、サブレは鉄華団とクーデリアとテイワズの見極めを任されて

いる。

その為にフォートレスが火星に作った仮面会社はいわゆる支部であり、そのの所属という事になっているサブレは監視要員。

それをハッキリ知っているのはごくわずか。

実際エージェント下に置かれているメンバーでも教えて貰える人間は少なく、それだけエージェントという仕事は本来大変な物である。

「ジュリエッタとうまく連携して立ち回れ。分かっているとは思いますが……」

「分かっているさ。もしジュリエッタがバレたと判断すればその時は素早く回収だろ？
分かっている」

マハラジャは「ではな」と言つて通信を切つてしまうとサブレは再び大きなため息を吐き出してからふと視界を泳がせる。

巨大海賊組織『夜明けの地平線団』に真つ向勝負を挑む鉄華団は、ギャラルホルンと共に参戦しようとしていた。

『夜明けの地平線団』討伐のために宇宙へ上がった鉄華団と違い、クーデリアは桜農場に避難していた。クッキーとクラツカと共に三日月が育てている農場に来ていた。

「トウモロコシ以外にも育てられるか三日月が試してるんだよ」

「農場だけで食べていくのに必要なんだって。ビスケットお兄ちゃんも手伝ってるんだよ。いつか農場の経営をしてみたいって二人で考えてるんだって」

三人が話している様子を後ろからククビータとデクスターが話し合っていた。

「私は事務所に戻りますが社長の事をお願いします。フミタンさんも社長の事よろしくお願いますね」

「ええ。団長達が戻るまでこちらに匿うよう言われてますから」

「早く終わるといいんですがね」

夜明けの地平線団との戦いも始まるうとしていた。

「エイハブ・リアクターを補足。固有周波数を確認、合流予定のギャラルホルン艦艇と一致しました」

「聞いていたより早いな……」

「あれが……鉄華団か」

鉄華団とギャラルホルンが接触しようとしていた。

目の前にグレイズがブリッジ近くを通り過ぎている姿を皆がジッと見守っていた。

「ギャラルホルンから仕事を頼まれるなんてやつばすげえな鉄華団は。あつ！ あれつてグレイズ？」

「だな」

「少し前まで殺し合ってた相手だろ？ よく仲良くできるよなあ」

「早くモビルスーツに乗りてえ」

ザックたちが廊下から外の様子を見ている間にオルガとビスケットとユージンとメリビットは石動たちとの話し合いに応じようとしていた。

「そつちは一隻だけか？ 艦隊五隻が合流するって話だったはずだ」

ギヤラルホルンが連れてきた艦隊は一隻のみであることだけは見ればなんとなく分かる。

オルガが不満げにしている理由もなんとなく分かってしまう。

「訳あって足の速い船だけで先行させてもらった」

「その訳ってというのは何でしょうか？」

ビスケットが一步引いた立場から質問をした。

「こちらのデータを。現座標から12時間の宙域で夜明けの地平線団の船を補足した。数は三隻。火星から航路をたどっている船団だ」

「というとクリュセのプラントを襲った部隊を運んできた船の可能性が高いだろうね」

「おそらくは。この中には組織のトップ、サンドバル・ロイターが乗る旗艦も含まれている。奴らの戦力が結集する前にここで叩きたい」

「今なら分散している敵戦力を各個撃破できるってか。まっ戦いの基本だな」

そんなユージンの言葉やギャラルホルンの意見に考え込んでいるビスケットを前から軽く見つめるオルガ。そしてもう一度石動に向く。

「そっちは戦艦一隻。つまり俺らに命張れって言ってんだよな？」

「危険に見合う報酬は約束する。ファリド准将も承知の上だ」

そんな意見にビスケットが激しく反対した。

「待ってください。そちらの本隊と合流してからでもいいのでは？ このまま戦って罠にでも嵌まったら……」

「サンドバルは狡猾な男だ。所在を掴んだ今を逃したくない」

「そ……それは」

ビスケットが黙るとオルガが口をはさむ。

「分かった。その話乗ってやる。ただし作戦の指揮権は俺達がもらうぞ」

「問題ない。我々が鉄華団の指揮下に入ろう。船に戻り次第データリンクの手筈を整える」

「ユージン。そのへんは任せるぞ。イサリビから艦隊をコントロールしてもらうことになるからな。それでいいなビスケット」

「……うん」

どこか納得いかないような表情をしながらも会談は終ったが、オルガとビスケットとメリビットが廊下で話し合っていた。

「あの男の話どう思いました？」

「嘘は言ってるねえ。だがなんか隠してるな。妙に急いでやがる」

「それが分かっているならどうして？ あの急ぎ様は異様だよ。何か裏がある。それに

……あのマクギリス・ファリドは信頼できない」

「それぐらいはわかってる。でも今なら俺たちが指揮権を獲得できると思ったのさ。

ギヤラルホルンの命令で戦って殺されるくらいなら……」

「それを聞いて安心したよ……」

メリビットはあきれたような顔をする。

「言っても聞かないんでしょ？ もう慣れました。作戦時間まで団員には交代で休息を

とらせます」

「ああ。あんたに任せる」

「お願いします」

「では団長とビスケット君はこれより六時間の休息を言い渡します」

「はあ!？」

オルガとビスケットは驚くがメリビットの意見はまるで変わらない。

「すでに団長は36時間、ビスケット君は40時間働き詰めですよ。特にビスケット君はいい加減休みを取りなさい」

「いちいち計ってんのか……」

「あはは……すいません」

「お嫌でしたらご自分の体くらいご自身で管理してくださいね」

メリビットはそのまま廊下の奥に消えていく。

ビスケットが何をしようと歩き出すと奥の部屋のドアが少しだけ開いており、そこからサブレの声がはつきりと聞えてきて少しだけ内容が気になってしまい聞き耳を立ててしまう。

サブレの部屋は他の人の部屋と違って少し広めに作られており、何をしているのかは普段から誰にも分からない。

だからこそ気になってしまったビスケット。

中は薄暗くいくつかの画面が周囲に張り巡らされており、何度考えてもこの部屋が寝泊まりをするためには作られていない。

サブレは部屋の中心に立っており、誰かと会話をしているように見えるが、他にも誰もいないように思える。

「では……イラクが夜明けの地平線団に紛れているのは間違い無いんですね？ 確定情報として受け入れてもいいと？」

『その通りだ。スポンサーもいい加減あいつの目的を探るようにとしつこい』

『君の今回の役目は夜明けの地平線団を潰しつつイラクの目的を探る事だ。エージェントサブレ。地球での戦いもある長引かせるわけには行かない。不安要素は素早く潰す事。こえはスポンサーからの意向でもある。もう……分かつているとは思いますが、本作戰が近づいているような状況だ』

「分かつています。例の作戦が実行段階までには確実に状況整えて見せます」

『さて……どうやらお客さんがいるようだしこの辺で。うまく立ち回るように……』

そう言って部屋が明るくなり普通の部屋に戻ってきたような感覚がやってくるとサブレがジッとビスケットの方を見つめる。

ビスケットはゆつくりと部屋の中へと入っていく。

「さ、さっさきの何？」

「フォートレスの重役会議だと思っていればいいよ。あの人たちはマハラジャが認めた役目を与えられた人達。スポンサーから直接文句を言われてしまう人達だと思えばいいよ」

「そうなんだ……何か物々しい気配だったけど……イラクって誰？」

「ガンダムの乗り手。フォートレスが要注意ターゲットとして指定している人物だ。なんでも…逢う度に違う人間が乗っているのに、何故か記憶や人格を共有しているという化け物さ」

サブレが何を告げているのかこの時点ではまだビスケットは分かかっていなかった。

「夜明けの地平線団の艦隊のエイハブ・ウェーブ周波数を確認しました」

しかし、目の前に映る映像には3隻どころか、艦隊数は10隻も存在していた。

「なんだこりや…3隻って話だったろ！」

「オルガ！ 艦隊は10隻！ 10隻いんど！」

「やっぱり罠だったんだ。俺たちははめられた！」

「偵察隊からの映像出ます！」

「3隻だけで他の船を牽引してエイハブ・ウェーブをごまかしたんだね」

オルガの目の前にある画面に夜明けの地平線団の団長が姿を現した。

「俺は夜明けの地平線団団長サンドバル・ロイターだ」

「鉄華団の団長、オルガ・イツカだ」

「せめてもの慈悲として降伏する機会を与えてやろう」

「あんたの方こそ俺らに手を出した詫びを入れんなら今のうちぞ」

「ギャラルホルンの弱兵を引き従え気でも触れたか」

「海賊が！ 言わせておけば！」

「そつちこそそれっぽつちの戦力で俺達をどうにかできると思ってたのか？」

ビスケットが後ろでため息を吐く。

「今はいきがることを許そう。目障りなハエほど叩き潰しがいがある」

そこで通信が切れ、一気に周りは忙しくなり始めた。

「ユージン！ 艦隊の指揮はお前に任せる！ ビスケット！ お前はモビルスーツの指揮だ！」

「シノたちは一旦船まで下がらせろ。三日月とサブレを先に出せ。完全に包囲される前に正面を突破する。ビスケットも急いで準備しろよ。方法はビスケットに任せる」

「了解！」

バルバトスがカタパルトにそのまま移動する。

「モビルスーツをひきつけければいいの？ 三日月・オーガス。ガンダムバルバトス出るよ」

バルバトスが出撃するとホタルビのコントロールをイサリビに預ける。

「今すぐ離脱すれば最小限の被害で逃げられるのでは？」

「そうだな。だが逃げてても被害は出る。こいつらに犬死にはさせられねえ。命張る以上

俺らは前に進むんだ」

「……そちらの状況は？」

メリビットからギヤラルホルンに状況報告を受けていた。

「既に本隊をこちらに向かわせている。到着まで凌げれば奴らの不意を突けよう」

夜明けの地平線団でも艦隊を動かしつつあった。

「敵艦密集陣形で突っ込んできます」

「破れかぶれの中央突破か。先頭の船に砲撃を集中。戦力の差を思い知らせてやれ！」

バルバトスが両腕の滑腔砲を使い敵のモビルスーツに攻撃を与えていく。

「ぐっ！ この距離で？ 噂に聞く悪魔って奴か……一番隊は俺と来い！ 残りは作戦

通り船をやれ！」

「昭弘。そっちに行つたから。ビスケットどうする？」

「昭弘は船の護衛を、三日月はそのまま敵モビルスーツを叩いて、俺たちは昭弘の援護をしながらバルバトスと一緒に艦隊が突破する隙を作るよ。サブレ出よう。」

「サブレ・グリフォン、ビスケット・グリフォン。ガンダムアガレスイーター、出るぞ！」

アガレスがそのまま出撃すると、敵のモビルスーツを蹴散らしていく。

「くそ！ 死神まで出てきやがった！」

「了解だ。昭弘・アルトランド。グシオンリベイクフルシテイ、出るぞ！」

昭弘がイサリビの前に出ると立ちふさがる。

「船の護衛が俺たちの仕事だ。体張るぞ！」

シノもモビルスーツを一機一機倒していく。

「おおくおおく。新しいグシオンとアガレス調子よさそうじゃねえか。俺も一度ガンダム・フレームに乗ってみた……」

シノの後ろから敵のモビルスーツが襲ってくるのをダンテが援護に入る。

「隊長が一人で突っ込むな！」

「背中を預けてんだよ」

遠くからグレイズが援護に入ってきた。

「なんだ？ グレイズ？」

「おう助かったぜ。しっかし変な気分だなあ。あいつらと肩を並べて戦うなんてな」

その間バルバトスとアガレスが多数のモビルスーツを蹴散らしていく。

「機動力は奴が上だ！ 距離を取って包囲する！」

「砲撃の邪魔だ！ たかがモビルスーツの2機さっさと片づけられんのか！」

バルバトスがコックピットを抜き手でえぐると、アガレスはそのままレンチメイス改でコックピットを容赦なく潰す。するとシユヴァルベ・グレイズが援護にはいった。

「あの機体前に……」

「援護する」

「そう、じゃあお願い」

「じゃあ俺は……!?!」

サブレは急いで操縦桿を動かしながら赤い機体の攻撃を紙一重で回避し、そのままの動きでレンチソードを赤い機体目掛けて叩き込もうとするが、相手もその攻撃を受け止める。

至近距離で睨み合う両機体。

「久しぶりだな……イラク！」

「フフ……ようやく会えたな。あれからどれだけ成長したのか見せてもらおう！ 死神

！」

「来いよ！ 赤い悪魔！」

赤い悪魔という名前こそイラクに付けられたフォートレスの名前だった。

真つ赤な悪魔よ

真つ赤なガンダムフレームが大剣をアガレス目掛けて振り下ろすのを俺はなんとかレンチメイス改で受け止めて至近距離で睨み付けた。

こいつが乱入してくると厄介なことになるとハッキリとわかりきっており、真つ赤なガンダムフレームは俺の乗るアガレスを思いっきり蹴つ飛ばすと、俺はその攻撃をスラストを最大まで高めて態勢を整え直し、後ろに乗っている兄さんは真つ赤なガンダムに向かってランチャーを放ち牽制する。

しかし、そんな牽制を大剣で受け止めながら容赦無く突き進んでくるのだが、俺はそんな奴の動きに合わせるように蹴りをぶつけてくるのだが、相手はそれを片手に受け止める。

「久しぶりに悠久を過ごそうとは思わないのか？」

「久しぶり!? お前二年前にエドモントンに居ただろ!? ふざけるなよ!」

「ほう……それに気がついたというのは流石と言うしか無い」

いつもいつものらりくらりとやり過ごそうとするこの化け物は俺にとって苛つく相手でもある。

すると兄さんが後ろから話しかけてきた。

「誰なの？ 滅茶苦茶強いんだけど」

「イラクという名のガンダムフレーム使い。ここ数十年ウチの情報部が最重要警戒対象として上がっていた人物だ。特に父さんや俺に対して執着があるらしくてな」

「まあ…君たちは面白いからな。長年ガンダム使いを見てきたつもりだが、それでも君は…いいや君たちは特に彷彿とさせるよ。初代アガレス使いに…あの双子に」

一体何を言いたいのかまるで分からなかったが、だからといって俺自身は理解しようとしてゐるわけじゃ無い。

この男を退けて三日月へと応援に行かないと大変なことになる。

情報部からアリアンロッド艦隊がここに近づきつつあるし、出来ることならジュリエッタと接触する前にこいつを退けたい。

「長年…お前いつからガンダム使いなんだ？ 少なくとも俺が聞いた話だと父さんがまだ若かった頃にはその機体に乗っていたよな？」

兄さんが驚きの表情を作っているが、その気持ち俺にも分からないわけじゃ無い。この男には寿命という存在がまるで無いかのようには何時だつて現れる。

最も姿を見たわけじゃ無いが、それでも話を聞いているとやはり記憶だけは継承しているように思える。

何度も何度も斬り合っていると何かを確認するように立ち去っていく。
「一体何なんだ？ あいつ…」

鉄華団はナノミラーチャフを放つと視界にスモッグと一緒に艦隊が消えていく。

「ナノミラーチャフだ！」

「艦隊見失いました！」

焦りと一緒に敵の中に動揺が広がっていく。

そんな中イサリビがそのままチャフの中を突っ走ってくる。

「当てなくていい。近づけさせんな！」

「それくらいなら俺だつて！」

「かまわねえから撃ちまくれ！」

敵味方共々スモッグの中で砲撃戦へと移行していく。

艦隊の攻撃をイサリビとホタルビが回避しながら突き進む。

「チャフの効果範囲より離脱！」

「敵艦急速旋回！左翼艦隊の後方に付かれます！」

「撃ちまくれ！」

鉄華団の攻撃がすれ違いざまに横から襲いかかってくる。

鉄華団の艦隊からの攻撃をまともに受けてしまう夜明けの地平線団と離脱していく鉄華団。

「七番艦モビルスーツデッキ損傷。八番九番推力低下。戦線を維持できません！」

「どこまでも忌々しい……回り込んでケツを取れ」

「よくやったユージン！モビルスーツデッキに補給の準備をさせろ。ここからは持久戦だ！」

「来んな！来んな！来んな！弾切れ!?しまった！うおお！」

ライドは焦りながら銃の引き金を引いていく。

ライドの獅電が弾切れしてしまいライドはそのまま体当たりを決める。その時アジーとラフタが援護に現れた。

「いい根性だ。よくやったねライド」

「体張れって昭弘さんが……」

「あいつの言葉はあんま真に受けない方がいいけどね」

昭弘も弾切れを起こすと、敵のモビルスーツが隙ができたそのまま突っ込んでくる。

「ちっ！弾切れか」

「ははっ！今なら奴は丸腰！」

「誰が……丸腰だつて!？」

グシオンはシザース可変型リアーマーを取り出すと、モビルスーツをはさみつぶそうとすると、コックピットから降伏信号が出る。

「降伏信号？ちつ……またかよ……」

「武装解除だけしてその辺に転がしておきな。あと昭弘は補給に戻る！」

「俺はまだ平気だ！」

「ライドがもう限界。あんたは隊長……ここは私らが持たせるから！」

「了解……」

昭弘は補給の為に後ろに下がっていく。

三日月とサブレも次々とモビルスーツを倒していく。

すると明楽とジョシユアも次々と敵を撃墜していくのだが、特に苦戦すること無く補給の必要性を感じさせないまま戦っている。

「ボスの船はさすがに守りが堅いな。まあちまちまやるか」

敵のモビルスーツはすでに戦えないとわかっていながらもバルバトスにくらいついでくる。

「まだだー！」

しかし、バルバトスは容赦のない一撃を加える。

「ヒューマン・デブリの方がいい仕事をするな」

「奴らに降伏は許されません」

「負けて帰る場所ありませんしね」

「だからこそ獣のように戦える。使い勝手はいいんだが……これじゃあ罅が明かねえな。奴らに本物の海賊つてもんを教えてやれ」

「了解」

三日月の側にサブレが近づいてくる。

「三日月。補給に戻って。ここはアガレスが何とかするから」

ダンテの腕にワイヤーが絡みつく、シノは敵のモビルスーツを蹴り飛ばす。

「逃がすか!」

「ダンテ!腕を外せ!」

「シノはいったん引いてくれ!」

「あれはサンドバルの副官だ!俺が直接戦う!」

「すまねえ。ここは任せる」

二機のモビルスーツに向かってアガレスが向かって行く。

「推進剤と弾薬の補給！破損した装甲は丸ごと交換だ！いいな！」

バルバトスがイサリビに戻るとすぐに補給に入った。アトラはコックピットに入ってくる。

三日月の真上から現れたアトラは食べ物を三日月に渡す。

「三日月」

「腹減った」

「そういうと思って……」

アトラからもらった食べ物を素早く食べていくと今度は飲み物を取り出して手渡す。

「はい。ほらこれも飲んで」

「まだある？」

「うん！いっぱいあるよ。どんどん食べて」

三日月が食べている間に整備班はどんどん補給を進めていく。

整備班はバルバトスの推進剤や銃弾の補給を素早く進めて行く中、ハツシユは舌打ちを打つような顔をしながらジツとバルバトスを見上げる。

「この人達が一番動いているはずなのに、推進剤の減りが一番少ない。これが……くそっ」

こんな状況でもアトラに「もっと食べたい」みたいな顔を作る三日月。

「今度はあったかいの食べたいな」

「じゃあいつぱい作って待ってるね！だからビスケットをよろしくね」

「ビスケットなら大丈夫だよ。サブレが付いてるし」

アトラを安心させようと発した三日月の言葉にニッコリ微笑むアトラ、時を同じくしてグシオンの整備を進めていく整備班は苦戦を強いられていた。

「団長！グシオンの整備もう少し時間をください。こいつ装備が複雑で……」

グシオンの整備は少し遅れており、それを受けたブリッジのオルガは最前線で敵を引きつけているアガレス、そして明楽とジョシユアも同じように大軍の相手をしている。

「ライドも出せる状態じゃないよ！」

「頼む。なるべく急いでくれ。アガレスが正面でかなりの数のモビルスーツを押さえつけてる。あの状態がそうそう持つとは思えねえ」

その時、夜明けの地平線団の船に攻撃が当たり船が大きく揺れており、そちらの方へと視線を向けるとギヤラルホルンの艦隊が姿を現した。

「何が起きた!?!」

「砲撃です！左舷後方艦隊5隻を補足。ギヤラルホルンです！」

「石動の本隊か！」

「いや………あれはアリアンロッド艦隊だ」

。アリアンロッドのモビルスーツが攻撃を仕掛けてくる

「なんだ？こいつら味方じゃないのかよ!？」

「あの連中はなんだ!？」

「ラストル・エリオンを総司令とする月外縁軌道統合艦隊」

「つまりあなたの上官とは指揮系統が別の部隊だど？」

「ちつ。作戦を急いだ理由はこれか……」

「サンドバルの身柄は我々で押さえない」

「当然だ！ビスケットに伝えろ！あとから出てきたギャラルホルンとはできるだけ交戦を避ける。敵大将だけを狙え！」

サブレはアリアンロッド艦隊に舌打ちをしながらモビルスーツを叩き潰し、もう一度そちらを睨み付ける。

同じ時間夜明けの地平船団の中では第三勢力の登場に焦りが広がっていく。

夜明けの地平線団の船は撤退の合図を始めていた。

「撤退だ！艦隊はデブリ帯に針路をとれ！」

「どちらへ!？」

「連中の目を引き付ける！同胞に伝えろよ！サンドバルが出るとな！」

「ジュリエッタ・ジュリス。ラストル様の為に出撃する！」

「サンドバル・ロイター、ユーゴーが出る！ギャラルホルンめ忌々しい。勝ちはやらんぞ鉄華団！」

サンドバルがグレイズを一瞬で倒してしまふ。

「敵の大将をやれつつあったてよお。そいつは船にいんだろ？」

「いや違う。モビルスーツに乗ってんぞ。鹵獲した敵のモビルスーツから抜き取ったデータを送る」

「聞け！夜明けの地平線団に刃向かう愚かなる者たちよ！これが貴様たちの末路である！」

サンドバルへと襲いかかっていくグレイズを捕まえてしまふと、グレイズをバラバラにしてしまふ。

「命を捨てる覚悟のある者だけかかってこい！このサンドバルが相手をしてやろう！」

そういうとアガレスが真つ先に食って掛かる。バルバトスもその戦いに入ろうと機体を走らせる。

「死神か！貴様といえど邪魔はさせん！」

「あなたの時代もここまでさ！」

バルバトスが近づこうとすると、ジュリエッタが邪魔しにはいる。

「これは……私の得物です」

「邪魔だな……あんた」

互いにならみ合う中、戦いは終盤に差し掛かろうとしていた。

後ろまでやってこようとするジュリエッタを発見して舌打ちをしたサブレは三日月にサンドバルの相手を任せてジュリエッタへと襲いかかってくる。

「勝ち星を取られても泣かないでくださいね」

「傍受されていないだろうな」

「安心してください。それより譲るといふ選択肢は？」

「あり得ないな。父さんからも言われているだろ？ あれは俺達の獲物だ！ それと負けても泣くなよ！」

出世の引き金

俺とジュリエッタが至近距離で睨み合いながら一旦距離を取り、再び距離を詰めていくのだがそんな時ジュリエッタの後ろから明後日の方向へと銃弾が飛んでいくのが見えた。

一体何処を狙ったの攻撃なのか全く理解出来なかったが、その攻撃がジュリエッタと同じアリアンロッド艦隊の機体から来ているのが間違い無い。

補給をまともに受けていないアガレスは正直心許ない状態を維持しており、先ほど補給を終えて飛び出してきたジョシユアは奇声を上げながら飛び回っている。

すると明弘達がアリアンロッド艦隊へと向かって突っ込んでいこうとしていた。

「どうすんだオルガ！ おいしいとこ全部持ってかれんぞ！ アガレスだってそろそろ補給を受けさせねえと」

「奴らごとやつちまうか？」

「兄貴は何言ってるの？ アリアンロッド相手に勝てるんでも？」

「昌弘の言う通り！」

「ギャラルホルンともめてたんじゃこゝで勝っても損するよー！」

「でもあいつらは俺らが追い詰めたつてのによお！」

「その通り。ここでアリアンロッド艦隊相手に喧嘩を仕掛ける事は無い。中に俺達の内通者がいるが、それもカバー出来る範囲に限界がある。俺がアリアンロッド艦隊の機体を抑える。サンドバルは三日月に任せよう」

俺の言葉を聞いていたオルガが少し悩む素振りを見せて言葉を発した。

「ミカとサブレがサンドバルを押さえられりゃあ勝ちも拾える！ 頼んだぞミカ、サブレ……」

俺とジュリエッタが戦っている間に狙撃が飛んでくるのだが、これまた適当に討っているのではと思われるほどにどこか彼方へと飛んでいく。

「なんとかしろ。お前の知り合いだろ」

「あんな人知り合いたくもありません」

「じゃあ止めろ」

ジュリエッタの機体から舌打ちが聞こえてきて、ジュリエッタは機体のパイロットに向かつて毒舌を掃き散らす。

「イオク様はその辺の適当な雑魚機体を狙っていてください。邪魔です」

「援護してやっているんだぞ！」

「いりません」

イオク？　じゃああいつはイオク・クジャンなのか？

て言うか遠距離武装でどうして外せるんだ？

「ジョシユアなんとかしろ」

「え？　なんか…避けた方が当たりそうな気が…キモいし」

俺がジュリエッタの機体を後ろから襲いかかっていると、サンドバルの副官が二人がかりで襲いかかってくる。

邪魔をするなどと言う気持ちで俺は副官が放ったワイヤーを掴んで見ると、ジュリエッタの機体が俺を無視して三日月の元へと一直線に走って行く。

俺は「無視するな！」と叫びながら副官の一人をプレゼントしてやる。

「邪魔しないでください！」

「邪魔しないとお前が手柄を取るだろ！」

「お父様からどつちが手柄を立ててもいいと言われてます！」

「あのクソ親父……」

「サブレ…落ち着こう」

落ち着いていられるわけがない。

石動がアガレスとレギンレイズの間に入ってきて、俺の機体にその状態で話しかけてきた。

「こちらは抑える」

「アリアンロッドは俺が抑える。あんたは副官の二人を。三日月はサンドバルを……。正直に言えば推進剤や弾薬が少なくなってきた。アリアンロッドは俺がやる！」

「分かった」

すると石動と呼ばれていた男は真っ直ぐにサンドバルの副官へと向かっていき、俺はジュリエッタに向き合うのだが、またこの無駄に銃弾の無駄遣いの攻撃がやって来た。

「ジュシユア！　なんとかしろ。あの避けた方が当たりそうな攻撃。鬱陶しいぞ。一々進路が塞がれる」

「ええ！　私……キモい人無理」

「命令だ。早くしろ！」

明楽がどこか楽しそうに「俺がやる」と言うが足の遅い機体で何が出来るんだと一蹴してから俺はジュシユアに改めて命令した。

ジュシユアはめんどくさそうに駆けだしていくのを黙って見守り、ジュリエッタの機体へとレンチメイス改を振り下ろす。

すると三日月の援護のために石動が間に入っていく。

「守るってことはあれがそうか」

「私が二人を押さえる……君はサンドバル本人を」

「分かった。宜しく」

三日月が恐ろしい速度でサンドバルへと向かっていき、メイスソードを振り下ろし更に追い打ちをかけていくのだが、問題はそのやり過ぎな攻撃だろう。

そのうち敵を殺しかねない。

「サブレー！このままだと相手の首領を三日月が！」

「まったく……世話ばかりを掛ける！ ジョシユア！」

「はいはい！ お任せあれ！」

ジョシユアがイオクの機体をワイヤーで絡めて連れてくると俺はそのままジユリエッタの機体ごと一緒に絡め取ってしまう。

そのままその場をジョシユアに任せて俺は三日月の攻撃阻止のために機体を走らせる。

正直スラスタアの燃料が少し心許ない気がするが、そう言ってもいられない。

全力で三日月の攻撃を阻止する。

「ストツプだ。やり過ぎだ」

「あれ？ ああ……助かったよ。殺さないようにって難しくって」

「今度からそれを教えないとな」

するとユーゴーの中からサンドバルが出てくると、降伏の合図を出すのだがその表情

はどこか忌々しい表情をしている。

「くっ……悪魔め……」

「夜明けの地平線団に告ぐ。サンドバル・ロイターの身柄は預かった。速やかに武装解除に応じ降伏を受け入れよ」

三日月がサンドバルを拘束し、イサリビに向かつていく中、俺はレギンレイズに近づいていく。

そして、そのまま拘束していたワイヤーを解除するとジュリエッタは鼻を鳴らしてどこかへと去って行った。

これでまた俺の評価が下がった気がする。

捕まえたサンドバルはその仲間と共にイサリビの格納庫におり、サブレとビスケツトは機体から出て行くと丁度オルガとサンドバルが会話をしていた。

「これで終わりではないぞ！ 成り上がりのガキどもが。お前たちを目障りに思っているのは俺達だけではない。それを忘れるな！」

サンドバルが大きな声で叫ぶ中オルガは冷静に返す。

「構わねえよ。そいつらにはあんたと同じ末路をたどってもらうだけだ。石動んところへ連れていけ。仕事は終わりだ。火星に帰るぞ」

まあサンドバルの捨て台詞を吐こうとする口を排除するために俺は横からドロップキックをお見舞いし、最後にジョシユアがヒールでサンドバルの顔面を受け止める。

その後地面に突っ伏したサンドバルを踏み越える明楽と三日月。

「そういう台詞は勝つてから言つて欲しいね……？ 父さんから電話？ もしもし？」

『おう。終わったか？ 終わった頃だろうと思つて電話したんだが？』

『どこかに監視カメラでも仕掛けているのか？』

『こんなの予想の範囲内だ。それより早めに帰つてこい。次の仕事だ』

「おやおや……俺達の扱いが酷い気がします？ 少しぐらい休暇があつても良いのでは？」

『ついで仕事だ。早めに帰つてこい』

どうやら俺達に休暇は無いらしい。

「まさか夜明けの地平線団を壊滅にまで追い込むとはな」

「ギャラルホルンの介入あつての勝利だろうよ」

「頭の首を取つたのはあいつらだ。事実を言つてんだ」

「何の金も生まれない仕事してくれちゃつて。賠償金すら取れやしねえ」

ジャスレイが名瀬に噛みついてくる。

「いいじゃねえか。航路の安全が確保されたんだ。鉄華団の働きには報いてやらねえとな」

マクマードは名瀬に一つの端末を見せるとそこには火星の地図データが映っていた。

「親父それは……」

「うちが火星で進めている新規のハーフメタル採掘場だ」

「例のクリュセの領内でも最大の規模になるっていう……」

「こいつの管理運営を鉄華団に預けようと思う」

マクマードの言葉に口を挟んでいくジャスレイ、納得がいかないという顔をしている。辺り鉄華団が手柄を上げたこと自体嫌なのだろう。

「ちよつと待てよ親父！ そいつはテイワズ本体のシノギにすべきでかいヤマでしょ！」

「鉄華団は身を削って仕事を果たした。その分の報酬はあつてもいいだろうよ」

「でも奴らは新参でしようが！」

「名を上げた今だ。鉄華団の旗を揚げたプラントを狙うバカもいねえだろう。余計な手間が省けていいじゃねえか」

ジャスレイはどこか納得のいかないような表情をした。

そんなジャスレイを無視してマクマードは名瀬の方を向く。

「決まりだ。名瀬お前から話をしてやれ」

「あいつらも喜ぶと思います。早く知らせてやりたいんで今日のところは失礼します」

名瀬には嫌な予感がしていたし、その予感が当たらないでくれれば良いと思うだけ。

すると名瀬が屋敷から出てくると待っていたアミダが名瀬へと近づいていく。

「浮かない顔して。鉄華団の仕事に何かケチでもつけられたかい？」

「そつちは問題ねえよ。むしろ順調すぎんのが問題かもなあ」

「なるほど……こつから先はあんたと同じ。身内に足を引つ張られるわけだ」

「オルガの奴はその辺の駆け引きがうまくねえからな」

「ビスケットに伝えるしかないね。あとは兄貴のあんたが面倒見るしかないね」

「力押しじゃどうにもならねえこともある。それを乗り越えなきゃあいつらは何か手に入れる度にそれ以上の敵を増やしていくことになる」

名瀬は浮かない顔を浮かべた。

一連の会話をマハラジャは盗聴器越しに黙って聞いていた。

三日月とサブレのもとにハツシユが現れると頼みごとをする為に頭を下げてきた。

「少しいいですか？ 俺もモビルスーツに乗りたいたんです。三日月さんとサブレさんか

ら団長に頼んでくれませんか？」

ハツシユの言葉にユージンが口を挟もうとするのをシノが口を挟んできた。

「はあ!？」

「まあまあ。面白そうじゃねえの」

サブレは飲み物を飲みながら改めて訪ねてみた。

「どうしてだ？」

「モビルスーツの操縦に関しちや三日月さんとサブレさんが一番でしょ。だから……」

サブレの心の中で「そうじゃないんだけど」と思いながら訂正する。

「そうじゃなくて乗ってどうすんの？」

「三日月さんより強くなります」

「いいんじゃない」

即答の三日月にため息を吐き出したサブレ。

「分かった。俺からオルガに伝えておく。多分俺達預かりになるから覚悟しておけよ。

ジョシユア。明楽。アツシユの教育一旦お前達に任せるぞ」

楽しそうな顔をするジョシユアと面倒臭そうな顔をする明楽、サブレは「頼むぞ」と微笑んでもう一度命令すると、その言葉にユージンが口を挟んだ

「おい！ 三日月！ サブレ！」

ユージンが止めようとするのをシノが再び止める。

「三日月とサブレが面倒見んならいいんじゃないねえの。あいつら小規模過ぎるしさ」

「まったく……どうなっても知らねえぞ」

「何の話？」

「ビ……ビスケット」

ビスケットへのユージンとシノによる説明に数時間かかったと言う事は言うまでも無い。

オルガ達鉄華団はギョウジャンの元へと訪れており、ギョウジャンは何とかノブリスと連絡を取ろうとしていた。

「クーデリアさんが命を狙われたと聞いて是非とも急ぎでノブリスさんと今後のご相談をです……」

「何度もご連絡いただきまして申し訳ありませんが……」

そういつて連絡が途切れるとギョウジャンは改めてオルガ達と向き合わなくてはいけなくなっていた。

「なんとしてもノブリスを通してクーデリアに我々が……無実であることを伝えなければ……何をしているかわからん連中だ。早くしなければ……」

焦り続けるギョウジャンの部屋のソファに座り込むオルガ、その隣ではビスケットが頭を丁寧に下げながら入っていく。

後が続くように三日月が入っていく

「邪魔するぜ」

「お邪魔します」

「なっ……何なんだ君たちは?!」

「アリウム・ギョウジャン。あんたに話があつて来た」

「それで英名轟く鉄華団の団長が今日は突然どのようなご用件で？」

「バーンスタイン商会のハーフメタル採掘場を襲った件、クーデリア・藍那・バーンスタインの命を狙った件、それと夜明けの地平線団を使って俺達に喧嘩を売った件についてです」

「この落とし前。あんたどうつけるつもりだ？」

ギョウジャンが必死になって言い訳をしていると、それが三日月の一声でぴたりと止まる。

「あんた何言つてんの？」

「まあ君のような子供にはまだわからないかもしれ……」

「俺は落とし前をつけに来た。最初にそう言つたよな」

オルガが足を机に乗せると、ビスケットはギョウジャンに提案を出す。

「ギョウジャンさん。こちらは今回の損害賠償をきっちり払っていただければ文句はあ

りません。ですが、あなたがこのまま言い訳をするのであればこちらもそれなりの手を使わせていただきます。料金についてはこちらになります」

ギョウジャンは端末に書かれた料金を見ると端末を投げつける。

「は……払えるかこんなもの！」

「払えねえ場合どうなるかわかってんだろうな？」

ビスケットは小さくため息を吐く。

「それは……わ……分かった、待ってくれ、今金は用意する」

「お願いします」

ギョウジャンは電話を掛けると、何とかギャラルホルンに通報しようとしていた。

「ギャラルホルンに通報はしたな？到着はまだか？」

「そ……それがあいつらその件にはかわからないって言ってる。鉄華団はギャラルホルンとつながってるんじゃない？」

電話越しに聞こえてきた部下の言葉を聞いて焦っていくギョウジャンにオルガは急かし始める。

「おい。金はまとまりそうなのか？」

「い……今その話をしてるんだ……。だったら何とか私たちだけで始末を……。おいどうした？」

ギョウジャンが電話越しにもう一度部下に話しかけると電話の向こう側から知らない声が聞こえてきた。

「お前らだけでなんの始末をつけるって？」

「おい。しつかり見張れよ」

「は……はい」

外も中も鉄華団の団員の手によって制圧されており、もはやギョウジャンに打つ手はなかった。

バスケットはあきらめられるように首を横に振る。

「やっぱりこうなるのか……」

「今回の件ではうちには死人も出てる。払う金もねえなら今すぐ向こうに行つてあいつらに詫びてこい」

「そ……それは……待つ……」

三日月が銃を取りそのままパンパンパンと四発発砲する。床に血が広がるとオルガはそのままバスケットとともに立ち上がる。

全員が外に出ると、昭弘と三日月と昌弘は黙つてバスケットから離れる。すると、バスケットはたまったストレスを吐き出した。

「穩便にって言ったじゃないか！ どうしてこうなるんだ！」

「仕方ないだろ！ このままじゃ死んじまった奴らが浮かばねえだろ！」

「だからって！ 大体オルガは強引すぎるんだ！ そんなんだから半年前の作戦であんな失敗を！」

「お前だつて一年前で失敗してるじゃねえか！ お前は慎重すぎるんだよ！」

三人は同時にため息を吐く。

「始まりましたね。ビスケットさんと団長の喧嘩。今じゃ恒例行事だけど」

「どうするんだ？ あれ始まると一時間はかかるぜ」

三日月が「さあ…」と言いながら興味なさそうにしていると、近くを歩いてきたサブレが見え三人は期待のこもった目で見つめる。

サブレは「はいはい」と言いながらビスケットの後ろに回ると先を撥りながら沈黙させた。

その状態で全体に「邪魔だろ？ 撤回。撤回。後処理はウチに任せろ」と言い聞かせながらビスケットに「邪魔。兄さん」と言いながら入っていく。

「……すごいな」

「昌弘……憧れてるのか？」

裏の顔と赤い顔

「アーブラウの防衛軍も鉄華団のおかげで何かと形になってきてな。発足式を行う段取りになった」

蒔苗は通信機を通じてクーデリアと話しておりその後ろではフミタンが立ち尽くしていた。

「ええ。アレジさんから案内状頂きました。ですが……」

「まあ……難しいだろうな。いろいろと噂は届いておるよ。焦ることはあるまい。目標へ到達するためには順序が必要だ。最短を選ぼうとすれば必ずしつぺ返しが来る」

クーデリアはその言葉を忘れないでいた。

きつとその言葉はこれからを占う意味を持っているのだから。

「あれ？ 今日にはアーブラウの人達は？ あつ例の発足式典の打ち合わせか」
タカキ達は鉄華団の地球支部のメンバーと話し合いをしていた。

「アーブラウ防衛軍のな」

「だからしばらく訓練は休み」

「あんな使えねえじじいどもが防衛軍かよ」

「なあタカキ。これから俺らどうなるんだ？」

「あいつらに教える必要なくなったら俺ら火星にもどんのか？」

団員からそんな話が入ってくると、タカキは戸惑う。

「いやそんな話はビスケットさんからは……」

「俺好きだな地球」

タカキはそんなアストンの言葉に一瞬言葉を失ってしまふ。

「俺も同意。飯はうまいし街に出りや鉄華団は優遇されっし」

「あのむかつくおっさんはいらねえけど」

「ほんとだぜ。なあ。ラディーチェの野郎いつまでいんの？」

団員からくるそんな不満にタカキはなんとか諫めようとする。

「いつまでって……ラディーチェさんはもう鉄華団の一員……」

「鉄華団なんかじゃねえよ。テイワズが俺達の見張りによこしたんだろ？」

チャドが部屋の一室でスーツを着ていると、廊下から部屋へとタカキが入ってくる。

「チャドさんすつごく似合ってますよ」

「本当に俺でいいのかな？ それこそラディーチェさんとか……」

「チャドさんが地球支部の責任者ですよ？ 蒔苗先先が指名してくれてるんだし、堂々と

してくださいよ」

タカキとアストンがチャドに近づいていくと後ろからラディーチエが現れる。

「あつ……やつぱ似合わねえか」

「いや……そうじゃなくて……」

「失礼。今度執り行われるアーブラウ防衛軍発足式について最終確認を……。あくまでサポートに徹し余計な動きは謹んでください。アーブラウ防衛軍とこれ以上余計な亀裂が生まれぬよう慎重にお願いします。そちらに式典の詳細が入っているので目を通しておいてください。では」

そういうとラディーチエは部屋から出ていく。

「あいつ……」

「まああの人もいろいろ考えてくれてるんだよ」

「確かに。前はなんでも頭ごなしに否定されてたけど最近は大いぶ俺達の意見ものんでくれてますよね」

「まっ俺達がアホすぎるってんで諦めただけかもしれないけどな」

そんな会話を聞いていたラディーチエは小さくつぶやく。

「その通りですよ」

タカキとアストンは二人で仕事帰りに街中を歩いていた。

「チャドさんって……俺と同じ元々はヒューマン・デブリなんだよな？」

「そうだよ。ねえ……今日も寄ってくだろ？フウカも喜ぶし」

「フウカ学校のテストがあんだろ？こないだ勉強してた」

「えっ？ うん。でもごはんぐらい……」

「俺が行くといろいろ気を遣ってくれるから今日はいい」

アストンはそこで別れるのだが少し寂しい気持ちになったタカキ、タカキは玄関のドアをそっと開けて中へと入っていく。

「フウカただい………」

フウカはソファで寝ており、起こさないように近づくとフウカはそのままタカキの存在に気が付く。

「あつ……おかえりお兄ちゃん。勉強に夢中になって。すぐご飯の支度をするから……」

フウカがご飯を作ろうと立ち上がろうとするが、タカキがキッチンに立つ。

「いいよ、俺作るから。フウカは勉強続けて」

フウカはアストンが来ていないかどうかをタカキに聞きながら周りを見渡す。

「アストンさんは？」

「今日はいいつて」

「ほんと？じゃあお兄ちゃんだけなら甘えちやおうかな」

そういうとフウカはそのまま勉強に戻る。

「フウカがこんなに勉強好きだなんておもわなかったな」

「うん。すごく楽しいよ。勉強だけじゃなくて、地球に来てから毎日がすごく楽しい。施設の子達と別れるのはちょっと寂しかったけど、でも地球でも友達いっぱいできたしそれにアストンさん達も優しくしてくれる。お兄ちゃんとずっと一緒にいられるし、私ここ大好きだよ」

「ああ。俺も好きだ」

するとフウカは雨が降っていることに気が付く。

「ああっ！洗濯物取り込んでなかったんだ！」

急いで洗濯物を取り込もうとベランダに出ていく。

それを見てタカキは地球にきて良かったという気持ちになっていた。

オルガとビスケットは片付けをしていたアトラのもとで遅めの食事をしようとしていた。

「悪いなアトラ。もう店じまいするところだったろ」

「ごめんね。アトラ」

「大丈夫だよ。それよりこのままでいいんですか？ あつため直さなくて」

「ああ」

「じゃあ、俺は温め直してもらおうかな」

オルガが席に座ろうとするとそういつたビスケットの方を見る。

ビスケットはオルガの視線に気が付き疑問顔をしながら首をかしげた。

「何？ どうしたの？」

「……何でもない」

オルガは何とも言えないような顔になるが、そのまま席に座ると飯に手を付けるが、食堂に三日月とサブレが入ってきた。

サブレはここ数日鉄華団へと顔をだしており、その理由をオルガやビスケットはあえて尋ねていない。

三日月はオルガの食事を見た後、温め直しているビスケットの方を見てもう一度オルガを見る。

「温め直せばいいのに」

「いや、いいんだこのままで。飯も仕事も厄介ごととも一緒だ。目の前のもんをひたすら片づけていく。そうしねえと先にすすめねえからな」

「でも、兄さんは飯を温めてもらってるけど……」

ちようど温め直してもらったビスケットがオルガの隣に座り食べ始める。

サブレの台詞に食べ始めていたビスケットはどこか物怖じしながらも「だって……」と言いよどむ。

「え? いや……だって温めないとおいしくないし……」

三日月はまつすぐオルガを見ると、オルガは食べずらそうにする。

「ん? なんだよ? そんなに見られてたら食べねえだろ」

「痩せた?」

自分では痩せたとハッキリ分からなかったオルガだが、サブレはビスケットの方をジッと見る。

「じゃあ、兄さんは太った?」

「じゃあつて何!？」

二人が言い争いをしていると、三日月は火星ヤシをオルガのご飯に入れる。

「お前……」

「栄養。オルガがみみつちくなるのはなんかやだ」

オルガはそのまま火星ヤシを口にしますが、そのとたん表情を変えた。

外れを引いたという顔をしたとビスケットとサブレはハッキリと分かったが敢えて指摘しない。

「あれ？ はずれ？」

「ん……いや……ありがとなミカ」

ジュリエッタはラスタルが先ほど頼んだという男の情報を素早く父マハラジャにリークした。

これは同時にフォートレスが近々『ある人物』への捕獲作戦を立案すると言うことであり、その作戦指揮をするのは間違い無くサブレだった。

サブレのことを思い出すと少し不機嫌になるジュリエッタ。

幼い頃にサブレを紹介された以降何かに付けて比較されがちな関係、何かと自分の一歩先にいるような彼に少しだけ不機嫌になってしまう反面、それがどこか誇らしい。

そんな、彼らに黙っている人間が直ぐ近くに。

直ぐに自分の気持ちを切り替え彼の本心を探り出そうと試みる。

仮面を付けた男へと歩んでいく。

「私には理解不能です。ギャラルホルンには多くの人間がいるというのにそれを差し置いて……どこの馬の骨かもわからないあなたを側近にするなど。これは由々しき問題

です」

「由々しき？」

「端的に言えばラスタル様によるえこひいきです」

「ふっ」

仮面をつけた男はジュリエッタの言葉に軽く笑う。

内心では「こんな人でも笑うんですね」と驚くが、ここで言葉を乱せば間違い無くバレル可能性が高い。

あくまでもラスタルに従順な兵士を偽る。

「なっ！ 今笑いましたか？」

「ああ。君の事もこの艦隊の人間が噂していたから」

ジュリエッタはジト目で仮面の男を見る。

イマイチ内心が覗ききれないと踏み、このまま踏み込んでいくべきかももう少し距離をあるべきかと悩む。

「確かに私は階級も後ろ盾もありません。けれどモバイルスーツの操縦の腕一つでラスタル様は私を認めてくださったのです」

「ラスタルを信用してるんだな」

「当たり前です。ラスタル様は私の誇り。尊敬すべき上官です」

「そうか。誇り……か」

その言葉が意味する事を探ろうとしていた。

これは少し前の話。

オルガたちはマクギリスに会いに火星支部に来ていた。

「素顔のあんたと会うのは初めてだな」

「火星で会ったのは君と帽子の彼だけだったか。彼はここにいないようだが……。活躍は石動から聞いた。元氣そうで何よりだ」

「そっちはなんか疲れてるね」

「三日月！」

「旅の疲れだろう。明日にはまた地球に立たなければならぬのだから気が重たい」

「まずは礼を言わせてもらおう。テラ・リベリオニスの後始末助かったよ」

「サンドバルを捕らえた君たちへの返礼としては安いくらいだ。他に何かあれば遠慮なくいつてくれ」

「仕事の分の報酬はもらってんだ。それよりも、アンタが仮面なしで俺らを呼びつけた要件を聞こうか」

オルガは疑いの視線をマクギリスに向ける。

「言葉にすれば大した話でもないのだが……鉄華団とは今後もいい関係でいたいのだよ……そう身構えないでもらいたいな」

「ギャラルホルンが一枚岩じゃねえってことは今回の件で分かってる」

「アリアンロッド艦隊の事か？」

「あんたは何がしたいんだ？」

「前に話したとおりだよ。腐敗したギャラルホルンを変革したい。その為にはより強い立場を手に入れる必要がある。当面の目的としてはラスタル・エリオンよりも上に行くことだ」

「アリアンロッド艦隊の総司令ですね。あなたと同じセブンスターズの一員でもある」

「今の所私一人の力で太刀打ちするのは難しい相手だね。協力してくれる味方が必要だと感じている」

「あんた正気か？ 俺らみたいなチンケな組織にする話じゃねえな」

「私は君たちを過小評価する気はない。君たちとしても、私と組むことに十分な利益はあると思うが」

「時間をくれ……。俺一人で決めるわけにはいかねえ」

「時間が必要だと？」

「ああ、相棒とちゃんと話さないといけないからな」

するとマクギリスは少し考え込むと、黙ってうなずく。

「分かった。そういうことならいいだろう。どのみち私もすぐに動く気もない」

マクギリスとオルガの結論は出ることなく終わった。

しかし、オルガには実際の所結論なんて決まっていた。

そんな事を思い出し、その後ビスケットに安堵の息を漏らされていたことを思い出すオルガ、しかし、オルガに取ってもう一人話したい人間がいたのだ。

先の戦いの最中に乱入した真つ赤な機体。

それが意味する事を…そして、最近サブレを自分たちの周りに置いてある本当の理由。

今日…ここにマハラジャが来ると分かっていた。

「いいや…ここは相も変わらず男臭い。もう少し換気や匂いに気を使ったらどうだ？」

そんな軽口を言いながら団長室に入ってきたマハラジャはタバコの息を吹き出しながらソファに座り込む。

オルガはその対面に座りながらも警戒心をほんの少しだけ上げていく。

「分かっただろう？ この真つ赤な機体は何だ？ 何で俺達の周りにサブレをいつも置いていたのか？」

「お前達を信頼しているからだっと思わないかな？ 思わないんだろうな…サブレをお

前達の周りに置いていたのはお前達の実力を探らせるためと信頼できる組織かどうかを今一度探らせるためだ」

「で？ 俺達はあるたの目になかったのか？」

「ああ…まだ危うさはあるがその辺りはこっちで調整できるレベルだしな…」

「で？ この真つ赤な機体は？」

オルガの取り出した写真に写っている真つ赤なガンダム。

「詳しくは避けるがガンダム・フレームを狙って現れる人物で、サブレ達は何度か立ち塞がったことがある。ここ数ヶ月再活動を始めたようだな。近々動くのではとこちらでも警戒しておく。動きがあればこっちからリークしよう」

「頼む。で？ 俺達にギャラルホルンもティワズも…誰も居ない事を確認させたのは何故だ？」

マハラジャはポケットの中から一枚の写真を撮りだして差し出す。

その写真にはマハラジャと近い歳の男性が写されており、見た感じどこかの傭兵という風貌の男。

「ハイツは？」

「私の…友人だ。こいつを捕まえない。最悪口がきける状態なら構わん。作戦の詳細はサブレに任せているから共闘して欲しい」

「俺達に探らせると?」

オルガは内心「どこにいるかも分からないのに」と思ったが、マハラジャは高笑いを浮かべながらテレビを付ける。

そこにはアーブラウ防衛軍発足式典の会場で爆発が起きたというニュースが写っていた。

「な!?!」

「(ここ)でお前達の仲間を騙しながら仕事をして居るはずだ…これで引き受けるしか無いな? 最低限の目標は捕獲…:だ」

「あんた…:この状況を読んで?」

「まあ…:読みやすいバカな奴だからな。不満ならテイワズに言えよ。テイワズが監視要員に連れて行った奴が裏切ったんだからな」

マハラジャはタバコを吸い始めた。

無音の戦場

アーブラウ防衛式典の最中トップである蒔苗を襲った爆発テロ、このテロをアーブラウはA E Uの犯行だと断言し一触即発の雰囲気になろうとしていた。

時を同じくし鉄華団の団員チャドも意識不明の重症になっており、鉄華団も混乱とした状態が続く中、それを必死で纏めようとタカキも必死だった。

「今日でもう三日たつぞ！ チャドさんどうなっちゃったんだ！」

「ラディーチェさんが言うにはまだ意識が戻らない状態だって……」

「そんな！ 団長はなんて？」

「本部との連絡はラディーチェさんが取ってるから……」

「なんだよラディーチェさんラディーチェさんって！」

「こうなったらチャドさんの敵俺らで取りに行こうぜ！」

「ダメだ！ そんな勝手なこと」

「なんでだよ！ オルガ団長だったらそう指示してくれるはずだ！」

「だからその団長の指示がまだないんだ。俺達が勝手に動くことはできないよ！」

全てがラディーチェに任されているという現状が更に他のメンバーの不満を高まら

せ、それが更に彼らを興奮に追いやっている。

タカキは何とか団員を押しさえ込もうとするが、そんな事で止まれるほど彼らの状態は収まらないと判断したタカキは、ラディーチェと話し合いなんとか現状を打破しようと試みていた。

「蒔苗氏の意識もまだ戻らないようですね。捜査の手がかりもなかなかつかめないよう
で、警備の不備が問われています。こちらに矛先が向いてくることもあるかもしれません」

「あの！ 俺からも一度団長に直接聞きたいことが……」

「前に伝えました通りチャドさん不在の間は、本部との連絡は私に一任すると仰せられています」

「でも、それじゃあ団員達の収まりがつかないんです！」

「それをなんとかするのはあなたの役目でしょう」

「私はまとめなければいけない書類がありますので」

「……わかりました」

タカキは渋々引き下がるが内心では納得できない部分が多くタカキ自身も不満を内に秘めている。

すると廊下ではアストーンが待つており、一緒に歩いて廊下を歩く。

「チャドさんが言ってたんだ。指揮はお前に任せるって。だからこそみんなは納得できないかもしれないけど、勝手なこととはできないんだ。俺の考えでみんなを危険な目に遭わせるなんてことは……」

「俺もみんなと同じだ。チャドさんの仇を取りに行きたい。だけど、それより前に俺はお前の味方だ」

「うん……ありがとうアストン」

タカキにはその言葉だけで良かった。

オルガ達鉄華団の本部メンバーは団長室で話し合っていた。

オルガ、ユージン、ビスケットなど重要人物が集まっている状況、マハラジャからの情報で色々な裏の事情が見えていたが、その説明をしようとっていたサブレ自身がここに集まらない。

そんな中オルガはユージンに訪ねた。

「地球支部はなんて言ってる?」

「状況は変わんねえよ。「チャドと蒔苗さんが負傷した。現場の判断はこちらに預けてくれ」ってそれ以上さっぱり分かんねえ」

オルガのため息が団長室全体に広がる中、ビスケットがユージンに訪ねた。

「タカキに話は聞けなかったの?」

「チャドの代わりにあちこち飛び回ってそれどころじゃねってよ」

「どうも気になるな」

その報告を聞いて少し考え込むオルガとビスケット。

「それって本当の情報？」

どうも嘘っぽい情報にビスケットが顔をしかめるのだが、その情報をさらつと「嘘だな」と言つて部屋に入室してきたのはサブレだった。

全員が驚いてサブレの方をジッと見つめる。

するとジョシユアはニヤニヤ顔で胸元を大きく開けてユージンを後ろから襲う。

ドギマギして会話に入つていけないユージンを放置してビスケットがサブレに噛みつく。

「どういう意味？」

「考えても見ろよ。タカキつてあの子供だろ？ そんな人間がチャドつていう人間の代わりについて飛び回る事態を想像できるか？ それにお前達はおくまでも防衛の協力者のな立場だったろ？ 技術を教える立場でしか無いお前達がどうして代わりに移動するんだ？」

「それもそうだな」

「ラディーチェつていう男が裏切り、ガランという男と結託した。その裏にはアリアン

ロッド艦隊のトップであるラスタル・エリオンが関わっている。このラスタルという男結構腹黒い男でも有名で、言ってしまうえばギャラルホルンという組織の闇を一身に集めたような男だ」

そう言つて写真を二つ取り出す。

ガラン・モツサと名乗る男とラスタル・エリオンがそれぞれ写っている。

「このガランつて男が今回の事件の主犯で良いのか？ 俺達はこの男を捕まえてアープラウに差し出せばいいわけだ」

「ユージン。そのドギマギした顔で言われても説得力無いよ」

「う、うるせい！」

「いや…あくまでも引き渡すのは俺達の方、この男はラスタルとの繋がりがある。この際全て吐かせてラスタル逮捕に向けての証人になりたいんだ。最悪廃人になつても良いとの事だからあくまでも捕獲が絶対だ」

「それよりあいつらは無事なんだよな？」

「保証は出来ない。いつ戦争状態に移行するかは予想は出来ないからな。ただ言えることは…戦争は絶対だ」

「やばいぞ！ さつきアープラウ防衛軍の奴らが噂してるのを聞きちまったんだ。この

まだまだと戦争になっちまうかもしれないねって……」

鉄華団の団員が興奮しながら入ってくるのをタカキは驚いて聞き、急いで部屋から出て行く。

タカキが急いでラディーチェに話を聞きに行くため走り出した。

「ラディーチェさん！ 式典の事件にSAUが関係してるって……経済圏同士の戦争になるかもしれないって本当ですか!？」

「その可能性は否定できませんね」

「あの……団長はなんていつてるんですか?」

「もちろん連絡はいれています」

「だったら!」

「地球にいる我々にわからないことが、火星の彼らに分かると思えますか? チャドさん不在の今現場を任せられるのはあなたしかいないんです。タカキ・ウノ。あなたにかかってるんですよ。鉄華団地球支部のこれからあなた達の地球での生活も」

あくまでも本部と交信させないラディーチェはタカキをうまく唆す。

「あいつを信頼しているのか?」

「鉄華団は家族だろ? ラディーチェさんは鉄華団の一員なんだから。家族を信用できなきやおしまいじゃないか。フウカの為に俺は地球で頑張っていききたいんだ」

タカキとアストンはタカキの家で話し合っていた。

「俺はお前らの幸せを守るためだったらなんだってする。まあ俺にできるのは殺したり、お前を守って死ぬくらいだ」

そんな発言にタカキが過剰に反応する。

「やめてくれ！ 死ぬとか殺すとかそんな簡単に言っちゃ駄目だろ！」

タカキの叫びにフウカが反応して起き上がる。

マクギリスは石動と自室で話し合っていた。

「正式にSAUからギャラルホルンに調停の要請が来た」

「本気で開戦するつもりでしょうか？」

「ここまで事態が進んでしまつては避けられないかもしれないな」

「ではお引き受けに？」

「要請が来たからには当然だろう」

「しかし、万が一調停が長引けば……」

「分かつてる。そこにつけ込み、こちらの足を引っ張ろうとする勢力がいることもな」

それが誰なのか石動には分かっていた。

「待つていましたよタカキ君。こちら今回の件に関してアーブラウ防衛軍の方を指揮す

る予定の……」

すると、ラディーチェが髭を生やした男を紹介する。

「ガラン・モツサだ。よろしく頼むぞ少年」

バスケットとクーデリアはオルガと出発前の確認をしていた。

「じゃあ、俺たちはそろそろ行くね。到着まで約三週間だけど……その間任せることになるけどいい？」

「ああ、もちろんだ。それより本当にあんたも行くんだな？まあ、アンタがそばにいれば大丈夫だろう」

「ええ。このような状況だからこそ私に出来ることがあると思うのです」

サブレが大きく欠伸をしながら部屋から出て行くと、それに続くようにクーデリアとバスケットが出て行き、廊下ではジョシユアがユージンを押搦っていた。

サブレが「そろそろ止めろ」と言い聞かせ出立する姿をオルガは黙って見守る。

鉄華団本部との連絡が取れないまま、SAUとアブラウとの戦争に巻き込まれる地球支部。

アブラウ・SAU両軍がにらみ合う国境地帯バルフォー平原。

戦闘は不幸な事故をきっかけに始まった。

威力偵察に出たSAUの偵察機がモビルスーツのエイハブ・リアクターの干渉を受けて墜落、SAUはモビルスーツが戦場に出るほどの事態だとは思わなかった。

SAU側の戦力は実戦経験のない防衛軍とギャラルホルン・SAU駐屯部隊、そして地球外縁軌道統制統合艦隊からの派遣部隊との混成軍だった。

対するアープラウ側もやはり実戦経験がゼロの防衛軍と鉄華団。作戦参謀にガラン・モツサと呼ばれる人物が参加していた。

平原のあちこちで散発的な消耗戦が繰り広げられてもう半月余りが過ぎた。

モビルワーカーで戦闘に向かうタカキは不安を抑えきれずにいた。

(違う……何かが違う。俺たちはこれまで幾度となく戦ってきた。そのどれとも違う)

戦場ではランドマン・ロデイがまた一機コックピットをつぶされてしまった。

また一人尊い命が失われていく中アストンが機体を走らせる。

一進一退の攻防が続くなか、マクギリス達はアープラウ側の思いもよらない抵抗に焦りを感じ始めていた。

「落とし所が見えないな」

「はい。武力介入して一気に事態を収束させるつもりが……」

「予想だにしませんでした。まさかアープラウ側がこれほどまでの抵抗を見せるとは」

ギヤラルホルンからすればアーブラウがここまで抵抗するとは当初は予想すらしていなかった。鉄華団のおかげで戦いが平行線をたどっていくことに、少なくとも焦りが見え始めた。

マクギリスは今一度作戦基地に戻り、部下と共に解決策を図ろうとしていた。

「准将。正規の外交ルートでの解決を図った方がよいのでは？」

「それができるなら苦労はしないでだろう。アーブラウの蒔苗代表が意識不明。外交チャネルは何者かによつて閉ざされギヤラルホルンのアーブラウ駐屯部隊も動きようがない。だからSAUは我々に紛争の調停を求めてきたんだ」

「しかし、このままでは埒があきません。おかしいですよこの戦い、いまだに決着がつかないなんて……」

「確かに見事な戦術だ。大規模衝突を避け、局地戦に終始、戦力の分散投入と撤退のタイミングにはある種の才能を感じる。特に、指揮能力はないが機動性に優れた鉄華団の特性をいかして手足のようにコントロールしている」

今だ正体のつかめない指揮官を褒めつつ、対策がいまだ出てはこなかった。

時を同じくしてタカキ達も戦場のおかしな空気に惑わされている真つ最中だった。

「アストン！敵の援軍だ。数は3！」

「撤退する。命令はここまでだ。あとで迎えに来る」

アストンは亡くなった仲間を迎えに来ると約束し、撤退していった。しかし、アーブラウ防衛軍との仲はうまくいってはおらず、一機のモビルワーカーが独断で動き出す。

「こつちも撤退するよ……戻れ！ 深追いするなって命令だろ！」

「うるさいクソガキ！ やらなきやこつちがやられるんだ！」

そして一機のモビルワーカーがまた落ちる。

マクギリスは戦場をジツと見つめながら見えない敵の目的を考察する。

「そして不鮮明な開戦理由を逆手に取り、見事な膠着状態を成立させた。つまりそれが目的か」

マクギリスは敵の目的に気が付きつつあった。

「これで12人目……」

シートのチャックを閉め、タカキはそつと目を閉じた。すると、どこからとなくガラッが姿を現した。

「俺にも別れを言わせてくれ。勇敢なる鉄華団の若き戦士に」

すると、ガラッはエナジーバーのようなものをタカキに渡そうとする。

「食うか？」

「あつ……いえ」

「辛いな。だが、ここが踏ん張りどころだ。実働部隊の実質的な隊長はお前ら二人だ。」

素人のアーブラウ防衛軍を率いての戦いはきついだろうが、これからも頼むぞ」

しかし、そんなガランの言葉とは裏腹に兵士たちの疲労は確かに蓄積されていた。

「俺達もう何日戦ってるんだ？」

「みんなお疲れ」

タカキとアストンがテントに戻ると、みんなは不安そうな顔をする。

「なあタカキ、これっていつまで続くんだ？ 俺達って勝ってるの？ 負けてんの？」

勝っているのか、負けているのかがはつきりわからない戦争の状況は兵士たちの士気を著しく下げていた。

そんな事はタカキとて同じ気持ちだったが、ここで指揮を下げれば間違い無くズルズルと引きずるのは明白。

タカキは何とかみんなの士気を下げまいと努力する。

「ガランさんはこつちが優勢だつて言つてたよ。ラディーチェさんも火星の団長が喜んでるって……」

「つかなんなんだ？ この戦い。お互いに大隊規模、千人以上も兵士いんのにちよろちよろ小出しに攻撃して、いいところで退却。意味わかんねえよ俺」

タカキは言葉が出なかつたが、アストンが代わりに答える。

「余計なことを考えてんじやねえよ。今は食える時に食つて、寝れるときに寝とけ」

「わ……わかってるよ」

「急にしゃべんじやねえよ。ビビったわ」

アストンとタカキはモビルスーツの前でご飯を食べながら話をしていた。

「みんなの思いはさ、俺の思いでもあるんだ。もう何年も戦ってるような気がするよ。ついこの前までフウカとアストンとあの部屋でご飯食べてたのか。夢みたいだ。ねえアストンは何も感じない？ この戦いは今までと何か違う。俺最近ずっとそれが頭から離れなくて。もちろん、理屈ではわかってる。けど、俺は今何をしてるんだろうって、時々見えなくなるんだ」

しかし、タカキ達に休息の暇は与えられず、すぐに出撃の命令が下った。

「伝令です！ 出撃命令です！ すぐに指令所まで来て……」

「無理だよ！ タベから戦い詰め、みんなまだ疲れ切って……」

「けど、ガラン隊長の命令で……」

その言葉にタカキが立ち上がり怒鳴りつける。

「隊長!!? いつからガランさんが鉄華団の隊長になったんだ!!」

「いや……その………なんとなく、最近みんな作戦指揮してんのあの人だから……」

「分かった……ごめん、すぐ行く」

また戦いが始まろうとしていた。

音の鳴らない無音の戦場をまた掛けなくてはいけないという想いが脳裏を過り嫌気がさした頃、真上では鉄華団本隊とフォートレスのエージェント達がアープラウ政府との交渉に難航していた。

舞い降りた悪魔

鉄華団が交戦に入ったところ、ユージンとビスケットはいまだ地球支部との連絡が取れずにいた。

焦っても仕方が無いと分かっているもブリッジでは焦りからか空気が非常に悪い。

「ああ、相変わらずだ。地球支部とは全然連絡がつかねえ。つたくアリアドネが使えるようになったつてのに、これじゃあ意味ねえよ」

「サブレの方は何か情報が入ったの？」

「? いや…強いて言うなら大体予想通りらしいな。やつぱり強攻撃で行くわけ? 俺

はあくまでも目標の捕獲が優先だから作戦は兄さんに任せるよ」

「少しは考えてよお…ううん…:…だったら」

ビスケットが考えついた作戦にサブレは「良いんじや無い?」と微笑みながら変えてしてくれた。

ラフタはトレーニングルームで筋トレをしている明弘に話しかけ、明弘は決して筋トレを止めないまま答える。

「熱心だねえ毎日毎日」

「つたく、それ以上ガチムチンなっでどうすんのさ？」

「ほっとしてくれ。俺の趣味……だ！」

ラフタは小さくため息を吐き出してから少しだけ微笑む。

「気持ちわかるけどね。まっそういうの私は嫌いじゃないけど」

明弘がラフタの気持ちに気づくことは無かった。

三日月たちは食堂で飯を食べており、部屋のテレビでは蒔苗の生死に関するニュースが流されており、そのニュースを見ながらアトラがため息を吐き出す。

そんなニュースを見ながらクーデリアはフミタンが入れてくれたコーヒーを片手に憂鬱な顔をしていた。

「心配だね蒔苗のおじいちゃん」

「でも容体はニュースで分かります。チャドさんは生死すら……」

「情報入らないからね」

「地球に着きや嫌でもわかるさ。ジタバタすんのはそれからいい」

三日月のドライな意見にユージンは意識を切り替えさせるような言葉を発する。すると、ハッシュが食堂に入ってきてサブレの所へと向かって歩いてくる。

「サブレ隊長代行！ 獅電のシユミレーション終わりました。次は何をすればいいです

か？」

「使った獅電の整備は？」

「それはやりました」

「筋トレは？」

「それもやりました」

「だったら休め」

「俺地球にいたらモビルスーツ戦初陣なんですよ!? 今のうちにやれることをやっておきたいじゃないですか！ だから……」

「だからこそだ。今休まないと休めないぞ。直前にぶつ倒れたら見捨てるからな」

サブレの意見にぐつと黙り込んで椅子に座るハツシユ。

すると、ユージンが立ち上がり演説をするかのように大きな声を発する。

「サブレの言うとおりだ。いいかお前ら！ あれこれねちねち考える暇があったらきつちり寝とけ！ 見えない明日で今日をすり減らすんじゃないやねえ！ たとえ明日が地獄でもそんなときやてめえらの力でしぶとく生き延びようぜ！ それが鉄華団だ！」

ユージンがかっこよく決める中、キッチンでビスケットは食器を洗いながらクスクス笑う。

クーデリアはそんなユージンを見ながら微笑む。

「頼もしいですね副団長」

「オルガの真似をしてるんだよ」

三日月の言葉に押し黙って汗をかいて黙るユージン、それをどう揶揄おうかと悩み近付いていくジョシユア、ビスケットがさらに笑いを堪えきれないように肩をふるわせる。

フウカはチャドのお見舞いに来ており、フウカの目の前に治療器に入っているチャドが意識不明の状態でした。

「こんにちはチャドさん」

チャドは何とか一命をとりとめてはいたが、しかし意識が取り戻せずにいた。すると看護師の女性がフウカに話しかけてきた。

「あら。また来たの？」

「あの……チャドさんは……」

「昨日と同じよ。あなた達が前にいた火星とは違って地球式の再生治療は時間がかかるから。勿論その分きれいに治るのだけどね」

看護師の言葉に複雑な表情で返すフウカはそのまま黙って家まで帰って行く。

フウカは家に帰ると、三人で取った写真を確認する。

「いいのかな？私これで……おにいちゃん……元気かな……」
フウカは不安な気持ちを抑えきれなかった。

地球支部ではタカキが戦場で孤立していると報告を受け、皆の中に焦りが広がりながら急いで支度が始っていた。

「タカキが!？」

「敵の陽動をくらってモビルスーツの真ん中に……」

「出せるモビルスーツは全部出せ！とにかくスピード優先だ。急げ！」

すると、一機のモビルスーツが素早く戦場に向かった。

「誰だ!？」

「速え!！」

「あれってガランさんのゲイレールか!！」

彼らがガランのモビルスーツだとハッキリ分かったのは彼が出かけた後だった。

タカキのモビルワーカーが危機に陥ると、ゲイレールがモビルスーツに攻撃を仕掛け、そして素早く機体をたたく。

「間に合ってよかった。お前を失ったらアープラウ全軍は総崩れだ」

「……助かりましたガランさん」

「お前にはすまないと思っっている。だがここが踏ん張りどころだ。俺たちの勝利は近い。もうすぐ家に帰れるぞ！その為にあと少し俺の無理を聞いてくれ！」

「……は？」

ガランの言葉にそそのかされるタカキ。

（俺は今何をしてるんだ？）

その気持ちに応える者が居るわけが無く、ガランの心の内を知らないままひたすら戦場へと突き進んでいく。

「やつと着いた〜」

鉄華団はようやくの思いで地球にたどりついた。

窓から見える青い星を前にして様々な意見を口にする面々だが、地球に到着しても中々降りれないでいた。

「これが地球かあ」

「遅いな。地球を目の前にして何ちんたらしてんだ」

「うん。なんかあったみたいだね」

ビスケットは鉄華団の代表として、シャトルの着陸の許可を出そうとしていた。

しかし、アーブラウ政府からの許可が下りない状況が続いている。

「どうしてですか!?! どうしてシャトルの着陸を認めてくれないんですか!」

「現在アーブラウは非常事態宣言を発令中です。すべてのシャトル発着場への着陸許可は出せません」

「ですが、俺たちは鉄華団です。軍事顧問として国境紛争の援軍として……」

「申し訳ありませんが、いかなる例外も認められません」

そういうと通信を切られてしまう。

ユージンはビスケットの方を振り向く。

「どうすんだ団長代行」

「サブレ達三番隊に連絡を……仕方がない、サブレは例のプランで。俺たちは俺たちで降りよう」

サブレが小さく「了解」と言いながら部屋から出て行く。

「アーブラウ宇宙港から報告がありました。ホタルビは軌道ステーションを出港し立ち去ったそうです」

「予定通りだな。これ以上子供が増えられても面倒だ」

「それと追加の連絡です。先ほど大気圏をデブリが突破したとのことで、まあ、戦場から離れていますし、問題ないでしょう。デブリ帯を漂っていた戦艦が落ちたという報告です。しかし、見事なお手並みですね。あの跳ねつ返りどもを手なずけるとは」

「まあ、デブリの方は駐屯部隊に任せるか。しかし、君の言う通り彼らは獣だな。犬と同

じで、餌をやってたまくに頭をなでてやれば何も考えず主人の命に従う。特にアストン。あいつは面白い。そうかヒューマンデブリとはああいうものだったのか」

ガランは悪そうな微笑みを浮かべており、その台詞を小さな盗聴器が黙って聞いていた。

「タカキの言っていた今までの戦いと違うって俺達団長以外の奴の命令で戦うの初めてだからそれで……違うか？」

タカキ達は寝ながら話をしていた。

タカキがずっと感じて居た違和感、しかしその違和感もアストンには通じていなかった。

「ありがとう。そうだね、確かにその違和感はあるよね」

「あるのかやっぱり。俺は別に誰の命令でもいいけど。ヒューマンデブリは戦うのが仕事だから」

「なんだよそれ！ 昔とは違うんだ！ 命令とかじゃない。俺たちは自分の為に戦っていいんだよ！ ……時々怖くなるんだ。アストンを見ると、そりや鉄華団の仕事はいつだって死と隣り合わせで、今が絶対に死なないなんて言いきれぬ状況じゃないのかわかってる。けど、死を最初から受け入れるのだけはやめてほしいんだ」

「それは……」

「ガランさんはすごい人だよ。あの人にはこの戦いの全体が見えてる。あの人に従っていればきつと勝てる。あと少しで家に帰れるんだよ。絶対生き延びて一緒に帰ろうアストン」

それに「うん」と返せなかったアストンだった。

マクギリスは自ら戦場へと向かおうとしており、それを部下が止めに入ろうとしてい

る。
「お考え直してください准将！」

マクギリスはグレイズリッターのコックピットにおり、操縦桿を握りしめながら焦りを滲ませる。

「膠着状態のままもう一月だ。これ以上戦局を長引かせると今後に大きな禍根を残す」

「しかし、何も准将自ら……」

「心配するな。無理はしないさ」

戦局を長引かせたくないという想いと共に駆け出していく。

マクギリスの出撃の報告はすぐにガランの耳元に届いた。

「何？ マクギリスが出た？ そうかしびれを切らしたか。奴の地位も名誉も帳消しになるまで、何年でも遊んでやるつもりだったが……俺のゲイレルとお前たちのシャルフリヒターをすぐに用意しろ。それと！ 鉄華団をたたき起こせ！」

全員が出撃体制を整える。

「いいか！ これが最後の戦いだ。敵の大將の首を取って勝利の美酒に酔いしれるぞ！」

「これが最後なら隊の指揮なんていらないだろう？ 俺が行く！」

全員が動き出した事にサブレが気がついた。

「サブレ隊長！ 予想通り動きました！」

サブレは三日月とハツシュと明楽とジョシユアと共に小高い丘の上で、戦場を見下ろしていた。

ハツシュからの報告で戦場の大きな場所を特定しており、サブレは一緒に降りてきたガンダムの一機である『マルコシアス』の上からハツキリ双眼鏡と盗聴器を通じて話している。

「しかし、まさかデブリにまぎれて先に戦場に降りてくれなんて注文されるとは思わなかったよ……サブレ先輩がおかしな了承をするから！」

「でも、おかげで間に合った」

「間に合ったんだから良いじゃ無い。私は暴れ回れるからOKだし…先輩。行きましょ」

サブレはコックピットに座り込んで息を吐き出し小さく呟く。

「行くぞ」

開戦と共にマクギリスの操るモビルスーツは次々とアープラウ側のモビルスーツを迎撃していく。

次々と進撃していくマクギリスに部下がお世辞を述べる。

「ここは片付いたか」

「准将お見事です」

「世辞はいい、もう少し敵の戦力を削るぞ、急造のアープラウ防衛軍だ。モビルスーツが無限にあるわけではない。すぐに底をつく。これ以上混乱を長引かせては、月の蛇を笑わせることになる」

マクギリス達を遠くからガラン達がジッと見つめていた。

しかし、そんな中ガランはあくまでも冷静に立ち振る舞っており、遠目にマクギリスを発見した。

「あれか、偵察隊の言っていた指揮官機」

「あいつをやればこの訳の分からない戦いは終わる……」

「そうだ。ここでの勝利を死んでいった連中への手向けにするぞ」

「あいつをやれば……」

タカキの意識がマクギリスに向くなか、アストンがそんなタカキを落ち着かせようと必死になる。

「タカキ、いつもどおりで平気だ。俺が前でお前が後ろ。いつもどおりやればきつとうまくいく。一緒にフウカのところに戻るんだろ？」

「そうだねアストン。一緒に帰ろう」

「ああ、約束だ」

タカキとアストンが約束をする中、実はその会話をサブレたちは傍受しつつ、後ろからこつそりとガランの隙を伺っていた。

「この先にアーブラウ防衛軍の前線の拠点があるんだったな、そこを叩けば見えない戦局もだいぶ分かりやすくなるだろう」

しかし、そんなマクギリスの前にガランが機体を走らせる。

まっすぐにマクギリスを捉えると、そのまま武器を振り下ろそうとするが、マクギリ

スの部下がそれを邪魔する。

「大将がこのこと出てくるとは戦法の基本がなっておらんぞ！」

「敵影五！ 准将はお下がりがください！」

「私の心配はいい！ 本部に救援を要請しろ！ 作戦本部……」

「聞こえるか！ 敵の強襲を受けた。至急応援を！」

しかし、一步先を読んでいたガランによって救援は抑えられていた。

「救援なんぞ期待しても無駄。そっちは別動隊をやっているからな！ ガキどもこっちは押さえる！ お前たちは肩付きをやれ！」

そういうとガランは部下のモビルスーツを押さえ、その隙に孤立したマクギリスにアストンたちが攻撃を加えた。しかし、攻撃の仕方からすぐにマクギリスには鉄華団だと判断できた。

「阿頼耶識の動き……鉄華団か。防衛軍のようにはいかないか……鉄華団のパイロット。これは団長からの指示なのか？ オルガ・イツカの指示なのかを聞かせてもらいたい。君達は誰の指示で戦っている」

そんなマクギリスの言葉にタカキが動揺を隠せずにいる。

その言葉の意味を知りたいと思っていたのはタカキ自身だったからだ。

「誰のって……」

「敵の言葉だ。耳を貸すなタカキ。こいつをやれば戦いは終わるんだ」

戦いを終わらせる事だけを考えようとするタカキとアストン。

そんなアストンの言葉に意識を切り替えるタカキ。

「そうだ……あんたをやればアストンと一緒に帰れるんだ！」

「タカキ！」

「いつもどおりやればうまくいく。分かっているよアストン！」

しかし、そんな言葉とは裏腹にタカキが前へと走っていく。

「いつもは俺が前だろ……！ 一度下がれタカキ！ そいつは一人じゃ無理だ！」

しかし、そんな言葉に耳も貸さないタカキは完全に冷静さを失い、そのまま攻撃を加

えようとするが、それをマクギリスは剣でうまくさばく。

「離れろタカキ！ くそっこれじゃ狙いが……」

マクギリスの機体の拳がタカキのモビルスーツに直撃し、その隙に武器を持ち替える。

「命懸けだよ……私もな！」

マクギリスが剣を振り下ろそうとする中、アストンが間に割って張ろうとするが、それよりも素早くサブレのマルコシアスが間に割って入る。

タカキのモビルスーツを突き飛ばし、アストンのモビルスーツを左手で止めつつ、マ

クギリスの攻撃を右手で受け止めて見せた。

「俺も守るのに必死だよ……」

悪魔が舞い降りた。

友よ

「さ、サブレさん？」

「て、鉄華団？ どうしてここに……」

「本隊か!? どうしてここにいる」

ガランの動揺は激しい物だったが、瞬間的に脳裏が晴れていくのだが、それ以上に本当ならここに居るべきでは無い人間の登場にタカキやアストンが驚いてしまう。

サブレはマクギリスの武器をそつと離し、その瞬間マクギリスから距離を少し取る。

サブレからすれば自分が鉄華団関係者では無いと思われてはいけない。

「いろいろな聞きたいことがあるでしょうが、マクギリス・フェアイド……できれば今回の紛争、俺達に任せてもらえませんか？」

「その前に君は鉄華団かな？」

「いいえ。私はその関係者です。鉄華団とは商売上の取引をして居ます」

マクギリスは少し考える素振りを見せてから「分かった。信用しよう」と言っただけを聞く体勢を作った。

「念のためにアープラウとSAUの両方から承認を団長代行がとっています。できれば

引いてほしい。ここであなただと三つ巴になればさらに悲劇が起きる」

マクギリスが考え込むと、ガランがサブレに攻撃を加えようとするのだが、それを今度には三日月が割って入る事で阻止する。

その姿を確認したマクギリスは黙って頷きようやく今回の事態の大凡を把握して見せた。

「分かった。君たちに任せよう。どうやら、君たちはこの紛争の全体が見えているようだ。ここは一旦引きSAUに話を聞きに行くぞ」

マクギリスが撤退しようとしたのを目撃したガランは、同時に鉄華団の関係機が次々と戦場に現れようとしているのをハッキリと目撃した。

不利だと判断したガランは素早く撤退を始めると、今度はそれを三日月が妨害しようと走り出す。

「逃がすわけないだろ……」

「待て三日月！ 追わなくていい！ 一度引こう……タカキ達の状況を聞く必要があるし、タカキ達は状況が理解出来てない」

三日月はどこか面白くなさそうな顔をするが、黙ってうなずくと、機体を翻す。

「分かった。タカキ、無事？」

「あ、はい」

「アストンは無事か？ 間に合ったと判断したが」

「……だいじょうぶです」

「そうか……よかった。ハツシユ！ 明楽！ ジョシユア！ 引くぞー！」

そういうとマクギリスとサブレたちは互いに引き始める。

「ガラン・モツサと連絡が取れないとはどういう状況ですか!?!一刻も早く調べてください。火星の連中に関する情報を最優先で……」

ラディーチェは焦るように通信でガランの行方を聞こうとする中、ユージンは隣から話しかけてきた。

ユージンの表情は明らかに怒りを滲ませるものであった。

「俺らがどうかしたのか?」

ラディーチェは冷や汗を流しながら疑惑の一つをそつと訪ねた。

「アーブラウのシャトル発着場への着陸許可は?」

「ああ。おかげでSAU経由で遠回りするはめになった」

どうして鉄華団が降りてこられたのか、それがどうしても分からなかったラディーチェだったが、その一言だけで十分だった。

ラディーチェは少しづつ後ろに下がると、今度は昭弘にぶつかってしまふ。

「火星からの通信にも一切答えねえってのはどういうことだ？ お前にはいろいろと聞きたいことがある」

明弘の怒りをぶちまけそうになっている表情を見てそのまま大慌てで遠ざかり自身の机の上にある書類をぶちまけた。

「まあ、サブレたちが先にこつちに降りてきててな、前線の状況は大体把握してるんだ。だからしらを切れるなんておもうなよ」

「ち、違うんです。全部ガラン・モツサの差し金で。わ……私ただ奴に言われたとおりにしてただけで！」

「言い訳ならあいつにしな……今回の一件、あいつはだいぶ怒っているみたいだけどな」
そういうとユージンの見つめる方向をラディーチェも確認すると、いつもより厳しい表情をしたビスケットが部屋の中に入って来た。

ゆつくりラディーチェの前に立ちふさがるのを見つめるのだが、普段温厚なビスケットはそう簡単なことでは怒らないが、怒っているという事が分かるぐらいハッキリと怒りを滲ませている姿を見て怯えたように命乞いを始める。

「ビ、ビスケット・グリフォン団長代行！ そ、そうだ！ ガラン・モツサの居場所になら心当たりがありません！」

「あなたはガラン・モツサと共謀し今回の紛争を仕掛けましたね。あなたの身柄はア―

ブラウとSAUが引き取るということで双方が合意してくれました。両陣営は今回の事件に決着をつけるつもりです」

すると、ザックが部屋に急いで入ってきた。

「団長代行！ 副団長！ ラフタさんから通信です」

ユージンが黙り込んだまま睨み付けているビスケットに変わって「繋げ」と告げるとザックとは急いで繋げ始める。

ザックはすぐに通信をつないで見せると通信機からラフタの声がハッキリと聞こえてきた。

「つながりました！」

「一旦戦闘の方は収まったよ。まあ、ほとんどサブレと三日月が何とかしたけど」

「そりゃよかった」

「それがあんまりよくもないんだよね。この一か月で鉄華団にもだいぶ犠牲者が出てる」

「そうか、分かった一度引いてくれ」

昭弘が襟首を締め上げ、ラディーチェを問いただす。

「そのガランって野郎はどこにいる？」

「もし戦場にはないのであれば国境を越えたSAU領内にいくつか身を隠すための場所

が……」

「なんでてめえが知ってんだ？ 俺たちをはめようってんじやねえだろうな？」

「ガランは平気で人を欺く男です。対等な交渉をするために色々調べておいて私のデスクに……」

昌弘がデスクの中からその情報が入ったデータを見つけてそのままそれをビスケットへと手渡す。

その資料には確かにガランの隠れ家に関する資料が描かれていた。

「分かりました。ですが、だからと言ってあなたの処遇が良くなるわけではありません。あなたにはきつちりと罪を償ってもらいます」

「そ、そんな！」

「あと、マクマードさんからの伝言です。「お前を切る」だそうです。テイワズからの援助も見込めないと思っただけです。ユージン」

「おう！ ほら！ 行くぞ！」

ユージンがほかの団員と共にラディーチエを引きずって連れていく。

昌弘がビスケットの方を見ながらそつと訪ねる。

「ビスケットさん。どうしますか？」

「俺も出るよ……昭弘、出撃準備だ」

(マクギリスの首は取れなかったが……まっあとはラスタルがうまくやるだろう。こっちはマハラジャを調べなければな……あいつが生きているのなら少しばかり厄介だからな)

「ここでの仕事はもう終わりだ。傭兵は傭兵らしく次の戦場へ向かうとしよう」

しかし、そんな中傭兵の一人が「襲撃が来た」と連絡を入れてきた。

「どこの部隊だ!？」

「詮索はあとだ! 戦闘用意! ここは放棄する。持ちきれない物資は破棄してかまわん!」

(こんな所で……さすがに笑えんぞ)

ガランが投げたコップがつぶれると、ガランはそんなコップには目もくれずモバイルスーツに飛び乗った。

戦場に出ると既に混戦状態になっており、ガランは最悪の状況を想定し味方を切るために策を打つ。

「数が多いな……囲まれる前にバラけるぞ! 合流地点で会おう!」

ガランが去るとき、三日月とハツシユ、明楽、ジョシユアは二人で敵のモバイルスーツと会敵していた。

「来ました」

「俺が先行するから適当についてきて。無理はしなくていいから」

「そうそう。お坊ちゃんはそので大人しくしているのよ」

(俺だつて……)

バルバトスが走り、そのまま次々とモビルスーツを殲滅していく中、ラフタやアジーや昭弘たちもまた同じように怒りを抱えながら淡々と殲滅を続けていく。

時を同じくして先にガランだけが目的の場所にたどり着く。

「まだ俺だけか？　　ったく……また兵隊を集めなきゃならんか。すまんラスタル。次の仕事を始めるのは少し先になりそうだ。しかし、なんで居場所が……まさかマハラジャが生きて……」

そんなとき、木々の奥からアガレスが単身姿を現した。

「そうかラディーチェか……少し小物と侮りすぎたか」

鉄華団のモビルスーツが現れたところでようやくガランも事態を把握した。

そのころ、ハツシユはモビルスーツに慣れておらず、苦戦を強いられていた。

(こんなはずじゃ……怖え……怖え……怖え！)

武器を弾かれ、戦うことのできないハツシユは恐怖のあまり目をつぶってしまふ。しかし、そんな中バルバトスはハツシユの乗るモビルスーツを吹き飛ばす。

「え？ そつちを吹っ飛ばすんだ…」

「邪魔」

「私でもそつちを吹っ飛ばすと思う…邪魔だもん」

「素晴らしいっそのまま前線に去っていく姿にハッシユはかつての兄貴分の姿を重ねた。

「俺は！」

このままでは終われないハッシユはまた立ち上がろうとしていた。

そのころサブレとガランも戦いを始めていた。

サブレのレンチメイス改をガランのゲイレールに叩き込むと、ガランはそれを何とか受け止めて見せたが、サブレはゲイレールの足元を蹴りで払って見せる。

ゲイレールは一度体制を崩し、そのままレンチメイスで後ろに軽く吹き飛ばされる。

「この戦い方…どこかで」

「ここで終わるような男じゃないんだろ？ 立ち上がって見せてくれよ」

「小童め！ よくほざく」

ゲイレールが武器を振り下ろすが、サブレはそれを後ろに軽く下がることで回避する。

サブレはそのまま右拳をたたき込み、そのまま連撃を加えていきレンチメイス改で左腕をつかみ、隠しパイルバンカーを打ち込む。

「この戦い方！ 思い出したぞ!! マハラジャ!!」

サブレの戦い方にガランはマハラジャの姿を重ねたが、しかし、一瞬の隙を突きサブレはゲイレールを押し倒しレンチメイスを振り上げてそのまま吹っ飛ばす。

「マハラジャ……………やはり……………お前は……………」

頭から血を流しつつガランは勝利を諦めた。

サブレにはガランを殺そうとする素振りが無いとガラン自身はハッキリと分かったからこそここで勝利を諦めて自決する事がラストルに出来る唯一の道だと判断した。

そう……………そこまでは読めたのだ。

ガランは自爆装置に手を掛けて自爆させようとした所で、ビスケットはそれより素早く地面に向かってランチャーを打ち付けると、地面から四本のワイヤー付きのランスがゲイレールに突き刺さり高圧電流がアツという間にゲイレールを襲う。

ガランの悲鳴が近くに居たサブレの耳元にまで届いたが、そんな事で表情が変わるサブレでは無い。

「安心しろよ……………ある意味死だよ……………心の死が待っているさ。良かったな。これで考えないで済む。沢山人を不幸にしたんだ…今度はお前が不幸になる番だ」

そうやってガランが生きているとハッキリと確認したところでサブレは殺気のような鋭い気配を感じ取った。

真つ赤なガンダム・フレームが現場に現れて大剣をアガレスへと振り下ろす。

「っ?! 貴様…いつの間に」

「さあ…どれぐらい強くなつたんだ? それを教えてくれ!」

ゼパルの目が赤く光りとたん動きが素早く、かつ予想不能な変則的な動き方に変わる。

素早く不気味な動かし方はサブレ自身エドモントンの戦いで良く見たものだった。

そんな状況で三日月のバルバトスが現場に割って入ってきた。

上空ではジョシユアの機体が飛び回って仲間達に情報をリークしている。

三日月のソードメイスを回避し、三日月を土台にして後ろのアガレスに大剣を振り下ろした。

三日月はソードメイスを下から振り上げようとしますが、それはゼパルが受け止める。

その状態でアガレスはレンチメイス改を力一杯振り下ろすが、その攻撃とバルバトスの攻撃を受け止めつつイラクはそつと微笑んだ。

「良いねえ……ふうん。なるほど……少し試してみたかっただけだし……これ以上騒いだら困るしな……上手く行って良かった。それでも君たちを応援して居たんだよ。その男は

私も困らされていたからね」

「白々しい事を……何がしたいんだ？」

「さてね……近いうちに分かるさ……」

そう言つてゼパルは大きく跳躍して現場から逃げていく。

アストンと共にタカキは最低限の事情を聴かされたのち、いったん帰宅することになり、タカキとアストンはフウカの待つ家へと帰つて来た。

フウカはタカキとアストンが無事なことを確認すると軽く涙を浮かべ二人に抱き着く。

「お帰り！」

「ヒゲのおじ様が？ そんな……どうして？ おじ様は誰よりも強くて優しく……」

動揺を隠せないジュリエッタにラストルは諭す。

「ジュリエッタ！ 彼の死を嘆くのはやめろ」

「ラストル様……？？」

ジュリエッタは大粒の涙を流し、嘆いていた。

「彼はどこにも存在しない。私の活動に裏で協力するため彼は家も所属も本当の名前す

ら捨て戦いの中で生き、そして死んだ。存在しない男の死を悲しめばそこまで尽くしてくれた彼の思いを踏みにじることになる」

「……はい」

ジュリエッタは涙を拭き前を向いて部屋から出て行く。

少し歩いたところである士官が歩み寄ってきた。

「お芝居も疲れるだろ？」

「ええ。悲しくないわけじゃ有りませんよ。これでもギャラルホルンに入るに当たって少しは面倒を見て貰った訳ですし、それに生きてることだって知っています」

「なら何が悲しい？」

「人として死んでしまう事…死人のように一生抜け殻のような人生を送る事への哀れみです」

そう言って二人は移動していく。

ラスタルは一人星空を眺めながらそっと呟いた。

「友よ…」

彼は知らない。

静かに貶められていると言う事に…。

幸せを求めて

アーブラウとSAU間の紛争から既に一か月が過ぎ去ろうとしており、SAUとアーブラウは鉄華団の仲介を得る形で紛争を終結へと導いた。

ギャラルホルンのセブンスターズの会議ではイオクがマクギリスの失態を追求しようとしていたが、マクギリスは周囲を巻き込み押さえ込んでいる。

「今回のSAUとアーブラウ防衛軍の戦闘について、全ての責任は地球外縁軌道統制統合艦隊にあることは明白！ 今回の件で水面下で行われていた、経済圏同士の争いは表に噴出するでしょう。そうなれば現在のギャラルホルンにどれほどの抑止力があるか……」

「クジヤン公落ち着きたまえ。この騒動はファリド公だからこそ最小限に被害を抑えられたとの考え方もある」

「気になるのはアーブラウ防衛軍を指揮したという男だが……」

「調査の結果地球上のすべてのデータに該当する人物はありませんでした」

「本当にそんな男がいたのか疑問だ」

ラスタルのそんな一言でガランの一件は打ち切りになってしまった。

ラストルとマクギリスは会議が終わったころ、廊下で鉢合わせになってしまった。

お互いに営業スマイルを見せながらももうわべだけの会話を繰り広げる。

「今回は大変な目に遭ったな。いや、ボードウィン公の言う通りだ。君でなくては今回の騒動は収められなかっただろう」

「いえ。そもそも騒動が起こったこと自体が私の失態ですので」

「君も大人になったものだな」

ラストルとマクギリスは昔出会っていた。ラストルはその時のマクギリスの欲していた物を今でも覚えていた。「バエル」とそういつた彼の事を。

「まさか子供の口からそんなものの名前を聞くとはな。まあ君には今でも驚かされるが。イズナリオ・ファリドの失脚劇の手際も実に見事だった」

「なんのことを仰られているのか計りかねます」

「私怨が君の原動力なのかと思っていたが、イズナリオ・ファリドが亡くなった今、君はギヤラルホルンで何を成し遂げたいのか……、しかしそれが分かる時はお互いに状況が今とは大きく変わっているだろうな」

そういうとラストルはマクギリスの前から姿を消した。

そして石動へと向ってマクギリスはふと訪ねる。

「ガラン・モツサについての独自調査の結果は？」

「やはり正体を追いきれませんでした」

「二人の人間の素性を完全に闇に隠す。それはエリオン家であれば十分に可能だ」

「ラストル・エリオンはあとどれだけの手駒を隠し持っているのでしょうか……」

マクギリスはまっすぐとラストルの消えた方を見つめていたが、そこにラストルはいなかった。

蒔苗は何とか一命をとりとめ、クーデリアと病室で話をしていた。

浮かない顔をしている蒔苗と紛争解決のために動き回ったクーデリア、お互いに状況が変化した事へのいたたまれなさを感じていた。

「まるで狐につままれた気分だ、目覚めたら一つの戦争が始まり、そして終わっていた」

「SAUとアーブラウ防衛軍は和平調停を受け入れました。鉄華団は地球から撤退するそうです。手続きの為、オルガ・イツカも今し方……」

「チャド・チャダーンはすでに退院したと聞いたが？」

「はい、今はもう現場に復帰したと」

「そうか。おいぼれを助けるために若い命を散らせてはあの世で悔やみきれんからな」

蒔苗は微笑みながらチャドの無事を喜んだが、同時にそんな彼にクーデリアは驚きの

顔を見せた。

「蒔苗先生はもっと冷酷……あついえ、情に流されず冷静に物事を判断する方かと思っ
ていました」

「年を取って変わったのかもしれない」

「素晴らしきことです」

「いや。この年での変化はもはや退化にすぎんよ。今回は運よく命拾いをしたが、すで
に限りは見えている。しかし、この年までわしが得てきた人脈を未来ある誰かに譲るこ
とができれば……クーデリア・藍那・バーンスタイン。どうだ？このまま地球に残らな
いか？」

「そのお話なのですが……」

クーデリアがそう切り出すと、病室をオルガとビスケットが訪ねてきた。

話を切り出したのはオルガだった。

「鉄華団か……何ようかな？」

「爺さん……話があるんだ」

チャドは端末に記載されていた今回の戦死者リストを見ながら階段で一人落ち込ん
でいた。すると、そこに昭弘とラフタがやって来た。

「今回の戦死者か」

「ああ。俺がふがないせいりで、こんだけの仲間を失っちゃった……」

「お前のせいじゃない」

「団長やビスケットはいつもこんな気持ちなのか……一分一秒が耐えきれねえ、やり切れねえ。自分が前に出て傷ついた方がずっとましだ」

「そういえばアストンって昭弘と同じ苗字だよ。アストン・アルトランドって」

「ああ。ブルワーズにいたヒューマンデブリの生き残りには苗字のない奴が多くてな、助かってよかった。サブレには感謝しねえとな。失ってからじゃ遅すぎるからな」

「……そうだね」

明弘の言葉にラフタは微笑みながら返してくれた。

タカキとユージン、オルガ、ビスケット達は帳簿などの情報整理をしていたが、その殆どをラディーチェが管理していたと言うこともあり難航を見せていた。

「おいタカキ、こつちの帳簿はどうなってる？」

「それは……すいません……ラディーチェさんが管理していて」

「こつちは？」

「すいません……それもラディーチェさんしかわからないんです」

オルガたちは事務所で撤退の為の準備を行っていたのだが、予想外の苦難にユージン

がため息を吐き出していた。

「結局の所、戦争なんて起こる前から地球支部は実質ラディーチェに牛耳られてたつてわけか」

「文句言つても仕方ないよ……基本的にみんなは実戦ばかりで、事務的な仕事は俺がやつてたし……」

「だな……こればかりは俺たちの責任だ」

「どうすんだ？ ラディーチェの奴を連れ戻すか？」

「止めておこう、ややこしい状況になるだけだし……俺はあの人を嫌いだ」

ユージンがそつとオルガの方に近づきながら訪ねる。

「なあ……ビスケットの奴、なんであんなに機嫌が悪いんだ？」

「自分の責任だつて感じてんだろ？ 自分が地球支部にいれば良かったつてな……」

「はあ？ そんなの仕方ねえだろ。サブレ達が協力してくれたつて言つてもビスケットは本部勤務だつて決まつたちまつたんだから」

「元々裏方はいつが一手に引き受けていた。それが今回の結果につながつちまつたし、元々あいつはラディーチェには反対だったんだ。頭を使うやつをいきなり入団させると、トラブルになるつてな。まああいつの予想通りになつちまつたがな。これは俺の責任でもある」

ユージンは肩をすくめ自分の席に戻っていくと、バスケットがタカキに声を掛けた。
「タカキ、ラディーチェさんが管理していたデータすべて俺に回してくれ、俺が何とかするから」

「だったら、バスケットお前が今してる整理の仕事を俺に回せ、俺とユージンでなんとかすつからよ」

少しずつではあるが仕事が片付きつつある状況の中タカキは自分の不甲斐無さと無力さを噛み締めていた。

悔しいという気持ちでそつと握りこぶしを造っていた。

それを外からそつと眺めていたサブレだった。

タカキは暗い中、座り込んでいると唐突に後ろから三日月が声を掛けた。

「どうしたの？しけた顔してんね」

「俺は鉄華団失格です。ラディーチェさんの嘘に乗せられて訳の分からない人間の命令に従った。鉄華団にとって団長の命令こそが絶対なのに、俺は……」

「タカキは自分に与えられた仕事を果たしたただけだ。オルガの命令だと思って従ったんでしょ？」

「それはそうですけど……」

「だったらいいじゃん」

三日月はそういうとそのまま外に出ていった。

入れ違うようにクーデリアが近づいてくる。

「タカキ……」

「三日月さんやバスケットさん、それにサブレさんはすごいです。あの時、サブレさんが割って入らなかつたら俺かアストンは死んでました。それにラディーチェさんが勝手にしていた仕事をバスケットさんはあつさり解決してくれて、俺……今でもバスケットさんに甘えてる。あの時の帽子をかぶる覚悟もなくて……俺……バスケットさんに合わせる顔がありません」

「私がこんなことを言うのは出しやばりかもしれないけれど、あなた達はもつと学ぶ必要があると思う。解釈の仕方は一つじゃない。選択肢は無限にあるの本当はね。だけど、その中で自分が選べるのは一つだけ」

「自分でなんて……俺なんかには選べないです」

「一つを選び取るのは誰にだつて難しいわ。でもね。多くのものを見て知識を深めれば物事をきちんと判断し、選択する力が生まれる。誰かの指示に頼らずとも。バスケットさんだつてあの日自分で判断し、選択した。だから彼は今、まっすぐに歩いている。タカキはそんなビスケットさんから帽子を託されたのでしょ？」

タカキの手をそつと重ねてくれるクーデリアの優しさ、改めて突きつけられてきたの

は幸せの選択肢だったのだろう。

鉄華団の地球支部前に一台の高級車が止まったのを団員の一人がしっかりと確認していた。

中からトドと呼ばれている男が顔をだす。

「ようよう元気か？お前ら。な〜んかまた盛大におつ死んだらしいなあ。おめえらの兄貴分として励ましに来てやったぞ」

「兄貴って……」

「あんた、じじいじゃねえかよ」

そんなトドの後ろには変装したマクギリスが乗り込んでおり、マクギリスを部屋まで案内し、マクギリスはたどり着くとオルガと話を始めた。

「ガラン・モツサはラスタル・エリオンの息がかかっているとみて間違いない」

「またラスタルってやつか」

「彼らを討たずしてギャラルホルンの改革はありえない。相手側が仕掛けてきたということはもはや全面対決も近いだろう。これからも君達には力を貸してもらわねば」

「手を組むだけならいい。だが……俺達にも目的がある。もし、アンタと俺たちの意見が食い違ったらどうする？」

「その時は手を切ることを約束しよう。それに私は確信しているんだ。君達の力を借り

ることができれば、私は必ずやギャラルホルンのトップに立つことができる。その暁にはギャラルホルン火星支部の権限をすべて鉄華団に移譲しよう」

「はあ？」

オルガは突拍子のないそんな条件にいまいち話を飲み込めずにいた。

「火星は各経済圏の植民地だが、それを束ね実際に管理しているのは我らがギャラルホルンだ。その権利を君達が持つとなればそれは鉄華団が火星を支配するということだ」

「火星を支配？」

「ああそつだ。君達は火星の王になる」

しかし、この時のオルガはすでに組むべき相手を見極めていた。

そんな会話をじつと聞いていたサブレ。

タカキは廊下をため息を吐きながら歩いていると、曲がり角で大量の荷物を抱えているビスケットにぶつかりそうになる。

「あつ……ごめん。タカキ、大丈夫だった？」

「え、あ、はい。持ちましようか？」

タカキはビスケットの荷物を抱えて一緒に歩いていると、抱えていた荷物が死んだ仲間との遺品であると気が付いてしまう。

タカキは思い悩んでいると、ビスケットが話を切り出した。

「そういえば……フウカちゃんは元気？ 学校に通っているって聞いたけど」

「はい。元気ですよ。アストンともすっかり仲良くなつて……」

「悩みがあるなら聞くとよ」

そんなビスケットの優しい言葉にタカキは一瞬驚いてしまう。

そして、本心を打ち明けた。

「俺……鉄華団をやめようと思つてるんです。でも、それが正しい判断なのかどうか分からなくて……俺だけ逃げているようで……それに、アストンの事だつて」

「だったらアストンと二人で話したらどうか？ 二人で決めたらいいよ。俺だつてもサブレと決めてきたんだから。タカキとアストンは本当の兄弟じゃないけど、地球に来てからアストンと二人で歩いてきたんなら、タカキが相談する相手は俺じゃなくつて、アストンじゃない？ 大丈夫、どこにいても、どこで仕事をしていても俺たちは仲間で、家族だつて言えるよ」

「び、ビスケットさん……」

しかし、そんな話をアストンが立ち聞きしていた。

アストンがそんな話を立ち聞きしていると、廊下の奥から昭弘が姿を現した。

「どうした？ アストン」

「あ、昭弘さん。おれ……。タカキが鉄華団をやめるつて……俺どうしたら」

アストンが思い悩んでいると昭弘はすれ違いざまに肩に手を置く。

「二人で話せばいい。お前がどこにいても俺たちは家族だ」

「……………はい」

アストンは廊下を歩き、外に出るとぼったりとタカキと遭遇してしまう。気まずい雰囲気の流れると、二人は同時に話を切り出した。

「あのさ……………俺……………」

二人は結論を出そうとしていた。

団長室に主要メンバーを集めるとマクギリスからの提案を飲むかどうかを話し合っていた。

「待ってくれよ。俺、脳みそが追っつかねえ……………」

ユージンが頭を抱えて悩んでいる。すると、三日月がいの一番に聞いた。

「オルガはどうしたいの?」

「断るつもりだ。手を組むだけならいいが、ここまで話が大きくなると別だ。それに俺たちが組む相手はすでに決めてある」

「どういうことだ?」

ユージンがふとオルガに聞くと、クーデリアとビスケットとアイコンタクトで合図を送りあう。そしてクーデリアが話を切り出した。

「私たちはマハラジャ達のフォートレスと手を組むことを決めました」

「「ええ!？」」

メリビットさんを含めて、団員のほとんどが驚きを隠せなかった。

「ごめん。いつかみんなには話そうと決めただけど、二年ぐらい前からその話を受けていたんだ。独立できるって話だし、クーデリアさんの最終目標と同じ場所だからって。手を組むって決めただ」

「ちよつと待つてください。テイワズとの関係はどうするんですか?」

「親父にはすでに話を通ってる。すでに了承済みだ」

「いつの間に……」

「話が私たちに来た時点でマハラジャが独自に説得してくれたんです。どう転んでもメリットがあるとして承してくれたので」

「マジかよ……。じゃあ、俺達鉄華団はフォートレスと組むってわけか?」

「いや、鉄華団が組むんじゃないやねえ、俺たちとお嬢さんで火星の複合企業『ファミリア』を作り、ファミリアとフォートレスが手を組んでことを起こす」

「なんだ? ファミリアって……」

チャドや昭弘は首を傾げ聞きなれない名前前に声を出して問う。

「俺とお嬢さんでテイワズのような組織を作るって話をだいぶ前からしてたんだ。その

複合企業の名前が『ファミリア』だ。火星の経済をファミリアが独自に握る」

そんな話に昭弘たちは関心の声をあげるが、すぐにメリビットさんが反論する。

「ちよつと待つて下さい！ そんな話、経済圏が許すわけが……」

「いえ、アーブラウとSAUにはすでに話通っています。他の二つの経済圏についても蒔苗さんが説得してくれる手筈になっています」

「いつの間に……どうやって」

「今回鉄華団はギャラルホルンの代わりに戦争の仲介役をかつて出ました、その際に成功の暁にはファミリアの立ち上げを許してもらえるように働きかけたんです」

「よく経済圏が許したよな」

「それは……経済圏にもメリットがあるからなんだ。前に名瀬さんが言つてたよね。経済圏は今のギャラルホルンを重荷に感じ始めているつて……、マハラジャさんの目的はギャラルホルンを変えること、そしてそれができる唯一の人物がマハラジャさんなんだ。その為の最低条件はラスタル・エリオンを討つこと、これはマクギリスさんと変わらない、でもそれができるのはあの人だけだと今のところは思っている」

「待てよ、なんで一組織がそんなことができるんだ？ たかが組織だろ？ 戦力だつてたかが知れてるだろ？」

ユージンの疑問は最もであり、ほかの団員も同じ意見だった。

「それについてはサブレから教えて貰うことにしている。入ってくれ」

部屋の中へと入ってくるサブレがゆっくりと口を開いた。

「俺達フオートレスは元々隠した戦力が多く、結成された歴史もギャラルホルンと同等の歴史がある。俺達の最終目標はギャラルホルンが握っている自治権を経済圏へと返却し、独自の統一防衛軍へと変えること。そして……かつて裏切った裏切り者に制裁を与える事。これは気にしなくて言い。これは鉄血のオルフェンズ達だけの血の盟約だから」

全員が言葉を失っていると、最後にオルガが全員に確認を取る。

「そういうわけで、俺達フアミリアはフオートレスと組む。この話に乗れねえってやつがいたら遠慮なく出てきてくれ。別に止めやしねえ」

ユージン達はやめようとしないうち、タカキとアストンが黙って前に出てきた。

「団長、俺とアストンは鉄華団をやめます！ 団長が俺たちの未来の為に悩んでいろいろと考えてくれてるのはわかっているんです。だけど……俺とアストンは今の幸せを手放したくないんです」

「俺たちは今の幸せを守るために地球に残ります」

「分かった。俺にはお前を止める権利はねえよ。今まで長いこと鉄華団の為に尽くしてくれてありがとな。タカキ、アストン」

「お世話になりました」

それぞれが選んだ幸せの道、それは求めたからこそ選んだ未来だった。

誠の願い

三日月は着ているスーツを鬱陶しいような目で見つめつつ窮屈そうな顔をして首元を弄っていたが、それを隣に座るオルガが止めさせた。

真つ正面に座るユージンは冷や汗を掻きながら緊張で身動き一つしておらず、その隣ではビスケットがソワソワしてこちらも少し落ち着かない様子だった。

オルガは人一倍大きなため息を吐き出し夜の街へと顔毎視線を向ける。

事の始まりは経済圏同士で起きた内紛を終えた鉄華団の協力を得たフォートレスからパーティーへの参加を促された。

フォートレスの決起集会も兼ねたパーティーであり、お金持ちなどが集まって仰々しい催しであることを事前に忠告を受けていただけに全員の緊張はピークに達していた。

「なあ…昭弘は!?! あいつは来ないのかよ」

「昭弘が参加できるわけ無いだろ。あいつらは全員撤退の準備だよ」

「なら三日月はどうなんだよ! 同じじゃねえか!!」

「三日月はマハラジャさんからの指示なんだよ…俺と三日月は強制参加だって…今回の話し合いにどうしても必要だから連れてこいって」

ユージンはイマイチ納得が出来なかったが、迫っていく四階建ての建物が見えてくると青ざめて行くユージンの表情が面白かったビスケット。

洋風の建物前で止まり中へとドンドン入って行くドレスを身に纏ったセレブ風の女性を見るだけでこのパーティーがどれだけ大掛かりなのかが良く分かる。

流石にタキシードを用意までは出来なかったオルガ達はなんとか手に入れたスーツを身に纏って現れたが、周囲にいるタキシードをすっかり着こなしている人達を見るとユージンは恥ずかしくて仕方が無かった。

「俺達滅茶苦茶浮いてんじゃないよ……クソ……俺は参加予定じゃ無かったのに」

「しゃあねえだろ……俺とお前も是非来いって言われたら無為にするわけにも行かないし、何より三日月の面倒をビスケットに押しつけるわけにもいかねえだろ。それにここで重要な話があるって言われた断るわけにも行かねえよ」

中へと入って行こうとする一行の前にタキシード姿をしたサブレが姿を現し、そんな彼に対して表情を曇らせるユージン。

何故そんな顔をするのか全く分からないサブレはそれを無視して中へと一行を入れていく。

そんな中ビスケットと三日月にだけ赤いハンカチを手渡し左胸のポケットへと見えるように入れる。

「何だよ……これ」

「後で分かるさ。今日ここに来ているのは全員がフォートレスに出資している人間達だ。お前達の仕事の依頼主という事でもある。ここで変なことを言えば何を言われるか分かるよな？」

サブレからの脅しに三日月やオルガやビスケットの目がそつとユージンの方へと向き、ユージンはそんなメンバーに「何もしねえよ！」と叫んでツツコム。

「大体決り集会って何する気だよ」

「フォートレスの結成時よりの誓いを果たす準備が整いつつあるという証明と、その決意表明でもある。ここに集まっている人達は皆『ギャラルホルン』を打倒して欲しいと願って集まっているんだ」

「ようするに現体制を崩壊させたいと？ でもどうして……俺達が言うのもなんだけどさ……ギャラルホルンに従った方がマシだと思うけど」

「……ここに集まっているのは皆鉄血のオルフェンズに参加したパイロット達の遺族の一族だ」

聞き慣れない言葉に首を傾げる四人。

「俺達グリフォン家もそうだし、オーガス家そうなんだが……最初のオルフェンズと言われたメンバー達はその殆どが死んでしまったが、遺族は残った。その遺族はギャラルホ

ルンの現在のやり方や過去の裏切りを許していない」

「何だよ…裏切りって」

「彼らはな…当時のリーダーのやり方に反発し裏切って金に目が眩んでしまったんだ。とある目的の為に一緒に戦っていたメンバーを裏切った。しかし、それは鉄血のオルフェンズ結成時に『絶対にしてはならない』というルールに反してしまふ」

「でもよ…そんなの今更どうしようもねえだろ？」

「それが出来てしまうんだよ。その証明の品をフォートレスはずっと持つて居た。いや…発見してしまったと言っても良い」

そこまで黙って聞いていたビスケットがふと気になった事をそのまま訪ねた。

「だったらどうしてそれをギャラルホルンは探さなかったの？　だって…それが有ると困るんでしょ？」

「探していたはずだ。でも…見つからなかった。最も見つけたのがセブンスターズの息が掛かった人間以外ならむしろ裏切りの対象になりかねない。なにせ、それは発見しただけで断罪できる証拠の品でもあるんだからな。それが大分前に見つかって以降、父さんの所にひっきりなしに作戦決行は何時だつて声が届いていたんだ。準備不足を理由に逃げていたが…オルガ達のお陰で色々な人達の協力を得られたし、今回の一件で一番厄介な奴への切り札を複数個造ることが出来た」

「それってあの男の事か？ あれってそんな重要な奴だったのか…：て言うか生きてのか？ 火傷だらけでヤバかったぞ」

「今は生きた屍状態だけだな…：喋らせるだけ喋らせたから今は嚴重監視状態で匿っているから…」

「…殺せば良いんじゃないか？」

ビスケットはユージンの言葉に肘をぶつけつつ不満をぶつける。

「あれでも父さんの元友人。殺したくないんだろ。いざとなったら首の爆弾を起爆させると言っていたから例え元の状態に戻っても平和な生き方は出来ないよ。この人達に俺達鉄血のオルフェンズの遺児が居ること、ガンダムが存在することを理解して貰い。作戦実行が近いことを伝えるんだよ」

「ねえ…サブレ。もしかして…その証拠ってアガレスのこと？」

サブレは何も言わない。

パーティー会場でたらい回しにされた三日月の表情は疲れ切っており、オルガはそんな三日月を連れて全員と一緒にサブレの案内の元マハラジャの元へと向っていた。

サブレが部屋のドアをノックして中へと入って行くと、濃いタバコの煙が充満しており、それを三日月は物凄く嫌そうな顔をしている。

「おお…入れ入れ。 ったく…やってられん。 文句を言うだけの奴は楽で良いよなあ…何も考えていないんだからな。 こっちは作戦成功率が上がるようにと悪戦苦闘しているにもかかわらず」

「それを言い出したらきりが無いって皆で決めたでしょ。 それよりオルガ達に詳細の説明をするんじゃない？」

「おおそうだ…サブレ、ジュースを用意してやれ」

サブレは「はいはい」と言いながら換気扇を動かしてからジュースを人数分集めて全員の前に置く。

マハラジャはタバコの火を消してから真面目な顔をしてオルガ達へと顔を向けた。

「ある程度の詳細はサブレから聞いたと思うが…我々フォートレスの最終目的はギャラルホルンを壊滅させることだ。 その後の新しい治安維持組織を作り出す事も含めてな。 お前達のお陰で経済圏を纏めることも出来そうだし…改めて謝礼の品が依頼主からきている」

そう言いながらマハラジャは大きなアタッシュケースをドスンという音と共におき、オルガは恐る恐るケースを開けるとそこには大量の金塊が並んでいた。

ユージンは喉を鳴らし、三日月は常に無表情、ビスケットですら動揺してしまっていた。

「現金は勘弁してくれ。現金は足が付きかねないな…この金塊を売れば今回の依頼金としては十分だろう」

「いやいや…！　こんな…」

「受け取れ。危うい所で経済圏同士の殺し合いからラスタルが介入する可能性があった。そうなれば最悪こつちの作戦に支障がでる所だった。依頼主も安全が保証できたと安堵の息を漏らしていたよ」

「なら良いけどよ…」

「でだ…お前達これからどうするつもりだ？　さっきも言ったが、フォートレスは最終目標としてギヤラルホルンを壊滅させる。これは前身組織である鉄血のオルフェンズからの目標でもある。その為にはリーダーの遺児の一人であるグリフォン家の末裔であるサブレとビスケットが必要だ。お前達には協力して貰わなければ成らない。無論その分の報酬も用意する。あのお嬢さんとお前達がしようとしていることを言えば…俺達に協力することが最短の道になると思うが？」

オルガの目が大きく開きその後そつと細くなつていく。

「あんた…どこまで俺達のことを…」

「どうする？　鉄華団…お前達と私たちの最終目標は同じだ…それに協力することが出来れば同時に世話になつているテイワズへの恩返しになると思うが？」

唸るオルガをマハラジャは笑いながら答えを待っていた。

そしてマクギリスとの取引に関する一連の会話を終えた一行、チャドと一緒にタカキとアストンは三人で歩いていった。

「地球でいい仕事がないかビスケットが走り回りながら探してくれてる。じきに見つかるさ」

「すいません俺達……」

二人が頭を下げ謝っていると、チャドは気にしておらずタカキとアストンに優しく声をかける。

「いいんだ。地球支部はお前たちのおかげで本当に助かったよ。離れていても俺達はずっと家族だよ」

しかし、三日月はそんなタカキ達に別の言葉を掛ける。

「いや違うでしょ。タカキとアストンの家族はフウカだけでしょ？俺たちの事は気にしなくていいから」

そういいながら三日月はすれ違っていく。昭弘がそんな三日月の発言にフォロー入れてくれる。

「気にするな。あれはきつと三日月なりの優しさだ。アストンの事をよろしくな。アス

トンもこれからは新しい家族と仲良くしろ」

「は、はい」

これからの幸せを誰もが願っていた。

「しかし、面白い話になってきたの……」

蒔苗は病室での話を思い出していた。

オルガ達の提案とマハラジャからの今後のスケジュールの話。

「火星複合企業の立ち上げじゃと？」

「ああ、それを認めてほしい。もちろん、SAUとアーブラウには事前に説得した。あとはオセアニア連邦とアフリカンユニオンだけだ。あんたにはそっちの説得をしてほしい」

「もちろん構わんが、そんなものを作ってどうするんじや？」

「火星が独立するというのは少々危ないことだと今は考えています。しかし、今のままでは火星の貧困などの問題は解決できません。ですから……」

「それがある程度解決出来る方法として俺たちはファミリアを作りたいんです」

「もちろん、勝つための算段はある。あんたたちにとつても悪くない条件だ」

蒔苗はひげをいじりながら少々悩むと、ゆっくり目を開ける。

しかし、蒔苗はそんなオルガ達がそんなことが出来るのかどうか疑わしい目で見ていたのだが、それを証明するようにマハラジャが部屋に黙って入ってきた。

決して喋らないマハラジャの行動に真意を掴んだ蒔苗。

「たしかに、わしらにもおぬしらにもメリツトのある条件のようじゃな。わしらはギャラルホルンへの発言権を獲得し、おぬしらは火星の経済面での権利を獲得する。そして、テイワズもまた木星での経済の権利を正式に獲得する。だが、それはおぬしらが勝てればの話じゃ。できるのか？」

「できなきやこんな話はあんたにはしない」

オルガと蒔苗が軽くにらみ合うと、蒔苗は微笑み了承する。

「よかろう……この話に乗ろう。他の経済圏はわしの方から説得しよう」

そんな話を思い出すと、蒔苗は目の前にある一つの写真を手を取る。そこには蒔苗のほかにもう一人ギャラルホルンの士官が移っていた。

「種はもう蒔かれたということか……のう、マハラジャよ」

すでに種は蒔かれ、世界はすでに引き返せないところにまで進もうとしていた。

「ビスケットさん」

タカキはビスケットを呼び出すと、ビスケットの帽子を差し出す。

「これ……返します。俺はもう鉄華団じゃないから」

ビスケットは帽子を受け取ると、もう一度タカキの頭にかぶせる。

タカキは驚いた顔をしながらビスケットの方を見つめると、ビスケットは優しい微笑みを見せた。

「!? ビ、ビスケットさん？」

「あげるよ、タカキに。今度会うときはその帽子が似合う男になってるって信じてるよ」
タカキは頭をあげることができず、必死に涙を我慢しようとするが、それでも涙は止まらなかった。

「何度も、何度も腕で涙を拭いて涙で真っ赤になった顔をビスケットに見せながらハッキリとした声を発した。

「お、俺！ ビスケットさんのおかげでここまで来ました……だから……今まで本当にありがとうございました！ この帽子は一生大切にします!!」

ビスケットの帽子はタカキへと受け継がれた。

昭弘達の会話をそつと物陰から見つめて居たラフタ。

「これで全部か？」

「ああ。死んだ地球支部の奴らの私物はこんなもんだ。残りはタカキとアストンに任せ

た。俺らにとつてはもう地球も第二の故郷みたいなもんだからな。不思議だな。ヒューマンデブリだった頃は自分の居場所なんてどこにもないと思つてたのに」

「ああ。そうだな」

そんな会話を複雑な表情でラフタが見つめていた。そうしているとラフタのそばにアジーが近づいてきた。

「昭弘は？ 大丈夫？」

「弟分が死んだわけじゃないからね。大丈夫だよ」

「じゃなくてあんた」

「えっ？」

アジーの言葉に一瞬言葉を失つてしまう。

一瞬だけ何を言っているのか分からなかったラフタ、すぐに顔を真っ赤にして反論しようとするがイマイチ行動に移せなかった。

「名瀬には黙つといてあげるよ」

「うっ！ だからそういうんじゃない……ああ……でもまあ……とりあえずダーリンには内緒で……」

そんな話を昌弘が立ち聞きしていることにはラフタ達は気が付かなかった。

「火星に戻りやまた似合わねえお偉いさん周りの日々だ」

オルガは黙って三日月の為に袋を破って渡してやる。

すると、悲鳴を上げながらビスケツトが階段から降ってくるのをオルガが間一髪で受け止める。

「大丈夫か？」

「う、うん。サブレ！ 何すんのさ！」

「兄さんが出入り口でうろろうろしてるからだろ？」

ビスケツトとサブレがオルガたちの隣に座ると、オルガが切り出した。

「これで良かったのかって思っちゃうんだ。あの時、ほとんど選択肢がなかったとはいえ、マハラジャの選択を受け入れちゃった。あいつらが反対するんじゃないかって」

「反対しなかったら？ まあ、基本的にみんな俺達に考えることを預けてるだけだと思っただけだね」

「信頼してるって思ってたよ。それにその選択肢が間違っていたかなんてこれからわかるや」

「だね。少なくとも俺たちは選択した。オルガとビスケツトについていくって」

「まあ、俺の場合オルガが断ったらそこまでの関係になっていたけどね」

三日月は「だね」といいながら菓子をかじると、ふとした疑問を尋ねた。

「そういえば、なんで『ファミリア』なの？」

「え？　なんでって……それは……」

オルガが少しだけ笑うと、ビスケットが代わりに答えた。

「俺が考えたんだけど、『ファミリア』って家族って意味があるんだ。それと仲間。家族みたいな仲間って意味で『ファミリア』なんだ」

「ふくん……いい名前だね」

「だな。俺もそう思う」

「ビスケットらしい名前だな」

彼らもまた前に進み始めていた。

「あつ。おかえりなさいお兄ちゃんアストンさん」

「そろそろ二人とも帰ってくる頃かまって待ってたの。お仕事どうだった？」

「うん。まあ……帰ろう、俺たちの家へ。ね、アストン」

「ああ、帰ろう俺たちの家へ」

三人で仲良く帰っていく。笑顔になれる家へ。

ヴィダール立つ

「アトラ……話があるんだ」

桜農場の裏でビスケットはアトラを呼び出しそわそわするビスケット、アトラは優しい表情で答える。

「何？　話があるって言ってたけど……あつ、そうだ。後でクッキーとクラツカにお土産渡しに行くよね。私もついて行っていいかな？」

「あ……うん……そうじゃなくて！　アトラに渡したいものがあるんだ」

そういつてビスケットは隠していた小さな小箱を取り出す。

そして、ゆっくり小箱を開けると中から指輪が出てくるとアトラはその指輪に驚くとすぐにビスケットの顔を見た。

ビスケットの顔は真っ赤に染まっており、照れながらもアトラの目をまっすぐに見つめる。

「け、結婚してほしいんだ……アトラ」

アトラは頷きビスケットは指輪をアトラの指にはめ込む。

「喜んで」

この日は記念すべき日になった。

そしてその話を聞いてニヤニヤしている人間が一人いた…明楽だった。

「手こずっていたシステム回りの調整もようやく完了したか」

ラスタルの目の前では新たなガンダムフレームがようやく調整を終え、出撃の時を待ちわびていた。

その近くで同じように新たなガンダムを見上げるのは仮面を付けた男ヴィダール。

「コロニーの鎮圧任務、お前にも出してもらおうぞ。ドルトの一件以来コロニーの独立運動は激化の一途だ。経済圏に自衛戦力を持たせたとこで、鎮圧もままならん。活動家共に金と武器を流している輩がいる限り……」

ヴィダールに話しかけるラスタルを面白くなさそうにジュリエッタは見ていた。

その脇ではある人物へと連絡を飛ばしていると、その人物から返信が返ってきた。

『それがエリオらしいな…』

ジュリエッタは内心「なんでそんな話を…」と思ったが、あの弟のような男の事だから父親にでも聞いたのだらうと思ったが、それはそれで気に入らなかった。

そんなジュリエッタは会話をしているとと思われる二人を物陰からそつと見守る。

「裏に誰がいようとかわまない。秩序を乱す武装勢力がいる。ギャラルホルンが力を振るうのにそれ以上の理由はないだろう」

「今日はよくしゃべるな」

「浮かれているのかもしれないな。ようやくこいつと共に戦えることに」

ヴィダールの出撃の時も着実に近づいていた。

鉄華団本部にはランドマン・ロデイが三機戻ってきていた。雪之丞とデルマはその近くで話し合っていた。

「これ誰が乗るか決まってるんですか？」

「戻って来た三機のうち一機はチャドが乗るつてよ。他はまだ聞いてねえがな」

「なら俺に使わせてください」

デルマは自ら乗ることを名乗り出る。

それに驚きを隠せない雪之丞だったが、デルマの覚悟は堅かった。

「はっ？ 元はおまえさんがいたブルワーズから引き揚げたマン・ロデイだ。ろくな思いがねえだろう？」

「俺達ヒューマンデブリにとってこいつは棺桶も同然だったけど、地球でアストーンが乗ってたんなら俺も……」

すると後ろからダンテが現れる。

「お前ならそういうだろうって昭弘が話をつけてるぜ。もう一機は俺が乗る。元ヒュー

マンデブリの意地見せてやろうぜ」

「ああくやつてもやつても終わんねえ。なんだこの整備地獄」

「俺は楽しい」

「変態野郎。俺はもう勘弁」

ザックはモビルスーツの上でだれているとユージンの姿が見えてくる。途端に焦ったザックはデインにあたる。

「おらっデイン！ 音上げてんなよ！ お前もさっさと手動かせ！」

「おい！ おととい搬入した獅電の調整は終わったのか？」

「今バリバリやつてるところです！」

「明日にはティワズからまた届くからな」

「げっ！ まだ増やすんですか？」

そんなユージンの前には白い獅電がその場に置かれていた。そんなユージンの方にシノが近づいてくる。

「副団長。農場に行ってた奴らが戻ってきたってよ……こいつがオルガ専用獅電か？」

「そーいやあさつき聞いたんすけど……ビスケットさんとアトラさん……結婚したらいいですね」

「はっ!？」

ザツクの何気ない言葉に反応したシノとユージンは言葉を完全に失った。

そして、訓練場ではハツシユとチャドがモビルスーツを使った訓練に明け暮れていた。そしてそれを遠くからアジーとラフタは眺めていた。

「チャド張り切ってんね」

「地球じゃ悔しい思いもしたからね。それはあの新入りも同じか」

「農場から戻ってきてすぐに訓練なんてね。まっおかげで物になってきたか」

「この調子だと獅電の慣熟訓練ももうすぐ終わりそうだね……」

「ああ。ようやくお役御免だ」

「うん……」

帰れるはずなのにどこかうれしそうじゃないラフタはある男の事を思い浮かべていた。

メリビットと雪之丞は格納庫で地球から回収した備品の確認を行っていた。

「これが地球支部から回収した備品のリストになります」

メリビットはどこか心配そうな表情を浮かべる。

そんな彼女に雪之丞は声をかけた。

「一体どこまで戦力を増やすのかしら」

「まあファミリアっていうのを立ち上げちまったら、火星の治安はファミリアが何とかしなくちゃいけねえからな」

「悪魔の名前を持ったモビルスーツが鉄華団に集まっている。なんだか嫌な予感がして……」

雪之丞は優しく頭を撫でる。

「考えすぎだ」

「ふふっ……もう」

「整備長！」

テイワズの整備長のもとにエーコとヤマギが近づいてくる。

「ルプスとフルシテイの調子はどうだい？」

「二機ともいいみたいです。その名前ではあまり呼ばれませんけど……」

「これどうでした？こつちでもいろいろ試したけど結局よく分かんなくって」

整備長たちの目の前には白いガンダムフレームが鎮座しており、鉄華団ではわからないということまでテイワズに預かってもらっていた。

それでもマハラジャ達にでも頼めば分かるだろうと思われたが、残念な事にオルガは金を取られることを嫌がって断っていた。

「モビルスーツのフレームは三百年程度では劣化しないよ。リアクターの寿命はもっと長い。それでどうにもならなかったのはリアクターがスリープ状態だったからだろう。いま立ち上げ作業をしているところだ。そうそう一緒に送られてきたモビルワーカーもどきなんだが、テイワズのデータベースにもこれといった情報がなくてねえ」

するとようやくガンダムフレームのリアクターが起動した。

「エイハブ・ウェーブの固有周波数が取れたぞ、これがこいつの名前か」

「ガンダムフラウロス……」

「オルガ達鉄華団はマクギリス・ファリドからの話は断ったそうです。ですが、これからも少なくとも手は結んでいくということでも落ち着いたと」

名瀬はマクマードとテイワズの幹部メンバーの前で地球支部でのやり取りの一部を話して聞かせた。そんな話にジャスレイがいの一番にかみつく。

「要はメンツの問題よ。鉄華団はおやじの情けで飼ってやってる弱小組織だ。そいつがおやじに相談なくギャラルホルンと取引をした。なあ名瀬よ。物事には順序つつうもんがある。そいつを踏まえずにガキらに好き放題やらせて親に恥かかせるつもりか？ ああっ!？」

「まあ、いいじゃねえか。結果として断ったんだ」

「この先この件で親父に迷惑をかけるようなことがあれば鉄華団は切つてくれて構わない。オルガはそういう覚悟です」

「そんなガキはどうでもいい。てめえはどうすんのよ?」

「その時は……俺が腹を切ります」

「……チツ。おやじ。俺は俺でテイワズの為に動きますよ」

「ああ。どう転んでもいいよう打てる手は打っておいてくれ。いままで通りな」

そこで話は終るとジャスレイはそのまま部屋を出ていく。中庭に出たところでアミダと遭遇した。

「何かいい事でもあったのかい? 悪い顔してさ」

「絡んでくるとは珍しいじゃねえか。名瀬に愛想を尽かして俺に飼われる気になつたか?」

「まさか。冗談でもやめとくれ」

「女とガキを使つてのし上がる軟派野郎のどこがいい?」

「女を女としか見てないあんたにはわかんないだろうね。名瀬は私らを使つてるんじゃない。居場所になつてくれてるんだよ」

「そりゃいかにも女が言いそうなことだな」

「ターピンズにいる子はみんなあんたみたいな男に使われてた連中さ。危険な運びの仕

事を割に合わない安い金でやらされてね。そういう子を名瀬が自分の器量で抱き込んでできたのがタービンスズ。あんたの器じゃその違いが分かんないだろうけどね」

「俺は自分の女をモビルスーツに乗せるようなバカじゃねえからな」

「ほくらやつぱりわかかってない」

アミダが話していると後ろから名瀬が姿を現した。

「悪い待たせたな」

「あんたを待つのも私にとつては楽しみの一つさ」

ジャスレイを軽く睨みつけながらアミダに問う。

「オルガは？」

「おとなしく待つてるよ」

部屋に入るとオルガは深々と頭を下げる。

その隣でバスケットも同じように頭を下げた。

「すみません！」

「なぐに謝ってんだ。おやじがマーズ・マセと話して決めたことにお前が乗っただけだろ」

「そうですが、兄貴に迷惑を……」

名瀬は勢いよくデコピンを決める。

痛そうに額を押しさえるオルガとそれを心配するビスケット。

「これまでも散々かけてきただろうが、今更殊勝になるんじゃないやねえ」

「ここからは背中にも気を付けないとね」

「前に言っていたジャスレイって男ですね」

「ああ、テイワズの幹部連中の考えは一つじゃねえ。何か仕掛けてくると思っておいた方がいい。ああ、そうだ……ビスケットほれ、結婚祝いだ」

「あ、ありがとうございます」

「そうだ。サブレはどうしたんだ？ 付いてきたって聞いたぜ？」

「そ、それが……トイレって出て行ったきり……」

時を同じくしサブレは帽子を深めに被って黒いスーツを着た状態で廊下を歩いており、目の前から現れたジャスレイとわざと衝突する。

するとジャスレイは胸ポケットからスマフォを落としてしまい、サブレは下手に出るような態度で「済みません」と技とスマフォを拾いジャスレイに渡す。

ジャスレイは舌打ちをしながら「気をつける！」と怒鳴りつけて去って行き、サブレはもう一度「申し訳ありません」と謝りながらにやついていた。

サブレがコッソリとスマフォに取り付けた発信器と盗聴器が付いていると分かんずくにジャスレイはもう一度スマフォをいじり始めた。

「ようチャド。地球に居る間に随分腕を上げたじゃねえか」

「おやつさんの整備のおかげだよ。ランドマン・ロデイすげえよかった」

「生言いやがって。まっこれからまたよろしくな」

雪之丞はチャドの肩を軽く叩くとそのまま行ってしまう。チャドは雪之丞の雰囲気
に違和感を感じていた。

デクスターは農場の運営の引き継ぎ作業をバーンスタイン商会に預けていた。

「これで農場の運営引き継ぎにかんする契約は完了ですね。すべてをお任せする形に
なってしまう申し訳ありません」

「でも、残念です。あそこでこの子達とかかわるのは社長にとって大切な時間でした
から」

「フアミリアが立ち上げられるまでの我慢ですから」

時を同じくしアトラとクーデリア、三日月とサブレとビスケットハツシユはご飯を食
べたりしながらたわいのない会話をしていた。

サブレからすれば本来なら適当な場所で食事を取るはずだったが、ビスケットからど
うしても言われて参加していた。

「大変だね手続きとかって。私だったら頭こんがらがっちゃう」

「三日月さん！ サブレさん！ おかわり持つてきましようか？」

「いいよ」

「いらない」

「でも……」

二人の素っ気ない態度に疑問を覚えたアトラ。

「戻ってきてから三人ともなんだかずっと一緒にいるね。地球で何かあったの？」

「俺、三日月さんとサブレさんについていくって決めたんで」

「迷惑なんだけど」

「そういうなって」

「気にしないでください」

「随分なつかれましたね」

ハッシュュが三日月に懐いている姿に微笑ましさを感じたクーデリアに迷惑そうな顔をしてご飯を食べる三日月。

「ほんと迷惑」

「農場は三日月の夢でしたよね？ なら……いえ。分かりました。あなたの夢は私が責任を持つてお預かりします」

「よろしく……」

「じゃあ、三日月はちゃんと返してもらわないとね」

「ハツシユ、飲み物」

「はい！ 今すぐ！」

「サ、サブレはこき使うことに全く抵抗がないよね」

「使える者は使わないとな」

たわいのない話をしているとチャドが部屋の中に入ってくる。

「なあなあ、おやつさんどうかしたのか？」

「どうかって何が？」

「臭くねえんだよ」

ビスケットの問いにチャドが驚きを交え問うと全員が答える。

「そういえばメリビットさんと付き合ってから変わったよね」

「だな。前まで臭いで鼻が曲がりそうだったのに……人間付き合おうと変わるってことか

……兄さんみたいに」

「どういう意味？」

「えっ、ええっ!?」

チャドの驚きが建物中に聞こえた。

昭弘と昌弘とライドは部屋の外でいまだトレーニングを行っていた。

「あまり無理するな、飯も食わずにトレーニングなんて」

「今日の飯、俺の嫌いな豆のシチューだし……それに……今は無理でも無茶でもします。年少組の奴らを引つ張っていくのはこれからは俺だから。地球に残ったタカキには負けないんです！」

「だったら余計にちゃんと食ったほうがいいじゃない？ 兄貴みたいになってからじゃ遅いよ」

「おい昌弘」

三人が話し込んでいるとチャドが走って来た。

「昭弘！ 聞いたかよ？ おやつさんとメリビットさんが付き合ってるって！」

「知らなかったんすか？」

「ああ。お前が地球に行ってる間だったか……」

「なんだ？ みんな知ってるのか？ なんて教えてくれねえんだよ！」

「そんなことで驚いてどうするんすか。ビスケットさんとアトラさんなんて結婚したのに、なあ……ライド」

「そうそう」

すると昭弘も驚きの表情に変わった。

「あ、あの二人……結婚したのか？」

「兄貴も？」

昌弘が引く番だった。

「昭弘さんも？」

ライドも引いた。

「え……ええ……!!？」

再びチャドの悲鳴に近い声がこだました。

「制裁を受けろ！」

イオクの攻撃は明後日の方へ行き、敵のモビルスーツは避けるまでもなく突き進む。

「避けたか……なかなかやるな！」

敵からの攻撃をイオクはちゃんと回避する。

「この俺と互角とは！」

イオクと敵モビルスーツとの間にジュリエッタが割って入ってくる。

「邪魔をするなジュリエッタ！」

「邪魔なのはイオク様です。下がっててください！」

「イオク様はお下がりがりください！」

イオクの部下が複数人でイオクを守りながら戦っている。すると、アリアンロッド艦

隊の船から一つの機体が姿を現した。

「あの機体は……味方の登録コード？ あれが……」

ジュリエッタの前にヴィダールが姿を現した。

「さあ、お前の待ち望んでいた戦場だ」

「機体名がヴィダール？ 自身と同じ……自らをモビルスーツと一つにし本来の自分を捨て去ろうというのですか？ 復讐のために」

ヴィダールは三機のモビルスーツからの攻撃をきれいに回避して見せると、そのまま近づきレイピア的外見のバーストサーベルであつという間に仕留める。

さらに増援が二機現れるとバーストサーベルの刃をパージし、攻撃を回避し、足を変形して仕込んでいたナイフでさらに仕留めた。

そして、刃を入れ替えると、そのままバーストサーベルをモビルスーツに突き刺す。

「綺麗……でも、サブレの戦いは……」

ジュリエッタは素直な感想を抱きながらも、それでもサブレの戦いを忘れられずにいた。

敵のモビルスーツはヴィダールに照準を合わせられず、ライフルとバーストサーベルを併用して着実に数を減らしていく。

左右から艦隊のミサイルによる挟撃がくるが、ヴィダールはライフルでそれらを一掃

すると今度は艦隊を沈めてしまう。気が付けばすべての敵を片づけてしまった。

「あなたの強さははったりではありませんでしたね」

「ありがとう」

「復讐とは本来黒く汚らわしい感情のはずです。ですが、あなたの太刀筋はとても復讐を起因としているとは思えませんでした。強くても美しい」

「ああそうか。忘れていた。今はただこいつと戦うのが楽しかった」

「本当に変わった人です」

「そうか？　で、どうかな？　黒い彼と比べて」

「……貴方より強いと思いますよ。貴方と違って人らしいですし」

「そうか……人らしいか。私や彼の戦いとは別なのだろうな」

　ヴィダール達が帰投している姿をゼパルがこっそりと見つめていることには彼らは気が付かなかつた。

「イオク・クジャンか……」

目覚めた禍編

目覚める厄災

アルミリアはマクギリスの膝で眠っているた。ふと目を覚ますとマクギリスが紙でできた本を読んでいることに気が付いた。

「あつ…またそのご本を読んでいたの？」

「ああ、この中に書かれたアグニカ・カイエル思想に私は救われた。人が人らしく生きられる世界を築くためギャラルホルンを作った英雄。私がフアリド家の生れでないことは知っているね？」

「子供の頃にイズナリオ様に引き取られたつて前に……」

「当時は卑しい生まれの子供だと蔑まれ幸せなど、どこにも存在していなかった。この世を呪い、自ら命を絶とうと思ったこともある」

「マツキー？」

アルミリアはマクギリスの話をどこか理解できずにいた。

「この本を与えてくれた人が私に教えてくれたんだ。おかげで思いとどまれた。アグニカは実現しようとしていた。人が生まれや育ちに関係なく、等しく競い合い望むべきも

のを手に入れる世界を。素晴らしいと思わないか？」

「ごめんなさい。私にはよくわからない……」

アルミリアを優しく抱くマクギリス。

「それは誰にも反対されることもなく、愛する者を愛せる世界のことでもある」

「その世界ではまだ子供だと言って誰も私の事を笑わない？」

「ああ」

「子供の婚約者がいるってマツキーをバカにする人もいない？」

「もちろん」

「私行きたい！ そんな世界に！」

「ああ。私が連れて行ってあげるよアルミリア」

（その世界への扉をこの手で開ける時が来たんだ……私を救ってくれたイラク様の為にも）

たった一人の野望が静かに渦を巻きはじめていた。

鉄華団とフォートレス、テイワズやアリアンロッドなどが謀略を巡らせるなか、それは静かに蘇る時を待っていた。

そして、イラクもまたその場でその時を待ち続けていた。

「ハシユマルよ……待っている。もうすぐ、目覚めさせてやる。役立って貰うぞ……」

ジャスレイが部下のメンバーと共に話し合っているとき、メンバーの一人が鉄華団の監視報告を上げた。

「アーレスを監視していた連中からの報告です。渡りは全てファリド公がつけたりはいいです」

「いつちよ前に地固めのつもりか？ガキが政治ごっこに浮かれやがって」

「テイワズの直参がセブンスターズと手を組むなんて」

「名瀬が裏で手え引いてんじゃねえのか？」

鉄華団の行動が面白くないジャスレイ陣営は鉄華団の持ちかけられた話に対抗しようとしていた。

「ジャスレイの叔父貴！ これ以上名瀬と鉄華団に好き放題やらせていいんですか!？」

ジャスレイも面白くなさそうな顔をしながらウイスキーに煙草を打ち込む。

「いいわけねえだろうが。なんの為に大枚はたいて、ガキどもを嗅ぎ回らせてると思ってる。こっからが本番よ。セブンスターズとつながりがあるのは何もあいつらだけじゃねえってことだ。あとは手土産だ。セブンスターズの頭の固え奴らと対等に渡り合うにやあ、あと一つ……「こいつは」ってえ情報があれば……」

ジャスレイが謀略を巡らせるが、その情報は全てフォートレスによって監視されてい

ることに彼らは気が付かなかった。

サブレが仕込んだ盗聴器から情報は全て筒抜けになっている。

「……それじゃあ、ジャスレイの奴はこっちで気を付けておく」

「任せたぞ、こっちの方まで嗅ぎまわられても困るからな」

そう言うとマクマードはマハラジャの部屋を出て、名瀬と共に廊下を歩いていると、正面からサブレとハツシユが歩いてきた。

サブレに続くようにハツシユも黙って頭を下げる。

「おう、オルガンとこの奴じゃねえか。どうしたんだ？　こんなところで」

「マクマードさん。いえ、ハーフメタル採掘場で見つけた例の機体は何なのか調べに来たんです。昔アガレスに入っていた資料で見た気がして……」

「ああ、あの時見つけたあれか。また厄介ごとじゃなきやいいけどな」

ハツシユがサブレの後ろからおずおずと手を上げマクマードに問う。

「あのく、なんでテイワズのボスともあるう人がこんな所にいるんすか？　こっつてあのフォートレスの拠点の一つなんすよね？」

今サブレたちはフォートレスが所有している拠点の一つ、移動型コロニーの『アナグラ』に来ていた。

「ああ、マーズ・マセとは取引をしているからな、細けえ調整をしなきゃいけねえのさ」
「大変そうですね。父さんが自分で動き回れば済む話なんですけどね…」
「良いさ。別にな」

サブレの言葉を聞きながら名瀬は腕時計を確認する。

「オヤジ、そろそろ……」

「おう、だな。それじゃあな。何かわかりやあ教えてくれ」

そういうとサブレたちとすれ違い、そのまま遠くに消えていく。

サブレはそのままハツシユと共にマハラジャの待つ部屋の前に立ち、部屋のドアが自動で開くと、あまりの煙ったさにとっさに手を覆う。

マハラジャの部屋はたばこの煙が充満しており、副リーダーの男も手を覆って不愉快そうにしていた。

「サブレか、よく来たな。まあ、入れ」

サブレは部屋の中に入ると、マハラジャに手元の端末を渡した。

「たしか、通信では送りにくいデータの詳細が知りたいんだっただな？ どれ」

マハラジャは手元の画像をのぞき込むと、そのまま表情をかすかに変えた。

副リーダーの男もかすかに表情を変え、サブレに問う。

「サブレ、この画像。どうした？」

「鉄華団が所有しているハーフメタルの採掘場で見つけた。今はテイワズの整備場で調査してもらってるよ。名前が分からないからとりあえずモビルワーカーもどきって読んでるけど…。でも前にその資料をアガレスの中から見た気がしてさ…」

「……ブルーマだ。これはブルーマという名前だ。まあ、よくもこんなめんどくさいものを見つけ出せるものだな。これは予想以上にめんどくさい事態になるぞ。おい、サブレ、これ以外にモビルスーツよりさらに大掛かりな何かを見つけただろ」

「ああ、見つけたよ。近づいてないけど」

「それでいい。近づくなよ。あと、ギヤラルホルンに連絡を入れろ。マクギリスという男でいい、こればかりはギヤラルホルンが対応した方がいい」

サブレに端末を投げ返すと、サブレは不愉快そうにし、改めて問う。

「で？ なんなんだよこれ。どういう存在？」

「モビルアーマー……かつて人類の四分の一を滅ぼした存在だ。ブルーマはその付属品にすぎん。ガンダムにとってこいつらはある意味宿敵のような存在だからな」

オルガやビスケットはユージン達と共に今後のスケジュールの確認を行っていた。

「来月にはまた獅電が三機。そのあとには歳星に預けてあったガンダムフレームが届くことになってる。それまでに配置転換訓練の完了ならびに各モビルスーツの稼働状態

を90%オーバーにすること、以上が団長からの指示だ。質問は？」

しかし、ユージンの視線はシノたちではなく、隣に立っているビスケットの方を向いていた。

「まあ、これぐらいは余裕だね」

「ああ。みんな頑張ってくれてっからなあ。かなりの優良スケジュールってやつだ」

「もうすぐ給料日ですしね。少し羽を伸ばしてもらって」

シノや昭弘、ユージンとチャドはビスケットの方を見ると一斉につぶやいた。

「「信じらんねえ……」」

「そういえばサブレから連絡は？」

「ああ、そういえばまだ……お、噂をすれば」

オルガたちの目の前にある大きな画面にサブレの姿が映る。

「オルガ。今すぐギヤラルホルンに連絡をくれた方が良い。俺もダツシユで戻る」

サブレが急いでいる事は良く分かり、何となく焦っているのも理解出来た。

「どうしたの？ サブレ」

「ハーフメタル採掘場で見つけたもの、絶対に近づくなんて父さんから。それとギヤラルホルンにすぐに連絡を入れてくれてっさ。あれは厄祭戦の時に人類を滅ぼそうとした兵器だそうさ。あれが目覚めたらクリュセは終わりだっさ」

「「はあ!」」

その後マクギリスが火星に向かうという方向で話し合いが決定した。

「若様。本家より通信です。若様宛にこのようなメールが届いたと」

イオクはそのメールの中身をすぐさまにラスタルに届けた。

「ファリド公が火星に? その情報はどこから?」

「JPTトラストという父の代につながりがあった商社からです。他にもいろいろと資料が送られてきましたが……」

そういつてラスタルは手元に届いた画像を見ると、ラスタルは驚きが隠せなかった。

驚いているラスタルを見て逆にその表情に驚くジュリエッタと仮面越しに黙って話を聞いているヴィダール。

「ん? なぜこんなものが……」

「ご存じなのですか?」

「プルーマ……モビルアーマーと共に運用されていた無人ユニットだろう。かつて厄祭戦を引き起こした機動兵器だ」

「厄祭戦を!」

イオクがその情報にびっくりすると、ジュリエッタは見下すような目でイオクを見

る。

「何を驚いているのですか。ギャラルホルンの兵士たるもの知っていて当然の知識ですが」

「も、もちろん知っているさー!」

「アグニカ・カイエルと我らセブンスターズの始祖達によりすべてのモビルアーマーは滅ぼされ、厄祭戦は終わった。その残骸が火星にまだ残っていたとはな」

その話を聞いてヴィダールは推測で話を広げる。

「奴が動くということは、もしかすると火星にモビルアーマーの本体があるのかもしれない。仮にそうだとすればファリド公の狙いは七星勲章。厄祭戦でモビルアーマー倒した勇者にだけ与えられる最高の称号。セブンスターズの席次は七星勲章の数で決まったと言われている」

「なるほど、物知りですね」

「一席のイシュー家は当主不在。もしファリド公が七星勲章を手に入れば三百年ぶりに席次が変わる可能性が出てくる」

「三百年目の七星勲章と戦後体制の破壊……それが奴のいう変革か」

「そんなこと断じてゆるしてはなりません! マクギリス追跡の任、ぜひこの私に!」

張り切るイオクがマクギリスの追跡の任についた。

「何？イオク・クジャンがマクギリスの追跡についた？」

マハラジャはアナグラで酒を飲んでいると、副リーダーが報告を上げた。

「ええ、マクギリスがモビルアーマーの調査に乗り出した途端の行動、どうやらジャスレイのつながっていた先はイオク・クジャンだったようですね」

「ラストルめ……衰えたな。クジャン家のバカにやらせたらくなことにならん」

「どうします？」

「最悪モビルアーマーが目覚めるといふ事態になる恐れがあるな」

「それと並行して……ゼパルが火星に姿を現したという情報も……」

「ゼパルか……厄祭の亡霊が何かを起こすつもりか？　しかし、都合がいいというのも事実……ことが荒立つのであれば、終息したのち、俺たちも動くぞ。ちようどいい。あの豚をいい加減始末する時だ」

「……了解です」

マハラジャもまた動こうとしていた。

「待たせてすまなかつたオルガ団長」

「こちらこそわざわざ来てくれて感謝している」

オルガとマクギリスが握手を交わし後ろにいるメンバーにも目が行く。

「地球以来だな、三日月・オーガス。それに、ビスケット・グリフォン君」

「うん」

「お久しぶりです」

オルガたちの車が採掘場に向かって移動しているころ、イオク達が出撃していた。

「それにしてもなんで三百年も前のもんが発見されなかつたんだ？」

「もしかして、ハーフメタルの特性のせいですか？」

「ええ、我々はそう考えています」

「ハーフメタルはエイハブ・リアクターの干渉を受けない反面その反応自体が検知されにくい」

「やつぱりモビルスーツをもつてきておいた方がいいかな？」

「いや、やめておいた方がいい。モビルスーツの存在が奴を起動させる可能性がある。モビルスーツとは元々モビルアーマーを倒すことのみを目的として作られた兵器なのだ。つまり奴にとって宿敵というわけだ」

「だが所詮はただの機械だ。乗る奴がいなければ危険はないはずだろ」

「いや、モビルアーマーはパイロットを必要としない。自分で考え自動で戦う」

「なんですか……それって自動殺戮兵器じゃないですか」

「その通りだ、だからこそ奴らはなんのためらいもなく街を破壊し、人を殺戮することができる」

マクギリス達が採掘場に到着すると上空よりイオク達が降りてきた。

しかめ面をして見上げるマクギリス。

「ギャラルホルン？ おいあれはあんたらの仲間なのか？」

「いや……あれは……」

「ふっ…… 動くなマクギリス・ファリド」

イオクがマクギリスに向けて声を発すると、三日月とビスケットはその機体に見覚えがあった。

「あれは……あの時の」

「うん、あの時のモビルスーツだ」

「クジャン公！ 私になんの用だ？」

「貴公に謀反の気ありと情報を受けてこうして火星まで追ってきたのだ。貴公がモビルアーマーを倒して七星勲章を手にしセブンスターズ主席の座を狙っていることはわかっている」

「七星勲章？ なるほど。そんな誤解をしていたのか」

「誤解ではない！ モビルアーマーの存在を隠蔽し、ファリド家単独で行動を起こした

ことが何よりの証。マクギリス・ファリド貴公を拘束する！」

イオクがマクギリスを拘束しようと機体を動かそうすると、オルガはチャドに指示を出す。

「チャド！ 本部のユージンに連絡、モビルスーツを回させろ！」

「ダメです。ここからだ」とLCSが使えません！」

そのころユージンの方でも歳屋からの報告が上がっていた。

「いや、起動と同時に急に暴れだしてさあ。なんとか抑えたがこつちも結構被害が出て通信機能もようやく回復したところだよ。団長さんの連絡通りやばいよあれ。そつちも気を付けてね」

そして、そのころマクギリス達の方でもイオクが余計な火種を付けようとしていた。

「マクギリス・ファリド。覚悟！」

イオクが一步機体を前に進めると、マクギリスが反応した。

「よせいオク！ それ以上モビルスーツを近づけるんじゃない！」

「ダメだ！ あれ以上近づけたら！」

「問答無用！」

しかし、マクギリスが止める暇もなく、それは起動した。

三百年の時を経て、目覚めたそれは機体を起こし、口からビームを繰り出したその姿

に三日月の右側が反応した。

(アレハ……ハシユマル……ダ)

三日月の脳裏にそんな言葉が浮かんだ。

そして、そんな状況をゼパルに乗っていたイラクは遠くから眺めていた。

近くに彼が呼んだ記者のカメラがイオクが起動させた決定的な瞬間を捕らえさせて。

「おはよう……ハシユマル。そして、ありがとう……イオク・クジャン。お前がバカで本当に良かった」

事態は最悪の形で進もうとしていた。

厄祭の亡霊

三百年の眠りより目覚めたモビルアーマー、イオクのアクションにより行動を開始したハシユマルはビームを空高く打ち上げる。

それはまるで一種の目覚めの咆哮のように思えた。

マクギリスはイオクの乗るモビルスーツに向かい自分の感情を向ける。

「バカが……目覚めさせてしまったのか」

「な……何なんだこれは？」

イオクは何が起きたのか全く理解できずにいると、三日月の目はまっすぐハシユマルの方に向き、その姿に魅せられていた。

ハシユマルは一気にイオクとの距離を詰めると、イオクが反応するのが完全に遅れる中、空高く打ち上げた。

「えっ？」

「イオク様！ぐわあ〜！」

イオクに攻撃する傍ら同時にイオクの部下のモビルスーツに対してテイルブレードで潰した。

イオクは中破した機体を何とか起こし、目の前にあるモビルアーマーに脅威を感じてしまった。

打ち震えるイオクとそれを護ろうとする部下達。

「あ……あれが……モビルアーマー」

イオク達が太刀打ちできずにいると、マクギリスはオルガに対して提案を出す。

「今のうちに離脱しよう」

しかし、そんなマクギリスの提案に対してオルガはあくまでもここに残ることを提案した。

「待ってくれ。このままじゃ採掘場がめちゃくちゃになっちまう。今本部に応援を呼んだ。到着すれば……」

「無駄だ、あれはそんな生易しい代物ではない」

マクギリス達が話をする間にハシユマルはティルブレードで薙ぎ払う。応援が来ても無駄だという言葉をはシユマルは眼前で示していた。応援が来て

実際ある程度訓練を積んでいるギャラルホルンの部隊がまるで役に立っていない。

「こういう事態を避けるために慎重に事を運んだというのに……イオク・クジャン……愚かにも程がある」

イオクはそんなマクギリスの言葉など知る由もなく、無謀にもハシユマルに挑もうと

していた。

しかし、イオクはイマイチモビルアーマーの脅威度が分かっていない。

「何がモビルアーマーだ。所詮は三百年前の遺物！ 恐るるに足らず！」

前に出て戦おうとするイオクに対し、部下はイオクを守ろうとハシユマルに攻撃を加える。

「イオク様迂闊です！ ここは一旦下がって陣形を……」

しかし、部下の攻撃など意味を為さず、ハシユマルは大きな砂煙を上げイオクの目の前から姿を消すと、一瞬でイオクの後ろに回った。

そして攻撃を加えようとテイルブレードが伸びると、部下の一人がイオクを庇う。

「イオク様！」

テイルブレードの攻撃はイオクの部下に直撃する一緒にイオクも吹き飛んでしまうが、そんなその場にいた者たちの眼前にブルーマが大量に姿を現す。

「なんだこいつら!? この数は!？」

「ありや一体……」

「モビルアーマーのサブユニットだ。ブルーマと呼ぶらしい。だがあれほどの数とはな」

大量のブルーマの出現にさすがのマクギリスでも驚きが隠せずにいる。そんな中部

下の一人がイオクに対して撤退を勧める。

「ここはお退きくださいイオク様！ 損傷した機体では……」

しかし、イオクはあくまでも戦うつもりであり、機体を前に進める。

「右は動く！ まだやれる！」

「意気込みだけで勝てる相手ではありません！」

「この場は我らが凌ぎます。ですからどうか！」

その場にいる部下の全員がイオクが撤退するまでの時間稼ぎの為にハシユマルに無謀な攻撃を開始する。

「バカな……お前たちを見捨てろというのか!？」

「クジャン家の未来をお考え下さい。イオク様の命はあなた一人のものではないのです
!」

「……………みんな……………すまん！」

イオクは涙を流し、機体のスラスターを最大まで上げ、その場から撤退していく。その間にイオクの部下はプルーマの軍勢の中に消えていった。

「敵は必ず取る！ 我が名に懸けて……誓うぞ！」

イオクは敵を取ることを誓い、部下たちに守られながらその場から離脱していく。

その間にザックは採掘場の施設を襲撃しているプルーマの軍勢を遠くから確認して

いた。

「ん？ なんだありや？」

ラストルからの連絡を受けたジュリエッタとヴィダールはイオクからの連絡が途絶えたという情報を彼らに伝えた。

「先行したイオク隊からの連絡が途絶えた」

「まさか全滅したのですか？」

ジュリエッタの推測にヴィダールが別の可能性を提示する。

「だとしても全滅と判断するのは早計かもしれない。火星支部はファリド公の支配下だからな。偽情報の可能性もある」

そんなヴィダールの言葉にジュリエッタは心から鬱陶しそうな顔になる。

「まったく……いなくなつて静かになつたと思つたら更に面倒を引き起こすのですね」

（もしかしたら……サブレに会えるかもしれない。大体お父様は何を考えて……）

シノ達一番隊は採掘場が見下ろせる場所にいると、採掘場の状況をオルガたちに伝えた。

「団長、俺だ。採掘場に到着した。モビルアーマーつてのはもういねえな。探して追うか？」

「いや。先に俺たちと合流してくれ」

オルガはシノたちに即時の合流を告げ、シノはすぐにオルガと合流すると、簡単に説明した。

「採掘場に残ってたのはギャラルホルンの機体だけでした。生存者はゼロ」

ダンテの報告にオルガはさすがに驚きを隠せない。

というよりはそこまで詳細に探し出したと言うことに驚きを隠せなかった。

「そこまで確認できたのか？」

そんなオルガの質問に今度はシノが答えた。

「確認も何も全部のコックピットがすげえ念入りに潰されてたからよ」

シノの言葉に今度はマクギリスが納得した。

「やはりな。モビルアーマーとはそういうものだからだよ。君はあれをどう見た？ 三

日月・オーガス」

マクギリスは隣に座っていた三日月に対して問うと、三日月はぎっくりした感想を述べた。

「すごかったな。すごく綺麗だった。地球で見た鳥みたいだ。あれ……ハシユマルつていうんだよね？」

三日月の問いにマクギリスが驚きながら答える。

「……天使の名を持つ人類の厄祭。かつて人類に敵対し当時の人口の四分の一を殺戮したという化物だ。その名前……どこで聞いた？」

「？ 別に……聞こえた」

それ以外に答えるつもりのない三日月に質問を諦めたマクギリスは続けてモビルアーマーの説明を始めた。

「何しろモビルアーマーとはただひたすらに人間を殺すことそれだけに特化したマシンだからな」

シノとダントテは全く理解できておらず、互いに首をかしげる。

「今から三百年前ギャラルホルンの始祖たるアグニカ・カイエルが戦った人類の敵……厄祭戦と呼ばれる人類の災禍はあのモビルアーマー達によってもたらされたものなのだから。モビルアーマー……人類を狩るために天使を真似て造られた悪魔・モビルスーツ。それを操るための阿頼耶識」

マクギリスからの報告が終わると、ビスケットがシノたちに追加報告を聞く。

「他の報告はある？」

「ああ……採掘場の燃料と資材の倉庫がぶっ壊されてた」

「え？ でもあそこは人はいなかったよね？」

ビスケットの疑問に今度はザックが先ほどの情報を報告する。

「あつそれ俺も見ましたよ。なんかちっこいのが火事場泥棒みてえにわらわらと」

その報告にマクギリスは前髪をいじりながら推測を述べる。

「補給か。半永久機関であるエイハブリアクターと違い推進剤やオイルは消耗品だからな。定期的に補給を受けなきゃいけないってことなんだろう」

マクギリスの推測が終わるとオルガはあくまでもハシユマルを狩ることを提案する。

「なるほど。どんな化け物でも結局奴は機械ってことだ。なら俺達鉄華団にやれねえわけがねえ。違うか？」

そんなオルガの力強い言葉に真っ先に三日月が反応する。

「オルガとビスケットがやれって言うならどんな奴でもやつてやるよ」

マクギリスもハシユマル討伐に賛成の意見を出す。

「確かにその通りだ。アグニカ・カイエルはモビルアーマーを倒してギャラルホルンを築いたのだからな」

「でも、油断はできないよ」

ビスケットが全員に釘を刺しておく、石動はモビルアーマーの情報を手に入れているた。

「准将。今軌道上の新江本部長から連絡が入りました。第三地上基地がモビルアーマーの襲撃を受けたとのことですよ」

そこは先ほどまでマクギリス達がいた場所だった。

「先ほどまで我々がいた場所だ。あの規模の基地ならかなりの量の補給ができただろうな」

「それから新たにアリアンロッドのハーフビーク級が接近中とのことですよ」

石動の追加報告を聞いたシノはオルガたちに援護に行くのかどうかを問う。

「で？ 俺たちはどうする？ そこに援護しに行くのか？」

そんなシノの提案にマクギリスがきつぱりと不要だと判断した。

「不要だ。今から行っても間に合うまい。それにあの辺りは見晴らしがいい平地だ。あれを迎え撃つのに適しているとは言えない」

マクギリスの言葉にオルガが反応する。

「迎え撃つ？ あんたが？」

「我々が」だ。協力してくれるだろう？ あれを起動させてしまったのは我々ギヤラルホルンの失態だともいえる。その責任を取らねばならない。だがそもそもあれを掘り出したのは君達鉄華団だ」

ビスケットはオルガの方を見ると、オルガのやる気に満ちた表情に大きくため息を吐く。

「分かっている。投げ出すつもりはねえよ。やるしかねえだろ。おい！ この辺りの地形

データを持つてこい！」

「ならオルガ、俺はサブレを回収しに宇宙港まで行つてくるよ。近くにアガレスを連れてきて」

ビスケツトはモビルワーカーの上に乗し、オルガに頼み込む。

「分かつた。任せとけ」

ビスケツトはそのままモビルワーカーと共に宇宙港へと移動していくと、マクギリスも覚悟を決める。

「准将……」

「ようやく地固めのできた火星を手放すわけにはいかない。それにイオク・クジヤンの言っていた七星勲章。私も欲しくなつた」

石動は全員の目の前でブルーマとモビルアーマーの関係を説明した。

「モビルアーマーの最も厄介な所はあの無数に引き連れたブルーマと呼ばれている子機達です。あれには攻撃の他にもう一つの重要な機能に本体の修復があります」

マクギリスは同じように説明に口をはさむ。

「直してしまふんだよ、自分たちでな。更に言えば本体にもブルーマの生産機能があつて時間と資材さえあればあれは無限に増え続ける」

マクギリスの説明にシノたちは軽く引いてしまふ。

「めちやくちやだな」

「そうやって無限に人を殺し続けるのさ」

三日月はマクギリス達の説明を聞くと、簡単な作戦を思いついた。

「つまりあれをやるにはおまけとの連携を断ってこと？」

「正解だ」

「修復が済み次第あれは人口密集地を目指すはずです。人間を見つけて殺す。それがモビルアーマーの基本プロトコル……本能とも言えるものですから」

「だから下手に追撃するよりも奴の進路に罠を張り迎え撃つのが得策だろう」

マクギリスが大まかな作戦を立てると、オルガは周辺にある人口密集地を調べる。

「一番近い人口密集地……」

シノが真つ先にどこかを理解した。

「つて！そんなのクリュセに決まってるじゃねえか！」

オルガとマクギリスは互いに分かれて別行動を始めようとしていた。

「俺たちはクリュセに向かうぞ！」

「我々も船からモビルスーツを降ろす、三時間後に合流を」

シノが先に先行するべきではないかと問う。

「俺の流星号はまだ十分動けるぜ。先行して二番隊を待った方がいいんじゃないか？」
「いや。お前には別の仕事がある」

オルガはシノにウインクを飛ばし、シノにだけ特別な指示を出す。

ジュリエッタとヴィダールはイオク搜索の為に出撃した。

「とりあえずイオク様達の降下地点周辺から搜索を開始します」

「二手に分かれよう。その方が効率がいい」

そのまま両機とも大気圏を突破していく。

それぞれの思惑を含みながら。

三日月はクーデリアのもとを訪れると、アトラやクッキーとクラツカに退避するようにと伝える。

「確かに開拓当初に作られたシエルターがあつたはずです。でもあれはともこの町の全員を収容できる広さは……」

「どうすんの？」

三日月の問いにクーデリアは力強く答える。

「いえ、私は避難しません。そうなれば必ず立場の弱い人々がつまはじきにされます。そういつた人達の助けになればと、このバーンスタイン商会を立ち上げたのに真つ先に

逃げ出しては、この先誰も信用してくれません。三日月達が命を懸けて戦っているように、私も自分の仕事に命を懸けたいのです」

すると、アトラも決心を固める。

「なら私も逃げない。この町には女将さん達もいるし、クーデリアさんを放っていけないよ。ビスケットとここで待ってる」

「私たちも!!」

クッキーとクラツカも同じようにここに残る決意を固めると、三日月は立ち上がる。

「分かった。オルガにはそう伝えるよ」

そういうと三日月はそのまま部屋を出ていく。

サブレは中央宇宙港に到着していた。

「ハツシユ、先にオルガと接触しろ」

ハツシユに向けてそう命令すると、ハツシユは「分かりました」と言つてモビルワーカーに乗つてその場を後にする。ビスケットが来るのを待っていると、ビスケットがモビルワーカーの上に乗つて姿を現したと同時にアガレスがさらに後方から現れる。

同時に宇宙港から下ろされた二機のガンダムと明楽とジョシユアがサブレの目の前に現れた。

「サブレ！ 急いで！ 明楽とジョシユアちゃんも急いで乗り込んで。あいつらの狙いはクリュセだ！」

「分かってるよ………たく、こうなりたくなくてオルガに説明したのに……何をしていたんだか」

「文句を言っている場合じゃないよ！」

「そうだよ！ ねえ……ジョシユア？」

「やる気出ないわあくただの機械でしょ？」

サブレとビスケットはそのまま機体に取り込むとアガレスを起動させた。

明楽とジョシユアも同じようにガンダムを起動していくといよいよ次の作戦に移ろうとしていた。

悪魔の不協和音

オルガたちはクリュセの前で臨時作戦本部を作って作戦を練っていると、三日月がクーデリア達のところから戻ってくる。

三日月はクーデリア達が避難しないという事をハッキリと伝えた。

「何？ 避難しないだと？」

クーデリア達の決意を素直にオルガに問うと、オルガは説得を諦め作戦に集中することにした。

そんな中、三日月はオルガに作戦内容を聞くことにした。

「ハシユマルの迎撃ポイントは決まったの？」

「ああ。クリュセを狙うなら必ずここを通るはずだ。この谷で奴を迎え撃つ」

すると、後ろから団員がバルバトスを運び込んだと叫んだ。

確かに後ろを見ると運び込まれたバルバトスが置かれていた。

「三日月さん！ バルバトスルプスキました！」

三日月はまっすぐバルバトスの方へと歩き出す。

「止めるよ。ここに来る前に」

「頼んだぜ。ミカ」

三日月がバルバトスに乗り込むと、オルガの後ろからメリビットが話しかける。

「団長どうぞ」

メリビットはオルガに上着を渡すと、オルガそれを受け取って羽織り始める。

宇宙港ではマクギリスと石動の目の前に二つのモビルスーツが用意されていた。そのうちの二機はグリムゲルデを改修した機体だった。

「やれやれ……まさかこんな所で使うことになるとはな。ヘルヴィーゲ・リンカー。グリムゲルデを改修した機体だ。今の立場にある私には使うことのかなわぬ機体。使いこなして見せろ」

その場所より離れたところでヤマギとエーコは宇宙港の作業員と共にテイワズから持ってきたフラウロスを下していた。そんなヤマギたちの目は二機のモビルスーツの方を向いていた。

「なんでこんな民間宇宙港に……」

作業員はヤマギ達の積み荷にも怪しんでいた。

「あんたらの積み荷も十分物騒ですよ。まさか戦争でも始めるんじゃないでしょうね？」

昭弘たち二番隊は先行してハシユマルの様子を確認していた。

「近づきすぎんなよ。リアクターを感知されたら一発だからな」

そんな昭弘とは別に昌弘はハシユマルの速度が遅いことに気が付く。

「でも、意外と遅いな」

「あのおまけの歩調に合わせてんのか？本部にこのデータを送れ。いいぞ。これなら作戦の準備に余裕ができる……」

昭弘がデータを送るように指示を出すと、どこから攻撃されたのか、ハシユマルに攻撃が当たる。

彼等にとって予想外の事態の発生で二番隊に動揺が走ると、ライドが驚きを口にす
る。

「なっ?!モビルアーマーの進路が!」

ハシユマルの進路が大きく変わりライド達は攻撃先を特定しようとしていた。

そんなハシユマルに攻撃を加えたのはイオクだった。

「くそっ! 一体どこのバカ野郎だよ!」

昭弘達はすぐに状況をオルガたちに伝える。

「見たか! 正義の一撃!」

イオクはこの一撃でモビルアーマーを倒したと確信するが、その攻撃は最悪の結果を招いただけだった。

オルガのもとにメリビットさんが二番隊から仕入れた情報をそのまま伝える。

「モビルアーマーの進路が変わったそうです！ 南東から何者かの砲撃を受けその方向に

移動を開始したと！」

オルガは手元の地図を確認すると、ハシユマルの進路方向にある施設を確認する。

「南東だと？ まさか……農業プラントがありやがる」

ハシユマルの急な進路変更により二番隊のライドが真っ先に動いた。

「ライドー！」

「俺が先回りしてその連中を逃がします！」

その間に三日月はバルバトスを起動させ、そのまま立ち上がる。

「進路が変わった？」

そこによくやく追いついたハシユが獅電に乗り込み、先ほどの進路変更の情報を三日月に伝える。

「らしいです。今は二番隊が対応してますけど……」

「バルバトス。出るよ」

三日月はそれだけを聞くとそのまま飛び出していく。さすがにハツシユがその行動に驚く。

「えっ!? 団長に連絡しなくていいんですか?」

「ほっとけ。サブレがいけない以上、三日月を止められる人間はいねえよ」

そんな整備を担当している雪之丞の言葉に納得するしか無いハツシユだった。

しかし、そんな中イオクは達成感と共にあった。

「やった……やってやったぞ! これで手向けになるか? お前たちの忠義のおかげであのモビルアーマーに一矢報いることができた……」

そんなイオクの前にジュリエッタが降り立ったのだが、ジュリエッタはそんなイラクに苛立ちをぶつけそうになっていた。

「今の砲撃はあなたですか? イオク様」

やってきたジュリエッタにイオクはいかに自分がすごいことをしたのか説明するのだが、イオクの馬鹿さ加減に眉間にしわを寄せる。

「ジュリエッタ!? どうだ見たか! 奴に報いてやった!」

しかし、ジュリエッタはそんなイオクを見下すような目で見てハッキリと告げた。

「バカですかあなたは。あの距離ではかすり傷もつきません」

「なん……だど……? レギンレイズの最高出力だぞ!」

イオクは言葉を失った。

自信満々で放った一撃だけに動揺は大きかった。

「その程度でなんとかなるならモビルアーマーが最強の兵器などと呼ばれたりしません。何をするんですか？」

イオクはコックピットの中に戻っていく。

「止めるな！ 部下達は命を賭して俺にチャンスをくれたのだ。その敵を取れずにおめおめ戻るなどと！」

「いいから！ もうあなたはおとなしくしててください！」

ジュリエッタの怒鳴り声もイオクには通じず、イオクはそのままハシユマルの方に向かって移動を始める。

「ライドを援護すんぞ！ ケツをたたいてこっちに注意をひきつけろ！」

明弘の指示にライドが必死で動いていた。

二番隊の決死の攻撃もハシユマルには全く意味を為さず、まっすぐに農業プラントに向かっっていく中、三日月も農業プラントに急ぐ。

「ミカ！」

急ぐ三日月の前にオルガから通信がくる。

「聞こえてる」

「今更迎撃ポイントを変えられねえ。なんとか凌いで奴の進路を引き戻してくれ」

「分かった。サブレは？」

「そつちに向かっているはずだが……」

三日月は「そつか…」と呟きながら内心では「遅いな…」と思い浮かんでいた。

「くそ！完全にこつちを無視してやがる！」

二番隊の決死の攻撃もハシユマルの進路を変更するまでには至らなかった。チャドも文句をつぶやきながら攻撃を加える。

そんな中昭弘もぼやく。

「人間の多い方に向かっているってことか！」

ハシユマルは農業プラントにいる人々を捉えると、口を開け、ビームを放出する準備に入った。

そんなハシユマルと農業プラントの間にライドが割って入る。

しかし、ライドは知らなかったのだ…ビーム兵器を。

「させるかよ！……へっ!?!」

ライドの獅電にビームが直撃すると、ビームはナノラミネートアーマーの性質上、着

弾点から周囲に拡散しつつ農業プラントに直撃したがその攻撃にチャドが驚く。

「あれはまさかビーム兵器!？」

昭弘も驚きを隠せずにいる。

「んだそりゃ?! ライドは無事なのか!？」

「大昔の兵器だよ。モビルスーツのナノラミネートアーマーなら大丈夫だと思うが

……」

チャドの予想通り、ライドは無事だった。

そう…ライドは。

「な……なんだってんだ? 今の攻撃……えっ?」

ライドが後ろを振り向くと、農業プラントが火の海に包まれていた。

ライドは絶句してしまう。

「そんな……俺……守ろうと……うわあ!!」

ライドはプルーマに攻撃を仕掛けるが、プルーマはライドの獅電に群がるように取り
囲む。

「くそっ! くそつくそつくそつくそつくそっ! なんなんだよお前! なんで今更出
てくるんだよ! ずっと埋まってるよ! バカ野郎!」

あつという間にプルーマは獅電を取り囲み、プルーマの大群の中に獅電は沈んでい

く。

ライドの目の前のモニターにブルーマの姿しか映らないと、ライドは絶望に包まれてしまう。

しかし、突然ブルーマ達がライドから引きはがされる。

「な……なんだこれ!?!」

そんなライドの前の前にバルバトスが立ちふさがった。

「生きてる?」

「三日月さん!」

アガレスも進路変更を聞き、農業プラントへと進路を変更するが、サブレはアガレスの移動を止める。

明楽とジョシユアも足を一旦止めてしまうが、サブレはそんな二人に「先に行け」と指示を出し見送る。

改めて二人が消えたところでサブレはある一点を見つめる。

「どうしたの?」

「……いい加減限界だ……出て来い! 宇宙港から俺たちを付けてきてるだろ! イ

ラク!!」

サブレの怒鳴り声と共にゼパルが姿を現す。ビスケットはさすがに驚く。

「いつの間に……」

「つけてたんだ。ビスケット兄さんを……」

イラクはにやりと笑い、サブレは不機嫌そうに睨む。

「賢いガキは嫌いだな……」

「何なんだ!?! 何が目的なんだ!」

そんなサブレの問いにイラクは軽く笑いながら答えた。

「さてね……まあモビルアーマーを起動させてでもしたいことの8割は達成出来たから良いんだがね。個人的に確かめたいことがあるんだよ。その為にもお前は少しの間邪魔だ」

「だからここで邪魔をしよう?」

「君達は阿頼耶識というシステムを誤解しているようだからハッキリと言っておくが、このシステムは元々機体の適正の高い人間の脳を機体のメモリー内に保存し、肉体をカードリッジ代わりに使うというシステムだ。この体は私にとって直ぐに交換の利く物体に過ぎないんだ」

「それと邪魔がどういう意味があるんですか?」

「フフフ……私はね自分の計画を復活させるのに必要な人材を探していたんだ。まさかオーガス家が生きていたとはね。彼は君達と同じ鉄血のオルフェンズのオリジナルナ

ンバーだからね」

「乗っ取った人間は……どうなるんですか？」

ビスケットの問いにイラクは悪い表情を浮かべる。

「消えるさ……自我は約一か月を懸けて完全に消えてしまう」

「それより何なんだ？ オリジナルナンバーって」

「ん？ 最初の十人の事だ。現在のセブンスターズは全て変えに過ぎない。そう……彼等は本来誰一人本当の意味で鉄血のオルフェンズのメンバーとは言えないのさ。イシュー家ですらな」

「おかしいだろ！ イシュー家はお前じゃ無いのか？」

「どうして私が汚れた血を内側に入れなくてはいけない。私はね金に興味なんて無いんだよ。分かるかな？ 自分がイシュー家だと思つて生きてきたあの馬鹿女なんて……私は端っから親類だとすら思つて居ない。強いて言うなら鉄血のオルフェンズの補欠メンバーでそのまま生き残っているのはイシュー家とファリド家以外だよ」

「そうか……これでハッキリとした。お前は俺の敵か！」

「そうだな……さあ！ 見せてくれ！ アガレスの能力をどこまで引き上げることが出来るようになったのか!？」

サブレはアガレスの武器を構え、そのまま交戦の意思を見せる。

サブレットとビスケットはアガレスのシステムを覚醒させ、同時にブースターを最大まで吹かせて吹き飛ばすように飛んでいきながら右腕に装備してレンチメイス改を振り下ろす。

悪魔達は不協和音を響かせながら戦いは激しさを増していく。

悪魔の輪舞曲

マクギリス達も移動しながら進路変更の情報を手に入れていた。

「予定外の進路変更か。やはり物事はこちらの思惑通りには進まないものだな」

「それにしてもどこか楽しげにも聞こえますが？」

石動はマクギリスの楽しそうな表情になっていると理解してハッキリと指摘する。

「そうか？　だがやはり気持ちのいいものではないな。予想外の駒の動きは盤面を乱す……」

そんなマクギリス達の前にヴィダールが姿を現す。

「エイハブウェーブ！　IFFを確認。これはギャラルホルンの機体コード!?　しかし

あれは……」

「ガンダムフレーム」

マクギリスとヴィダールは出会ってしまった。

三日月がライドの前に守るように立ちふさがる。

「三日月さん……俺……余計な事しちゃった……」

ライドは農業プラントが甚大なダメージを受けたことに責任を感じていた。

三日月はそんな事とは別にライドの無事を確認する。

「ライド動けそう?」

「えっ? あっ……はい俺は全然。けど獅電がもう……」

「分かった。ん? なんだこれ?」

ライドの無事と獅電の戦闘不能を確認したとき、バルバトスに異常が現れた。

正面のハシユマルにバルバトスが過剰に反応し、そのとたん三日月は鼻血を出してしまふ。

三日月の状況を知らないハツシユは農業プラントの状況を報告する。

「三日月さん! プラントに生存者はいませんでした。次どうします? ……三日月さん?」

「おかしいな……」

バルバトスは動かなくなった。

大きな一撃をアガレスがゼパルに向けて振り下ろすと、イラクはそれをぎりぎり回避した。

イラクは薙ぎ払うようにふるうとアガレスはそれをしゃがんで回避しそのまま足払いを決める。

ゼパルは態勢を大きく崩されるが、アガレスの振り下ろされる攻撃を足場を崩壊させることで回避する。

「なっ!?!」

アガレスとゼパルはそのまま下へと落ちていく。

アガレスもゼパルも上手く着地してお互いに睨み合う。

「ここら辺にこんな地下空洞があったなんて……でも、ここって……」

「ゼパルは……あそこか」

正面にはゼパルがアガレス同様に何の問題もなさそうに立ち上がる。

しかし、その瞬間にはサブレットとビスケットの視線は周囲にある完全に大破したガンダムフレームとモビルアーマーの姿に釘付けになった。

「な……なんだ……これ……」

「モビルアーマー? ガンダムフレーム?」

二人の疑問にイラクが答えた。

「安心すると良い……ここら辺のガンダムフレームとモビルアーマーはもう動くことはない。見ればわかるようにエイハブリアクターを抜かれているからな。動くことはない。これが……厄祭の名残だ。ようこそ……厄祭の戦場痕へ」

二人は絶句しつつも戦う姿勢を崩さなかった。

「ガンダムフレーム……」

「ギャラルホルンのマツチングリストに該当する機体はありません」

石動とマクギリスは目の前に現れた新たなガンダムフレームに困惑していた。

「しかし、この固有周波数はギャラルホルン製のリアクターに非常に近い。ラストルの手の者か？」

沈黙を続けるヴィダールの前に石動はマクギリスを守るように立ちふさがる。

「お下がりでください准将。そのモビルスーツ！ 所属と階級を答えよ」

石動の問いにヴィダールは答えるそぶりを見せない。

「火星で再会するとはな。お前の裏切りの全てが始まったこの土地で。しかし……」

ヴィダールは黙ってマクギリスの方を見る。

すると、ジュリエッタから通信が来た。

「ヴィダール。何をしているんですか？ こちらはイオク様と合流したのですが……ええい！とつとと合流して下さいい！」

「……分かった。そちらに向かう」

ヴィダールは去り際にマクギリスに言葉を発した。

「俺にはわからない。自らの愛を叫び散っていったカルタ・イシューと同じ機体に乗る

その気持ちか」

ヴィダールが去る中、マクギリスは全てを察した。

「待てー！」

「いい。捨て置け」

その声は震えていた。

グシオンライフルでプルーマに攻撃しつつもプルーマからの反撃にあう。

グシオンはプルーマを蹴り上げ、プルーマに狙撃した。

「ライドはどうなった!？」

昭弘の疑問にチャドが答えた。

「三日月達が向かったって連絡は来たがどうもトラブってるみたいだ」

「仕方ねえ……俺が囷になる！」

昭弘は自ら囷になるために高く飛び砲撃しようとハシユマルの方を見た瞬間目の前の顔面に赤い文字が出現しそのとたん、昭弘は鼻血を噴出させる。

コントロールを失ったグシオンをチャドのランドマン・ロデイが回収しようとダツシユで駆け寄る。

「昭弘！」

滑り込みながらうまくキャッチするチャド。

「昭弘！ おいどうした!?! 返事しろよ昭弘！」

昭弘に声をかけるが反応しない昭弘。チャドは昌弘に昭弘を任せる。

「昌弘！ 昭弘を任せる。俺はモビルアーマーを引き付ける！」

「了解！」

昌弘は昭弘をつれその場を後にすると、チャドはハンマーチョップパーを力一杯投げつけハシユマルの視線を自分の方に向けさせる。

「そうだ！ こっちにきやがれ！」

ハシユマルはチャドのランドマン・ロデイにビームを放つとビームはランドマン・ロデイのナノラミネートアーマーに着弾し拡散していく。

「熱い！ これがビームってやつか。けどやっと化け物に振り向いてもらえた！」

チャドは機体をひるがえし、そのままハシユマルを引き付ける。

メリビットは作戦本部でオルガに先ほどの状況を報告する。

「二番隊から報告が来ました。モビルスーツの作戦ルートへの誘導に成功したそうです。ただしグシオンが機能停止。バルバトスも不調のため現在待機状態だそうです」

「サブレとビスケットはどうしたんですか？」

「それが渓谷を移動中に行方が分からなくなったそうです。明楽君とジョシユアさんの報告によると赤いガンダム・フレームと交戦後に通信が切れているそうです」

「仕方ねえ……まずはモビルアーマーだ。昭弘とミカ、サブレにビスケットがいねえんじやさすがに戦力が足りねえ。明楽とジョシユアが到着するまでなんとかしねえと。一番隊を出さず。ラフタさんとアジーさんにも出てもらう。それとマクギリスにも連絡を取ってくれ。ユージンにも爆破準備を急ぐように伝えてくれ」

オルガはメリビットから雪之丞の方へ視線を向ける。

「悪いがミカ達を見てきてくれねえか」

「任せろ。詳しいことが分かったら連絡する」

そういうと雪之丞はバルバトスの方へ移動を開始した時、オルガの元にソニアから連絡がやって来た。

「団長さんかしら？　もしかしてバルバトスとグシオンに不具合が生じたんじゃない？」

「……で……厄祭戦が？」

ビスケットはイラクの言葉に驚きを隠せなかった。

イラクは不敵な微笑みを浮かべる。

「別に驚くようなことは無かろう？ 厄祭戦は木星圏でも行われていたんだからな。火星が特別なわけがない。まあ、厄祭戦のちに我々の手によってほとんどのエイハブリアクターは取り除いたがな……。我々がエイハブリアクターの製造方法を独占したのはこれ以上のモビルアーマーを作らせないためでもあった」

イラクの言い様にサブレはいら立ちを隠せなかった。

「で？ そんな厄祭戦を終わらせた英雄様が、三百年の月日を経てなお何をしたい!?」
イラクはまっすぐアガレスの方を見つめる。

「……………君達が気にしていても仕方の無い事さ。強いて言うなら今回の戦いにおける私の最低限の目的は達成しているんだ」

「?」

「強いて言うなら人選だよ」

「人選？ それって…」

「そんな事より本気を出したらどうだ？ モビルアーマーを倒すならアガレスが全力を出す必要があると思うが？」

サブレは表情を暗くさせ、まっすぐゼパルの方を向く。

アガレスの目の色が赤になろうとしたとき、サブレは目力を強くし、そのとたんにアガレスの目が赤から青に変わる。

アガレスの動きが変わり、ゼパルを吹き飛ばして通路の奥へと姿を消した。「それでいい……さてさて今日の夕方にも例の映像がテレビで流れるはずだ」

ジュリエッタは何とかイオクを見つけ出し、説得しようとしていた。

「よろしいですねイオク様。ヴィダールと合流次第移動します。そちらの機体はまだ動けますか？」

ジュリエッタの行動に勘違いをしたイオクはさらに調子に乗る。

「恩に着るぞジュリエッタ……そこまでこの身を案じてくれるとは……」

「はい？」

意味の分からないジュリエッタは首をかしげる。

ジュリエッタからすれば「この人は何を言っているのだろう」と思わざるおえない。

「しかし！ やはり私は行かねばならぬ。そうでなくては部下達に合わせる顔がないのだ！」

「バ……バカを言わないでください！ 私はあなたを逃がすために」

そんなジュリエッタの言葉でも止まらないイオクは再び機体の中に入っていき、動き出すとわかったジュリエッタは飛び移る。

「あつー！やばつー！」

「部下たちの流した涙はもはや私の血肉となつてゐる！ 命の尊さを人の心知らぬモビルアーマーに分からせてやらねば！」

イオクの訳の分からない言葉に唾然とするジュリエッタの目の前で飛び去っていく。

「さーらばー！」

「ああもう！ お守りをしている場合ではないのに！ 早く来てくださいヴィダール！」

ジュリエッタも機体に取り込みその場を移動する。

内心苛立ちが抑えられなかった。

雪之丞はザックと共にグシオンとバルバトスのところにまでたどり着いていた。

「どうだザック！ 昭弘の様子は」

「駄目です。まだ意識が戻りません」

ザックはいまだ意識が戻らない昭弘の前でグシオンのシステムチェックに追われていた。

三日月はバルバトスの前で雪之丞に状況を簡単に説明した。

「あの鳥を見てからバルバトスが言うこと聞かなくなつた」

すると原因が分かつたザックが近くに寄つて来ると説明した。

「ちよつといいつつすか。多分原因はこの二つのリミッターじゃないつつすかねえ。こいつを見てください。バルバトスとグシオンのシステムログです。阿頼耶識からパイロットにフィードバックされる情報量に過度な制限が掛かったみたいなんすよ。逆に機体自体は出力制限は解放されてます。分かりやすく言うと出力全開にしたい機体側と、パイロットを保護するシステムがぶつかり合ってる状態なんす。それでどつちの機体も動きが悪くなってるんだと思います」

ザツクの説明に驚く雪之丞は疑問をぶつける。

「おめえどこでそんな知識を……」

「鉄華団入る前学校でこの手の勉強してたんすよ。こう見えても俺く割と優秀な子で」

ハッシュはザツクにどうにかするようにと告げる。

「んじやなんとかしろよ！これからモビルアーマーとやんなきやなんねえんだからよ」
そこにソニアがやって来た。

「やつても良いけど。旧式タイプの阿頼耶識システムは危険でしょうね。新型タイプはシステムを新しくしてあるからリミッター解除をある程度任意でパイロットの負担になりすぎない範囲で行えるけど……」

「こつちのタイプは難しいとっ？」

「そうね。それをしたら……」

ソニアの言葉に雪之丞が暗い表情をするしかなかった。

雪之丞から連絡を受けたオルガが受けた結果はバルバトスとグシオンが出せないということだった。

「無理に出してたとえ動けたとしても下手すりやエドモントンの二の舞だ」

オルガ達が話していたころラフタ達はハシユマルを食い止めている最中だった。

「ユージン達の準備はまだ!？」

「予定よりもずつと進行が速くてこれ以上は抑えられない!」

予定よりも進行が速いハシユマルにラフタ達はユージンに作戦の前倒しを提案する。

「ユージンやれるか!？」

通信機越しにオルガがユージンに問う。

「もうかよくつそ! やるしかねえだろ。巻け巻け! ガンガン巻いていけ! 奴さんが来やがるぞ!」

「あとちよつと! なんとかなる! する!」

「ああ! この調子なら……」

突然ラフタとアジーの目の前でハシユマルに攻撃が当たりハシユマルとブルーマの

移動速度が上がる。

モビルアーマーが細けえのと一緒に加速した。

驚くダンテにユージンも驚愕する。

「はあ!? なんでだよ!？」

「ごめんユージン! 抜かれた!」

ラフタの目の前でハシユマルは抜いていき、そのままの速度で移動していく。

一人の団員が一機のモビルスーツを確認した。

「くっ! 準備は!？」

「まだですよ!」

「なんだあいつ。あいつが撃ったのか?」

「あれはギャラルホルン?」

ユージンの視線の先にはイオクのレギンレイズがレールキャノンの限界が続く限り撃っていた。

「バレルが逝ったか……限界を超えた最後の一撃。感じたか? それを私を信じ散っていった者たちの痛みだ! もはやここまで。だが悔いはない! クジャン家の誇りを抱いて華々しく散ろう!」

イオクは目を閉じ覚悟するとジュリエッタが姿を現した。

「いえ。バカは死んでも治らないのであれば……無駄なので生きてください」
イオクのいた場所を高速で移動すると、ポイントを通過してしまう。

「目標……ポイントを通過しました」

「それにしてもあのギャラルホルンのアホが……どうなつてんだあいつら！」

ユージンの憤りに対しオルガはユージンに次の行動の指示をだす。

「次の手を考える。お前らは本部に戻つて補給してくれ」

（ビスケット……サブレ……どこにいるんだ？）

オルガはいまだに連絡の取れないアガレスの心配をしていた。

少ししたのち三日月と雪之丞はバルパトスを連れてオルガのところまで来ていた。

「どうすんの？ 俺出ようか？」

あくまでも出撃しようとする三日月に対し、オルガはあくまで反対する。

「たまには横でおとなしく見てろ。シノに連絡を取つてくれ」

そんなオルガの言葉に三日月はムツと表情を変える。

「フラウロスを使う」

オルガの言葉にメリビットが反応する。

「でもガンダムフレームをモビルアーマーに近づけるのは危険だと……」

「いやありやあこういう時にやうつてつけの機体だ」

雪之丞が賛成すると三日月が再び口をはさむ。

「分断した後は？」

「今ある戦力でモビルアーマーで叩く」

「それであいつをやれるの？」

「さつきマクギリスに連絡を入れた。あいつらが何とかしてくれる」

オルガの発言に雪之丞が口をはさんだ。

「それでいいのか？ 今回の仕事は鉄華団にとつちやあちらさんに力を見せつけとく場だったんじゃないのか？」

「仕方ねえだろ。クリュセを見捨てるわけにはいかねえよ……あそこにはビスケット達の妹もいるんだ」

「俺が出るよ」

三日月の発言にオルガは反対する。

「横で見てろつつつたろ。本体と細けえのを分断できりやあ今回の作戦は十分に成功なんだ。メンツの問題だけでわざわざ危険な目にあうことはねえ。それになテイワズからもらった俺の獅電を本部から運んでる。いざとなりや……」

「それはだめだ」

オルガの言葉に三日月は強く否定する。

珍しく意見がぶつかり合った。

悪魔達は様々な思いを馳せて戦いは更に激しさを増していく。

悪魔と天使

「すまなかつた。途中で足止めを……」

ヴィダールは何とかジュリエッタと合流していたが、ヴィダールはジュリエッタに嘘をついていた。

最もジュリエッタはそんな事気にしてすらいなかつた。

「もういいです。それよりイオク様をお願いします」

ジュリエッタの言葉にイオクは強く反応する。

その瞳は感動で一杯になっており、これから出撃しようとするジュリエッタに自らの感情を向けた。

「そうか！ 敵を取ってくれるというのか！ お前は……お前というやつは……」

イオクの言葉を無視してヴィダールとジュリエッタは会話を続ける。

「行くなら早くした方がいい。鉄華団とファリド公に先を越される」

「私の誇りを預けるぞ！」

そんなイオクの叫びにジュリエッタは叫ぶ。

「イオク様うるさい！」

ジュリエッタはそのまま走り去っていく中、遠くからイラクがイオクの姿を見ていた。

イラクは悪そうな微笑みをしており、もう一人ヴィダールの方を見ながら小さく呟く。

「今は放置しておくか……イオク・クジャン……君は私にとっても最後のパズルのピースなのさ……そしてガエリオ……フン。あの時死んでおけば楽だったのにな」

フラウロスは戦場に向け移動する中コックピットの中ではシノとヤマギがすし詰め状態になっていた。

「まったく団長も無茶言ってくれるぜ」

シノの言葉にヤマギも同意する。

「ほんとだよ。俺までコックピットに引きずり込むなんて」

「新しい装備の操作方法がいまいちわかんねえんだから仕方ねえだろ。時間もねえし説明書代わりだ」

「もう……」

ヤマギは不満そうな言葉をはきながらも足は嬉しそうにバタついていた。

「にしてもほんとにこいつでできんのかよ?」

「うん。モビルアーマーとブルーマの分断はフラウロスのキャノンなら可能だよ」

「だったらモビルアーマーを直接やっちまえば……」

「残念だけど近づくことができない状態でナノラミネートアーマーに対して致命傷を与えるのは難しいね」

ヤマギは目の前の端末を操作しながら簡単に否定したがシノはイマイチ理解は出来なかったが、「ヤマギがそう言うのならそうなのだろう」と思い込むことにした。

団員の一人がハシユマルの通過を確認した。

「来たぞ〜!」

「こちら第二監視ポイント。モビルアーマーの通過を確認!」

団員の連絡を受けたラフタとアジーは不安ながらも目標地点で待機していた。

「ほんとうに今度こそ大丈夫なんだよね?」

「ああ。信じるしかない。あいつらの力を借りるのも癪だけど仕方ないね」

作戦ポイントではマクギリス達が待機していた。メリビットの目の前にある端末でハシユマルの到着時間をカウントする。

「モビルアーマーの到着まであと10」

「全員聞こえたな?ここで奴を仕留めるぞ。なんとしてもだ!」

「来ました!」

しかし、ラフタ達の目の前に現れたハシユマルとプルーマは密集していて分断は無理そうだった。

「あいつあんな固まって！ これじゃ分断できないよ！」

「幅が狭くなつた分プルーマが密集したんだ」

「何とか分断してください！」

「やるだけやってみるけどさ！」

「数が多すぎる！」

メリビットの指示にラフタとアジは答えながらもまるで意味をなさない。フラウロスは目標地点に到着した。

「おいおいどうすんだ団長！ ポイントには着いたがよおこつからじゃ目標はみえねえんだぞ！」

すると、シノの目の前に流星号が姿を現した。

「俺が行きます！」

ライドは流星号を駆け急ぐ中シノは機体に注目した。

「んんん……ありやあ……俺の流星号じゃねえか！」

「ついてこいや！ 鳥野郎！」

ライドはハシユマルの前に移動する。

「こつちも行くよシノ！」

「おう！」

フラウロスの姿が大きく変わり始めると、そのまま二つのキャノンリアクターに接続させる。

まるで四つ足走行の動物へと変貌していくフラウロス。

「これがバルバトスやグシオンにはない変形機構。二基のリアクターの出力を集中させた……電磁投射砲の威力ならいつでも行けるよ！」

「唸れ！ ギャラクシーキャノン発射!!」

シノの叫び声と共に両肩のキャノンから弾が放出されると反動がフラウロスにやってくる。弾は渓谷を貫通し、ハシユマルとブルーマを分断する。

「見たかおまえら！ これが四代目流星号だ！ あとは頼んだぜ！」

ハシユマルの前に数機のモビルスーツが立ちふさがる。マクギリスはフラウロスの攻撃に疑問を抱いた。

「新たなガンダムフレームか。しかしあの威力……」

「来ます！」

石動の目の前にライドが吹き飛ばされる。ジュリエッタはそのとたんに攻撃を加える。

「ファリド公に手柄は譲りません！」

「あれはアリアンロッドの！」

「やらせるわけにはいかんな」

「はっ！」

石動とマクギリスはジュリエッタに負けじと機体を走らせる。しかし、ハシユマルには何一つ通用しない。石動とジュリエッタはそのまま壁に蹴り飛ばされる。

「くっ！ これほどとは……」

マクギリスの驚愕を待たず、ハシユマルはマクギリスの機体を吹き飛ばす。メリビツトはオルガにマクギリス達の状況を報告する。

「モビルアーマーに防衛線を突破されました！」

「チャド！」

「こつちもいっばいいいっばいですよ！」

チャド達はブルーマの相手に精一杯でハシユマルの相手などできるはずもなかった。オルガは途端に走り出す。

「団長?！」

マクギリスは改めてモビルアーマーの強さを確認していた。

「これが厄祭戦で人類を絶滅の窮地に追いやったモビルアーマーの本性か！」

ライドに攻撃を加えようとする中、ハシユマルの動きが完全に止まった。

その理由は壁を勢いよく破って現れたアガレスにある。

「あ……あれは」

ジュリエッタの視線の先に現れたアガレスはそのまま奥へとハシユマルを連れていく。ハシユマルを追うようにバルバトスも降り立つ。

「なぜ彼が……」

マクギリスが驚く中バルバトスはそのままハシユマルを追いかけていき、それについていくように明楽とジョシユアも同じように駆けて追いかけている。

「石動行くぞ！ 我々も追おう！」

「はっ！」

「私も……追わねば」

ジュリエッタも追いかけていく中、大きな空間にアガレスはハシユマルを待ち受ける。遅れてバルバトスとアンドロマリウスとフェネクスも追いかけていく。

「おいバルバトス。あれはお前の得物なんだろう？ 余計な鎖は外してやるから見せてみるよ……お前の力を」

「先輩……私達の手柄を奪わないでくださいよ……新しい阿頼耶識だからこそ出来る限界突破試させてください」

「此所で殺す…絶対!!」

バルバトスの目が赤く強く光ると、三日月の右目が赤く充血する。そして、アガレスは目をさらに青くさせる。

フェネクスは全身からナノマシンを噴出していき、アンドロマリウスは両腕から熱を放ちながら目の前に現れた獲物に照準を向けた。

「アガレス! お前は機械で俺は人間だ! お前が機械なら俺達のいうことを聞け!!
俺は人間だ!!」

バルバトスとアガレスとアンドロマリウスとフェネクスはハシユマルと対峙する。

マクギリスと石動とジュリエッタはようやく戦いの場にたどり着く、バルバトスとアガレスがハシユマルを挟み込むような形で立ちふさがる。

フェネクスは空中に浮かんでいき、アンドロマリウスはハシユマルは背中中に回り込んでおり尻尾の方向をジツと見つめていた。

バルバトスは目を赤く、アガレスは目を青くする。石動とマクギリスは援護するための前に出ようとする。

しかしそれを三日月は冷たく引き離すだけだった。

「援護する。石動お前は左から……」

「いらぬ。邪魔」

マクギリスの援護を邪魔と一蹴すると、バルバトスとアガレスはとてつもない動きで一気にハシユマルとの距離を詰める、アガレスはテイルブレードの攻撃を紙一重で回避し、レンチメイス改を腕にたたきつけ、いったん距離を取る。

アンドロマリウスは後ろからハシユマルに殴りつけようとするのだが、ハシユマルは後ろから襲い掛ってくる攻撃を尻尾で迎撃を試みてる。

それに対して明楽はアンドロマリウスの右腕で尻尾を強く掴んで引つ張ろうとする。フェネクスは明楽が尻尾を完全に抑えたときにハシユマルの背中に張り付いてナムシンを流し込んでいく。

動きが悪くなる中ハシユマルはフェネクスを弾き飛ばして動きに自由が得られた。

バルバトスはソードメイスで攻撃を仕掛け、石動を盾にするように攻撃を回避する。

ジュリエッタたちは二人の動きについていくことすらできない中でバルバトスはハシユマルの上に乗リ攻撃を仕掛けるのをハシユマルはテイルブレードのワイヤーで吹き飛ばす。

その姿を見たビスケットは負荷に苦しみながら叫ぶ。

「み、三日月！」

「大丈夫。それよりそっちはまだ動ける？」

「ああ、行ける。このまま仕留めるぞ」

「うん。明楽とジョシユアも大丈夫？」

「まだ行けるけど……この尻尾を抑えるだけで必死なだけで……!!」

「私も今のでフェネクスのナノマシンが結構消耗しました……」

しかし、アガレスとバルバトスが動きを一瞬止めていた隙にハシユマルは近くのモビルアーマーの武装をあさりそのまま自分の武装として装備する。

背中には巨大なタンクのようなものが装備されていた。

バルバトスとアガレスは壁に埋まった自分の武器を引き抜こうとするのをハシユマルはビームでソードメイスを壊し、背中から高速で出てきた弾で埋まった武器を壁ごと破壊された。

その攻撃にマクギリスは驚く。

「あ、あれは……ダインスレイブ!!」

バルバトスは四つん這いで動きながらもハシユマルのパーツをもぎ取る。

アガレスは近くにあった大型ランスを取り出し、突き刺そうとするが、ハシユマルはそれをテイルブレードでガードする。

ハシユマルはテイルブレードにくっ付いているアンドロマリウスをなんとか引き離したが、その瞬間アンドロマリウスは右腕を犠牲にしつつもハシユマル下側から攻撃を

加えた。

ハシユマルは腕でバルバトスを殴りつける。ジュリエッタを含め、三人は唾然としていた。

「何なんだこれは……」

「動きが……見えない」

三日月はこれでも足りないと呼ぶ。

「使つてやるからもつとよこせ……こんなもんかよお前の力は」

マクギリスでさえ驚愕していた。

「これが……厄祭戦を終わらせた力……か」

背中に乗っていたバルバトスをハシユマルはテイルブレードで吹き飛ばしアガレスを足で蹴り飛ばした。

バルバトスのコックピットの近くにテイルブレードの攻撃がやって来た。

「あつ……あつぶねえ……なあ！」

バルバトスを殴りつけるハシユマルはそのままテイルブレードをジュリエッタの方に向けた。

ジュリエッタのコックピットにあたるうとした攻撃をサブレはアガレスを使つて庇う。アガレスの左腕をもぎ取るように突き刺さる。

「ど……どうして？なんで私を……」

「俺の近くに居ろよ……守り切れんから」

そういうとアガレスは再びランスを取り、突き進むような体勢になる。

三日月は石動が持っていた大剣を奪う。

アンドロマリウスは残った左腕で突っ込んでいこうとし、そこにフェネクスが上空でナノマシンを振り回して一瞬だけだがハシユマルの動きを止めてアンドロマリウスは左拳を叩き込む。

動きが多少ぎこちなくなるがテイルブレードで明楽を吹っ飛ばすと、明楽はなんとか受け身を取るが機体のあちらこちらから悲鳴が上がっていく。

フェネクスすらもテイルブレードで軽く飛ばしてからアガレスを睨み付ける。

「俺達がテイルブレードをひきつける、三日月はそのままあいつをやれ！」

「分かったそっちは任せる」

両機はほぼ同時に走り出し、サブレは三日月に向けられたテイルブレードの攻撃をランスで受け止め、そのまま三日月は駆け抜ける。

しかし、テイルブレードの攻撃はアガレスの右腕をもぎ取り、そのまま三日月の方に向く。

「さ、させるか!!」

両腕を失ったアガレスは機体を走らせ、テイルブレードの攻撃をそらし、その隙にバルバトスはハシユマルの頭部に攻撃を決める。

そらされた攻撃は辛うじてコックピット直撃だけは阻止した。

しかし、両機とも戦えるような状態ではなく、バルバトスも、アガレスも崩れ落ちたハシユマルに寄りかかるように倒れた。

ギャラルホルン本部ではセブンスターズによる会議が開かれていた。マクギリスによる報告が行われていた。

「報告書にある通り私が火星に向かった目的はあくまでもモバイルアーマーの視察でした。ですがそれを邪推したクジャン公の介入がモバイルアーマーを目覚めさせてしまった。我がフアリド家が現地の組織と協力しモバイルアーマーを撃破したことで事なきをえました。一歩間違えれば市街地は蹂躪され火星は大惨事となっていたことでしょう」

そんなマクギリスの言葉にイオクが喰ってかかる。

「黙れ！全て貴公が仕組んだことではないか!!」

「私が？なんのために？」

「七星勲章!!」

「そんなものに興味はない」

「しらを切つても無駄だ！そうですよ？エリオン公……えっ？」

しかし、ラストアルはそんなイオクの言動に賛成せず、出てきた言葉はマクギリスを称賛する言葉だった。

「モビルアーマーの鎮圧お見事であつたファリド公」

「そんな！ラストアル様何を……」

イオクはシヨックで黙り込んで座り込むと会議室に一人のギャラルホルン士官が入り込む。

セブンスターズの面々から「何事だ!？」と怒鳴り声上がるが、士官は焦った様子で一つの映像を見せてくれた。

そこにはイオク・クジャンがハシユマルを目覚めさせた瞬間が写されており、それが堂々とニュースで流されていたのだ。

セブンスターズは全員ラストアルですら同様で開いた口が塞がらなかつたが、それは同時にギャラルホルンに大きな動揺を与えた。

変革する未来編

家族のカタチ

ビスケットが団長室に入ってくると、後悔に襲われたオルガは机に顔をぶつけ、そのまま悩んでいた。

ビスケットはオルガのそばまで寄りそう。

「三日月……右半身が動かなくなっただって？ 俺も後悔してる。あれはオルガの所為じゃ……」

「わあつてる。でも……俺があいつを追い詰めてるんじゃないやねえかって思ってしまうんだ。だってそうだろ？ ミカはいつだって俺の為に進んできた……」

三日月は何時だってオルガの命令を聞くわけじゃ無い事はビスケットだってずっと見てきたことでもあるのだ。

時にオルガの為なら彼の命令を聞かない事だってある。

ビスケットはオルガに尋ねる。

「なら、オルガは三日月にどうなってほしいの？」

ビスケットがずっとオルガに聞いてみたかったことであるが、同時に今まで聞けな

かったこと。

結局の所でオルガは三日月にどうして欲しいのか。

「俺は……あいつに家族を作ってほしいって思うんだ。俺たちは家族なんて知らなかった。だからほしかった。あいつも家族を作れば……きつと。そうだ、サブレはどうだ？」

「怪我は無いよ。俺と一緒に。でもソニアさんにはコテンパンに怒られちゃって…俺もだげど」

そんなビスケットの言葉にオルガは「そうか…」とだけしか答え無かった。

「俺達の作戦で壊したモノだからな。弁償ぐらいなら…」

「大丈夫だよ。そこまでじゃないし…」

「そうか…でもさ。良いよな家族ってさ。俺やミカには家族って無かったからさ。俺はそこまで気にならないから。俺には鉄華団の奴らが俺には家族みたいなものだ。だけど…」

「うん。三日月にとってはオルガだけなんだろうね。俺達との関係だつて仲間って感じだし」

「ああ。だからあいつに好きな奴を作ってそうやって生きてくれれば…これも無理な注文なのかな？ ビスケット」

「俺は…良いことだと思っけど？」

オルガはビスケットと共に微笑む。

「そうだよな…」

「お見舞い遅くなってしまつてごめんなさい」

クーデリアからのお見舞いのお菓子をアトラからもらう三日月。

「三日月全然じつとしてくれなくて、ハツシユ君に運ばせてもずつとどこか行っちゃや
んです」

「だからバルバトスの近くに置いといてよ。あれに繋いでくれたら動けるから。桜ちや
んとこはどう？」

三日月はクーデリアにそう問う。

「順調ですよ。来月にはまた次の収穫です」

「そつか。でもこれじゃあもう手伝ええないな」

三日月がどこか残念そうにしているとそれを励まそうとするクーデリア。

「そんなことありません！ 畑仕事なら私も手伝いますし！」

しかし、三日月はそんなクーデリアの言葉を否定する。

「駄目でしょ。クーデリアにはクーデリアの仕事があるでしょ」

「はい……そう……ですよね……」

クーデリアとアトラは部屋を出ると、クーデリアは自分の気持ちを吐き出す。

「私は卑怯者です。三日月に会うのが怖かった。不安だったんです。だからずっと会いに来ることができなかつた」

そんなクーデリアの言葉にアトラは同じ気持ちを抱きながらも答える。

「で……でも三日月何も変わらなかつたでしょ?」

「はい。変わりませんでした。それをずっと恐れていたんです。こんなことになっても変わらなかつたら……またどこかへ行ってしまったら……」

アトラは同じような不安を抱く。

「私同じようなこと考えてた……。三日月変わらなくて体……腕がなくてもバルバトスがあれば大丈夫とか言つて……。」「団長が言つたらいつでも動ける」って……。それ変わらぬのうれしいはずなのに……。次にどこかに行つたらもう三日月戻つてこないような気がして……。私クーデリアさんにお願ひしたいことがあるんです! 私がビスケットと子供作るから、クーデリアさんは三日月と子供作つてほしいんです!」

そんなアトラの突拍子の無い言葉にクーデリアは驚く。

「えっ!?!」

マクギリスの興味はガエリオより三日月の方に向いていた。マクギリスは石動に尋ねる。

「石動……お前はあれをどう見た？」

「あれ……といますと？」

「バルバトスとアガレスの戦いだ」

「バルバトスは理性なくひたすら破滅へと突き進む己の身までも食いつぶすかのような……方やアガレスは逆に己の身を傷つけながらも他人を守ろうと必死になっているように思えました」

「しかし、あの強さは本物だ……あの男が生きていたとして、ラスタルがそれを飼っていたとして、それを純粹で正当なカードとして強さを保有するのは腐った理想が蔓延する曖昧な世界でだけ。バルバトスが……三日月・オーガスが再認識させてくれたよ。真の革命とは腐臭を一掃する強烈な風だ。本物の強さだけが世の理を正しい方向へと導く」

ヴァイダールは一人の女性と話をしていた。

「ぎくんねん。全然データが取れてないじゃない。何しに火星くんだりまで行ってきたの？」

「それでも収穫はあったさ」

「あらジュリー」

ジュリエッタはその女性の前に姿を現した。

「技術部長。あの機体のテスト私がお引き受けします」

「あら本当に!? かなりピーキーな機体だから任せられる子がなかないなかったのよ」

二人が話しているとヴィダールが口をはさむ。

「ラスタルの許可は？」

「もちろん取りました。私を疑うのですか？」

「いや、ラスタルがそれを指示したとは思えないだけだ」

「余計なお世話です」

「そうか？」

ジュリエッタは自らの胸に手を当てる。

（このままではいけないのです。このままサブレに守られているだけの自分では）

「イオク様！クジャン家の当主ともあろうお方がこれ以上怪しげな輩と接触を持つのは……」

イオクの部下はジャスレイと接触するのを止めようとするが、それでもイオクは繋ぐ

ように告げる。

「いいから繋げ！ 私の命を輝かすためだ。部下の尊い犠牲により繋がれたわが命。この命がラストル様に侮蔑されるようなことがあれば部下達に顔向けができないではないか！ だから早く繋ぐのだ。ジャスレイ・ドノミコルスに」

現在謹慎を命じられているイオクは、更に動き出そうとしていた。

ビスケットが廊下を歩いていると、後ろからアトラが歩いてきていることに気が付く。

「あ、アトラ。少し待っててね……あと少しで終わるから」

「ね、ねえ！ ビスケット……私と子供作ろう!!」

アトラの言葉にビスケットの思考が追いつくのに数秒かかると、ビスケットはとてつもなく驚く。

「え、えええ!!? どうしたの!? アトラ！」

「私、本気だよ！」

ビスケットはまっすぐアトラの目を見つめると、決してその言葉が嘘ではないとわかる。ビスケットも優しく微笑む。

「……分かった。作ろうか……」

「うん！」

そして偶々鉄華団の施設まで来ていた明楽はしつかりと聞いていた。

クーデリアは再び三日月の部屋を尋ねると、三日月はクーデリアが現れたことに気が付いた。

「どうしたの？ なにか忘れ物？」

「いえ……三日月は子供は好きですか？」

クーデリアのそんな突拍子の無い言葉に一瞬驚くと、逆に三日月が訪ねる。

「クーデリアは子供がほしいの？」

「え？そ、そうですね」

三日月はふと考えると、今度は三日月が突拍子の無い言葉を放つ。

「じゃあ、俺と作る？」

クーデリアは一瞬驚くが、すぐに落ち着きチャンスとばかりに条件を提示する。

「なら……三日月はお父さんになるということですよ？ 約束できますか？」

「……………俺……………どうすればいいんだろ？」

「三日月の夢は私が預かっています。ですので一緒にかなえましょう？ 今度は私があなたを支えます。それが家族でしょ？」

「……じゃあよろしく」

新しい家族が生まれようとしていた。

それを聞いていたオルガはふと嬉しい気持ちになって三日月から遠ざかっていく。

翌日三日月はビスケットにお願いして、自分の畑に連れてきてもらっていた。

「どうしたの？ いきなり畑に連れて行ってほしいって」

「ねえ……ビスケット……お父さんってどんな感じ？」

三日月の突然の質問に目を白黒させると、優しく微笑み隣に座る。

「……俺も考えてるんだ。どういのがお父さん何だろうって」

笑うビスケットを見て三日月もなんとなく気が付いた。二人は畑をジツと見つめると、それぞれの家族のカタチを思い浮かべる。

誰もきつと教えてくれることでは無いと二人は思い浮かべていた。

いつか生まれてくるかもしれない子供に何が出来たのか、今まで考えてこなかった未来を考えると来ようとしていたのかもしれない。なかった。

アジー達は鉄華団での仕事を終え、今日帰ろうとしていた。

オルガがアジーとエーコに別れを告げる。

「長い間世話になったな。兄貴にもよろしく伝えてくれ」

その間ラフタだけは昭弘と二人で別れを惜しんでいた。

「ほくんとさ。あの時はどうなることかと思つたよ。昭弘ボロボロなのに後先考えずに突っ込んでいくし」

ラフタがぐちぐち文句を言っていると昭弘は視線をそらす。

「しかし実際なんとなつた」

「そういう問題じゃないの！ もう部下もいるんだし無茶しすぎないでよね！」

「まあお前もいなくなるしな。今まで本気で俺の背中を任せられると思えたのは三日月とサブレとお前だけだった。確かに少し考えないとな」

ラフタの気持ちにまるで気が付かない昭弘にラフタは諦めながら握手するために手を出す。

「そっか……じゃあそれでいいや。ねえ握手しよ」

昭弘は手をズボンで拭き握手するために右手を出す。

「ありがとよ。元気でな」

「うん。昭弘もね」

そういつてラフタが去っていくとすれ違いに昭弘の後ろから昌弘が姿を現す。

「良いの？ 何も言わなくて」

そんなことを聞く昌弘に全く理解できていない昭弘が首をかしげる。

「なんでだ？」

昌弘は大きくため息を吐き、小さくつぶやく。

「……鈍感」

「無理……だど？」

イオクは自宅でジャスレイと通信していると、ジャスレイからの返答に驚きを隠せない。
い。

「今、鉄華団と正面からぶつかるのは得策ではないと……」

ジャスレイのそんな言葉にイオクは怒鳴り声をあげる。

「もういい！ 頼りにした私がバカだった！ 私はなんとしても鉄華団に復讐せなばならんのだ。倒れた部下達の忠義に報いるためにも……」

暴走するイオクを止める者などいるはずもなく、ジャスレイもそんなイオクを利用しようとしていた。

「勘違いなさらないでください。私はより効果的な方法があると申し上げただけですよ。鉄華団は所詮実行部隊。本当の敵は彼らではなくその背後にいる奴なのです」

ジャスレイの提示するその敵を知りたくて立ち上がる。

「誰だそいつは!？」

「タービンスですよ。鉄華団の兄貴分、名瀬・タービンが率いるテイワズの下部組織の一つです」

ジャスレイに乗せられたイオクは標的を鉄華団からタービンスに変えた。

「タービンス……そうかタービンスか!」

その話を盗聴器で聞いていたイラクは悪魔なような微笑みを浮かべていた。

「ホント……分かりやすい」

イラクは通信端末を取り出してみるとある人物に情報をリークし始めた。

『イオク・クジャンが独断行動を取る気配あり』

その情報が向かう先が何処なのかはイラクしか知らない。

「イオク様。あんなものをどうなさるのですか？禁止条約で使用は制限されているのですよ。」

イオクの船には持ち出された兵器が固定されている。

「無論分かっている。だからこそ我が作戦の要となるのだ」

「ですがラスタル様に一度ご裁可を仰いだ方が……」

部下がイオクにラスタルへの判断を仰がせようとするが、イオクはまるで話を聞か

ず、独自の判断で動く。

「問題はない。これはラスタル様のご利益にもかなうことなのだ。一石二鳥……いや三鳥とはまさにこの事」

部下が不安を募らせる。

「は……果たしてそうなのでしょうか？」

「お前らにはわからないだろうな。だがそれが政治というものだ」

イオクは自信満々に乗り出す。すると、ジュリエッタがそばまでやってくる。

「私も参ります。今テストしている試作機はベンチテストも終わりあとは実戦を試すのみ。是非ともその力を試す機会がほしいのです。どうかチャンスを。私は早く強くならねばならぬのです」

「分かった……ジュリエッタ。共にタービンを倒そう！ 全ての責任は私が取る！

お前達は黙って私の言葉に従ってほしい！」

部下も何も言えない中、ジュリエッタはイオクをじつと見つめる。

（どうすれば……まで調子に乗ることができるとしようか？ あんなものまで持ち出して……お父様も面倒な仕事を私に任せたものですね。最悪逃げ出す事も考えろつと言っていましたか……）

「イオクにも困ったものだ。人には適材適所というものがある。奴には力など求めていないのだが……。クジャン家には主のためなら命を投げ出す。それは当主への忠誠というだけではない。奴の率直さと熱意には人を動かす力があるのだ。君が仮面さえ脱いでくれればイオクもこのような真似をせずともすむのだが」

ラストルはイオクの行動に頭を悩ませていると、後ろに立っているヴィダールをふと見る。

「あなたには救ってもらった恩義がある。しかし真意を確かめるまでは……」
ヴィダールは仮面を脱ぐこともできず、それを断った。

「ああ。それは承知の上だ。しかし人が人を理解することはそう簡単ではない。まして相手が相手だ」

そんなラストルの言葉にヴィダールはそれでも理解しようとしていた。
「彼を理解する権利が私にはあると思っっている。私は彼に殺されたのだから」

燃ゆる太陽に照らされて

「イオク・クジャンがタービンスの一齐取り締まりを？ 他に動きは？」

マクギリスの元にもイオクの情報が入って来た。

石動はマクギリスへの報告をする言葉を決して止めない。

「出発にあたり本部四番倉庫から何やら持ち出したようですが……」

石動の報告に思い当たったマクギリスはハシユマルとの戦いを思い出す。

「四番……覚えているか石動。火星でモビルアーマーを足止めした鉄華団の攻撃、そしてモビルアーマー自身が使った兵器を。あれはダインスレイヴ。ナノラミネートアーマーすら貫く過剰な破壊力から使用・保有の禁止がギャラルホルンの下で条約として結ばれている大型レールガンだ。まあ使用したのは通常弾頭のようなだから条約的にはグレイゾーンではあるが……厄祭戦の遺産たるモビルアーマーが現れ、三日月・オーガスとサブレ・グリフオンの操るガンダム・フレームは昔日の悪魔の力を世に示した。その熱狂と恐怖は人々を揺り動かしやがて時代そのものを大きな渦に巻き込んでゆく。今こうして禁じられた旧兵器が持ち出されるのもそういった一つの時代の流れなのかもしれない」

マクギリスは立ち上がると石動はマクギリスに尋ねる。

「では……」

「全ての同士達に連絡を。ついに立ち上がるべき刻が来たと」

（あの仮面が本当にあの男だとするならば私はすでにラスタル・エリオンに襟首をつかまれていることになる。しかし私の魂までは掴めはしない）

少しずつ運命が動き出そうとして居た。

「よくしきたきたきた！ようやくセツティングの当たりが出たつばいよ」

エーコは新型モビルスーツである『辟邪』の調整を行っていた。

タービンスに帰って来たアジー達は辟邪の調整に追われている。

「やっとか。思ったより手のかかる機体だねこの辟邪は」

「だね。癖がないのが癖っていうか。でも鉄華団みたいにパイロットも任務内容も雑多な組織だと結構使いやすい機体に仕上がるかも」

ラフタはふと鉄華団の方に話を向ける。

「ふん」

「ん？ 何？」

「いえいえ別に」

ふとアジーとラフタが話しているとアミダが後ろから声をかけてきた。

「手間を掛けさせるね。帰って来たばかりで悪いね」

そんなアミダにラフタが答える。

「いいんです。動いていた方がモヤモヤ考えなくて済むし」

先ほどの会話でアミダは事情を察した。

「いろいろあつたみたいだね。鉄華団での生活さ」

「ああ……まあどうなんでしょう……」

はぐらかすアジーにアミダはアジーの頭を撫でる。

「分かりやすいね。素直ないい子だよ。あんた達はみんな私の自慢だ」

「姐さん……」

「そうか。ラフタも他の男に取られる時が来ちまったか」

名瀬はどこか嬉しそうに酒を飲む。アミダはそんな名瀬に問う。

「その割に嬉しそうじゃないか」

「ラフタも他の女達も俺にとつちや妻つてだけじゃなく娘みたいなもんでもあるからな。それが鉄華団の奴らを選んだなら自分の娘が男を見る目がある女に育つたってことだ。そりや嬉しいさ」

「まったく最近のあんたは何かあつちや鉄華団、鉄華団つて……相変わらずこの安酒を？」

「アミダは名瀬の飲んでいる酒に話題を移す。

「好きなんだよ。お前と出会った思い出の酒だしな」

「思い出すねえ確か火星のちっぽけな宇宙港の酒場だった」

二人が語りだすのはタービンスができるまでの物語。

「私を護衛に？」

その昔、火星にあるちっぽけな宇宙港の酒場で名瀬はアミダに仕事を頼み込んだ。

「頼みたい。ちよつとでかくてやばいヤマがあつてな」

「いいのかい？ 私が女だつて分かったとたん引く奴も多いんだけどね」

「変わったことを言うなあ。女と男ならそりや女を選ぶだろ？」

「ふふつ。あんた見方が変わつてるよ」

一匹オオカミの運び屋だった名瀬は傭兵だったアミダに仕事を依頼してきた。

名瀬は少しずつアミダに惚れていった。

名瀬はコンビを組まないかと迫つたが答えはNOだった。

「これ以上は無理だ。次はペインナツツ商会との護衛任務がある」

「ああ……あの女だけの輸送会社か」

長期航路の輸送業務はいろんな事情から逃げ出した女達の行きつく場所だった。

安値で買収叩かれ男でも裸足で逃げ出すような危険な仕事ばかりを受けるはめになる。

アミダはそんな女達の船を進んで護衛していた。

そんなアミダに名瀬は問う。

「なあ。俺にできることはねえか？」

そうして名瀬とアミダが作ったのがタービンスだった。

裏社会に搾取される女達を名義上妻にすることで救い出し、乗組員にすることで職も与える。

女達の安全を守るため、後ろ盾を作るために名瀬はテイワズの傘下に入る道を選んだ。

それから名瀬はアミダと係わった女の輸送業者達をまとめ上げてネットワーク化し、地球と木星の間を網羅する大輸送網を作り上げタービンスは構成員五万人の巨大組織に成長した。

その動きはマクマードにも認められて名瀬はテイワズで上り詰めていった。

そのころからジャスレイは名瀬を煙たく思っており、アミダが喧嘩しようとするのを

名瀬が食い止める。

「まだむくれてんのか？」

「なんであの時止めたんだよ？」

「あいつらの言ってることはなんも間違つてねえ。俺はお前らのおかげで成り上がったんだ。女は太陽なのさ。太陽がいつも輝いていなくちや男は萎びちまう」

そうしてタービンはできた。

「まあ女のおかげっていうのは今思えばちょっとだけニュアンスが違うかもしれないねえな。前にオルガに言ったことがある」

『まあでも血が混ざつてつながって……か、そういうのは仲間っていうんじゃないぜ。家族だ』

二年前オルガに告げた言葉を思い出す。

「あいつ家族つて言葉聞いたら豆鉄砲くらったみてえにきよとんとしてよ」

なつかしそうに語る名瀬にアミダが答える。

「知らなかつたんだね……家族つてもんを……」

アミダとそんな話をしてしていると警報音と共に女性の声が響き渡る。

「緊急連絡です！　うちの輸送班と各地の事務所にギャラルホルンの強制捜査が入りま

した!」

事態は最悪の方向へとタービンを連れて行こうとしていた。

マクマードのところに顔を出した三日月たちにマクマードは上機嫌だったが、三日月はそんなことなど知るよしもなく、菓子を食べていた。

「いや、よく顔を出してくれたな三日月よ。モビルアーマーとやらの一件聞いたぞ。厄祭戦時代の化け物を潰すたあおめえらやっぱり面白れえなあ」

上機嫌なマクマードに対しハツシユはアトラに耳打ちする。

「もつと怖えんかと思つてましたけど、ただの爺さんですね」

「三日月気に入られてるみたい」

するとマクマードの前に部下が姿を現す。

「おやじ。その……ギヤラルホルンの手入れの件で」

上機嫌だったマクマードの表情ががらっと変わった。

「……なるほど。マハラジャが言っていたのはこのことだったか」

マクマードは立ち上がる。

「幹部連中を集めろ」

マハラジャを前にオルガが食って掛かる。

「あんたが裏から根回ししてどうにかなんねえのかよ!」

マハラジャは首を横に振る。

「ガルスの子に言えば何か打開案があるかもしれんが、得策とはいえん。今下手に動けばこちらの作戦に支障が出る」

「くそ!」

オルガがうろたえる中、マハラジャはサブレを連れて部屋を出る。

「今回の相手はギャラルホルンだけじゃない。うちの秘密航路や看板も出てない事務所にまで手が入ってるっことは……」

名瀬はハンマーヘッドと共に姿をくらませており、アミダの言葉に名瀬が同意する。

「ああ。見事に内側から刺されたな」

「やっぱリジャスレイかい?」

「考えたくないがおやじつて線もある。なにせよ腹括んなきやならねえ時が来たみたいだな」

ハンマーヘッドの通信にオルガが割って入る。

「兄貴! ハンマーヘッドの予定航路をくれ。今から俺らで……」

応援に行こうとするオルガに名瀬は冷たく突き放す。

「お前は来るな。今や俺達は違法組織だ。俺達との繋がりが取り沙汰されりや鉄華団はどうなる？ それにお前はこれからテイワズの未来すらかかった戦いがあるんだ。この絵を描いた奴はお前たちが手を出してくることまで見越してるはずだ。だとすりや突っ走れば連中の思うツボ。とにかくこいつはテイワズの内輪もめの結果だ。お前らにや関係のねえ話なんだよ」

名瀬の言葉にオルガは食って掛かった。

「俺達だってテイワズの一員だ！ 関係ないことはねえでしょう。いやだいたいあつてもなくてもかまわねえ。兄貴を救うためなら俺は……」

それでも名瀬は突き放す。

「じゃあ言わせてもらう。お前とは兄弟の盃を交わした。だが俺はお前の家族じゃねえ。見失うなよオルガ。お前がいの一番に守らなきゃならねえものを。それ以外は全部後回しにしる。家族を幸せにするつてのは並大抵の覚悟じゃできねえことなんだ。分かったら前を向け。鉄華団を……家族を守る。それだけを考えろ。いいな？ オルガ・イツカ」

「兄貴……」

これ以上は何もいえなかった。

ノブリスが部屋でアイスを食べていると、ドアをノックする音が聞こえてくる。「なんだ？」

黙って部屋に入って来た人物を視認すると、ノブリスはアイスを落とし、窓際まで後ずさる。

「マ、マハラジャ・ダースリン!？」

マハラジャは不敵に微笑むと少しづつ歩いて行くとノブリスは近くの電話を取る。

「何をしている！ 誰かこんか!!」

「誰も来ないぞ？ お前以外はすでに始末したしな」

ノブリスの焦りはさらに増していき、ノブリスはギャラルホルンに連絡を入れようとするが、外への連絡が付かない。

「ちなみにここから外への通信は切つてあるぞ」

「く、来るな！」

ノブリスは震える手で銃を取ると、さらに窓の方へ後ずさるのを見届けたマハラジャは手で合図を送る。

「あまり窓際に近寄らん方がいいぞ……つて言つても遅いか」

何処からか撃ち込まれた銃弾は窓を突き破り、ノブリスの頭を貫通するとノブリスは

頭から大量の血を吹き出しその場に倒れた。

「まあ、お前を殺して資産を分割する準備をするのに二年もかかるとは思わなかったが……」

すると、マーズ・マセの端末に連絡が入り、通信しながらオイルを部屋中に撒き、マツチに火をつけるとドアを閉め出ていきながら部屋に火をつけた。

サブレは反対側のビルにいと大きくため息を吐いた。

「なんで俺がこんなことをしなくちやいけないんだよ。自分でしろよな……」

「サブレ。急いでジュリエッタの回収に行け。これは命令だ」

ノブリスの事務所は火災で全て潰れてしまい、生存者のいないまま捜査は打ち切られた。

時を同じくしサブレは急いでジュリエッタ回収の為動き出していた。

「ですが……」

クーデリアがマクマードに食い気味に立ち上がるが、マクマードは意見を変えない。

「タービンスはギャラルホルンから違法組織と認定された。手助けなどしようもんなら巻き添えくらって潰されるのがオチだ。お前らにはこの後の作戦があるんだぞ、お前らの行動にテイワズの未来がかかってるんだぞ。オルガ・イツカにもそう言つとけ！」

決して譲らないマクマードに三日月が代わりに答える。

「分かった。言っとく」

三日月の淡白な答えにクーデリアがショックを受ける。

マクマードも三日月があっさり引き下がる姿に疑問を持つ。

「やけにあっさり引き下がるじゃねえか」

「目を見れば分かるよ。あんたはここでも動かない」

三日月たちが屋敷から出ていくと、マクマードは名瀬と通信で話をする。

「所帯がでかくなればあちこちに綻びが出るのは必然よ。それがギャラルホルンだろうがテイワズだろうが……で、どうしてほしい」

マクマードが名瀬に尋ねる。

「おやじ。盃を返させてくれ。タービンを解散する。そのうえでダメな息子の最後の頼み……」

「女どもの面倒を見ろってんだろ？ 俺の直轄組織に入れるよう手配してやる」

名瀬は深く頭を下げる。

「恩に着ます」

「今までお前のわがままをどんだけ聞いてきたと想ってたんだ」

「これが最後です」

名瀬は最後だと決め決意を固める。

オルガは壁を思いっきり叩く。

「くそっ！ 名瀬の兄貴がハメられたことは分かってんのおやじは知らぬ存ぜぬを決め込みやがった！」

イライラするオルガをメリビットが諫める。

「団長。今動けばタービンス同様鉄華団も違法組織と認定されます。名瀬さんもそれがよく分かっているから団長に動くなど命じたのでしよう」

「分かっているよんなこたあ！ でも俺は兄貴を……」

それでも助けたいオルガだが、それでもメリビットが引き留める。

「鉄華団を潰す気ですか？」

「それでも……なんとかしてえと思っちゃいけないのかよ俺は……」

団長室にシノと昭弘が入ってくる。

「らしくねえなあオルガ」

「タービンスはどこにいる？」

シノや昭弘はタービンスの現居場所を尋ねるとメリビットが答える。

「アリアドネの航路外にある中継基地です」

「俺の流星隊と昭弘の筋肉隊で脱出した非戦闘員を保護しに行く」

シノの言葉に昭弘が反応した。

「おいシノ筋肉隊つてのはなんだ？」

「二番隊なんてださい名前じゃあかつこつかねえだろ」

二人が言い争いをしていると、メリビットが口をはさむ。

「二人ともわかっているの!? 今鉄華団が動くということは……」

「直接やり合わなきゃいいんだろ？」

「民間人を助けるだけだ」

「俺の流星号と昭弘のグシオン、ライドの雷電号が先行する。流星号と雷電号はロケットブースター付きのクタンで運ぶ。グシオンには新型の追加ブースターパックを装備。もうヤマギ達に作業を進めさせてる。俺達が中継基地付近でモビルスーツの運用テストを行っている途中避難してきたタービンスの非戦闘員を救うってシナリオだ。それなら名瀬の兄貴に背いたことにはならねえだろ？」

シノと昭弘にオルガが頭を下げる。

「シノ……昭弘……兄貴を頼む！」

ハンマーヘッドは中継基地での撤退作業が着実に進んでいき、名瀬はブリッジにいるメンバーに告げる。

「もうここは俺だけでいい。お前らも早く輸送船に行け」

名瀬の言葉にエーコが驚く。

「俺だけって……ダーリン一人でハンマーヘッドを動かす気？」

「いざって時に敵艦隊への囮として使うだけだよ」

すると一人の女性がブリッジ内で叫ぶ。

「基地周辺のレーザー通信S7がロスト。S4、S8もです。まっすぐこつちへ向かってくる……」

「目標の小惑星を肉眼で補足」

オペレーターが目標を捉えたと報告を上げるとイオクは艦長席に座って待機する。

「よしモビルスーツ隊を発進させよ！　ダインスレイブ隊は艦隊後方で待機！」

大量のモビルスーツを展開させるイオクにジュリエッタは呆れたような顔をする。

「小物相手にこれほどの戦力を投入するのですか？」

「どんな相手であろうが全力を尽くす。クジャン家の家訓だよ」

「ご立派で」

（いつまで付き合わなくてはいけないんでしょうか？）

「アリアンロッドが来たって?」

「私達が牽制に出る!」

ラフタとアジーがブリッジから出て出撃し、牽制に行こうとするがそれを名瀬が止める。

「奴らの相手は俺がする。アリアンロッドが来るまで多少の時間がある。お前らが安全圏まで離脱したのを見届けたら俺も尻尾を巻くさ」

名瀬がそういうと今度はアミダだけが付いていこうとする。

「とはいえあんた一人じゃ危なっかしすぎてみてらんないよ。私が護衛につく。ラフタ、アジー。あんたらは家族を守るんだ。モビルスーツは足は速いが携帯火器じゃ船の装甲は抜けない。慌てずに避難できるように誘導してあげな」

アジーはそんなアミダと名瀬の意図を知らながらも反論できない自分に齒噛みするしかなかった。

二人がそのまま出撃し、辟邪で船の後方につこうとする中、アジーがラフタに言葉を向ける。

「輸送船の後方につくよ……ラフタ?」

答えないラフタにアジーが心配するが、ラフタが涙を拭き前を向く。

「大丈夫……私が家族を守る。絶対に守って見せるから!」

名瀬は遠ざかっていく船を見つめるなか上着を脱ぎ、操縦席につく。

「いい子だ。そのまま進め。まっすぐに。出るぞ。アミダ」

アミダはそのままハンマーヘッドの前に出る。

「しかし女つてのはなんでこう男の嘘が見抜けるかねえ。男も男さ。すぐ分かる嘘をつく」

「ならなんで女は男に騙される?」

「そりゃ本気で惚れてないからさ。あんた一人で罪を背負うつもりだろ? けどあんた

一人じゃモビルスーツに囲まれてタコ殴りに合うのがオチさ。露払いは私がする」

「何もかもお見通しか。惚れられてるねえ俺は」

ハンマーヘッドと共に前に進んでいく。最後の戦いへと向けて。

「打って出るとはな。その行為には敬意を表しよう。モビルスーツ隊を前に出せ!」

「モビルスーツ隊から通信。敵強襲艦の信号弾を確認。停戦要請です!」

オペレーターがモビルスーツ隊からの連絡を告げる。

「ふん!モビルスーツ隊からそのような報告があつたようだが誰が敵艦からの停戦信号を確認したものはいるか!」

「……いえ!誰も見ておりません!」

「ふふっ……つまりそういうことだ！」

（お父様から一連の会話を録音しておけと言われましたけど……こういうことでしたか）

「ダインスレイブ隊を艦隊前面に展開。扇状の陣形をとらせろ！ ダインスレイブ隊、放てー！」

ダインスレイブ隊が放つ弾頭はアジー達が護衛してた輸送船に直撃する。

「攻撃!? どこから!?!」

「なんてこと……輸送船がー！」

どこから飛んできた攻撃か全くわからないアジー達は驚きを隠せない。

名瀬は輸送船に向けられた攻撃から輸送船を守るためにさらに前に出る。

「輸送船とはいえ船のナノラミネートアーマーを軽々と……まさか例の兵器を使ったのか？ たたくコケにしてくれなせ。お前ら相手の射程外まで逃げろ！」

輸送船が逃げるために船を移動させるのを確認したイオクはダインスレイブ隊に次弾を装填させる。

「逃がすわけないだろ。ダインスレイヴ隊次弾装填急げ！」

アミダが次弾を装填するのを確認すると名瀬に告げる。

「第二射が来る。スモークを！」

ハンマーヘッドがスモークを放つがダインスレイヴ隊には意味がなく、射出された弾頭が再び輸送船にあたる。

イオクを心配する部下の一人が尋ねる。

「イオク様。ブリッジを戦闘態勢に移行させなくてよろしいのですか？」

そんな心配など知る由もないイオクは自信満々に答える。

「ああ、よろしいとも。奴らに王者の貫禄というものを見せつけてやろうではないか」

ジュリエッタはため息を吐き出撃しようとする。

「イオク様。ジュリアアで出ます」

「結構。行つてくれ。活躍の機会はもうないだろうがな」

身を振り返りそのまま機体に入り込むジュリエッタは新型機で出撃する。

「支えるよラフタ」

「あれは！ ハンマーヘッドが……ダーリン！」

ハンマーヘッドがそのままスモークの先に突っ込んでいくのをラフタ達が見届ける。

「弾幕張るよ！」

「釣られるな。他のみんなもだよ！」

アジーとラフタが機体を走らせるとギャラルホルンのモビルスーツが散開する。

「脱出艇を庇う気か。散開して撃破せよ！」

「敵の数が多い。このままじゃ……」

敵の数の多さにタービンスのメンバーが泣き言を言うのとラフタがそのままモビルスーツをゼロ距離射撃で撃墜する。

「タービンスに泣き言なんて！」

名瀬はラフタ達が苦戦しているのを確認すると、アミダに救援に向かうようにと告げる。

「アミダ！ ラフタ達の救援に行ってくれ！」

「分かった！」

そういつてひるがえすとアミダの前にジュリエッタがぶつかってくる。

「この出力……アリアンロッドの新型？」

「一合で分かる。強い相手と！」

アミダとジュリエッタがぶつかり合う中、またランチが一隻落ちてしまう。

「船が！」

「今は逃げることだけを考えて！」

「あいつらランチを標的にしてる！」

「これがギャラルホルンのやり方か!!」

ギャラルホルンの非道なやり方にラフタは怒りを覚えかける。

「よくもー!!」

ライフルから弾を放とうとするが、弾切れを起こす。

「弾切れ!? もう?」

弾切れした辟邪にギャラルホルンのモビルスーツが近づいてくる。ラフタの目の前で武器を振り下ろそうとするモビルスーツにグシオンの一撃が入る。

「昭弘! どうしてここに……」

「理由が必要か? 行け。俺たちが時間を稼ぐ!」

昭弘がラフタを守っている間にシノとライドも到着した。ライドの一撃がモビルスーツに叩き付けられる。

「やるようになった!」

「師匠の教えの賜物ですよ!」

「こつちはいい。家族を守れ!」

昭弘がラフタを守るようにと告げる。

「けど!」

「俺に背中を預けろ!」

「……昭弘! 今度会ったらギューってしてやるから覚えとけよ!」

「なんで絞められなきやなんねえんだ……」

勘違いしている昭弘を尻目にラフタが去っていくと、ギャラルホルンのモビルスーツの一機をガンダムマルコシアスが薙ぎ払い、そしてそのままハンマーヘッドに向けて走っていく。

「さっきのモビルスーツってサブレ？」

「なんでここに？」

シノとライドが驚きを隠せずにいると、そのままアミダの方に向かっていく。

名瀬はどこか嬉しそうな表情になる。

「オルガの奴……何もすんなったのに……」

「見えるよ。あんたのにやけ面がね」

「よそ見なんて！」

「ジュリエッタ！ 撤退だ！ 戻ってこいだそうだ！」

「な、何故!？」

「言うとおりにしろ！ この一件でもう状況は決定的になる……彼等の犠牲を持って世界は動く……」

「で、では……お父様は彼等を犠牲に!？」

「ジュリエッタ！ 犠牲にしているのはギャラルホルンだ……！ 優先事項を考えろ。今

ならスモークに紛れて回収できる……今以外に回収する事は出来ない」

サブレはジュリエッタのみを回収しアマダにジュリエッタが乗っていたモビルスーツを盾として渡す。

「行きなよ……後は頼んだからね」

アマダの言葉にサブレは黙って頷いてそのまま現場から離脱していく。

名瀬はスモークから飛び出ると、降伏信号を発する。

「敵強襲艦、スモークから出ました」

「信号弾確認。降伏信号です！」

「聞けない相談だな。ラスタル様の隣に立つためには非情を貫き通す覚悟が必要とされ

る。全艦！ 敵強襲艦を砲撃せよ！」

イオクの攻撃でハンマーヘッドのあちらこちらから火の手が上がる。

名瀬は額を強くぶつけ、頭から血が流れる。

アマダは降伏を認めないアリアンロッドに突っ込んでいく。

「降伏すら認めないか……なら相手の頭を潰すだけだ！」

（名瀬……私らがいなきやあんたは咲くことすらできない。だったら私は……）

突っ込んでくるアマダにイオクは戸惑いを隠せずにいる。

「敵モビルスーツなおも本艦に向かって接近中！」

「まさか特攻する気か？ダインスレイヴ隊！」

「ジュリエッタ機の固有周波数が射線上に反応があります」

「あの機体ならかわせる！ 放て！」

アミダはジュリエッタのモビルスーツを盾代わりにして突っ込んでいく。

放たれるダインスレイヴの一撃にアミダのモビルスーツはボロボロになっていくが、それでもアミダのモビルスーツはギリギリで耐え抜いた。

「やつ……やつた……やつたぞ〜！」

アミダは最後の力を振り絞る。

(名瀬……見せてやるよ。とびっきりの輝きを)

アミダの最後の攻撃がイオクのブリッジにぶつかる。アミダの機体が爆散するのを見届けてサブレはそのまま現場から離脱していく。

「見えたぜアミダ」

(一人じゃ逝かせねえ。そうだろ？ アミダ。女は太陽なのさ。太陽がいつも輝いてなくちや男つて花はしなびれちまう。いつも笑っていてくれよアミダ。強く激しく華やかに笑っていてくれ。そうすりや俺はどんな時だって顔を上げることができる。お前つて太陽に照らされりや俺は……)

ハンマーヘッドに次々とダインスレイヴの攻撃が決まる。

イオクは怯えながら艦長席の後ろに隠れる。

艦橋に攻撃が決まると名瀬は笑いながら命を落とすが、しかし、イオクへの攻撃は直前でそれ、隣の船に命中し2隻とも落ちていく。

タービンスの全員が、ラフタが、アジーが涙を流す中、昭弘は悔しそうに拳を操縦席にたたきつける。

シノとライドもやるせない気持ちになる。

クーデリアとアトラはそれぞれの愛する人の胸で泣き、三日月はどこか遠くを見つめる。

ビスケットもどこか悔しそうな表情になる。

オルガも「兄貴……」とつぶやきながら涙を流す。

そんな中サブレはジュリエッタを抱きしめながら撤退していく中、ジュリエッタとサブレの中にあるのは悔しさと怒りだけだった。

それぞれのお愛

「すまねえ。名瀬の兄貴の遺体はハンマーヘッドごとギャラルホルンに押収されちまつた。姐さんの百鍊も……」

シノからその後の状況を説明されたオルガはただ歯噛みすることしかできなかつた。時を同じくしマクマードの部屋にジャスレイが姿を現すと名瀬の葬式を歳屋でするマクマードに強く意見を出す。

ジャスレイは納得が出来なかつたのだ。

「正気ですかい？ おやじ。名瀬の葬式をこの歳屋でやるなんて」

「ここは俺の持ち物だ。何やつたつて勝手だろうが」

「名瀬はギャラルホルンから指名手配された犯罪者だ。その葬式をおやじが出すつて意味を……」

「死ねばみんな仏様よ。それに今回の件はいろいろと納得いかねえことがあつてなあ。いろいろとな……」

ジャスレイを軽く睨みつけるような視線をマクマードは向ける。ジャスレイは怯んでしまいそのまま部屋を出ていく。

ジャスレイは自分の事務所に戻ると苛立ちを周囲に向ける。

「おやじももう終わりだな。死んだのは名瀬、生きてんのは俺。テイワズの頭として損得を考えりや俺の側に付くのが当然じゃないの……イオク・クジャンは？」

ジャスレイの隣に座っていた部下の一人が答える。

「今時直筆の感謝状が届きましたよ。例の件も喜んで力を貸すと」

ジャスレイはあくどい笑顔になる。

「あの老碌爺に引導を渡してやる頃合いかもしれねえな。しかし、それにはちよいとし下ごしらえがいる」

しかし、この後予想だにしない方向へと歴史は動きはじめる。

この数日後……ラスタル・エリオンは違法行為によって経済圏に逮捕されるという末路を辿ったのだ。

名瀬とアミダの葬式の場合にジャスレイが姿を現す。

高いテンションで場の空気を全く読もうとしないジャスレイ。

「おおー！ちゃんと届いているじゃないの。結構結構」

「さすが叔父貴」

「叔父貴の名前かつこいいっすね」

ジャスレイ一行は鉄華団のメンバーを発見すると挑発する。

「おおく？ どうも臭えと思ったら宇宙ネズミ」一行様か」

「尊敬する兄貴の最後だ。しつかり見届けてやれよ。まっあの汚え長髪の一本も残っちゃいねえみたいだがな。ははははっ！」

挑発にユージンが乗ろうとするのをオルガが止める。

ユージンが振り向きざまにオルガへと向って怒鳴る。

「なんで止めるんだよ！ あいつら……」

「今はよせ……チャンスは必ず来る」

ユージンはオルガからの言葉を受け渋々引き下がる。シノがオルガに尋ねる。

「なあ……ビスケットとサブレはどうしたんだ？」

「あいつらならおやじに呼び出されて今仕事の最中だ」

葬式が始まる前にビスケットとサブレはマクマードに呼び出されて部屋にやつてくる。

マクマードは豪快に笑いながら二人をソファへと導くと、二人は恐る恐るソファに座るとマクマードはそのまま本題に入る。

「おめえらに頼みたいことがある。ある人物の護衛を願いてえ。頼めるか？」

「ある人物というのは？」

ビスケットが訪ねると、マクマードは二人の写真を取り出し二人に見せる。

そこに移っていたのはアジーとラフタが映し出されていた。

「アジーさんとラフタさんですか？」

「マハラジャの読みでは鉄華団と最もかかわりの深いこの二人とエーコの三人が危ねえつて話だ。エーコつて嬢ちゃんはこちらで護衛する。おめえらはこの二人を頼む」

サブレとビスケットは黙つてうなずき、そのまま部屋を後にする。

ビスケットは歩いて行く過程で気になった事をふと訪ねた。

「サブレが回収したつていうあの女の人の人どうしたの？ 今どこに居るの？」

「なんで？ 気になる？ 兄さんにはもう奥さんがいるでしょうに…それとも浮気？」

「真面目に聞いているんだから教えてよ！ 何？」

「…父さんが連れて行つたよ。ジュリエッタの奴は今回の命令がイマイチ納得できないつて不満げだったしな。どうやら俺が使つていたあのガンダムをジュリエッタに与えるから特訓させるつて回収していったよ。本人は「そんな事よりイオクを殴らせて欲しい」と不満げだったけど…」

「で？ サブレは何を言つたの？」

「え？ 勿論。俺は「それは俺の役目だから諦める？」

「バスケットは素敵な返しだねとだけしか言わなかった。

マクマードはラフタ達を呼び出すと名瀬の遺志をそのまま受け継いで欲しいと告げた。

「あいつの遺志通りお前らの今後は俺がきつちり面倒を見る。まっそもそもお前らがいなくつちやテイワズの流通は回らねえんだ。これからも頼むぞ」

ラフタ達はそのままマクマード邸を出ていくと、三人で話していた。

「マクマードさんマジでいい人だったね。うちらはあんましゃべったことなかったけど」

エーコがそう言うとラフタが同意する。

「うん。ダーリンが慕ってたわけだ」

アジーはラフタに尋ねる。

「ラフタ。あんたは行ってもいいんだよ」

「え？ どこに？」

「鉄華団に……さつき聞いた通りうちにはモビルスーツの乗り手は必要なくなる。だけど鉄華団は戦力を常に欲してるからね。自分の気持ちに素直になっていいんだ。姐さんもそれを望んでた」

『あんた達はろくに恋も知らないまんまここに来た。名瀬は私らを平等に愛してくれ。だけど女なら誰だって欲してるはずさ。自分だけの男をね』

かつてアミダがそうアジーに告げると、アジーは不思議そうな顔になる。

『姐さんもそんなふうに思うんですか？』

『前にアトラにも言ったことがあるんだけど。いい男の愛つてのはみんなでどんだけ分けても満足できる。そこらの並の男の愛なんかよりよっほどね。ただラフタが惹かれるぐらいなら並の男じゃないだろう。そのでっかい愛を受け止められるんなら女としてそれ以上の幸せはないさ』

アジーはアミダの言葉をそのままラフタに告げると、ラフタは少しだけ悩む。

「まあ考えてみなよラフタ」

ニュース記者の人達は一人の若者に握手を求めていたが、若者は「良いですよ」と握手を遠慮してその場から立ち去った。

ニュース記者の人達からすればギャラルホルンの違法行為の瞬間を抑えたニュース記事をギャラルホルンに閲覧される心配をしないで済むというのは嬉しい限りだった。

人々は何時だつてゴシック記事を求めている。

他人が揉めているという状況は流行る事は若者であるイラクは分かりきっている。

だからこそ、敢えてギャラルホルンの違法行為をニュース記者に渡し、同時にそれを記事にさせようとした。

それがギャラルホルンでも最大勢力と言っても良いアリアンロッド艦隊であれば間違いなく騒ぎになるだろう。

「ラスタルには一時的に現場から離れて貰おう。貴様の役目は別にある。この世には役割がある。お前は象徴になるのさ……反乱と悪の象徴にな。そうやって育ててやったんだ……役割は果たして貰おうか……ラスタル」

イラクは微笑んだ。

「タービンは内側から刺された。裏で糸引いてんのはあのジャスレイってのに決まってるんだろ！」

ユージンの感情のこもった言葉にシノも同意する。

「お前がやるってんなら俺達は乗るぜオルガ」

「少しだけ待て……おやじとマハラジャがジャスレイを孤立させるための作戦を立ててるからそれを待て」

三日月がそのままジューつとオルガを見ているとき、ラフタは昭弘と話をしていた。

「その……あんた達さ明日には帰っちゃうんだよね？」

「ああ。バルバトスの修理も終わったからな。アガレスは後で合流するって話だけど……」

「よかつたらさ。今から少しだけ飲みにかかない？」

二人の話を立ち聞きしているユージンとシノなど知る由もなく二人は話を続ける。

「分かった」

「じゃあ……」

「待ってる。みんなを呼んでくるから」

ラフタの気持ちなど知る由もない昭弘は通路を曲がったところでユージンとシノは昭弘の首根っこをつかむ。

「聞いてたのか。お前らも……」

「バカじゃねえのか!? お前二人つきりで行って来いよ! 女心が分かってねえな!」

シノの言葉を全く理解できてない昭弘は理由が分からないという表情になる。

「なぜ二人で?」

「そこにはよお……金で買えない愛があるかもしれないねえだろうが」

「兄貴だけで行って来いよ……鈍感兄貴」

「昌弘?」

突然後ろから話しかけてきた昌弘に驚きつつ、昌弘はまっすぐ昭弘を見つめ、その視

線に昭弘は軽く怯む。

「わ……分かった」

昭弘はかつて鉄華団が訪れたバーへとラフタを連れて行った。

「こんなお店知ってるんだ。昭弘すごいじゃん」

「いや前に歳星に来た時に鉄華団のみんなと来てな」

ラフタは自分の胸に手を置き語る。

「なんか変な感じなんだ。いろんなものがごっさりここから持つていかれた感じ。私ね、ガキの頃から違法船で働いて仲間は女ばっかだったけど雇い主がひどいおっさんでさ。みんないっつも暗い表情でおしやべりもなくて……それが当たり前だと思ってた。でもダーリンと姐さんが助けてくれて……私ね。それまでほんとに何も知らなかった。読み書きだけじゃなくて楽しいとか嬉しいとかあったかいとか、人として当たり前のこと。誰かを好きだっと思う気持ち。守りたいって願うもの。全部タービンスに入ってから教えてもらった」

「それは俺も同じだ。鉄華団に入って初めて自分が本当はどんな奴だったか分かったよ。うな気がする」

「優しいよ昭弘は。ただの筋肉バカだと思ってたけど誰より周りを見る。人のことを

自分の事みたいに考えられて……不器用だけどそつと……言葉なんてなくても気持ちで隣に寄り添ってあげられる。そんな奴。そくんでもつてさ。隣により添われてもどうにも暑苦しいからこつちも無理やり元気だして立ち上がるしかなくなるの」

「バカにしてるだろ？」

「やだな。褒めてるんだよ。だって私はあんたのそういうところが……」

ラフタは喉元まで出かかった言葉をグツと飲み込み、まっすぐ招弘の方を向く。

自分自身に「駄目だ」と言い聞かせたラフタ。

これ以上は駄目なんだと言い聞かせる。

「私ねここに残るよ。マクマードさんはうちらを守ってくれて言うけど頼ってばかりもいられないし、それにダーリンと姐さんが教えてくれたことちゃんと伝えていききたいから」

昭弘もまっすぐラフタを見つめ、自分の気持ちを伝える。

「俺はお前を尊敬する。筋を通さねばならないことを大事にせねばならないものをきちんと見つめ、まっすぐに生きる……俺もお前のようにありたいと思う」

二人はバーを離れてそのまま外に出ると別れの挨拶をしている。

「これでほんとうにさよならだね」

「また仕事で会うこともあるだろう。その時はよろしく頼む」

鈍感な昭弘はラフタの気持ちに気が付かない。

「そうだよね……あつ！忘れてた！　ぎゅ〜!!」

ラフタは昭弘に抱き着き、昭弘は固まってしまう。

「ハグくらい挨拶みたいなもんでしょ？　な〜に赤くなってるの？　じゃあね」

昭弘は表情を赤くする。

（私はタービンスが好き。ダーリンが、姐さんが大好き。でもそれとは違う。こんな気持ちになったのは初めてだよ昭弘）

しかし、そんな会話を聞いていた昌弘は齒軋りする。

「なにやっつてんだよ……兄貴」

「なら言っつてやれ！　昌弘！」

「明樂……うん」

「昌弘の役目じゃん？　兄弟が増えるってどんな感じかな？」

「え？　そつちが楽しみ？」

二人はふと笑ってしまう。

何となく少しだけ楽しいと思えるような瞬間、鈍感な兄にガツンと言える瞬間を楽しんでいられるのはきつと明樂のお陰だった。

ジャスレイが酒を飲んでいる中、葬式の一件の愚痴を漏らす。

「期待外れだぜあのガキども。あれだけ煽ってやったのによお。敵討ちだなんだと突っかかってきてくれりやあでつけえケンカができるのによお。おやじも巻き込んでつけえのが。しかたねえ。こうなったら嫌が応でも男を見せてもらうほかねえなあ」

ジャスレイは自身の行動が常に監視されているとも知らずに。

彼の後ろに置かれ得ている時計に鈍い光があるとも気がつかずに：彼は愚痴り続ける。

昭弘がイサリビの廊下を歩いていると後ろから昌弘が姿を見せる。

その隣には居るはずの無い明楽が楽しそうに微笑みながら佇んでいる。

「昌弘か……どうかしたのか？ それに明楽まで」

「俺は付き添い。用事は昌弘だつて……ほら！」

「何やつてるんだよ……兄貴」

昌弘が何を言っているのが理解できず、首をかしげる。イライラする昌弘は睨みつけながら怒鳴る。

「分かんねえのかよ!! ラフタさんは兄貴のことが好きなんだよ!!! 本当は兄貴に好きだつて言いたいのに……なんで気が付かないんだよ!! この鈍感兄貴！」

「そうだ！ そうだ！ この鈍感馬鹿野郎兄貴！」

昌弘の言葉にラフタのセリフを思い出す。

『だって私はあんたのそんなところが……』

あの言葉の先をようやく理解した昭弘は動揺のあまりに少しだけフラつく。動揺する昭弘に昌弘はさらに怒鳴りつける。

「男なら自分の気持ち伝えて来いよ！」

昭弘は昌弘と明楽の肩に手を置いて、走り出す前に一頓だけ告げた。

「すまねえ……昌弘。明楽」

「ちよつと買い過ぎちゃったかなあ？でも仕事が始まったら当分こういう買い物はできないだろうしね」

ラフタとアジーが二人で買い物しながら歩いているとアジーは振り返る。

「買い忘れ。さっきの店が。ちよつと待ってて」

ラフタは近くにあるぬいぐるみショップに入ると昭弘に似ているぬいぐるみを見つけた。

「へえ、かわいいじゃん。何？この子、目つき悪つ。なんか似てるかも」

昭弘はラフタを探してぬいぐるみショップの近くに寄ると、ビスケットが後ろから声を出す。

「昭弘！ぬいぐるみシヨップにラフタさんが！狙われてる！」

どうしてここにビスケットが居るのかまるで分からなかったが、彼の方を見ずに「サンキュー」とだけ言って駆け出して行く。

昭弘はぬいぐるみシヨップに入りラフタを発見する。

「え？ 昭弘!？」

「ラフタ!!」

昭弘はラフタに抱き着くとそのまま押し倒す。

先ほどまでラフタがいた場所に銃撃で窓ガラスが割れた。

後ろからビスケットが追いかけて、男は追いかけることに驚き銃を捨てて走り去る。

男がいなくなったことを昭弘は確認するとラフタを立ち上がらせる。

「大丈夫か？」

「うん……でどうしたの？ あんた……鉄華団と一緒に帰ったんじゃないか？」

昭弘は少し恥ずかしそうにする。

「いや……こういう時になって言えばいいのか……その……お前のことが……その……」

昭弘が何を言おうとするかわかってしまったラフタはクスクス笑ってしまう。

「なんだよ……」

「なんでもないよ……何？ 聞きたいな」

昭弘は珍しく顔を赤くし、そのまま告白する。

「……お前のがすがす……好きだラフタ」

「うん……私も好き！ 大好き！」

二人は少しずつ手を握る。

ビスケットが走って男を追いかけると男はそのままサブレにぶつかってしまふ。

サブレは男の首を絞めながら持ち上げる。

「さて……誰に言われてラフタさんを殺そうとした？」

男は口を噤んでいると、サブレはビスケットに尋ねる。

「ねえ、しゃべれる程度になら痛めつけてもいいんだよな？」

「う、うん」

ビスケットは内心「何をするつもりなんだろう？」と疑問を抱く。

サブレはなんの容赦もなく男の手の指を折る。

「ぎゃー!!」

「一回しか言わないぞ。すべての指の骨を折られなくなければさっさとしゃべってしまったほうがいいぞ」

男はサブレの気迫に気圧されてしまいしゃべってしまふ。
「ジャ、ジャスレイで……です」

落とし前

鉄華団に合流したビスケット達はブリッジに集まっていたオルガと一緒にマハラジャとマクマードと通信していた。

「さて……今現在ジャスレイは完全に孤立している。イオクは現在謹慎処分中だ。その上ラスタルはイオクの行動によって逮捕されてアリアンロッド艦隊は完全に沈黙。ジャスレイがこれを知っているのかは知らんが」

「テイワズもジャスレイを完全に切っている」

マクマードとマーズ・マセが互いに現在の状況を説明すると、ビスケットが二人をまっすぐ見つめると、簡単に頭を下げる。

「ありがとうございます。でも……いいんですか？ ジャスレイはテイワズのナンバー2だったんじゃない」

マクマードはただ目を閉じ、はつきり告げる。

「……家族を殺すような人間を仲間とは思わん」

マクマードのはつきりとした言葉にオルガが力強く応える。

「分かっています……今までありがとうございます！」

「……」

マクマードは何も言わず通信を切る。

マクマードは通信を切ると、自身の机の引き出しから鉄華団の盃を取り出すと、その場で割ってしまう。

微笑みながらベランダに出る。

その行動には一切の躊躇いなどありはしなかった。

「面白い育ち方をしたじゃねえか……なあ………名瀬よ」

オルガ達はマハラジャとの通信が切れると、オルガが艦長席から立ちあがると、ユー・ジンはこぶしを力強く叩き、気持ちいを吐き出す。

「さて……ジャスレイのクソ野郎をぶっ殺しに行こうぜ！ 名瀬さんの敵……」

「待って！ 敵討ちとか復讐とかそういう感情で戦うのだけはやめようよ……」

ユー・ジンはビスケットのそんな言葉にビスケットの襟首をガシツとつかみ怒鳴る。

「お前は悔しくねえのかよ！」

「俺だって悔しいよ！ でも……だからってそんな言葉で戦ったらもう引き返せなくなる。そんな前のめりな組織がこれから真つ当な結果になるとは思えない。だから……」

「分かってるけどよ……」

ユー・ジンはビスケットを離し、小声で悔しさをにじませる。

そんな中みんなも黙ってしまい、しかしサブレだけが口を開く。

「父さんが昔言っていたけど……『復讐で戦う人間はもう真つ当な生き方はできないし、たとえ達成できたとしてもまともな結末にはたどり着けない。復讐は復讐を呼ぶだけだ』つと。……アイン・ダルトンって男をみんなは覚えてる？」

サブレが問いかけた名前にほとんどのメンバーが首をかしげるが、三日月とビスケットが覚えていた。

「あの時のパイロット？」

「三日月と兄さんは覚えていたか……。あの時の男は俺達鉄華団への復讐で戦っていたと父さんが言っていた。あれが復讐に走った男の末路だ。人間を捨て……。結果としてああなつた。畏怖の対象になり、世界から疎まれた。みんなはそうなりたいわけ？」

「僕はご免だね」

「私も」

明楽とジョシユアは揃ってそんな言葉をハッキリと告げた。

オルガが黙るみんなに声を上げて士気を上げる。

「俺達は復讐の為には戦わない。俺たちはテイワズからの最後の仕事をきっちり果たす。ジャスレイを討ちに行くぞ！」

強い決意を秘めた鉄華団はまっすぐ突き進んでいく。

「ユーゴー1、2、3番機被弾。前線を離脱！」

「これにより我が方の戦力更に15%低下」

開戦し少ししか経っていないにも関わらずすでにジャスレイは追い詰められていた。

冷汗が流れるジャスレイ。

「くっ！ 調子に乗りやがって……宇宙ネズミどもが！ それにアガレスを出さねえだ
と!? 指揮官機を出さなくても勝てるってか!!」

グシオンも流星号も雷電号も確実に敵を仕留めていく、そんな中三日月のバルバトスはまるで違う動きを見せる。

右こぶしで敵のコックピットを容赦なく潰す。

しかし、アガレスだけは戦艦内でいまだ調整を続けていた。

「しかし……まさかいまだに兄さんがアガレスのバックパックスの調整を終えてなかったなんてな……信じられないバルバトスルスプレクスでさえ完成してたのに……この数日間何をどうしていたら放置出るんだか」

サブレはアガレスのコックピットでふてくされていると、ビスケットは端末をいじりながら申し訳なさそうな表情をする。

「だって……難しいんだよ……これ」

「言い訳になるかよ。ジュリエッタだって調整を終えて今日テストの為にきてる

のにさ：アガレスの初陣はもはや出番無いかもな」

アガレスは新しいバックパックを背負っており、それはまるで翼のようにすら見える。

サブレの元にヤマギがやってくる。

「フアンネルって言うらしいですよ。これ……正式名称は……」

ヤマギが言う前にサブレが喋ってしまう。

『ソードフアンネル』だろ？ アガレスの後部座席にある全方位索敵はいわゆる死角が無い。たとえ隠れていたとしても分かってしまうほどだ。だからこそフアンネルのようない線式の兵器が搭載できたってわけだ」

二人が話していると雪之丞とソニアも話に混ざってくる。

「それだけの兵器だ。フアンネルのコントロールと全方位索敵で阿頼耶識が人間に伝えられる限界だ。だからこそアガレスは意図的にリミッター解除を搭載しなかった。疑似リミッターはあくまでマーズ・マセが搭載したものだ。アガレスがリミッターを解除なんてしたらパイロットの脳が焼ききれちまう。ま……あえて言うなら搭載できなかっただな。そういう意味ではアガレスは他のガンダムフレームとは違えな。ま……このフアンネルもフォートレスが回収し修理してテイワズに渡されたって話だ」

「その通りよ。復活させるのに凄い時間掛かったんだからね。発見時は古ぼけて全然使

えないし、厄祭戦当時の技術は現代では復元が難しいのよ」

四人が話している間にビスケットはようやく作業を終えた。

ジュリエッタはマルコシアスのコックピットで操縦桿を握り直すと目の前にいるユーゴーに対して大太刀を振り下ろす。

マルコシアスは元々サブレが個人用にとOSまでも全部改造していたが、ジュリエッタが扱いやすいようにとソニアが急いで再改造と武装選びまでもを済ませていた。

「どうして私がサブレの機体を…」

「嫌なら降りたら良いじゃん！ 僕に譲ってよ！」

「嫌。絶対に嫌です」

ジュリエッタと明楽が遊んでいる間にジョシユアは両手に持っているソードで敵モビルスーツを真つ二つにしてしまう。

ジュリエッタも負けじと大太刀で二機のモビルスーツへと切りかかるが、そのモビルスーツは奇妙な動き方で攻撃を回避する。

「阿頼耶識ですか…と言う事は」

「ヒューマンデブリだね。良くもまあこんなに用意したものだね」

「どうせ子供のことを兵器程度にしか考えていないからよ。その子供に殺される屈辱を

教えてあげましょうか……フッフ」

「あ。嫌な癖が始った」

「新たにユーゴー8、9番機が大破！」

「戦力更に低下。第一次防衛線突破されます！」

「くっ！ あの機体修理が終わってやがったのか！」

ジャスレイの目の前で暴れるバルバトスにジャスレイは焦り始める。

「あの野郎……予定の時間はとつくに過ぎてんだぞ」

イオクが来ないことに苛立つジャスレイ。

「俺はテイワズのトップに立つって算段だつてのに……これだから坊ちゃんは！ クソ

親父は!!」

バルバトスがガトリングで牽制し、そのまま百里の頭部を捕まえる。

「捕まえた！」

そのまま百里を潰し、百鍊に大型メイスを叩きつける。

テールブレードが縦横無尽に動き回り百里のコックピットに突き刺さる。

するとイサリビに動きが見えた。アガレスが見えた瞬間全員の目が一瞬だけだがそちらに向くと、サブレとビスケットの前にオルガが通信で顔を出す。

「前線は任せるぞ」

「分かつてるよオルガ……」

サブレは目の前に広がる戦場に目が向く。

「ガンダムアガレスフルイーター！ サブレ・グリフォン、ビスケット・グリフォン！
出る!!」

アガレスが射出されると、アガレスは腰につけた二本の剣を引き抜く。

右の剣でユーゴーの頭部ごとコックピットを切り裂く。

ビスケットは目をつむると、デブリに隠れたモビルスーツなど、数機を見つけ、ビスケットはファンネルの操縦に集中する。

「行って！ ファンネル！」

六枚のファンネルがアガレスから離れると敵モビルスーツに向けてかける。

百鍊が二機デブリに隠れると突然隣の百鍊のコックピットにファンネルが突き刺さった。

「ど、どこから!?!」

急いでその場から離れると上からアガレスが剣でコックピットを切り刻む。

するとジュリエッタが近付いてきた。

「いい出来だな。『レンチソード』。二本の剣を自由に組み合わせてレンチメイスにも大

剣にもできる。もちろん銃にもできる！」

「やつと調整が終わったのですか？」

「ああ。兄さんが随分待たせてくれた。将来将官クラスの人は準備も遅い」

「あの話はまだ受けると決めた訳じゃ……」

アガレスの二本のレンチソードが銃に変わるとそのまま敵モビルスーツ群を牽制し、避ける敵モビルスーツにファンネルは容赦のない攻撃を浴びせる。

後ろにいた昌弘はビスケットから譲り受けた獅電に乗りながら見とれていた。

ラフタが昌弘に近づき怒鳴りつける。

「ちよつと昌弘！あんた見とれてなくていいから戦いなさい！」

「す、すいません！」

ハッシュもまたビスケットから譲り受けた機体に苦戦しながら戦っていると、三日月が援護に入る。

「すいません三日月さん」

「無理しなくていいから。その機体難しいでしょ？」

「はい、でも、ビスケットさんから譲り受けた機体です。それにあれだけ厳しく訓練を受けます！ものにして見せます！だから三日月さんは先に補給しに戻ってください

い」

「分かった。ここは任せるよ」

三日月は一旦引くと、一部モビルスーツも同じように補給の為に戻っていく。

「百里2番機大破。百鍊4、5、6、7、8番大破」

「くっ！カスが。どんだけ高え金払ったと……おい！ 坊ちゃんはまだなのかよ!」

ジャスレイは部下に怒鳴りつける。

「それが今また問い合わせたんですが全くつながらないんですよ……」

「まさかケツまくりやがったのか？ あのだへタレが!」

「どうします叔父貴……」

「デブリだ！ ヒューマンデブリどもを全部出せ!」

ジャスレイの指示でヒューマンデブリが次々と出撃する。

ハッシュユの目の前のロディーフレームに銃の照準を向けるが当たらない。

「もらった! ……この動き……阿頼耶識!」

ハッシュユの獅電にロディイが食いつくと、シノの流星号がロディイを吹き飛ばす。

「シノさん……」

「深追いするんじゃないやねえ! その機体壊したら俺らが怒られんだろ」

しかし、その話がサブレの通信機に繋がってしまう。

「壊したら戦闘が終わった後に追い回すぞ……全員! その機体兄さん用に改造費が掛

かっているんだからな！」

「「なんで俺たちも!!」」

全員が不満を漏らす。ラフタの辟邪と昌弘の獅電も弾切れを起こす。

「もう弾切れ!?!」

「ラフタ! 昌弘と一緒に引けここは大丈夫だ! 俺に任せろ!」

昭弘に促されてラフタは昌弘と一緒に引いていく。

そのころジャスレイは追い詰められていく様に汗が止まらない。

そんなジャスレイに部下達はそつと話し掛ける。

「やばいぜ叔父貴……奴ら皆殺しにする気だ……」

「命あつての物種だ。ここは詫びを入れてでも……」

部下のそんな言葉にジャスレイは怒鳴って返す。

「たわけことをぬかすんじゃないやねえ! ガキに頭なんざ下げ……」

そんなジャスレイに部下達は後ろからそつと提案する。

「だつたらマクマードのおやじとナシつけてくださいよ!」

「メンツにこだわつてる場合じゃねえぜ叔父貴」

部下の提案に乗るしかないジャスレイはマクマードに繋げる。

「お……おやじ」

ジャスレイは情けない声を出す。

「どうした？ 情けねえ声出しやがって」

「それが……鉄華団の奴らがカチコミをかけてきやがった。頼むおやじ。あんたから奴らに話を……」

「分かってんだぜ。鉄華団をやったあとは俺も用済み。全部の責任をおつかぶせてギャラルホルンに俺を売るつもりだってことはな」

マクマードの言葉に焦ってしまふジャスレイは何とかごまかそうとする。

「な……なんのことだかさっぱりだぜおやじ……」

「クジャン家の御曹司はこねえぞ。それに……おめえはもうテイワズじゃねえ」

そうはつきり言い切って、マクマードは通信を切ってしまう。

「待ってくれおやじ！ ……ざっけんじゃねえ！ 俺はテイワズのナンバー2ジャスレイ・ドノミコルスだぞ……あのタヌキおやじ、俺のおかげで今までどんだけ甘い汁が啜れたと思ってるんだ！」

部下の一人が焦るジャスレイに尋ねる。

「叔父貴……どうするんですか？」

「どいつもこいつも人の話もまともに聞けねえ奴らが雁首そろえてよお！ 脳みその代わりに藁でも詰めてんじゃねのか?! 戦闘狂の人食いネズミ共が……てめえらなんざ

人間じゃねえ。二束三文の命よ。そんなもんに……人間様の俺がやられるなんざ道理が通らねえだろうが!! うああ!!」

ジャスレイが叫び声をあげる中、ガンダムフレームが中心になって暴れ回る。もうジャスレイの負けは確定しているようなものだった。

「お……叔父貴」

「どうしたら……」

「はあ……鉄華団につなげ」

ジャスレイの命令通りにオルガに繋げると、オルガは冷たく接する。

「よう。調子はどうだ? ジャスレイ」

「ぐっ! ガ……いやオルガ・イツカ。お前らの力はよく分かった。でどうよ? ここで手打ちと行かねえか? もちろんただとは言わねえ。お前だっただ俺を殺したってなんの得もねえだろ? ここはお互いの利益のため……」

「何の話だ? 俺はおやじの命令でお前を討ちに來ただけだ。お前がティワズを裏切るのが悪いんだろ? それに命乞いをするなら相手が違うだろ。ミカ、サブレ、ビスケット。道を作ってやれ!」

「ジュリエッタ。手伝ってくれ」

「はいはい」

バルバトスとアガレスとマルコシアスがイサリビから黄金のジャスレイ号までの敵モビルスーツを倒す。

辟邪の前にまつすぐの道ができると、昭弘が後ろから話かける。

「行け……ラフタ！」

「……………ありがとうみんな！」

ラフタはジャスレイに向けてまつすぐ突き進んでく。

ジャスレイの目の前にラフタの辟邪がたどり着いた。

「ラ、ラフタか!? 名瀬の事は謝る！ だから命だけは……」

「あんたを殺したってダーリンも姐さんも戻ってこない。だけど……」

「や、やめ……」

ラフタは容赦のない銃撃をジャスレイ号のブリッジに浴びせる。ラフタは涙を流すと昭弘のグシオンが優しくラフタの辟邪を抱きしめる。

「昭弘……!」

「良くやったよ……お前は……」

「うわあ!!!」

戦いは静かに終結した。

「我々はついに立ち上がった。革命の時が来たのだ同志達よ！ 新しい風を起こしギャラルホルンに蔓延した腐敗を吹き飛ばす！ 我々が一人一人の力でこの欺瞞に満ちた世界を変革する時がきたのだ！ 平和と秩序の番人であるギャラルホルン。それはセブンスターズの面々が特権を享受するための都合のよい戯れ言にすぎなかった。地球で起きたアープラウとSAUの国境紛争。それをコントロールしていとされるガラ・モツサなる傭兵がラスタル・エリオンとつながっていたことが我々の内偵により明らかになった。イオク・クジヤンは一民間組織であるターピンズを違法組織に仕立て上げ強制捜査、違法兵器であるダインスレイヴを自らが使用し多数の非戦闘員の虐殺！ 政治抗争に腐敗し民間人を虐殺してなお……。平和と秩序の番人であるギャラルホルン。それはセブンスターズの面々が特権を享受するための都合のよい戯言に過ぎなかった。目を覚ませ！ 共に立ち上がるのではないか同志達よ！」

世界に放送している宣言を聞いているクーデリア達の後ろで社長室のドアを誰かが叩く。ククビータがドアを開けると、マハラジャが姿を現す。

「さあ……行くうか……革命の乙女」

「……………はい」

クーデリアも同じように進み始める。

今静かに革命の時が始ろうとしていた。

これより始るは後に『第二次厄祭戦』と呼ばれる戦いだつた。

開戦の刻

クーデリアと共に話し合つて決めた火星を独立させる方法、それは当初よりクーデリア自身が強く望んできたことだったが、それを望むのには鉄華団には選択肢などあまり存在しなかった。

テイワズにそんな事が出来るわけが無いし、かと言ってノブリスなどに任せておけるわけが無い現状、結局でマハラジャと共に行くしかクーデリアにも鉄華団にも存在はない。

そして、その選択肢だけにしたのもまたマハラジャでもあったのだ。

彼は初めて鉄華団を見たとき、彼等の行動力は鍛え上げれば必ず役に立つと考えていた。

多少金を払つても鉄華団へと技術面でも協力態勢を作りだし、その後彼等を表に連れて行くことで水面下で進んでいた対ギヤラルホルン勢力を確実にさせたのだが、そんな彼が火星の独立で避けられない道、それはテイワズからの独立である。

オルガが決めた事、それは木屋の独立自治権をテイワズに渡す代わりに、それをテイワズ傘下としての最後の大事なと捉え、マクマードもそれが結果的にテイワズにとって

最大の利益をもたらし、同時に名瀬の弔いとしては最も有効的な方法であると捉え、オルガの望み通り独立を認めた。

その際にマクマードが出した条件が『大戦後に昭弘をテイワズの幹部候補として迎え入れたい』と言うことと『大戦中までラフタを提供する』であった。

オルガはそんな中で「昭弘が望むなら」と本人が了承する事が前提条件で条件を受け、全ては昭弘の判断に任せられることになる。

ラスタルが地球に存在している刑務所に服役している間、世界は大した動きを見せては居なかった。

実際セブンスターズはラスタル家が刑務所に服役することになった事に、今更誤魔化しなど出来るわけが無かったのだ。

ニュースでは何処もかしこもラスタルの逮捕話で騒がれ、同時にイオク・クジャンはセブンスターズの手によって「セブンスターズからの排除」と「指名手配」という罰を受ける形になる。

それとほぼ同時にイオクが姿を消した。

マハラジャ達はその間に地球圏へと足並みを向け、イオク達が動くのを待つて居るとマハラジャの元に「ラスタルが脱走した」と「アリアンロッド艦隊が刑務所を襲撃した」

という話を聞きつける。

マハラジャはオルガに「三日月を地球に送れ」と命令し、サブレに「ビスケットと共に地球に行け」と命令。

バルバトスとアガレスは降下装備をしたまま地球へと降りていった。

ギャラルホルン本部はマクギリス率いる革命派が占拠していたと言うニュースはあつという間に世界中へと発信された。

そんなニュースは火星でも木星でも金星でも見られた誰もが知る最新情報だったが、そんな最中で動いたアリアンロッド艦隊の「ラストル脱獄」というニュースは影に隠れることになる。

「現在地上部隊が本部施設の七割を制圧。セブンスターズは何者かが連れて逃走したと報告がありました。予定通りライザ・エンザによる声明を全世界に向けて放送中です」

石動はマクギリスに簡単に報告する。

「モビルスーツとセブンスターズはどうした？」

「本部所属のモビルスーツ隊は既に無力化が完了。セブンスターズが港周辺で目撃されていますが、今のところは捕獲したという報告は上がっていません」

「さすがだな。鉄華団はどうしている？」

「鉄華団は現在ライザ・エンザの対アリアンロッド艦隊への防衛網の反対で目撃されています」

「今のところは静観というところか……。ここは任せる石動」

マクギリスはその場から移動していく。

「こちらです」

マハラジャの部下がセブンススターズを連れて撤退の準備に入っていた。

「まさかここから逃げなければならん時がくるとは……」

「しかたない……」

「マハラジャは今どこにいる？ 本当に生きているのか!？」

ガルスがフアントムエイジのメンバーに尋ねると、彼らは周囲の警戒を解かずに答える。

「ファミリアと接触しようとしているはずです。すでにクーデリア・藍那・バーンスタインをつれて地球をめざしていると報告が上がっています」

ガルスはふと足を止め、外を眺める。

彼等はいつかはとは思って居た事だ。

「もう……とまらんか」

マクギリスはガンダムバエルの元に辿り着く。

「やつと会えたなバエル。いや……新しい時代の夜明けだ。目を覚ませアグニカ・カイエル」

しかし、そんなマクギリスの前にヴィダールが天井をぶち破って姿を現す。

コックピットからヴィダールが姿を現すと、ついに仮面を取った。

「やはりここに来たか。ガエリオ・ボードウィン」

仮面の奥の素顔はマクギリスが殺したはずのガエリオ・ボードウィンだった。

「お前がラスタル・エリオンに飼われているとはな」

「彼とは利害が一致している。あくまで対等な立場だ」

「すぐに人を信用するのはお前の悪い癖だな」

「そうかもしれないな。なんせ親友だったはずの男に殺されたのだから。親友……いやその言葉は違う。俺は結局お前を理解できなかった」

（俺にとつてお前は遠い存在だった。だからこそ憧れた。認められ、隣に立ちたいと願った。そのうちお前は仮面を着け本来の自分を隠すようになった。しかし……隣に立つことがなくなったと思った。お前は俺の前では仮面を外してくれているとそう感じた。なのに……）

ガエリオは幼い頃を思い出す、そして裏切られた時の事を思い出した。

「俺は確かめたかった。カルタや俺まで寄り添おうとしている人間を裏切つてまでお前が手に入れようとしているものの正体を。この場所にお前がいるということそれこそが答え。おかげで決心がついたよ。愛情や信頼、この世の全ての尊い感情はお前の瞳には何も映らない。お前が理解できるのは権力・威力・暴力。全て力に変換できるもののみ。ここにいるということは乗れるのだろうか？ バエルに乗れ」

「俺がこれを手に入れることの意味を分かっているんだらう？」

バエルに乗れとガエリオはマクギリスに向けてさういうと、マクギリスは疑問に思いながら尋ねた。

「それとも一度死んだ身何も失うものは持たない？」

「いや。逆だ。今の俺は多くのものを背負っている。しかし、全てお前の目には永遠に映らない物達だ。お前がどんなに投げかけられても、受け入れようともせず否定するもの。それら全てを背負いこの場で仮面を外したお前を否定してみせる」

「詭弁だな……あんたは復讐の為に戦っているんじゃないのか？」

そんな言葉と共にアガレスとバルバトスが天井をぶち壊して姿を現した。

マクギリスはその隙に上半身を脱ぎ捨てバエルに乗り込む。

「バルバトスにアガレスまで来たか……どうやら運は私に向いているようだ」

マクギリスは勝利を確信したが、ビスケットは予想もしていない答えを出す。

「勘違いしないでください。俺たちはあなたの答えを聞きに来たんです。あなたの真意を……一つだけ聞かせてください。そこにいる人の言っていることは正しいんですか？」

マクギリスは目をつむり、少しの間だけ考えるとはつきり答える。

「……ああ。その通りだ」

「そうですか。なら俺たちはあなたの革命に参加しません。もちろんアリアンロッドに味方するわけでもない。俺達は俺達の道を行く！」

ガエリオはコックピットに入ると、四機のガンダムフレームがそれぞれの武器を構える。

「アイン……好きにだけ使え。俺の体をお前に明け渡す」

ガンダムヴィダールのツインアイが赤く光ると、アガレスは青く光らせる。ヴィダールがバーストサーベルでバエルを攻撃しようとするのをアガレスがレンチソードで捌く。

しかし、バルバトスはバエルに攻撃を仕掛けるが、バエルはそれを紙一重で回避する。（これが疑似阿頼耶識というやつか？ アイン・ダルトンの脳を利用することで脳神経への負担を克服し、機体性能を限界まで引き出すことができるという。俺たちのアガレ

スのシステムに酷似しているというより、このシステムを元に開発されたのか)

「今からでもこちらに來ないか? 三日月・オーガス」

「興味ないな……俺の道はみんなと一緒にある」

決定的なところで道を違えてしまった両者はぶつかり合う。

ヴィダールの攻撃を捌き切り、ヴィダールはそのまま足に仕込んだナイフで切り裂こうとするが、それすらもアガレスは回避する。

そのままヴィダールの機体を蹴り飛ばす。

「なるほど……あの親父の言った通りだったか。強いけど……軽い!」

バルバトスのメイスの一振りを難なく回避したバエルは剣をバルバトスに振り下ろそうとするが、バルバトスはテールブレードでそれを受け止める。

「残念だよ……三日月・オーガス」

ヴィダールの銃での攻撃をレンチソードで受け止め、そのままヴィダールと武器と武器がぶつかり合う。

「背負うと言いながら……それがあんたのやり方か。人の脳を利用していただけじゃないか……」

「それでも……俺には成し遂げなければならぬことがある!」

「それを詭弁だと言っているんだ!! 人の死を冒瀆してまで成し遂げたいことが復讐な

のか!? だから軽いんだ! あんたの攻撃は!!」

アガレスの攻撃で天井に穴が開くとヴィダールはそのまま外に出ていく。

続いてアガレス、バエル、バルバトスが順番に出ていった。

地上に移行した戦闘の最中にマハラジャから通信が入る。

「マクギリスとガエリオの事は放っておけ。セブンスターズが退却を始めている。お前達はそちらの援護に向かってくれ」

「……分かりました。三日月! サブレ!」

バルバトスとアガレスが背中を向ける中、ガエリオが三日月たちに謝罪する。

「いつかのことを謝罪しよう。阿頼耶識手術を受けた君達を唾棄すべき存在としたことを」

その謝罪に答えることなくバルバトスとアガレスは援護の為にその場を後にする。

二人つきりになったマクギリスの後方から援軍が姿を現す。

しかし、その瞬間にマクギリスの脳裏にノイズが走った。

「准将!」

「さすがにこれ以上の戦闘は無理か……」

その場から移動していく、ガエリオはその場から撤退していった。

「准将……先ほどセブンスターズが退却していると情報がありました」

「……放っておけ。作戦は成功した。聞け！ ギャラルホルンの諸君！ 今300年の眠りからマクギリス・ファリドの元にバエルは蘇った！ ギャラルホルンを名乗る身ならばこのモビルスーツがどのような意味を持つかは理解できるだろう。ギャラルホルンにおいてバエルを操る者こそが唯一絶対の力を持ちその頂点に立つ！ 席次も思想も関係なく従わなければならないのだ！」

マクギリスの演説が世界中に放送される中、ガエリオはラスタルの元に戻って来た。

脱獄したばかりの彼は何処か真剣味を持ちながらも諦めているような顔をしていたが、ガエリオが目の前に現れると同時に「どうだ？」とだけ訪ねた。

「ああ。ここからはあなたに従おう。今こそ戻らうあるべき姿に」

ガエリオも世界中にマクギリスのように演説する。

「私の名前はガエリオ・ボードウィン！ ガエリオ・ボードウィンはここに宣言する。逆賊マクギリス・ファリドを討つと！」

それと同時にラスタルも宣言をだす。

「アリアンロッド艦隊司令ラスタル・エリオンより告げる……」

しかし、ラスタルの宣言を邪魔するように画面の中にクーデリアと蒔苗が姿を現した。

「その者の言葉に従ってはいけません。私はクーデリア・藍那・バーンスタインです」

ラスタルをはじめ、ガエリオも驚きを隠せない。

「アリアンロッドはタービンスの非戦闘員に対してダインスレイヴを使った虐殺行為を行い、コロニー圏にはフアントムエイジから強奪した各コロニー圏の調査権を行使して虐殺行為を行いました。そして、ラスタル・エリオン……あなたはかつてフアントムエイジが持っていたコロニー間や経済圏に対する調査権と紛争仲裁の権利を手に入れるために彼らを罠に嵌め殺そうとした。あなたこそ逆賊ではないのですか？」

クーデリアの問いにあくまでも冷静に答えるラスタル。

「なんのことも分からないが……証拠がないと思えますが？」

「証拠ならここにありません」

ラスタルの目の前に現れた人物はラスタルにとって致命的な人間だった。世界中にマハラジャの姿が映っていた。

蒔苗がマハラジャの存在を認めた。

「皆の者よ……彼の名はフアントムエイジ司令官であるマハラジャ・ダースリンじゃ。そして、かつて厄祭戦を終わらせた鉄血のオルフェンズの後続組織のリーダーでもある」

「ギャラルホルンの全士官よ。そして世界中の人々よ……私はかつてラスタル・エリオンによって殺されかけた。しかし、こうして全員の前に姿を現せたことを嬉しく思う。」

ラストル……お前は我々を殺そうとしただけではなく、各コロニーに内通者を送り込み、コロニーに独立運動を引き起こして、それを理由に虐殺を行った。ラストルお前をギャラルホルンの人間として認めるわけには行かない。無論ギャラルホルン全てに言える事」

そんな言葉と共にアガレスが目の前に現われ世界中にギャラルホルンの不正や、かつての厄祭戦の真実が映像として映し出された。

その映像は人々が思い描くギャラルホルンを裏切るには十分な証拠であり、人々の心の中から信じるという言葉は消え失せた。

「我々フオートレスは真の鉄血のオルフェンズを受け継ぐ者。私達の願いは一つ真の意味での厄祭戦を終わらせ、火星、木星、金星の独立自治権を認め、人々に平等な権利を与える事にある！ それこそあの日を生きた子供達が願った事だ！ 偽善者を打ち倒せ！ 今此所に我々フオートレスはギャラルホルンに対し宣戦を布告する！」

時代の歴史が変わろうとしていた。